

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別授受承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第8巻第9号 昭和38年8月1日発行 (毎月1回1日発行)

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別授受承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第8巻第9号 昭和38年8月1日発行 (毎月1回1日発行)

裏窓

裏窓



8月号

定価 250 円

IBM 1807

東京都中野区江古田1 株式会社 あまとりあ社 振替・東京10756番
(久保書店宛)

ウソのようなホントの話がいっぱい！

話のペメになる本

野高一作・著

¥170 ㊦40円



「こんなおもしろい本 いままで読んでことがない」と読者から賞讃の手紙が殺到！
笑ったり感心したり怒りたくなったりとにかく選りぬきの話題ゆかいな知識がいっぱいです

痴恋さまざま抄一

うかれ猫

妖しく燃える
女体の生態

武野藤介・著

¥200 ㊦40円

これがプレイボーイだ！

現代野郎入門

プレイボーイナンバーワン
が書いたズバリ入門編

野坂昭如・著

¥180 ㊦40円

問題の原作！

温泉芸者

がめつくかせいだ色と
欲とのダブルプレイ

斉藤米二郎・著

¥180 ㊦40円

てのひら人生

図解手相術 のすべて

手相術のもっとも正しい秘伝

佐藤六龍・著

¥250 ㊦40円

■あなたをエクスタシーにさそう異色新書判！

■東京都中野区内江古田一ノ三三〇二
株式会社 久保書店営業部

(振替・東京一〇七五六)

裏窓叢書

○第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵

価三五〇円
㊦六〇円

○第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵

価三五〇円
㊦六〇円

○第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 秋吉 巒絵

価三五〇円
㊦八〇円

○第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵

価三五〇円
㊦八〇円

○第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵

価四〇〇円
㊦八〇円

★以下続刊！

(東京・中野・江古田一・あまとりあ社・刊)



裏窓・八月号・目次

◎表紙

モデル・津木百合

◎目次カット・中川彩子

カメラ・吉田 久

とびらカット・江淵晃夫

★巻頭／巻末二色オフセット絵物語★



東京／神戸十六時間

文・祖父江新
絵・山田彬弘

(9)

ぬめ肌女郎

文・矢桐重八
絵・春日章

(103)

オフセット
色紙ページ

海外SM画傑作展

フェニクス商会・特約

(127)

残念なり猿飛佐助

井村 錠

(24)

妖異水底に沈む

信夫澄夫

(36)

忍 秘 古 発
者 聞 墳 掘
アラビア
の城・3

お仕置きにぬれる弓子

北園透一郎

(48)

裏窓文
芸評論

大江文学と西村みゆきの

「裏窓」的分析

安東 泉

(65)

特選
グラビア

海外SMフォトご紹介①②……フェニクス商会

(215)(15)

砂の上の船……吉田 久

(111)

漁師宿にて……吉田 久

(122)

裏窓タウン……読者コーナー……

(135)

コレハオドロ記『さるぐつわの起源』……左 次朗

(86)

落城悲図……鬼頭 暁

(154)

紅のライフル……文・祖父江新
絵・落合竜二

(90)

西物部
絵物語

★★★★
マンガM

ユーモア
アブ小説

お転婆学園秘密作戦……郷 保夫

(72)

ほも
紳士録

愛を愛するLの女……かびや・かずひこ

(96)

M文
献の

現代マゾヒズム文化時評①⑦……森下高茂

(156)

体当たりM論
ああ、ぼくは王子と女王の前で虫けらに
なり、三者奉仕に溺れたい

……水尾 究

(144)

■見たもの聞いたもの……159

■あるお便りから……

(142)

■撮影行……エダ・キリコ 160

■うらまご・ニューモード・ご紹介

(153)

絵物語

密林の美女……文・黒部恭治
絵・中川彩子

(162)

女の争い……五所 章

(170)

ファイギュア・トレーニング……春川光彦

(176)

切支丹散華……北村仙也

(190)

連載マ
ゾ小説

ゴルドンの記憶⑤……阿麻哲郎

(202)

■編集後記……

(214)



★東京から神戸まで風のように
すっ飛ば、美女をつめこ
んだ高級車!



① 出発

「なにかでっけえことやりたいな、兄貴」
それが哲也の口ぐせだった。
六本木の、とある喫茶店に、哲也は兄貴の
呼びだしで落ちあった。

兄貴——と哲也に呼ばれた男、高岸は、な
にが職業なのか、哲也も知らなかった。とき
どきバアにあらわれて、映画やテレビのスタ
ーたちと親しいつきあいをしている。

それが、哲也にはうらやましくてならない。
高岸は哲也のあこがれでもあった。

「また哲公の口ぐせが出たね。ところで今夜
君を呼んだのはほかでもない。素晴らしいス
リルを味あわしてやろうと思っただけ。札金は
五万円。明夜中の二時、R町の交叉点で待っ
てろ。そこから車で、神戸までフツ飛ばすん
だ。どうだ」

「OKだ。そうこなくちやおもしろくねえ」
——翌午前二時。ときおりタクシーが風を
巻いて過ぎるR町の交叉点に、ポツンと哲也
が立っている。と、東方からダッジが近づい
てきた。ピカピカした空色の新車だ。

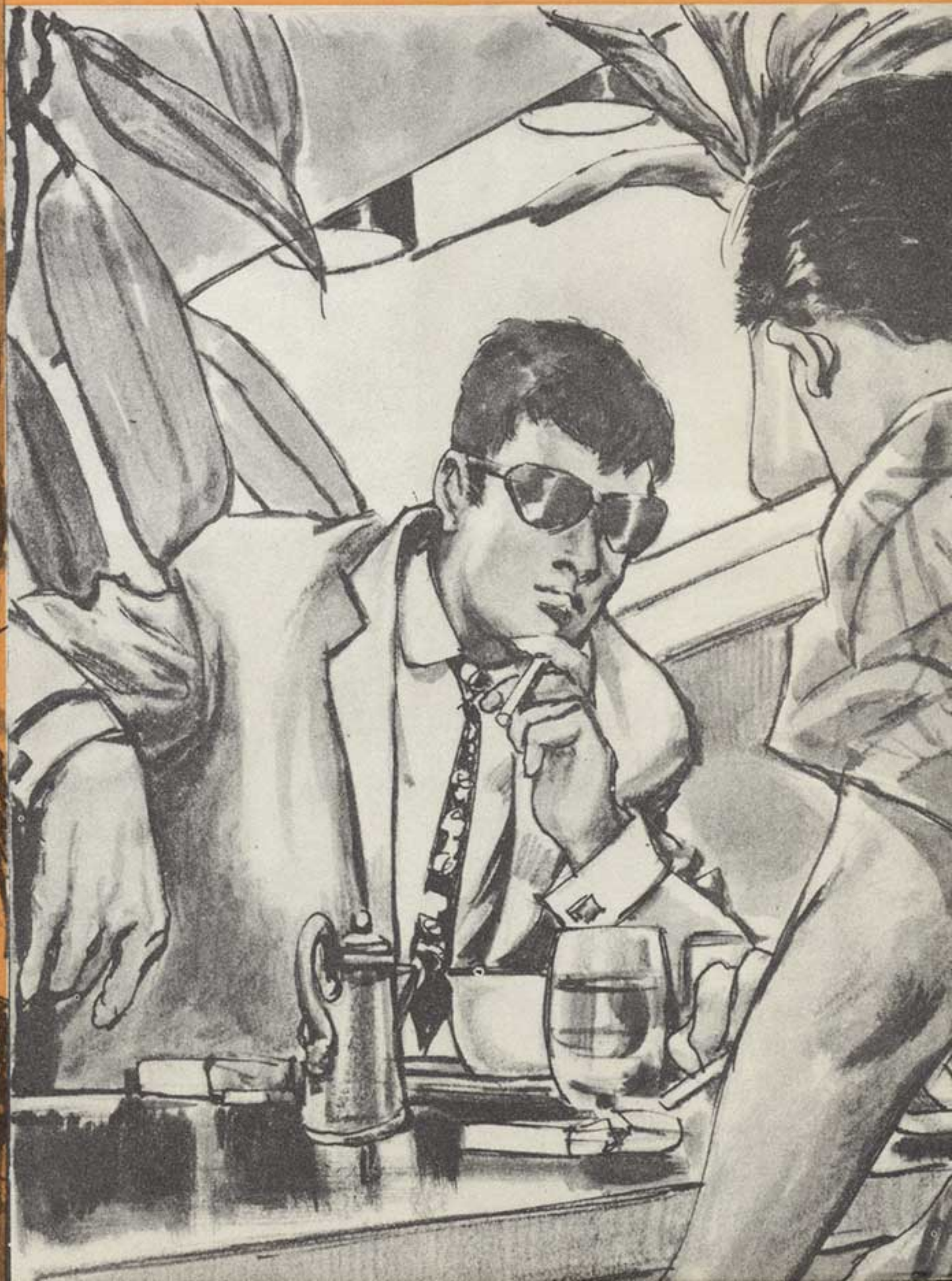
「兄貴! すげえ車だな」
哲也は声をはずませて、車に乗りこんだ。
「さあ、ゆくぞ」

祖父江新・作
山田彬弘・絵

★★★★裏窓サスペンス絵物語★★★★

東京—神戸

十六時間



② トランクのなか

神戸で仕事なら、麻薬の運搬かな。しかし高岸は、黙って車を走らせている。

「兄貴、仕事はヤバイのかい？」

「黙って俺にまかしたときな。そのうちにわかるさ」

ようやく明け初めに箱根のドライブウェイにはいったときだった。高岸はハンドルをわき道にそらせた。

「……？」

「ちよっと休憩。いや用たしだ」

車を降りた高岸は、注意ぶかくあたりに気をくばってから、後部のトランクを開いた。

(アッ！)

哲也は息をのむ。

トランクのなかに、白いやわらかいものがうずくまっていた。

たぶん、眠っていたところを誘拐されたのだろう。薄いナイロンネグリジエのまま、後ろ手に縛られた若い女がそこにいた。

女の顔は、かたく猿ぐつわに覆われていたが、澄んだ瞳が美貌を物語っている。

哲也はその瞳を、どこかで見たようだった。高岸は、女の縄尻をとって、森のなかへは

いっていった。





③ スター・小牧洋子

静岡市内は、ちょうど朝のラッシュ時だった。

哲也はハンドルをにぎったまま、信号を待つあいだも、しきりとトランクのなかの女のことを考えていた。

その哲也の眼に、交叉点に立てかけられた映画の看板が映った。

“女豹作戦” 主演・小牧洋子

「アッ！」

看板には、小牧洋子が、張りのある大きな瞳で、哲也に微笑みかけていた。

スター失踪！ 小牧洋子誘拐！

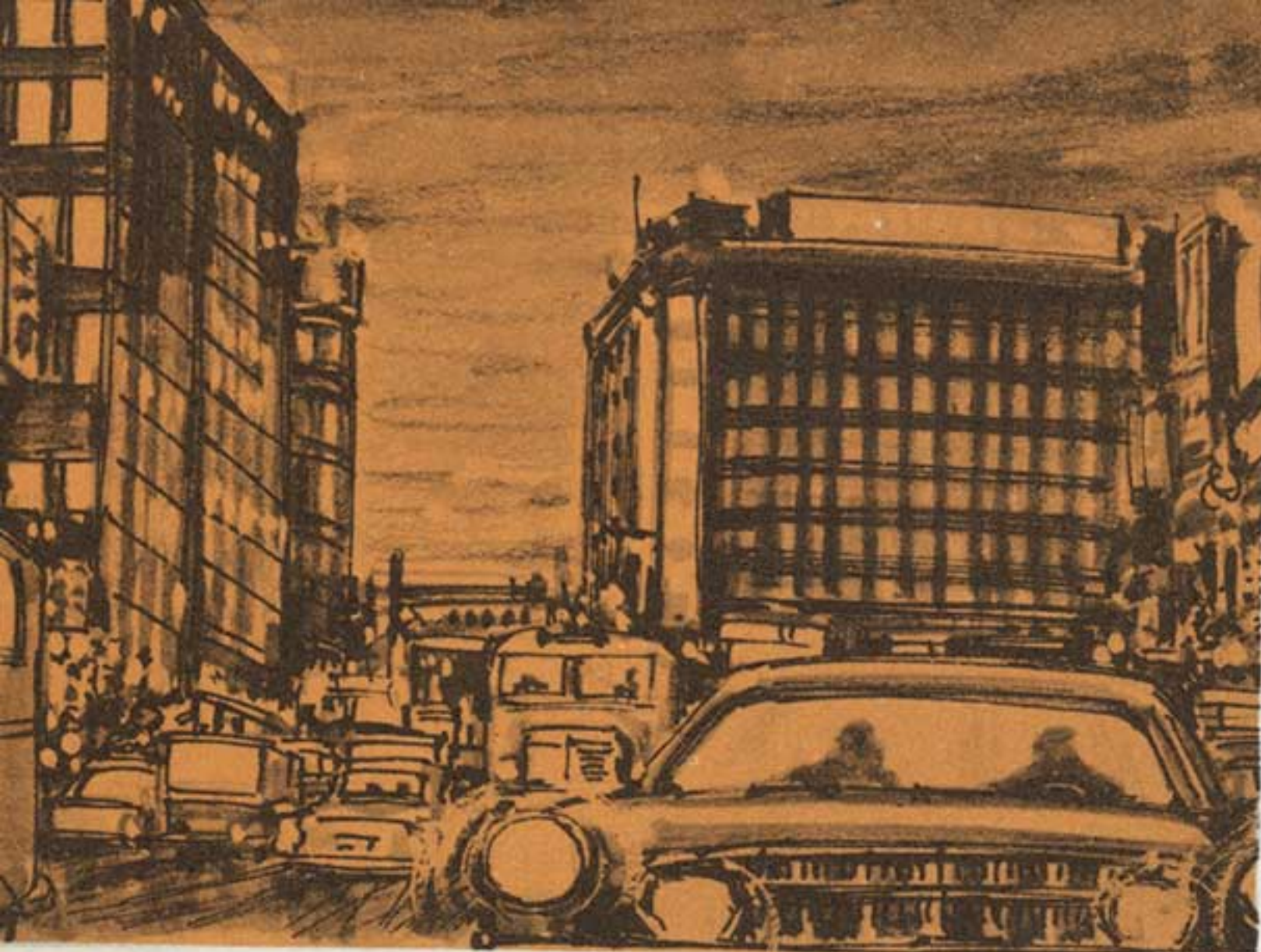
仕事は意外に大きかった。そして、もう始まっているのだ。いまさら後には引けない。

アクセルを踏む哲也の足が、ガクガクした。

「どうした？ おじけづいたのか」

意地の悪い高岸の声。

「なに、だ、だいじょうぶだ」



④ 甘いドライブ

車は、たびたび人影のないところで停車した。明かるい日中では、洋子を連れだすことは不可能なので、オシメが使用された。

洋子の猿ぐつわを解き、高岸がジュースの瓶をあてがうと、彼女は咽喉をふくらませて飲み乾した。いじらしいほど素直で、父親に甘える少女のようにもみえた。



——名古屋を過ぎ、鈴鹿峠にかかったとき、高岸はオシメのとり換えを哲也に命じた。

白桃を想わせるふともものあいだから、あたたかく濡れた布をとりだすと、哲也はふるえる手で新しい布をあてがった。

赤児のように黒い瞳が、じっと自分を見上げているのを感じると、哲也はこの素晴らしいドライブが、あと数時間で終わってしまうのが惜しまれてならない。

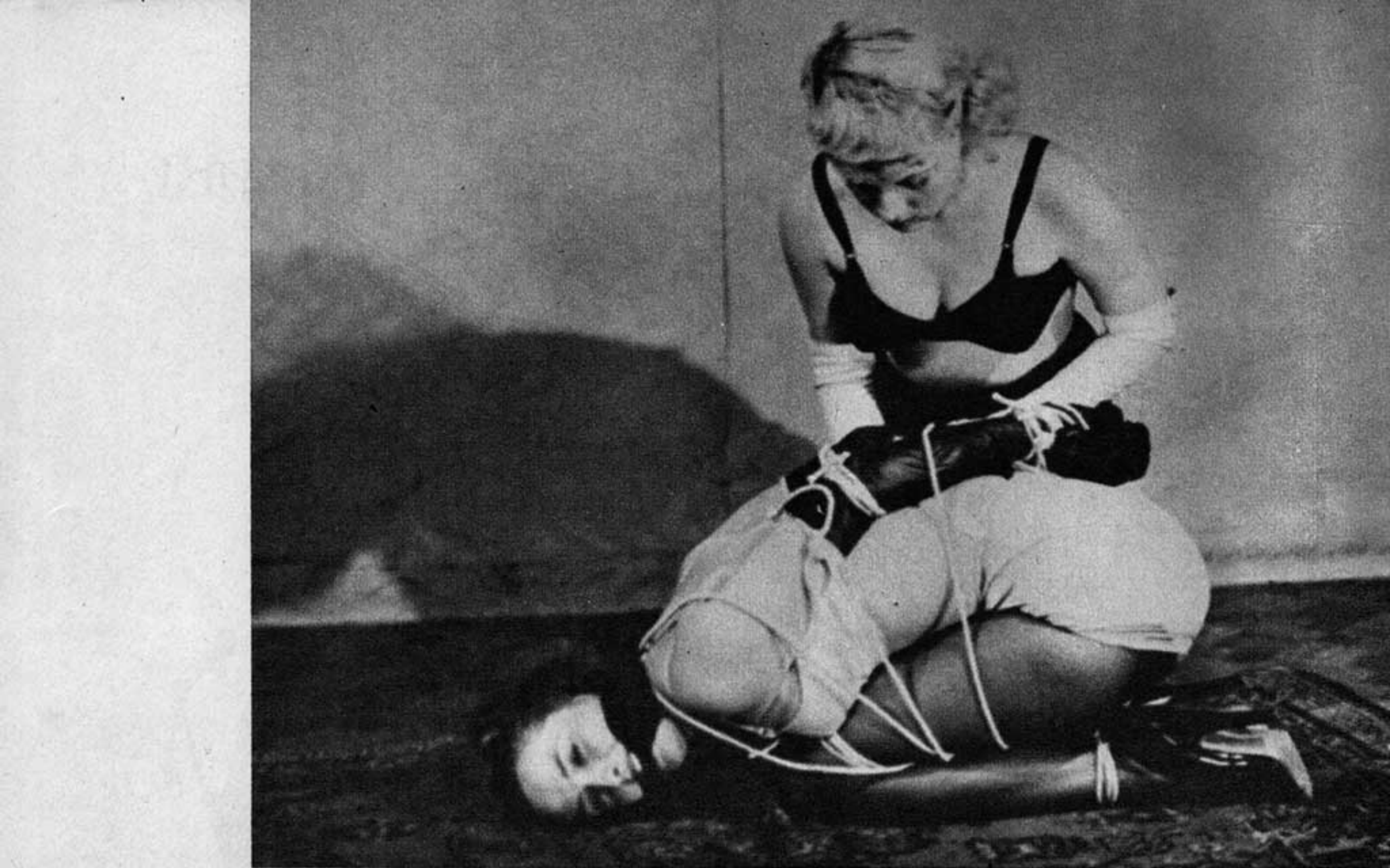
——最終オフセットページへつづく——

海外の公刊誌より

SMフォトご紹介①



カナダ・フェニクス商会・特約















裏

窓



8 月 号

第8卷・第9号

大阪落城秘聞
 残念なり猿飛佐助

錠村井

絵夢一向日小



佐助懸想

平蜘蛛のように張りついていたらからだをおこし、佐助は、ホッと熱い息を吐いた。熱い。といえ、いま佐助のいる大阪城二

の丸の天井裏は、常人ではとても耐えられぬばかりの熱気がこもっていた。

まして、佐助の眼下、千姫の寝所にかいまみた秀頼と千姫の痴態に、佐助はしばらくおのれの五体の火照りをもてあましていた。

(無理もない)

と、佐助はこころにつぶやく。

——元和元年五月。東西の談判が決裂するや、満を持していた関東勢は、たちまち檜井に西軍を討ち破り、潮のごとく大阪城を包囲

してしまった。先年、冬の陣に敗れて、外堀を削りとられた城郭は、嵩にかかって攻めつける関東軍の砲撃に、日々にそのかたちを歪めていった。

城兵のひとりとして、万が一にも大阪方の勝利を信じるものはなかったが、豊家恩顧の大野治長、木村長門守をはじめ、後藤又兵衛ら必死の奮戦にくわえて、食いつめ浪人隊のなかば捨て鉢の抵抗で、さしも関東の精鋭も攻めあぐみ、戦況は一進一退をつづけ、互いに兵力を消耗しながら、硬着状態にはいつてしまった。

こんな時に、佐助のような忍者の活躍が始まる。いくさにまぎれて忍者たちは互いの陣に潜入し、あるいは敵兵になりすまして流言放火、暗殺をくわだてる。

佐助は城内にとどまり、そのような関東の忍者の暗躍を阻止するのが役目だった。

佐助にとって、千姫の寝所は楽しみの一つである。今夜も、なにげなく姫の美しい寝顔をのぞき見たのだったが、偶然、そこに秀頼と千姫の浮世絵巻図を見てしまった。

当然、すぐ立ち去ろうとした佐助ではあったが、まだ幼な顔の残る千姫の、愛らしく開いた唇や、明日をも知らぬ若い生命を、その一瞬に燃やし尽くそうともみえる妖しい肢態

に、佐助は張りつけられたように動けなかったのである。

——秀頼が千姫の寝所から姿を消し、やがて、そこから千姫の充ちたりた寝息が聞こえるようになって、佐助はおのれの体内の炎を消しきれずに狼狽した。

(チッ)

彼は舌打ちをくると、意を決してスルスルと天井を滑った。

そして、ジッと階下の気配をうかがう。

佐助のいる真下の部屋には、十人ばかりの奥女中の寝所になっていた。

いくさのないころの彼女たちは、紅おしろいに身をやつし、華やかな生活をおくっていたのにくらべて、明け暮れいくさのさなかにある今日このころは、籠城の兵たちに部屋を占領され、小さな部屋に分散して押しこめられている。

そのうえ、やれ炊事だの兵器の手入れだのと追い使われて、綿のように疲れたからだを、いぎたなく夜具に横たえて眠りこけていた。

女の匂いの立ちこもる部屋に、フワリ、と佐助は羽根のように舞い降りた。

佐助は闇に眼を凝らして、部屋の中ほどに眠っている一人の女に注いでいた。

千姫——と見まがうばかり、そこには千姫と酷似した女の寝顔があった。

「笹葉どの、笹葉どの」

まるい肩に手をかけ、軽くゆする。

「あッ！ あなたは」

つぶらな瞳が見ひらくのを、佐助はみとめた。

「佐助だ。今宵こそわしの情を受けてもらうぞ」

「なにを申されます。このようなところで」
笹葉は身づくろいながらも、あたりをはばかりて小声でたしなめた。

「なんの、というてほかに逢う瀬もなし。気づかれはせぬ。よいではないか」

四十男の情念が、小柄なからだに横溢して、しきりと吐け口をせきたてた。

「はしたない。部屋を出て……、出ていってください」

佐助は黙したまま、黒い手を笹葉の胸に差し入れようとした。

「あッ！ なにをなされます。大声を、大声をたてますぞ！」

激しく身もだえする笹葉に、千姫のおもかげを見いだして、佐助の血は高鳴った。

佐助の手はツと伸びて、のけぞる笹葉のふくよかな頬にふれた。

「あッ、あぐッ！」

女の顎がはずされて、言葉にならない声もれる。

「しずかに……。あがらえばそれ、痛いめをみる」

佐助は女の腰から緋色の紐を引きぬいて、素早く後ろ手にくくしあげた。紐の端を顎にまわし、手首を高く吊り上げる。

「ふふふ、またせたのう」

しかし、笹葉の胸をもてあそぶ佐助の手がすぐ止まった。

研ぎすまされた佐助の耳に、誰か、ヒタヒタと天井裏を近づいてくる足音が聞こえたからである。

やがて、ヒタ、と足音はやんだ。

「佐助さま。佐助さま」

天井の一角から、忍ぶような男の声。

「雲十郎か、なに用だ」

（チッ）と、舌打ちながら、佐助の手は笹葉の縛しめを解き、顎をもとになおしていた。

笹葉は自由になるや、飛びすきって身づくろった。

「いましがた伊賀者らしき忍者を追いつめましたところ、堀に身を隠したままあがりませぬ」

「……………」

「塙団右衛門さまの手の者がまわりを固めて城外へ逃がられる気づかいはございませぬが、塙さまがたつて佐助さまにおでましを」

「よし！ ゆく」

佐助は天井に声をかけると、笹葉の顔へふり向いた。

「笹葉どの。佐助は欲しいと思えば手だてを選ばず手に入れる男。お忘れあるな」

「けもの！」

笹葉が、小さく罵ったときは、佐助の黒い影はもう闇に吸いこまれていた。

死闘の堀

見廻り隊隊長の塙団右衛門は、自慢の大槍

の石づきをついて、佐助を待ちかねていた。

「待ったぞ猿。なかなかしたたかな奴らしい。水に飛びこんだまま上がりおらぬ。なんとか生け捕りにしたいのだが……」

佐助は団右衛門を無視したように黙ったまま、装束を脱ぎすてると、裸の背に甲賀刀を結びつけた。

眼は鋭く水面に注がれている。堀の対岸にチカ、チカ、と城兵の槍の穂光が月光にきらめくのが見える。

「生け捕れよ、猿！」

団右衛門の声を背に、佐助はゆっくりと石壁を這って降りる。とみるや小さな影は、水音もなく水中にかくれてしまった。

月光が水あかに映えて、佐助の眼に蒼黒くよどんでいた。

チュルッ！ チュルッ！

異様な音は、城兵が忍者がひそむとおぼしきあたりへ、しきりと射込む矢音である。

佐助はしばらく、水中に敵を求めて泳ぎまわっていたが、

いた！

蓮が、ひととき茂り生えた堀の一隅に、黒衣の人影が、ヒソ、と漂っているのを発見した。

佐助は、力強く水を蹴って茂みへ肉迫して





いった。

ポカリ、水面に黒い頭が浮かび、それが静かに岸に向かってくる。

団右衛門は待ちきれずに声をかけた。

「猿かッ！ 捕ったか！」

団右衛門は手を貸しながら、再びせきこんだ。

ズルリ、と佐助が引き上げた忍びの男は、胸をえぐられてすでにこと切れていた。のみならず、おのが刀で顔をなますのように斬りきさんでいるのだった。

「なんと、殺ったのか。佐助、おぬしも腕がにぶったの」

団右衛門は皮肉るように佐助をなじる。

「案外手ごわい男だった。仕方もないわ」

「なにか懷中しているものはなかったのか」

「忍者は必ず密書をふところしているとは限らぬわ」

佐助はうそぶいて素早く忍び装束を身につけていた。

「それよりもおぬし」

「……………」

「明朝からの食いものには、せいせい気をつけることだな。この男は兵糧のなかへ毒物を撒いたかも知れぬ。いや、まだまだほかに謀

者はおるぞ」

「……………」

かえす言葉もない団右衛門に背を向けると
佐助はたちまち闇に溶けこんでしまった。

奸計

カリ……カリ、
鼠の歯噛みが、断続して聞こえてくる。

ときどき、湿った音が闇を駆けぬける。
地下牢としてこしらえられたここにも、倉
庫をうしなった兵糧が山積みされて、いくさ
の不利を物語っていた。



牢の隅にころがった米俵に、縄尻をゆわえられてうなだれている半裸の女——笹葉だった。

今朝——、団右衛門の注意にかかわらず、佐助の予言したことが起こってしまった。

追手門を固める兵士百名が、朝食をとったとたんに苦しみだした。

上を下への大騒ぎで、うち六十二名は手当ての甲斐もなく死亡、二十余名が生命をとりとめたものの、枕もあがらぬ重症という大変だった。

団右衛門が早朝調べたときには異状がなかったはずである。となれば当然、炊きだしの女たちに疑いがかかった。

そうになると、笹葉は不利な条件があった。

彼女は千姫に似ていることを好んで、千姫が四年前に家康のもとから、この大阪城に呼びよせたお守り役、いわば千姫の遊び相手だったのである。

それだけの理由で、笹葉は、佐助の配下雲十郎に引つたてられてしまった。

忍者の縄目はきびしい、後ろ手に高く吊られた両手首や、幾条にも締めつけられた二の胸は、すでに知覚を失っていた。

それにも増して笹葉の苦痛は、ときおり兵糧をとりにくる、雑兵たちの好色な眼に、あ

ますところなく肌をさらされていることだった。

うなだれた笹葉の眼にも、細引きにくびられてのぞかせている、突き出た乳首が羞恥をそそのめるのだ。

盛夏とはいえ、地下牢の夜は、ソクソクとしてうそ寒い。

けれども、夜が更けてようやく地下牢に足を向ける人影がなくなると、笹葉はむしろホッとした気持ちだった。

フと、目の前に人の気配を感じて、顔を上げた笹葉の上に、小さな顔が笑っていた。

「あッ、佐助さま」

それが佐助だと知ると、顔をそむけて身をよじった。

「いかがじゃな笹葉どの。ここで裸は寒かうて」

「むたいな！ わたしとていまは豊家に仕える身を、なんで毒などいれますものか！ このような羞しめを受けようとは、露知らぬことを」

「ほほう、そなたが兵糧に毒物を撒いたとか？」

「そうじゃ。わたしが徳川の諜者だとて、雲十郎どのがこのようなめに……」

「はて？ めんような。雲十郎がそなたを諜

者と申したか」

笹葉の眼に、キラリ、と喜色がはしった。

「そなたが諜者などと……たわけたことを。」

「わしはまことの諜者を存じている」

「そッ、それならば、わたしのうたがいは晴れたのですね！ ならば縄を、いましめを解いて下さい」

笹葉は縄目の羞恥も忘れて、佐助の膝にすり寄った。

「ふっふふ。わしはそなたを手にいれるため、雲十郎に命じただけのこと。佐助がねらったものはいかにしても手にいれると、昨夜そなたに申したはず」

計られた。と覚って笹葉は声をのんだ。空しい、とは知りながら身をもだえれば、金縛りの細引きは、いよいよ肉に食いいった。

佐助は、笹葉の胸を咬む縄をつかむと、顔をのけどらせる女の耳になにかささやいた。

「ひえッ！ では、ではそなたが憎い徳川の諜者！」

「ふふ、明かしてしまえばそなたの口は閉じてもらわねばならぬ」

いきなり耳の下を、強い指でおさえられて「あッ」

開いた口へ手拭いをおしいれられる。その上からピタリ、薄いなめし皮の猿ぐつわが覆

ってしまった。

幾人、幾十人の苦吟の唾液を吸いにとって、それは異臭を放ち、笹葉は屈辱に身を突っ伏した。

「ふっふふ。夏の夜明けは早い。どれ、つもり積った佐助の情念。そなたの柔肌に受けて

もらおうかい」

シリッ、と蠟燭の灯がひと揺れし、醜塊な影が地下牢の壁にゆらめいた。

あとは、笛のようにせきいる息の音が、クッ和小鳩を想わせる呻きが、断続してきこえていた。



陰謀

茶臼山にかまえた家康の本陣の空に、明日もまた炎天を告げる無数の星がまたたいていた。

いましてが重臣たちと密議を終えた家康は、じっと皺ぶかい臉を閉じて、しきりとなにかを想いあぐんでいるふうであった。

いまひとおし。大阪攻城に最後の鉄槌をくだすべく、総攻めの日取りは八日寅の刻と決議し、九分どりの勝算をもくろみながらも家康のころはうつうつとして晴れなかった。

それもそのはず、家康には目の中に入れても痛くないほどにいとほしい、孫娘千姫の安否が老雄の胸を重くふさいでいるのである。家康は人ばらいすると、置きもののように入れたまま、あれこれと千姫救出の思案をめぐらせていた。

「大御所さま、大御所さま」

家康の耳に、陣幕をへだててあたりをしのぶ低い声がした。

「……………」

「猿。佐助でござります」

「おお、佐助か。待ちかねたぞ」

「はい。ひさびさに……………大御所さまには



「ご武運も強く……」

「なにに、そちらが働きのおかげじゃ」

「ありがたきしあわせ」

陣幕の声は家康の右から、と思うとやがて左からきこえる。

「一昨日、半蔵殿の手の者と思われます霞甚衛と申すもの。大阪城のくわしい見取り図を

手に、脱出せんとしましたが、城兵に追いつ

められ……」

「うむ、それで……」

「佐助めがかわって持参つかまつりました。

大御所さまの脇に置いてござりまする」

こわいかに、いつのまにか家康の左わきに皮袋が置かれてあった。

家康は嚴重な皮袋の紐を解き、内から小さく折りたたんだ書類をとりだした。

伊賀忍者霞甚衛の筆による苦心の見取図であった。

「おお、これさえあれば！ 佐助。礼をいうぞ！」

家康は、狂喜の眼を図面に走らせながら言葉をついだ。

「して霞甚衛はいかがした」

「もはや逃がられぬところと存じ、それがしが討ち果たしました」

「うむ。さすがは天下の忍者、天晴れぞ」

「それに昨日は兵糧に毒を投じ、ために城の追手門はにわか組がえて手薄のありさま。

城攻めの時はここを衝けば……」

「重ねがさね天晴れの働き。覚えておくぞ」

「それにつきまして……」

佐助の声はしばらくとぎれた。

「ご主君幸村さまのことはくれぐれも」

「約束したぞ佐助。知行のこともすでに考えてある」

「はい。ありがたきしあわせ」

やっと、人間らしい声が、陣幕の外からした。

「ときに佐助。そちを見込んで頼みがある」

「なんなりと」

「城の総攻めは八日朝と決まった」

「……………」

「そちはいくさにまぎれて千姫を救いだして
もらいたいのじゃ」

「この佐助が千姫さまを——」

「そちをおいてほかにおらぬ。頼んだぞ」

「もったいなき言葉。佐助、いのちにかけて
ても」

佐助の声は、喜悅にふるえた。

「頼んだぞ。ゆけ！」

「ごめん」

それきり、闇の声は絶えた。

しばらく——。家康は瞑目したまま動かなか
った。が、やがて

「半蔵。いるか」

端座した姿で、宙に向かって声をかけた。

「はい。これに」

陣幕の黒絵が動いたかに見えろと、伊賀流
忍者の統領、服部半蔵の忍び姿が、影のごと
く家康の背後に平伏していた。

「聞いたか、半蔵」

「はい、のこらず」

「猿は、かならず千姫を連れてくる」

「はい。佐助ならばかならず。しかし……」

「ほほ、なんだな」

「今朝ほど、坂崎出羽之守さまにお約束なさ

れましたことは……」

「出羽にできると思うか」

「さあ、それは」

「できぬよ」

家康はこともなげにいつてのけた。

「それなれば」

「出羽め！ 近ごろ武功を鼻にかけて出過ぎ
おる」

「……………」

「総攻めの日が出羽の討ち死にの日、き奴に
はよき死に場所じゃ」

醜く垂れた頬皺が、いっそう深く刻まれ
た。家康が、得意になったときもらす笑顔で
ある。

「ところで、そちらにもひと働きしてもらわ
ねばならぬ」

「はッ」

「半蔵、これへ」

ツ、と半蔵はにじり寄る。

家康の小声に、半蔵は黒布で覆った頭を、
コクリ、コクリ、うなづいてみせた。

千姫救出

元和元年五月八日未明。大阪城総攻撃の火
ぶたは切つて落とされた。

関東勢の人海攻撃に対応して、城兵は死に

もの狂いの抵抗をこころみだが、城内に潜伏
した関東方の諜者が、つきつきと城内の火薬
庫に火を放つたのを潮に、攻め手はドツと城
門を討ち破つて突入した。

近づく破声、おたけび、そしてたちこめる
硝煙の政所に、半狂乱の淀君は、浮き足だつ
千姫の袖をつかんで放さなかった。

近くで、砲弾が炸裂し、壁がバラバラとく
ずれ落ちる。

「あれッ！ 母さま、こわい！」

思わず飛びだそうとする千姫の手首を、淀
君の手がガッキとにぎりしめた。

「なんのというて、そなたは城をぬけだそう
とするのである。ええい、放しはせぬ。すわ
りや！ ここにおるのじゃ！」

蒼白になった淀君は、甲高く叱咤した。

「あッ！ 痛いッ。おねがい、放して！」

ここにも火が移つたのであろう。黒煙が天
井板のすき間を這つて浸入してきた。

「淀君さま！」

そのとき襖が開いて、黒衣の男が手をつい
た。

「申し上げます、秀頼さまにはただいまお人
ばらいなされました。もはやお覚悟かと存じ
うけられます」

「なんと！ 秀頼が、秀頼が自害とかッ！」

淀君はとり乱して思わず立ちあがった。
「わらわが戻るまで、そちは姫をとらえてお
るのじゃ。逃がしてはならぬぞ。とり乱せば

縛ってもかまわぬ。よいか！」
いい残すと、狂乱の女はあわただしく廊下
を駆けぬけていった。

「姫ッ！ 逃げるのです。大御所さまのもと
に帰るのです！」
「えッ！ 爺さまのところへッ。爺さまのと



ころへ帰るのかッ！」

佐助の言葉に、千姫の声は狂喜した。

「いかにも、爺さまのところへ帰るのです。姫！しばらくのご辛棒を」

いいながら、佐助はふところから細引きをとってしごいた。

「あれッ、なにを、なにをしやる！」

あばれる手を、佐助は苦もなく後ろ手に、胸から腰へときびしく縄をかける。

「あッ！こわいッ！」

悲鳴は、たちまち布でふさがれていた。

しかし、佐助は千姫の自由を奪うため、縄をかけたのではなかった。忍者が人間をかかえて、遠い道のりを駆けるとき、それは常套手段である。千姫の鼻口を覆った布も、煙による窒息死をふせぐためだった。

「ごめん！」

佐助は、もはや荷物のように縛られた千姫を小脇にかかえると、渦巻く黒煙のなかへ身をひるがえした。

大和川堤の決闘

はるか北の空を、ふき上げる火の手が紅く染めている。

大阪と堺のあいだを銀色に帯を引く、大和川に向って矢のように飛ぶ佐助だった。

むろん、佐助一人ではない。

佐助の小脇に、シッカと抱えられているのは、相かわらず鼻口を覆った白い布、手足をきびしくいましめられた、白い小袖の千姫である。

佐助は大阪城も脱出したあと、家康の本陣に背を向けて、奇怪、いち早く城を脱出して堺沖に佐助を待つ、真田幸村一党のもとへ、ひたすらにいそいでいた。

堤のてまえの松林を駆けながら、ひとときの見事な大松の下を走りぬけたとき、佐助の右手が一閃した。

声もなく、十字手裏剣で額を縫われた黒い影が、樹上から転落した。

(とうッ！)

同時に、佐助の足は地を蹴って、松の太木に駆け昇っていた。

佐助極意の猿飛びである。

松の根かたに、白い人影が浮きでたように横たえられている。

だが、佐助は千姫を手放す一瞬に、忍び刀で千姫の足腰を縛した縄を寸断していた。

もちろん、千姫奪取の手がかりを少なくともするためである。

そして、裾を乱して横たわる千姫は、佐助にとって絶好のおとりともなった。

樹上の攻撃を忘れて近寄れば、たちまち佐助の十字手裏剣の餌食となろう。

佐助は樹上に身をかがいながら、す早く襲撃者の人数を読んだ。

業を煮やした襲撃者が二人。滑るように千姫めざして突進した。

が、いずれも目的の数歩てまえで、飛来した十字手裏剣をうけて倒れた。

続いて二人が同時に飛びだす。

二人を援護して八方の樹間から、しぶきのように伊賀八方手裏剣が、梢に向ってひらめいた。

伊賀忍者の一人は飛びだしたその場で、いま一人は千姫の背の縄目に、手をかけたところで十字手裏剣に咽喉をえぐられていた。

討つものも無言、討たれるものの声もなく、それは陰惨な忍者の死闘だった。

激しく、八方手裏剣が佐助のひそむ梢に音たてて突きささった。とみるや、六人の黒い風が輪をちぢめるように、千姫に向って殺到した。

ヒョウ、ヒョウ！

月光にきらめいて、八方手裏剣と十字手裏剣が飛びかった。

しかし、わずかに佐助の術は勝っていた。襲撃者のあるものは咽喉を斬り裂かれ、あ

るものは額を割られて、木蓮の花びらのような千姫のまわりに、累々と黒い影を横たえて、月光に照らしだされていた。

半蔵敗る

服部半蔵は肩先に深手を負いながらも、死をよそおって樹上の気配をうかがっていた。

樹上からはなおしばらく、突き刺すような殺気が半蔵の五体を圧していた。

半蔵は絶息しながら、根気よく機会を待った。

しばらくして機会はきた。

樹上の殺気が霧のように消えた一瞬！

半蔵は身をおこして千姫の縄目に手をかけるやいなや、

(てえいッ！)

蛙のごとく跳躍し、次ぎの瞬間には、樹幹を楯の草むらに身を伏せた。

(やった！)

半蔵はたかぶる胸を制しながら、次ぎにきたるべき佐助の攻撃にそなえ、八方手裏剣を右手にそえた。

——が、依然として佐助の気配はない。

いぶかる耳に、佐助の落ちつきはらった声がきこえてきた。

「やったな半蔵。さすがは伊賀忍者の統領。

しかし、女の顔をとくと見るがよい」
はじかれたように、半蔵は千姫の口から布を剥ぎとると、美しい顔を凝視した。

「あっ！」

女は千姫に酷似していたといえ、大御所家康の孫娘として、豊家秀頼の奥方としての、気品に欠けるものがあつた。

「たばかったな佐助！ このうえは！」

覆面のかげから、怒りに朱をそそいだ半蔵は八方手裏剣を握りしめた。

「佐助！ 姫君は、姫君をいずこに隠したぞ！」

「うはっはっは、千姫はそれ、駿府どのが討ち死にを願った、坂崎どのにくれてやったわ。坂崎どのに嫁入って、駿府どのともども苦しもうぞい」

「おのれッ！」

怒りたけた半蔵は、佐助に決戦を挑むべく、格好の場所を眼で探ぐった。

「待て！ 半蔵」

鋭く、佐助の声がひびいた。

「……………」

「うぬはいま右手の草むらに踊り出て、手裏剣を討つつもりだったろうが。ならばうぬが飛び出す一瞬に、この十字手裏剣を見舞おうか」

きいて、半蔵は冷水を浴びせられたように背筋が凍った。動けなかった。

「うぬの生命は、最初から助けるつもりでいた。聞け！ 半蔵。戻って駿府どのに伝えるのだ。この猿飛佐助をたばかった返礼に、必ず駿府どのの白髪首を頂戴にまいるとな」
佐助の声は、次第に悲痛な色をおびていた。

半蔵は、縛られた笹葉のかたわらに伏し、あたかも数葉の夏草と化したもののよう、遂に動くことはできなかった。

無念の唾をのむ半蔵の耳に、

「さらばじゃ、半蔵」

はや数町をへだてた対岸のあたりから、佐助のかすかな声がひびいた。

千姫を救出した坂崎出羽守から、誓約の履行を迫られて、家康が大いに悩まされるのは衆知のとおりである。

これは、明きらかに服部半蔵の失態であつた。にもかかわらず、家康は半蔵に、忍者としては破格の三千石を与え、終生身の警護の任に就かせたという。

よほど、佐助がこわかったにちがいない。

妖異水底に沈む

信 夫 澄 夫

秋吉 轡・絵

整然とならべられた大和時代中期の鏡を、私は見るとはなしに眺め入っていた。

凄味のこもった獣首鏡、龍虎鏡、それとは対象的に、淫靡な気持を呼びさます鈴鏡、珠文鏡、どの鏡にも持前の魅する力を宿していたが、どの鏡もまた、発掘されたばかりの妖気をみなぎらせていた。

獣文鏡、画像鏡と、私は幾つもの鏡に眼を移していった時、ふと見なれない鏡に吸いつけられた。

鏡背の内側に神と動物とが四体ずつめぐらされ、そのまわりを神獣が体をくねらせて踊っている図様に、不可解なものを感じたからである。



一体いつごろの作品なのか、なんという呼び名の鏡であるのか、皆目私には見当がつかなかった。

私は手許におかれた古墳文化に関する学術書をひもどくと、異常な関心をもって古代鏡の項をめくった。

神獸鏡——その学術書はその鏡の名称をそう紹介し、前期古墳時代のものと注意書きしてあった。

前期古墳時代のものとして書かれた注意書きをもう一度確かめた私は、心のなかに起こった大きな動揺をおさえることが出来なかった。

当時、T大学の学生だった私は、大学の古墳発掘調査班に加わって、H湖畔北部に点在する、大和時代中期の古墳発掘を手伝っていた。

先年他の調査班が発掘して有名になった登呂遺跡はここから僅かばかりの距離にあり、我々T大学調査班の競争意識をいやがうえにもあおりたてていた。

私達が手がけた五つばかりの古墳は横穴式石室といわれ、古墳文化がかなり発達した中期から後期のものであった。

石室からとり出された埴輪、鏡、壺、瓶、玉、櫛などは、調査班の宿所である仮建築のかまぼこ住宅に運ばれ、几帳面に整理、区分



されていた。

その夜、私は息づまる思いに包まれながら、中期古墳時代の遺品のなかに前期古墳時代の遺品がまじっているのはおかしい。

中期と前期とは少なくとも数百年の年代的なへだたりがある筈である、と調査班の学生達に問題を放ったのである。

「なにかの間違いだよ、そりゃあ」

男くさい感じのする犬山が、無頓着な顔で云った。

「馬鹿！ ゴボウの畑に山芋がまじっていたのとはわけがちがうんだぞ。科学者を志す者はもっと科学的に物ごとを洞察する究明心が必要だ」

私はこう云ってやりかえした。

「だが、それは当世はやりの偽作かも知れないぜ、むかしだってあったと思うな。前期時代のよいものを、中期時代の細工人が盗作して、時の御門に献上して関心をかったというような話しはね」

白面の月森がこう云うと、みんなの間に笑い声が起こり、話しは古今東西の盗作のことにそれてしまった。

物ごとを理づめに考える私は、ひとり、話しかけずれて不吉な思いにひたっていた。しかしその不吉な予感、その後、事実と

なって実証されたのである。

私達の発掘作業は連日の好天気恵まれ、順調に進んでいた。

横穴式と呼ばれる古墳は、まず羨道（センドウ）と云われる道を開き、その奥にある玄室に達する。玄室は前室、中室、後室と三つに分かれている。

そんな時、一つの室をあばき、さらに次室のあることがわかり、重ねて奥の奥があることを知って掘り進む気持は、期待と不安といひ知れぬ快感に似たものを感じるのである。

この数日、埴輪、高坏、埴（マリ）などが、たくさん掘り出され、破損したものの優元作業も平行して行なわれた。

いつもならこういう作業は東京に持ち帰り、専門家の手で行なわれる訳だが、これも大学調査班の勉強に、というので専門家を現地にむかえ、学生達の手で復元が試みられていた。

高津玲子もエツ子も、復元作業では女性らしいこまやかな神経を発揮して男の学生達より立派な仕事をしていた。

三十名の男の学生にまじる女性二人。高津玲子は、考古学で有名なT大学教授高津直道氏の令嬢である。

エツ子は……つまりエツ子については誰れ

も知らないのである。私達が調査を始めたころに、どこからともなく現われ発掘作業に加わったのである。

初めは、三時ごろになるとお茶菓子をおふるまってくれる目立たない瘠せた女の子だったが、なれるに従って、初歩的な作業を手伝いだしたのである。

「こんなのにも果物を盛ったら素敵ね」

ふくよかな胸をした玲子が、高坏の脚台の損じたところを器用につなぎながら、こう云った。

「果物より、これでお酒飲んじゃったほうがおいしいと思うな」

セーターにストラックスというスポーティーないでたちのエツ子が、ハスキーな声で答えた。

「酒ならこっちの壺の方がうまいさ」

云いながら犬山は大きな瓢箪に似た壺を高くかざして見せた。と、そのはずみにせっかくくつつきかかった底がころげ落ちた。

「生れつきの不器用者はしょうがないね」

同じような壺をいじっていた私がこう云っている側から、エツ子が駆け寄って犬山を助けた。

エツ子のきやしゃな手は、するりと壺のうちに入り、内側から接着剤をぬりつけた。

私はこの時、セーターをまくり上げたエツ子の腕に腕輪をはめてあるのを知った。

一見なんの変哲もなく、町で売られているものと同じであるが、くすんだ青磁色と、輪の周りについた五つの小鈴を見ているうちに奇妙なものを感じ取った。

古代に使用された銅釧（ドウクシロ）という奴とそっくりで、当時の技術の未熟さを物語る輪のゆがみまでが、うかがえるのである。

エツ子は、私の眼がその腕輪をじっととらえているのに気づくと、あわててセーターの袖をひきおろし、激しいまざしで私を見かえた。

「やっぱり、エッチャンだけのことはあるね。細工はりゅうりゅう、傷がどこにあったのか、まるつきりわからない」

出来上がった壺に犬山が感服すると、

「あら、無料サービスした訳じゃないわ。おかえしに、なにかプレゼントしてもらわなくちゃ」

と、犬山の襟についた糸くずに、やさしく手を伸ばしながらエツ子は云った。

「なにが欲しい」

「そう……ね。腕輪はこのあいだ買ったばかりだし、イヤリングにするわ。町まで出る

と、マルタ屋ってちょっと気のきいた装飾品専門のお店があるわ。クラシックなものがかくさんあって、私の趣味にピッタリなの。私はいつもそこに決めてるんだけど」

エツ子は、私の方をちらりと見て、さりげなく云った。

「おいおい、そういう話しは、ご遠慮ねがいたいね。みんな若いんだから」

月森にこういわれると、エツ子はわざと、犬山に甘える素振りを作って、みんなからひやかされた。

渋味を含んだ青い腕輪、ゆがんだ輪形、五つの鈴、私はもう一度、心のカメラに焼き付けられた銅釧を脳裏に描いた。

私の見間違えだろうか。

犬山とエツ子がかわした会話が、エツ子のトリックにしては、あまりにもうまく運び過ぎていく。

エツ子の瘡せて骨っぽい体身に未成熟でつましやかな胸のふくらみを見ていると、可憐な愛らしさがにじみ出ていて、なんの作意も感じなくなってしまうのである。

だが、あの激しいまざしと、その奥底にかくされたおののきはなんだろう。

私は、忘れかけていた小さな異変を思い出した。

遺品の復元作業がはじめられた一昨日、私は作業の終わった埴輪の出来ばえを、一つ一つ調べていた。

すると、その一つに不思議な紋様を見つけたのである。

それは女子像を形どった埴輪で、頭は島田髷を平たくつぶしたような髪を結び、簡素なブラウスに似た上衣をまとい、裳（モ）と呼ばれるスカートのような下衣をつけているが、スカートの下腹部の一方所に、全く異った紋様がついているのである。

おそらくこの部分が破損していて、復元作業の時にくつつけられたものらしいが、その紋様は明らかに、新石器時代を代表した縄文の模様であった。

縄文文化の時代と、私達が今、発掘している大和時代中期の間は、数千年から一万年ものへだたりがあるはずである。

しかも、縄文土器といえど東日本に多く、この地方では殆ど発見された例がない。

こう考えると、だれが、なんのために、どういう経路を通じてこんなものをここに持ち込んだのか、私には解けなかった。

縄目の紋様に、雲母の粉末を浮き上がらせ、金砂子をまいたようにキラキラ光って見えるその部分は、妙に艶美に映り、だれかの

単なるいたずらさだけではすまされない秘密が
かくされていた。

エツ子が唄っている。

なにこともなかったように私の目の前で、
流行歌かなにかを口ずさみ、学生達の間を身
軽にとびまわりながら作業を手伝っている。

明朗でハツラツとしたふん囲気が彼女が行
くさきさきにかくわしく匂っている。

やがて仕事が終わる、宵闇が迫ると、彼女は
ステップを踏むような気軽な足どりで家路に
向かうのである。

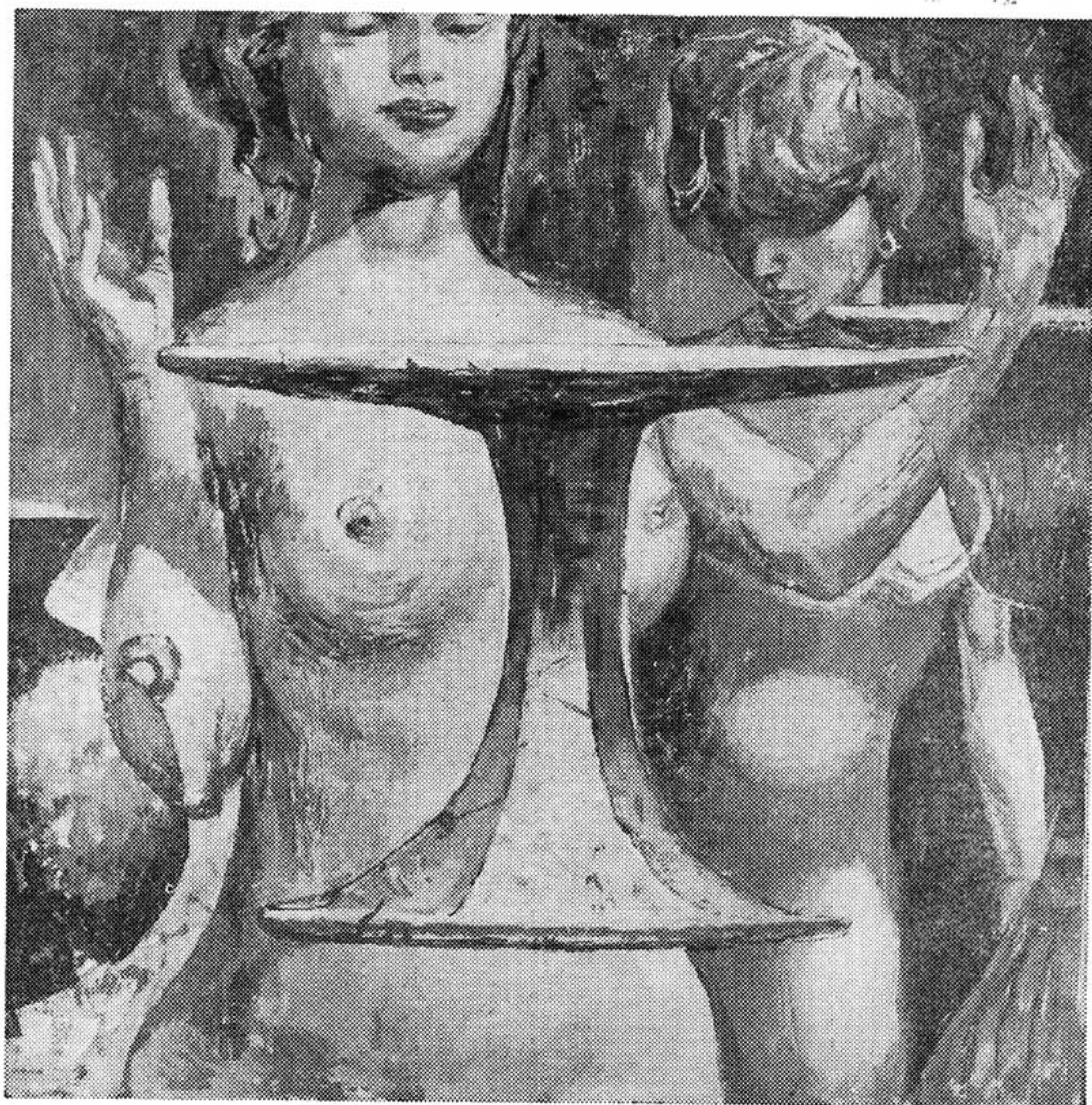
しかし、私は彼女の持つムードにどこか欺
まんがあり、深く秘められた醜悪な部分があ
ることを見逃さなかった。

若い人いきれで室のなかはいっぱいだっ
た。

早目の夕食が終ると、私達はきまってグル
ープごとにかたまって雑談した。

今夜は珍らしく、高津玲子の顔も見えてい
る。いつもは教授の室に当てるカマボコ
住宅の一角に父と一緒にこもり、みんなの前
にはあまり姿を現わさない彼女である。

「話しが違うんですけどね、エツ子さんのお
化粧ってちょっと変ね。いつも肌から浮き上
って濃いとこりと薄いとこりが出来てるわ」



玲子が云った。

「まだ若いからよくわからないんでしょう、化粧の仕方なんか」

月森が週刊誌から眼をはなして答えた。

「鉛華と滑石粉でつくった白粉は、あんな色してるんだぜ。僕の云っていることの意味がわかるかい」

こう私は含みのある云い方をした。

私はもう黙っていられなくなっていたのである。これをきっかけに、エツ子の仮面をはぎとってやろうと決心していた。

「それどういう意味かしら」

玲子は艶のあるまざしをむけた。

「つまりね、漢の影響をうけた我が国の古墳の中には、漆の化粧箱に入ったそういう白粉が発見されることがよくあるんだ。それで、そいつを塗ると、エツ子みたいな顔が出来上がるのさ」

私の云い方はずいぶん断定的だった。

「じゃあ、エツ子さんは、それをどこから手に入れたというの」

「そうだよ、彼女はそんなものを簡単に手に入れる方法を知らないと思うな」

と云った犬山は、腑に落ちないようすだった。

「どこから手に入れたのかは、こっちからエ

ツ子に聞きたいところだね……」

私はこう云ってから、腕輪の一件と、埴輪の縄文紋様のことを持ち出し、神獣鏡の話しをむしかえした。

すると、今まで黙っていた月森が、青味を含んだ表情で云った。

「エツ子っていうのは、一体男なのか、女なのかわからないな」

それっきり、みんなは黙りこくってしまった。

さっき別れたばかりのエツ子のことを、それぞれ思い浮かべているようであった。

「なぜ？」

しばらくしてから、私は月森に向きなおって問いただした。

「なぜって、君のいう、科学的な洞察力を持つて観察したわけじゃないが、大体からだの感じが女じゃない。それに、よく注意して見ろよ。エツ子のオッパイの位置は毎日違うぜ……あれはにせものだよ。パットでごまかしてんじやないかな」

月森は、眼を異様に輝かせて一気に云った。

「そんなこといったってな、ブラジャーのしめかたで乳房の位置なんてもんは変るよ」

犬山は依然、エツ子の立場をかばってい

た。

「いやだわ、女性を前においてそんな話するなんて」

玲子にそう云われて、みんなの悪い顔をした。

翌日、私達の神経は殆どエツ子にそそがれ通してあった。

エツ子の一挙手、一投足のうちになんとかして秘密をとく鍵を見つけようとして、みんなの眼はエツ子をあらゆる角度からとらえてはなさなかった。

作業が終りに近づいたころ、だれからともなく、私達はエツ子を取り巻いていた。

「エツ子、お前、女じゃないだろう……」
不遠慮にこう切り出したのは、意外にも犬山であった。

エツ子は、落雷に持たれたようにからだをぐらりと動かして、立ちすくんだ。

「俺はお前が嫌いじゃない。だけど、お前は俺や、俺達に隠しだてをしてるだろう」

こう云った犬山は、かなり考えた末に心を決めたものらしい。

エツ子は、落ちつきをとり戻すと、

「私、まだ子供なのよ。こんなこと云うの恥ずかしいけど、一人前の女になってないの……」

と云った。

私達は、この言葉に、またはぐらかされたようである。私達は、彼女が女でないという確証を持っているわけではなし、これ以上、エツ子の生理について、何にも口出しが出来なかった。

この時、

「エッチャン、もういいわ。あまり気にしないで。それよりも私、これから勝山さんのところへ行くから一緒に行きましょうよ」

玲子是这样云うと、やさしくエツ子の肩に手をさしのべた。

勝山というのは村の有力者のことで、カマボコ住宅の風呂をきらった玲子は、時々そこへもらい風呂にいらっていたのである。

私は玲子の心を読みかねていた。一緒にいこう、というのは、エツ子を風呂に誘って、彼女の生理の秘密を解こうというのか、それとも、単に途中まで行こうといさなつたのか……私達が拍手拔けしている中を、エツ子は玲子にうながされて出ていった。

五大新聞の東海地方版が、一せいに猟奇事件としてとり上げた奇怪な事件が起つたのは、それから数時間後のことである。

「金環の耳飾が一つ足りないんだがな、だれ

か心あたりはないかね」

あの夜、高津教授にこう云われて、私達は、室中をひっくりかえして耳飾りの行方に無中になっていた。

何時間もの時間をかけた後、探しあぐんで私達は、

「そう云えば、エツ子がひどくイヤリングを欲しがっていたな」と、エツ子と耳環の紛失を一つに結びつけて考えはじめた。

「腕環はマルタ屋で買いました。イヤリングもそこに決めましたってエツ子の奴云ってたが……」

犬山は室中を見まわしながら言ったと思うと、

「畜生！ わかった。マルタ屋って云うのは、このカマボコ住宅のことなんだ」

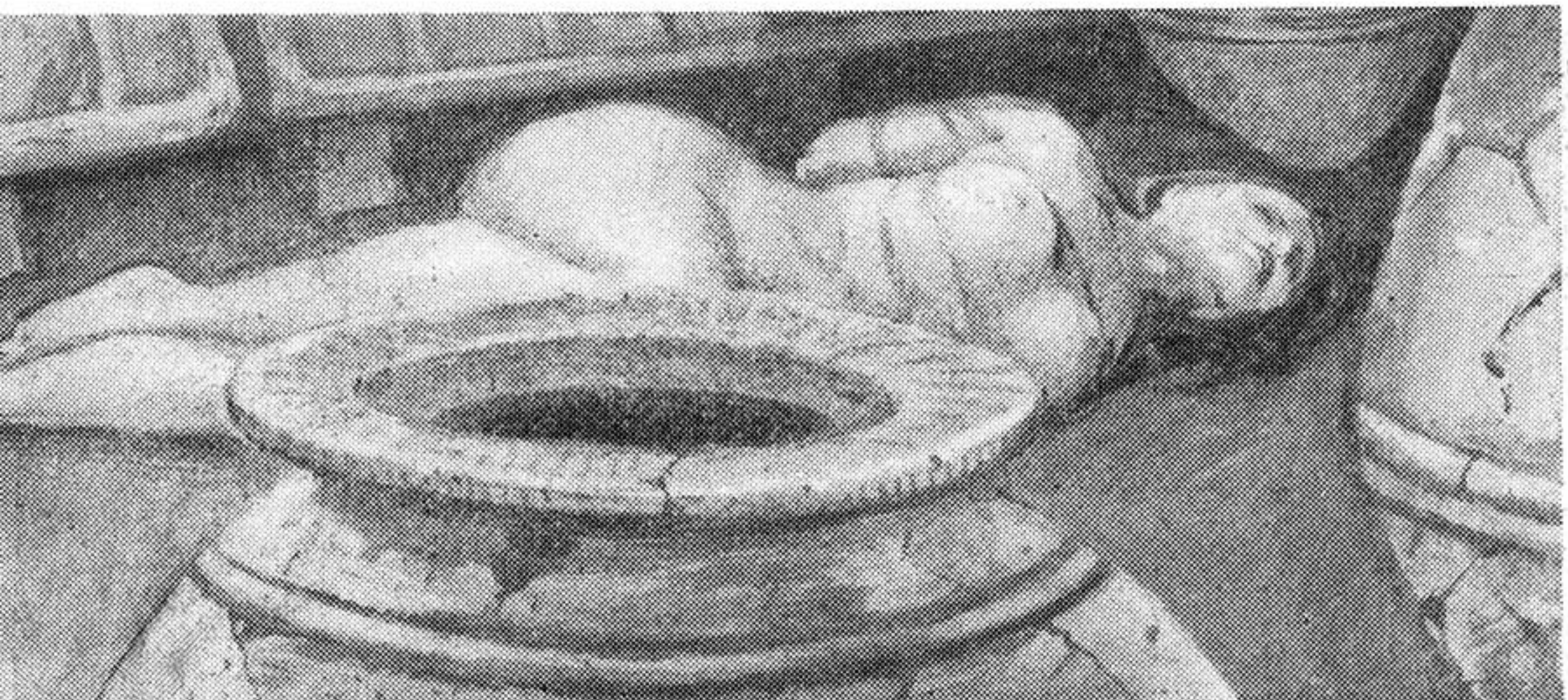
彼は、宿舎を支えている幾本ものマルタの柱を指さして叫んだ。

そこまで考えの及ばなかった私は、背筋に鋭角的な緊張を覚えながら、反射的に時計を見た。九時二十六分。

玲子とエツ子が連れだって出かけてから、三時間余りの時間が過ぎている。

「しまった！ 玲子さんを探さないと、玲子さんが危いぞ」

大声に云った私は、叱咤しながら、玲子の



行方を探すための手わけをした。

私は高津教授と、勝山の家を訪れたが、予想していた通り、もらい風呂には来ていないという返事だった。

警察へ、村の消防団へ、捜査は八方に依頼され、私達自身もやっきになって入念な探索を行なったが、何んの手がかりも得られず、明け方になって、疲弊したからだをひきずりながら宿舎に戻った。

眠たげに、不格好なからだを横たえた宿舎。黎明の灰白い光を透して見る、発掘された様々な遺品。その一つ一つが、黄泉の国から送りこまれた、死者の霊像のようであった。冷えびえとした室に、足をふみ入れた私は、改めて、古墳発掘という仕事、他人の墓をあばき、死者の霊を冒瀆する行為であることを悟った。

どの鏡にも、どの土器にも、死者の執念がまつわりついているのだと、自身に云い聞かせながら私は、見なれたはずの遺品を、いつもとは違った息づまる面持で、見改めながら室のなかを歩いた。

「誰れだ！」

私は幾つかの遺品を過ぎ、カメ棺と石棺の間まで行った時、白い蠟人形のようなものを認めて叫んだ。

私の直ぐ後から、学生達が走り寄ってくる。

白い肉の塊は、薄暗闇のなかにうづくまり、ほんやりとふやけて見えた。

「早く灯を……」

私の役に人垣をつくって、みんなは口々に云った。

灯がともされた瞬間、私達は驚愕のあまり押し黙ってしまった。

上半身をかな、縛りにされ、一糸もまとわないう女のからだ、眼の前どころがっていたからである。

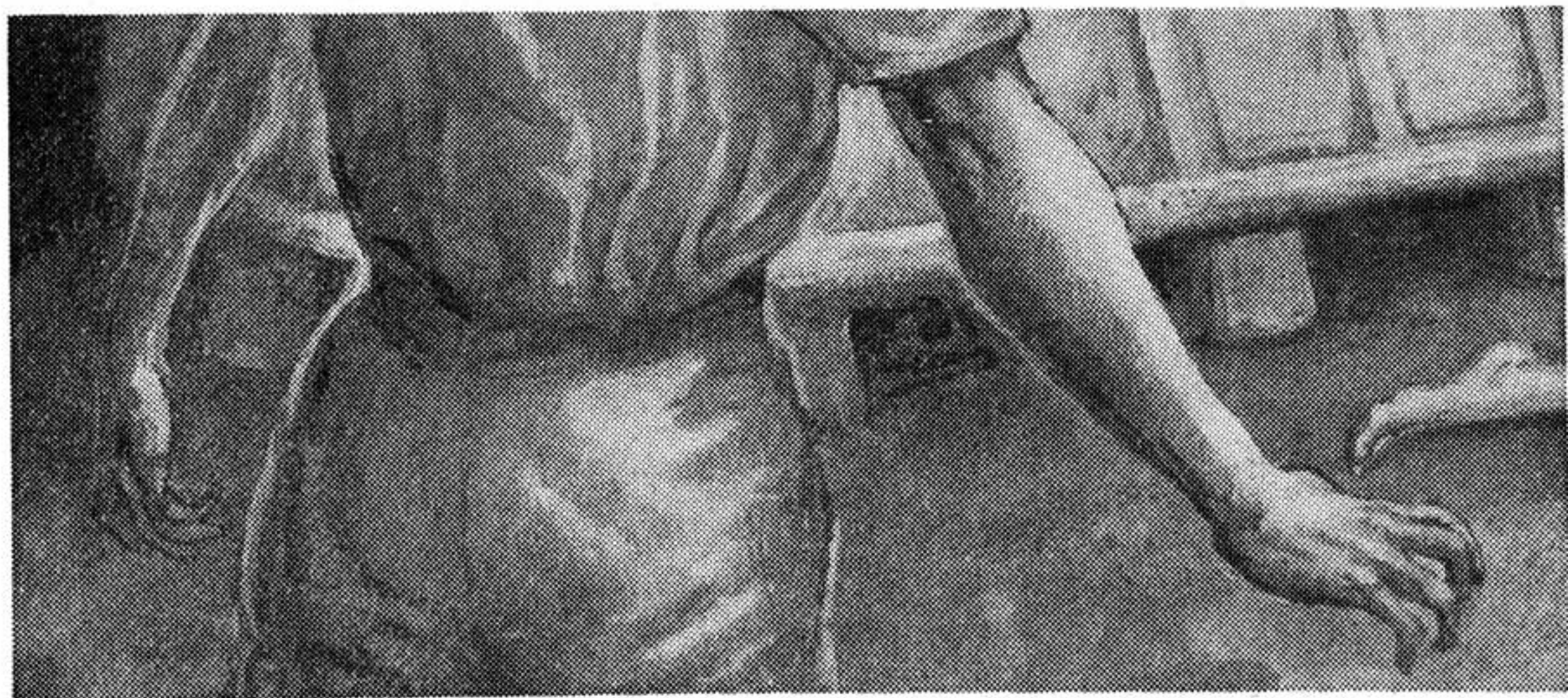
縄目の間からこぼれかけた二つの豊沃な乳房が、痛々しくもまばゆかった。ムッチリとした太もものつけ根にも、縄目の跡が歴然と残されている。

「玲子さん！」

月森がこう云うまで、それがだれであるのかも見境がつかなかったくらいである。

エツ子の仕業に違いないと思ったが、虚を突いた余りにも大胆な仕打ちに、私達は、ただ啞然とするばかりであった。それにあのかほそいエツ子が肉付の量感にあふれる玲子はどうやって仕止めたものか想像もつかなかった。

徐々に落着をとり戻した私は、なにか犯罪



でも犯すような気持でもう一度、玲子の大腿部に眼をやって、再び愕然とした。縄目の跡とばかり思っていた部分は、なんと、縄文の紋様を陽刻したイレズミであった。

私の頭のなかは、大きく回転して、あの女子像をかたどった埴輪の腰に思いを走らせた。沈線文といわれる縄文の紋様、それとまったく同じ紋様が、玲子の艶めかしい内ももの奥に刻まれているのであった。

私達の発掘調査は、この事件で中断され、そそくさと東京へ引揚げることになった。失神からさめた玲子は、精神状態が錯乱したまま、とうとう正気に戻ることはなかった。とぎどきフナガタ、ナガモチと謎めいたことをわめくだけで、それがなんのことなのか、玲子がどんな責苦を受けたのかをかいま見ることも出来なかった。

エツ子の姿は、その日から見えなくなり、その後、だれ一人として、彼女を見かけたと噂する者はない。

湖北の暮靄(ボアイ)は美しかった。夕映えに浮彫りにされたなだらかな丘陵。それを背景にして妖精のように小躍りしながら、家路にむかうエツ子は、今では切りぬきの影絵の姿になって、私達に鮮烈な印象を残し去ったのである。

私は、もうこのまま何年か過ぎればエツ子のことは忘却の扉に閉じこめられ、再び話題になることはなくなるものと安易に考えていた。ところが私は、再びエツ子を話題にしないでならなくなった。

これは一体どういうことなのだろう。奇縁というか奇遇というのか、まったくの偶然から、つい半月ほど前、私はエツ子を見かけ恐るべき事実を目撃したからである。

先きごろ、H湖の北で日本最古といわれる人骨が発見され、その鑑定の現地実習に私ひとり当地へ赴くことになったのである。人骨は五万年前のもので、浜北人と名づけられ現地の話題を奪った。その騒ぎの帰り、私はエツ子を見かけたのである。

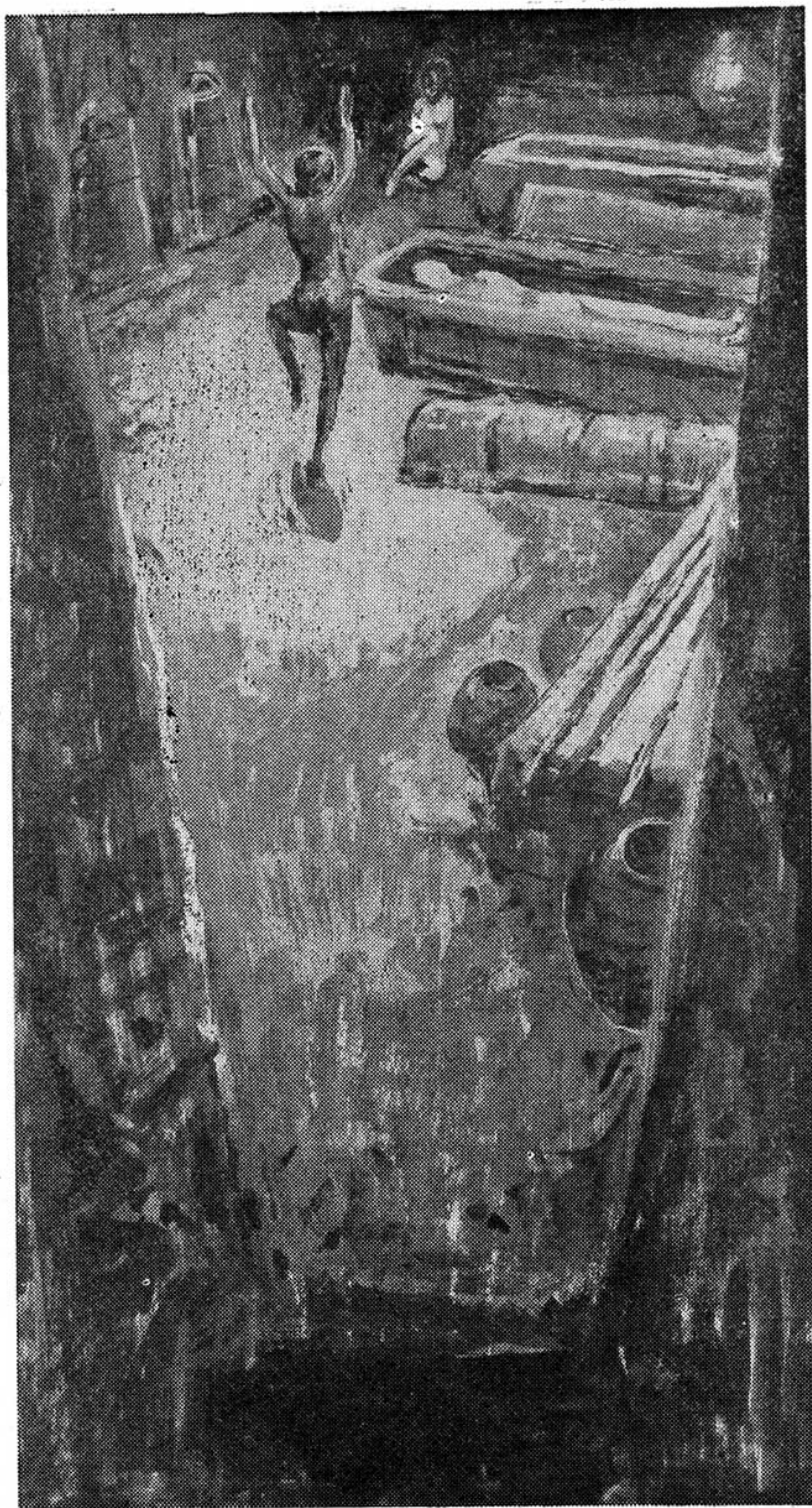
少年のような髪をして、初夏だというのに徳利のセーターを着、あのころと同じスラックスをはいていた。未成熟な胸、しほんだ尻、それに、見覚えのあるイヤリングまでしている。天龍川にかけられた橋の上で彼女とすれちがった私は、悪霊にとりつかれたのかも知れない。忘れかけていた過去と現実の距離が急にせばまると、私は矢もたてもたまらず踵を返して彼女を尾行した。

エツ子は橋を渡ると、ステップするような足取りも昔のままに、鳥羽山と呼ばれる古戦場と、天龍川の間には僅かに立ち並ぶ林のなかに入った。そして二十メートルも進んだかと思うと、フツと姿を消してしまった。私がおそるおそる近寄ったそこには、ぽっかりと口をあけた穴だけがあつた。

私は躊躇しながら穴のなかに足をふみ入れてハツと思った。これは地下式坑という大和時代の古墳なのである。地表より五メートルも降りると横にむかう孔道があつた。冷々とする横穴も、私は不安定な足どりで玄室まで進み、息を殺してなかを盗み見た。

つぎの瞬間、私は危く声をあげるところであつた。粘板岩をアーチ形にえぐった玄室は、さながら秦の始皇帝の墳墓を再現したほどの佳麗さである。袈裟襷文がどこされた一メートル余り銅鐸(ドウサナギ)、ミカと呼ばれる五石甕、金色に輝く金属製の靴、柳葉状の大刀、小刀、無数の遺品が絢爛として室内を飾りたてている。

なかでも私に驚異の眼をみはらせたのは、豪華な船形石棺と整美な長持形石棺であつた。長持形石棺には蓮花文までが細密に彫刻されている。遺品の種類が多いことから考えると、方々から集めてきたものらしいが、そ



れにしても銅鐸とか棺とか重さのあるものは、もとからの古墳に葬られていたものであろう。

エツ子は凍りつくように寒い室内を念入りに見まわすと、妖しく微笑して意味のききと

れない言葉をぶつぶつとくりかえしはじめた。古代語の呪文である。

私はこれからなにが起ろうとしているのか想造もつかなかった。エツ子は呪文をとまえながら、徐々に柔軟な踊りにうつり、ときど

き壁に幾つも描かれた奇妙な絵に一つ一つ接吻してはまた舞いつづけた。

壁の絵、私はそれが古代の図様を描いた壁画であろうと思っていた。が、よく見ると、その一つ一つに、人体をかたどったひからび

たカンバスのようなものに描かれているのである。なかには乳房の跡が歴然と残っているものすらある。

人間の皮だ！ それに気づいた私は、もう逃げ腰だった。俱梨伽羅紋のイレズミを後世に残すために東京の大学あたりではよく、死者の皮をはいで保存してあるというが、女性の中から古代紋様を刻みこみ、生身の皮をひきはぐという恐ろしい行為が、ここでは平然と行なわれているのではなからうか。

なおも踊りつづけるエツ子は、熱してくると修羅神と化し、銅鐸をたたき星雲の鏡をふりかざして足をふみ鳴した。

やがて彼女は、上衣とスラックスをかなぐりすてて、私のすぐ前に立った。と、それはもうあの可憐なエツ子ではなく、眼のすわった骨っぽいひとりの男性であった。しかも驚いたところには、骨太そうな胸に流水文のイレズミが一っばいに刻みこまれてあった。

やがて男は精白鏡と雷文鏡をもち出し、棺の前に置くと、うやうやしくぬかずいた。

古代の鏡は死者の霊を慰めるためにも使われたという説が強いが、この男はそのことをよくわきまえているらしく、呪術のつぎに鏡を配したのである。

男が深くぬかずく船形石棺と長持石棺：

私は、この二つの石棺から記憶の糸をたぐった。

「フナガタ、ナガモチ」たしか、玲子がうわ言のように云った言葉はこうであった。すると、玲子がイレズミを彫られたのもここに違いないのである。

このとき、石がすれあう音がした。男が、下ばきまでぬぎ捨て裸の姿で、船形石棺のフタを開けたのである。私はミイラになった遺骸が化石になった骸骨が現われるのだろうと、打ち震える好奇心にかりかてられながら、背伸びして石棺のなかをのぞいた。すると、私の予想は全く裏切られ、そこには白蠟でつくった人形のようなうら若い高貴な感じの女性が、一糸もまとわずに横たわっていた。

隆起した胸にはブラジャーが———と思ったが、それは獣首を描いたイレズミであった。

男は、棺のふちへ足をかけ軽々となかに入ると、かぶさるようにして身を没した。それっきり私の立っているところから、どういう行為が男と女の死体のあいだで交されているかは見えなかったが、男のうわづった声が玄室いっばいに伝わるのである。

淫獣！ 私は思わず心のなかで叫んだ。

昼は女を装い遺跡を漁り、夜は高貴な婦人

の遺体をもてあそぶ。私は狂態を眼の前にしながら、これが悪夢であってくれればと心に願った。男はやがて虚脱したように茫とした顔を現わすと、ふうふうと立ち上がり、長持石棺の方に移った。棺のなかからは、猿ぐつわを噛まれ、後手に縛られた裸の女が現われた。

男は女を床の上にひきづり出すと、すばやく左手に絵の具を右手に、尖根式と云われる先端の鋭い刀子を握って女体に迫った。

すると、死体だとばかり思っていた女の体は、恐怖におののき肢体をくねらせて身悶えした。軟骨動物のようにつたうつ女の内ものあたりには、やはり縄紋のイレズミのあるのを私は見逃さなかった。

男はふくよかな乳房の丘に、にじり寄ると処女らしい薄ばら色の乳房をつまみ上げ、鋭利な刀子のさきを使って、なにかの紋様を刻んでは朱色の絵の具を流し込んだ。女は乳房を大きくはずませて、乱れ狂うのである。苦悶してからだをよじるたびにムチムチとした尻をのぞかせたが、そこにも股間から通じた縄目のイレズミが彫ってあった。朱の絵の具は脂肪ののった胸を染め、さながら血しぶきを浴びたようであった。

私はもう眼の前の振るまいを黙って見てい

るわけにはいかなかった。

壁の鉄刀を握ると、いきなり玄室のなかに躍り出していた。男は突然の乱入者に一瞬ひるんだがすぐ燃えるまなざしで私を睨みつけると、そばにたてかけてあった銅鉾をふるって、私に突きかかってきた。そして私のたじろぎを見て取ると、男はいきなり背をむけて力一っぱい玄室の壁に鉾先を突き立てた。

つぎの瞬間、ゴーと音をたてて、粘板岩の壁がくづれ、水が玄室のなかへなだれ込み、見る見る室を没した。私は危く水に巻きこまれそうになりながら、孔道を走り抜け、穴からはい上がった。

暮色につつまれた天龍の対岸の山々は、紫色に沈んで行こうとしていた。私は覚めやらぬ悪夢を払いのけようと、呼吸を整え水の流に暫く見入っていた。広大な水帯。私はその流れの帯のなかに不審な渦を認めて慄然とした。

あの玄室は河底に通じていて、今はもう河水の渦巻くなかに沈んでしまったことがはっきりとわかったからである。時の流れをまったく停止させてしまうような、あの玄室の冷やかさも、大天龍の流勢によって冷されているのである。

石棺のなかの貴婦人が、幾千年をへた今日原型を保っていたのも、玄室が冷凍室の役割りを果たしていたからも知れない。

それにしても、もうひとつの棺にかくされていた生きた女はなんだろう。

そう考えなおしてみたが、もだえ苦しんだ女のからだは、男の妖術におどらされたムクロであったのかも知れない、とも思えた。

女をよそおって調査班に接近し、神獣鏡をわれわれのなかに放って調査員の注意力をそらし、発掘作業が自分の秘密のかくれがに及ぶことをおそれて、ひそかに、われわれの計画を内偵しようとした緻密さにはおどろかされる。

埴輪にほどこされた紋様や、玲子のいのちをうばわなかったことなど、のこされた謎は多いが、いまは、それをとくカギも、うばいさられてしまったのである。

遠い町なみの水銀灯が、青焰の妖しさを増していった。

私は、夢と現実のあいだをさまよっているような、不確かな思いで足を運びはじめた。

このおそるべき事実を目撃したものは、私だけなのである。

いまはもう、学会や友人たちを納得させる証拠は、すべて水底に沈んでしまい、私の脳裡にだけ、呪うべき傷あとを残していったのである。

私は、これから何年ものあいだ、この疑惑と不安と恐怖の十字架を背負ってくらさねばならないのだ。

ながらくお待たせしましたが「裏窓叢書」全巻増刷できました。このチャンスにぜひお求めください。

裏窓叢書第一集
「狂異地獄肌」 飯田豊吉・著

お仕置きにぬれる弓子

北園透一郎
鬼頭暁・絵

1

都心からフルスピードで、一時間ほど車を走らせたところにある高級別荘地帯に、いつものまにか、スマートな洋風の建物が新築された。なにも知らない者の目には、せいぜい、三階建ての、しゃれた別荘ぐらゐにしかみえない。

しかし、地上に現われている平和な風景とは逆に、地下には、八階という深く巨大な構造が、巧妙な設備をもって完成されていた。

この別荘こそ「アラビアの城」と、ひそかに愛称されている、ある人種たちの天国であった。

ある紳士たちにとっては、ハレムであり、天国であったが、ある選ばれた美貌の女性た



ちにとっては、まぎれもない地獄であった。
この「アラビアの城」の主人は、Qとよばれる正体不明の男である。

Qは、全国から多くの若い美女を、むりやりに招待してきては、このハレムのなかに閉じこめ、とくべつな訓練をほどこす術に、天才的な才能をもっていた。

さいきん、Qは上ぎげんであった。

それは、大木弓子という理想的な娘を、手にいれたからである。

弓子は十九歳になり、BGとして勤めはじめたばかりの、明かるく素直な娘であった。

中流の家庭に生まれ、なんの苦労も知らずのびのびと育った幸福な処女の運命は、美しく清純であるがゆえに、かえって悪魔に魅入られてしまったのである。

弓子にとって、この運命の激変は、まだ現実のものとは思えなかった。

夢なら早くさめてちょうだい！

私には、なんのツミもないのに！

おとうさん！

おかあさん！

しかし、この悪夢は、いつまでもいつまでも執拗につづくのだ。

2

「なに、そんなにオトイレにいききたいの？

そうか、そうか。よし、よし。すぐにさせてあげようね。でも、その前に、さるぐつわをはめさせてもらおうかね」

Qは、にたりと笑い、ふたたび、れいの、ガーゼをとりあげた。

ガーゼは、口のなかにつめやすいように、ほうたいのように、細長く切って、きれいに巻いてある。

「ああ、ああ、いやッ、いやッ。口をくくるなんて、いやです。かんにんして。なんにもいわず、だまっていますから。がまんしていますから、口をふさぐのはやめて！」

弓子は肩をふるわせて哀願した。

「ホラ、ホラ。もうそんなにさわいでいる。だめだ。やっぱり、さるぐつわだ」

Qは、ピンセットをつまんだ。

「だまります、だから、ゆるして！」

弓子は悲鳴をあげ、不自由な首を左右に振っていやがった。

が、たちまち首枷が調節され、弓子は頭を動かすことができなくなった。するとQは、

「さあ、もう観念して、おとなしく口を開くんだ。さるぐつわがはまらんうちは、でたいものも、ださせてやらんぞ」

と言った。これは、Qが弓子に始めて見せ

た恐ろしい顔と声であった。弓子はびっくりして、ふるえながら口を小さく開いた。

「よしよし、いい子だ。さあ、もっと大きくアーンして」

あやすように言いながら、弓子の口を片手でさらに大きくこじあげ、もう一方の手に持ったピンセットで、带状のガーゼを少しずつ、彼女の口の奥のほうからびっちりつめこんでいった。

弓子の口からもれる「アアア……」というせつない悲鳴は、ガーゼがつめこまれるのに従って、「ムムム」といううめき声に変わっていった。

ガーゼは、弓子の口のなかの、すみからすみまで、充分に押し込まれた。つぎに、Qは満足そうに笑いながら、黒光りのする、しなやかな、なめし皮のさるぐつわを、その上にあて、しっかり締めあげた。

皮は、口からあご全体をおおい、細い首のあたりまでを、がっちり締められるようになっており、唇にあたる部分にはスポンジが張ってあるという嚴重なものである。

Qが、後でいくつかの尾錠を、適当に調節しながら止めると、弓子の口からの呼吸は完全に止められてしまった。

弓子は、あまりの苦しさと痛さに、激しく

あえぎながらうめいたが、それも外にはほとんどもれなかった。

左右の乳房だけが、無言の悲鳴をあげる。

Qは、さるぐつわの完全さに満足した。

「さて、オシッコだったね。すぐに仕度して上げるから、もうすこし辛抱しているんだよ。おもしろいなんかすると、お仕置きだよ」

Qは言いながら、世話係を呼ぶと、

「オシメを頼む」

と命じた。

オシメときいても、弓子はそれが自分に当てられるものだとはいえなかった。

さるぐつわの痛さをこらえながら、「早くご不浄に行かせて」というように、弓子は目で哀願していた。

そのあいだに、Qは責め椅子を操作するスイッチの一つを押した。

すると、かすかな音とともに、椅子の足はゆっくりひろがり始めた。

「ムムムム」

弓子は、苦しいうめき声をだしながら、必死にそれに抵抗しようとしたが、彼女の足首と膝にはめられた枷は、音もなく左右に動いた。

Qは、べつのスイッチを押して責め椅子の背をたおし、弓子のからだを、膝の上に横た

えた形にした。

そのころ、世話係は、何やら白い布を持って部屋にもどって来ていた。

「フフフ。じゃ、すぐにオシメをあててあげるからね。もうすこしガマンしているんだよ。ホラ、きれいなオシメだろう。弓子みないな、大きな赤ン坊のために、特別に作らせたオシメなんだよ」

自分にオシメがあてられるのを始めて知って、弓子は、さるぐつわの奥から異様なうめき声をしぼりだし、不自由なからだを激しくもだえた。

「フフフ。じゃ、パンティを脱ごうね」

弓子のもだえは、さらに激しくなった。

「さあさあ、おとなしくするんだよ。こうしなくちゃ、オシメがあてられないだろう」
なだめるように言ったが、弓子が静かになるはずはなかった。

むろんQにとっては、特殊椅子にしっかりと固定されている弓子が、いくらもがいても、パンティをずらすことぐらいかんたんである。

しかし、何事も、ゆっくり時間をかけて、その間の屈辱を充分に味わせるというのが、彼の方針であったし、また今の場合、べつのたくらみもあったのである。

「そんなにいやなら仕方がない。じゃ、パンティの上からオシメを当てておいてあげよう。おもしろいをして、椅子が汚れても困るからね」

Qは、しかつめらしい顔でいった。

世話係に手伝わせ、弓子のパンティの上に、白く柔らかなオシメを当てがった。

そしてつぎに、小さな花模様のある純白の、ゴム引きをしたオシメカバーで、むっちりしたおしりをくるみ、しっかりボタンで止めた。

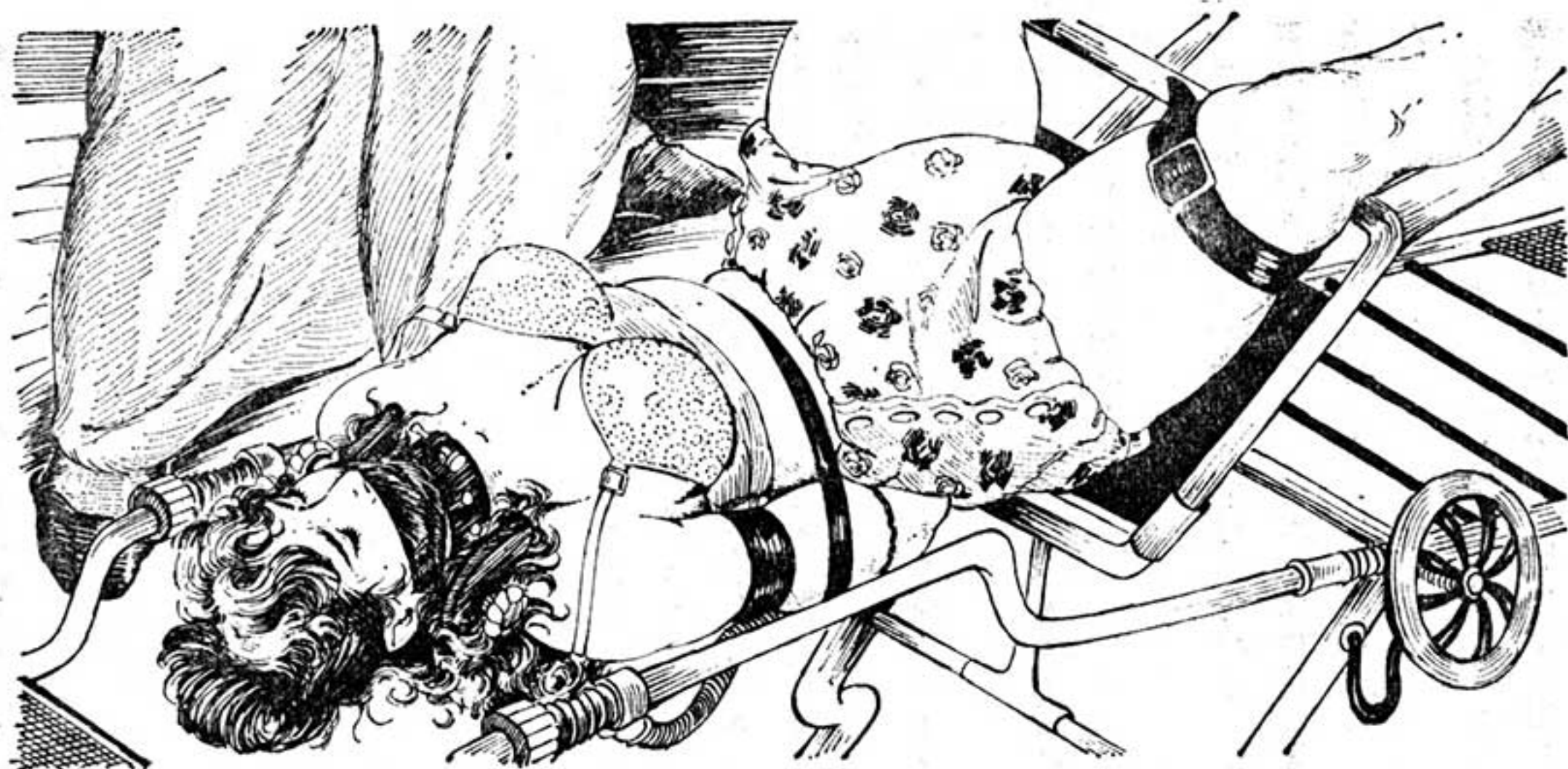
「ムッ」

弓子は、わずかに動く腰をくねらせ、オシメをあてられまいとしたが、むろんそれは、むなししいあがきでしかなかった。

それより、オシメカバーのゴムのぬめぬめとした感じが、肢につめたくふれ、かえってオシメをおぞましい実感として味わわされるのである。

Qは、ふくみ笑いをもらしながら、弓子のなまめかしいあがきを見ていたが、やがて、世話係に合図して部屋から下らせ、特殊椅子を操作して弓子の背を起こし、彼女が自分のオシメ姿を見えるようにした。

弓子のオシメ姿は、ほんとうに可愛らしかった。



純白のオシメカバーは、赤や黄色の小さな花で一面に刺繍してあり、うちにオシメの当ててあるところが、ふっくらと盛りあがっている。

「オシメもこうして当てられてみると、なかなか可愛いものだろう。弓子にはとってもよく似合うね。フフフ。それに、こうして椅子にお坐りしたまま、どこへも行かずにオシッコができるのだよ。便利なものだね。」

さあ、息もつけないほど、したかったのだろう。もう、していいんだよ。全部オシメが吸いとってくれるのだからね。もちろん後仕末だって、ちゃんとしてあげるから、安心していいんだよ。フフフ。

なにも、そう恥ずかしがることはないだろう。赤ン坊のときは、弓子もさんさんお世話になったのだからね。それに、弓子はきょうからまた、このハレムで、ワシの赤ン坊になったのだから。さあ、ひと思いにしておしまい。なんでもないんだよ」

ニヤニヤ笑いながら、弓子をあやすように言った。

弓子は、この気も狂わんばかりの恥辱を、石のように眼をとして耐えていた。

3

Qは、いいつけに従わず、けなげにじっとこらえている弓子を、愛しげに眺めながら、柔らかな髪をなでていた。

「よしよし、そんなに恥ずかしいのなら、どうしてもこらえられなくなるまで、待ってあげよう。時間は、いくらでもあるのだから」言いながら、そばのテーブルに用意されていた、ビニールの袋に入った淡いピンク色の布を取りあげた。

「じゃ、そのあいだに、これをあててあげようね。きつとオシッコがしたくなるよ。フフ。弓子は、チャドルと言うものを知っているだろう。ホラ、回教徒の女たちが、顔を隠すために使っている布のことだよ。もちろん、エジプトやアラビアの、ハレムの女たちも、チャドルで顔を隠していたんだよ。弓子もハレムに入ったのだから、チャドルをつけるのが、エチケットなのだよ。フフフ」

Qは袋の中味を説明する。

Qが言ったように、袋のなかの布は、女が顔を隠すために、眼から下をたっぷり包んでしまうチャドルであった。

このハレムでも、自分のハレムから外へ連れだされて、ほかの紳士と顔をあわすおそれのある場合は、チャドルで顔を隠しておくのが、ハレムの女の身だしなみであった。

しかし、こうしてハレムのなかでチャドルをもちいる理由は、むろんほかにあるのだ。

チャドルで顔をおおうと、嚴重なさるくつわで痛々しくゆがんだ顔が隠される。女は、残された眼だけで表情を現わすようになって、男にとっては、ますます可憐に美しく見える。

女にとっては、よけいなものを顔にかけられ、それだけでもなさない思いをせねばならない上に、鼻をおおわれてしまうので、ますます息苦しく、屈辱感をあおられる仕組みである。

その上、このチャドルには、あるにおいがつけてあるのだ。

チャドルは、このにおいがぬけないように、また、いつもしっとりとぬれているように、ビニール袋に密閉されて、男のもとにとどけられていた。

こうして、チャドルをあてられた女は、ぬれた布から、自分の体温で徐々にたちのぼる恥ずかしいにおいをふくんだ蒸気を、呼吸するたびに全部吸いこまねばならず、失神するような嫌悪感に、じわじわと責めつけられるのだ。

弓子は、むろんこのような恐ろしいたくらみを知らない。チャドルをあてられた後に、

いやでも自分で体験させられ、さとらされる運命なのである。

しかし、Qがニヤニヤ笑いながら、袋のなかからしっとり湿った、淡いピンク色の布を取り出したのを見ると、弓子は、本能的にまた自分になにかの苦痛が加えられることを知った。

弓子は、頭を振って拒否しようとした。が、首枷をほどこしてある彼女に、チャドルをあてるのは、Qにとってなんでもないことであった。

Qは、弓子の目のすぐ下から、たつぷり首のあたりまでおおうような、やわらかなタオルでできたチャドルを、いやがる弓子にゆくり当てた。

可愛らしい顔を包み、つけてあった紐で結んで落ちないようにした。

チャドルが顔にあてられたとたん、弓子は浸してあった、いやなにおいをかがされ「ムッ」とうめいて、もがいた。

「フフフ、ちょっとオツなおいだろう。おとなしくかいでおいで。そのうちに、いい気持ちになってくるからね。フフフ。そんなにもがいたって取れやしないよ」

言いながら、チャドルの下ッ端の紐を弓子の首にまわして結んだ。

これで、もうまくれあがることもなく、弓子の顔は完全にチャドルにくるまれ、うちにこもったにおいは、すべて弓子の鼻の穴を通るようになるのである。

「むうん、むうん」

弓子はうめきながらQに哀願した。

そうやって、ふたつの目だけでゆるしを乞う弓子のすがたには、いっそう哀れな、いじらしい風情があつて、Qの心をよろこばせるのだった。

4

完全なおもちゃだった。

おもちゃ以外の、なにものでもなかった。

どんなに高価な、精巧なおもちゃよりも、かわいらしく貴重なおもちゃだった。

弓子は、若い。

若さは、あきらめるということを知らないのだ。Qの行動のひとつひとつに、卒直な反応をしめすのだ。

おびえ、もだえ、泣くのである。

したたかな女だったら、とつくにあきらめ身を投げだしてしまうだろう。

弓子には、プライドがあつた。中流家庭に育った、自尊心があつた。

苦痛に屈伏しても、その自尊心はすぐによ



みがえるのだ。

あきらめることができたなら、かえってそのほうが、どんなにしあわせだったろう。

赤や青や黄色の、どぎつく光る原色の渦が弓子のあたまのなかに、音たてて巻き、うなっていた。下半身の感覚が、重く、するどく圧迫している。

「どうだね。まだそっちのほうはでないのかね」

Qはたずねた。

弓子は、つぎつぎに加えられる恥ずかしめよりも、さすがにQの膝の上でオシメを使うという苦しみにはかえられないとみえ、まだけんめいにこらえている。

「フフフフ。なかなかまん強いね。だが時間はいくらでもあるのだから、いつまででも

待ってあげるよ」

Qは言いながら、つややかな髪をなでまわしたり、ブラジャーをいじりまわしたりしている。

が、やがてQはそれにもあきたらしい。「よしよし。じゃ、そのあいだに弓子の胸のへんを見せてもらおうとしようかね」

Qはハサミを取り上げた。

「む、む、む」

弓子はまたもがき始めた。

「フフフフ。おとなしくじっとしておいで。すぐにはずしてあげるからね」

ハサミで弓子の清楚なブラジャーの肩ひもを、弓子の反応を楽しみながら、ひとつひとつゆっくりと切った。弓子のもだえは、さらに激しくなった。

「よしよし、もうすぐすむからね」

つぎに背中にまわったひものホックをはずすと、両手で隆起を押さえながら、ブラジャーをゆっくりずらしていった。

弓子は、ここでも、ゆっくり脱がされるという時間をいやというほど吟味されたのである。

ふっくらとした隆起が、しだいにあらわにされてゆき、ついに、淡く色づいたその頂点が、ブクン、ブクンと顔をだした。

「むっ」

弓子は、けいれんしたように全身の筋肉をふるわせた。

「フフフフ。思っていた以上にいい胸だね。とてもかわいらしい。だが、もうちょっと大きいほうがいいな。美容師に言っておくとし

よう」

つぶやきながら、ねっとり光る視線で、弓子の胸を眺めまわしていた。

初心な処女らしく、固く締まった、ほどよい大きさのまるい丘で、軽くふるえている。

うす赤く色づいた小さな乳首は、すこしうわ向き加減にツンとすましており、男の食指をそそるには充分であった。

「フフフフ」

Qは、その乳房に視点を凝固させた。

「むっ、むっ」

弓子は、男の熱い、脂でねとねと光る目に押され、激しくうめきもがいた。

「よしよし、じっとしておいで」

ゆっくりもみ始めた。まるで美容師のように、きつくもんだり、ゆるくなでたり、マッサージしたりするのである。

弓子は、その感触に我を忘れた。

こらえている神経など、もう保てるものではなかった。

オシメカバーの中で、小さな音が始まると、Qは満足気に笑って、白い丘をマーサーシする手を休めた。すべてが、計画どおり、予想通りなのだ。

なまぬるい感触が、弓子の腰にひろがり始めた。弓子には、この苦しい恥辱を目をとじ

て耐える以外に方法はなかった。

やがて弓子は、自分の置かれている状態が前よりいっそう悪くなっているのに気づいた。パンティの上にオシメを当てられていたので、たまった大量の液体は、パンティまでもぐっしよりぬらしていた。

オシメをあてる時、わざとパンティを残したのは、この結果を充分計算していたのであった。

「フフフフ。どうだね。オシメを使った後の感じは？」

と、Qはふたたび弓子の髪の毛をなでおろしながらたずねた。

「気持ちが悪いだらう。オシメだけなら、みんな吸い取ってくれるから、そんなに気持ち悪くはないのに、弓子がパンティを取るのをいやがったからだよ。フフフフ。もうしばらくそのままはかせておいてあげよう。そうすれば、こんどオシメを当てる時には、すなおになにもかも脱ぐようになるだろうよ」

オシメは、弓子がもがたびにジュクジュクと音をたて、その恥ずかしさに弓子はまた泣きだしていた。

そのとき、弓子のすわらされている特殊椅子のそばにあった小さなインターホンが、世話係の声を伝えた。

「弓子ちゃんの専用さるぐつわができて参りました」

「すぐこちらに持ってきてもらおう」
Qはインターホンのボタンを押してそういつた。

すぐに、世話係は、新しくできてきた弓子専用のさるぐつわを一式持ってきた。

「さあ、さるぐつわを換えてあげよう。しずかにしているんだよ。弓子専用のは、二重さるぐつわといって、一番嚴重で便利にできているのだからね。フフフフ」

Qは、弓子の顔をくるんでいた悪臭のチャドルを取り、さるぐつわも解いた。

愛らしい顔に皮のさるぐつわの跡がくつきりとつき、痛々しく哀れな美しさであった。「もうかんにんして、なんでもいうことをききますから」

弓子は、かすれた、かほそい声で哀願した。

「だめだめ、さあ、アーンとするんだよ」

「いや、ゆるして」

「フフフフ。いうことを聞かないんだね。じやこうしてあげよう」

Qは、弓子の白い丘を軽くなでた。

「アーッやめてッ」

弓子は悲鳴をあげる。

しかし、その口には、すばやく開口器がはめられ、強いバネの力で弓子の口は大きく開かれてしまった。

「アーツ、アーツ」

「フフフフ。すなおに口を開かないと、いつもこうだよ。じゃ、まずちゃんと、つめものをしようね」

Qは、開口器に取りつけてある精密な舌ばさみで、弓子のかわいい舌をはさんで邪魔のできないようにしてから、あらかじめ弓子の口の大きさに合わせて切つてあるガーゼを、一枚一枚ゆつくりとつめこんでいった。

詰め物用のガーゼは、ナイロンでできていて、口の中で唾液にぬれても、小さくなったり、弾力がなくなったりすることがなく、いつも同じ大きさを弓子の口の中を占領していることができる仕掛けである。

彼女の口に入れられるものは、このほかに、わざと汚したり異臭をつけたガーゼや、金属の玉、ゴムボール、スポンジなど、さまざまなものがそなえられ、いずれも弓子の口にぴったり合致した大きさになっている。

ガーゼをつめ終わると、Qは開口器をはずして、手早く薄絹で口をおおった。これが二重さるぐつわの始めの一重で、ファンデーションさるぐつわと呼ばれているものであつ

た。

つまり、詰め物をはきだせないようにすると同時にあごや頬をぴったりおおって形をととのえ、つぎのさるぐつわがきっちり合うようにするためのものなのである。

こうしてファンデーションさるぐつわをはめておけば、後はこの上にはめるさるぐつわを変えるだけで、強さや外見上の美感を変えることができる、いちいち詰め物をしなおす必要がないという便利な仕組みになっているのだ。

ファンデーションさるぐつわは、布でできていて、木綿やナイロンの薄物のような薄手のものまでいろいろそろえられており、弓子の口をおおって頬のあたりでいくつかのボタンをとめると、しわひとつできないほどぴっちり合うように仕立てられていた。

その上、弓子専用のこのファンデーションには、Qの好みによって、くちびるの当たる部分にはいずれも薄い生ゴムが張ってあった。

このため、口の中にたまつた唾液が外にしみ出さないばかりか、このファンデーションだけで、もはや口からの呼吸は完全にとめられてしまうのである。

弓子は、その薄絹のファンデーションさる

ぐつわをはめられ、早くも苦しそうにうめいていた。

「フフフフ。ぴったりして気持ちがいいだろう。こうして、ファンデーションをしてしまえば、つぎの本当のさるぐつわを、ゆつくりはめられるし、弓子がいくらもがいても、絶対にずれたりしないのだよ。便利だろう」

Qは言いながら、つぎのさるぐつわを取り上げた。それは、しなやかな白いなめし皮でつくられたもので、締め具の金属がつめたく光って、チャラチャラと音をたてている。

Qは、それを、もがく弓子にゆつくり当てがった。

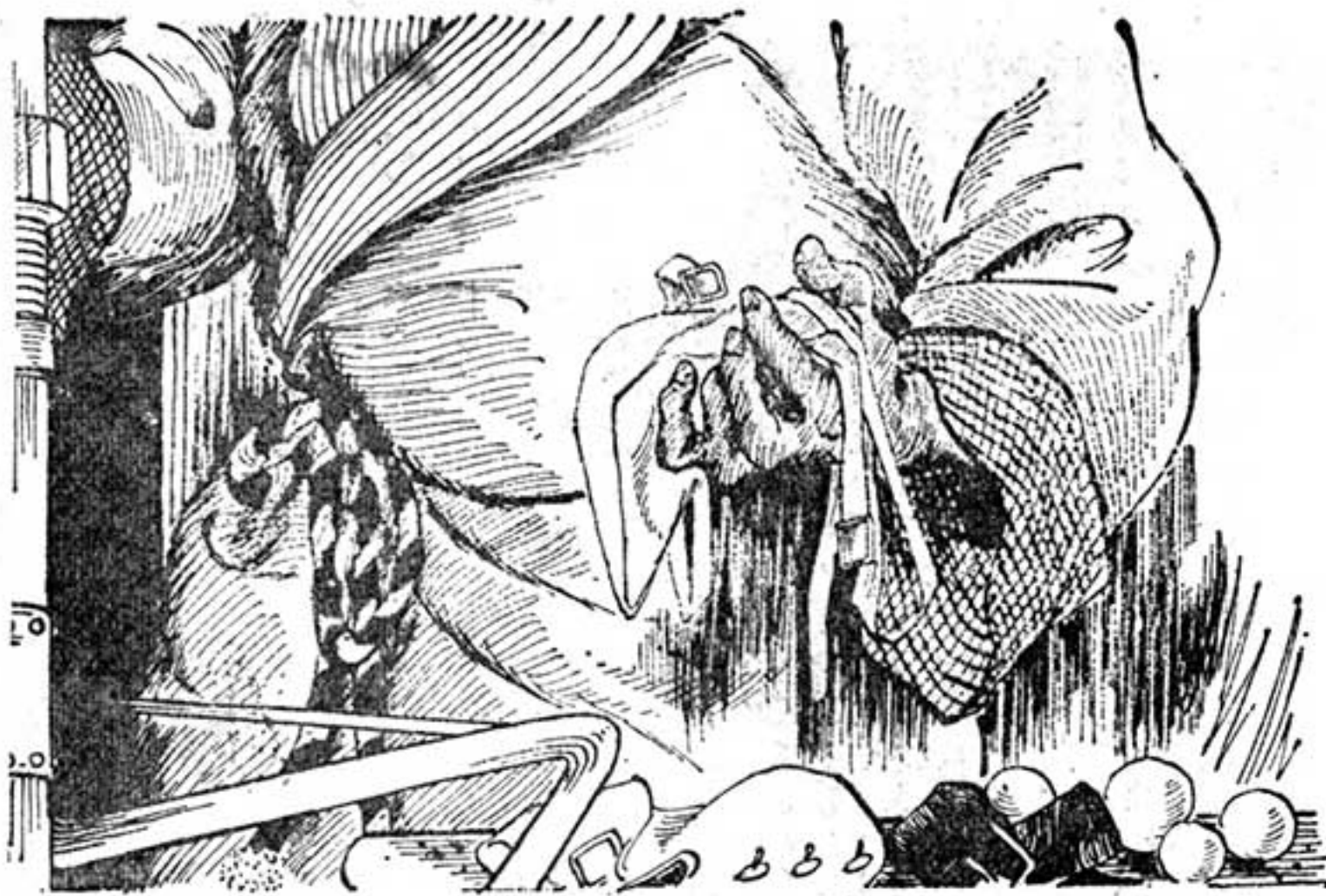
弓子は、いくらもがいても、Qの意のままにさるぐつわをはめられるより仕方がない。弓子の口は、それがぴったり合うようにとのえられているのだ。

なめし皮は、彼女の顔にまきつけられ、Qは一つ一つ止め金を締めていった。

そして、Qが手をはなすと、そこには痛々しくゆがんだ、弓子の哀れな顔があった。

弓子は低くうめき続けていた。痛さと苦しさを耐えるそのうなり声すら、もはや大きな声にはならない。

「どうだね。よくできているだろう。うめき声も、この専用二重さるぐつわをすると、か



わいく聞こえるよ。フフフ。これからは、いつもこの専用さるぐつわにしてあげようね。うれしいだろう。フフフ」

Qは満足そうに笑いながら、弓子のからだをふたたび、じわじわとながめはじめた。

弓子は、けもののような声をしぼりだして必死に哀願していた。

もはや、彼女に残された哀願の手段は、うめき声と眼だけであった。

弓子のオシメカバーの中は、じっとりとむ

れ始めていた。

「フフフ。どうした？ オシメを取ってほしいのかね」

弓子は、小さくうなずいた。

「パンティもはずしてほしいだろうか？」

弓子はちよっとためらったが、また、かすかにうなずいた。そこはびしょぬれなのだ。

「よしよし、聞き分けがよくなってきたね。

じゃ、取って、ぬれたやつの後仕末をしてあげよう。だけどおとなしくしていなくてはだめだよ」

Qは言う、ゆっくりオシメをはずし始めた。

いくら気持ちの悪いオシメとは言え、他人に後仕末をされる弓子の屈辱はどのようなものであったろう。

しかし、いまはこれを耐えるよりほかに仕方なかった。

Qは汚れたオシメとオシメカバーを、ビニールの袋に入れると、今度はその下のものにも手をかけた。

弓子は、自分のもののむれたにおいをかいで、真ッ赤になっていたが、最後の一枚まで脱がされようとしているのを知ると、また、もがき始めた。

Qは、今度はそのあがきを楽しみながら、

ゆっくりと作業をつづけていった。

弓子のみずみずしく、美しい裸身は、どうすることもできず、Qのいやらしい眼の前にさらされてしまっていた。弓子は、固く全身をこわばらせた。

Qは、あやしく光る眼で、弓子の肩から胸をなめまわしていたが、やがて、弓子があきらめと疲れに四肢の力をぬいてぐったりしてくると、むしタオル器を持ってこさせ、熱いむしタオルでぬれた部分をもむようにしながら、ていねいにふき始めた。

「むっ、むっ」

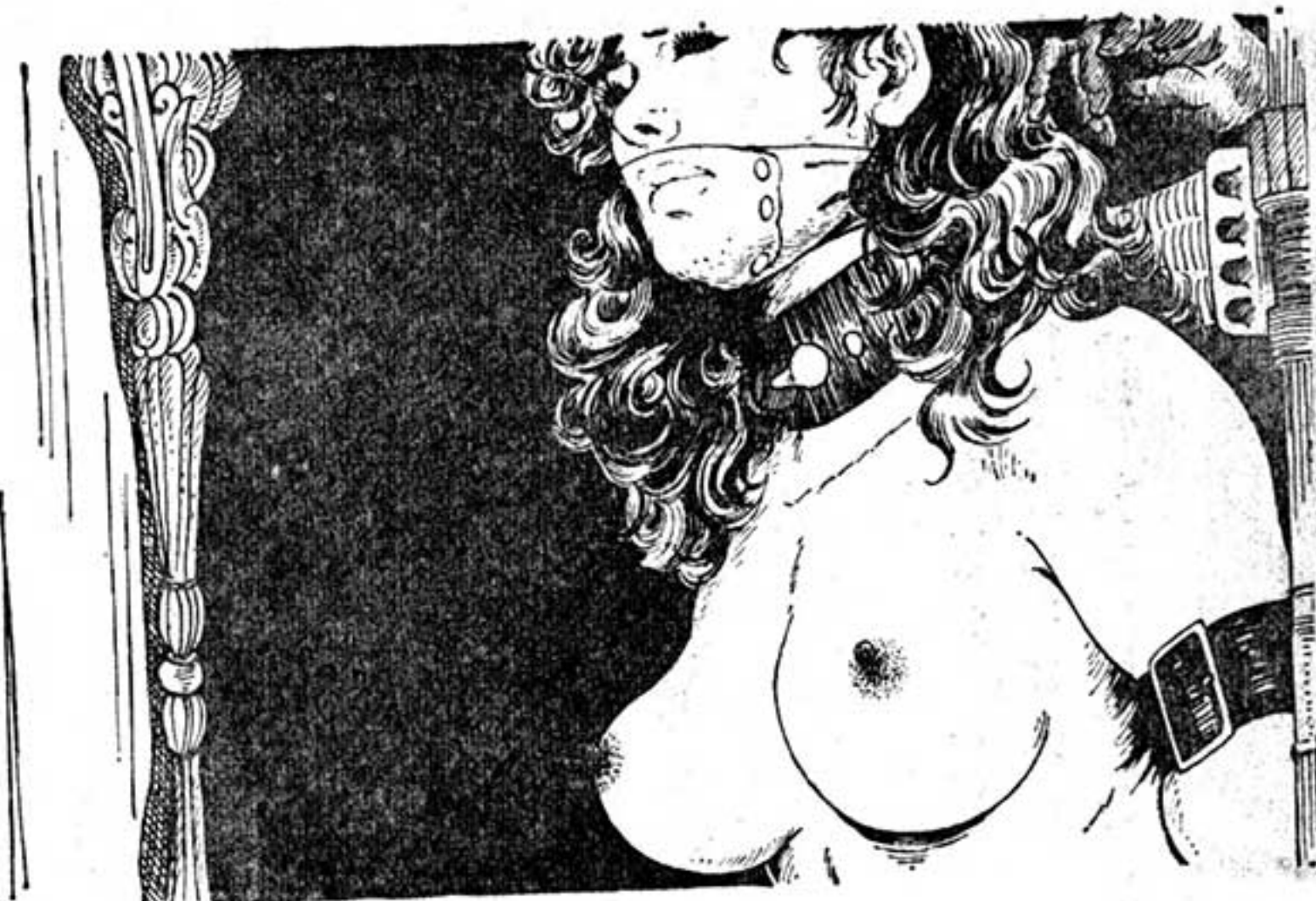
弓子は、その熱いマッサージにふたたびうめき始めた。

何度もむしタオルを取り換えて、ふき清めると、Qはあらためて弓子のすべてを觀賞し始めた。

弓子は、その恥ずかしさ、不気味さにピクピクけいれんしながら、半分気が遠くなつて、うめきもだえていた。

5

弓子のはかない抵抗と、嚴重なさるぐつわの奥からもれる、低い哀れな泣き声を楽しみながら、ねっとりした視線で、すべすべした美しい裸身をながめまわしていた。



やがて、弓子は抵抗する気力も失って、ぐったりとなったまま、Qの視線のままにすべてをまかせるようになってしまった。

そんな弓子と、なおしばらくの時間をすごしてから、Qは世話係を呼び、

「身体検査」

と短く命じた。

世話係たちは心得て、哀れなすがたにむかれてしまった弓子を、椅子からはずして隣室に運び、カガミの前に用意されていた検査台

に、彼女を取り付け始めた。

世話係たちは、ともすれば何とか逃がれようとする弓子を、あやすようにしながら固定していった。なにしろ、弓子はご主人さまのたいせつな、美しい赤ン坊なのである。

「さあ、さあ、お利口ちゃんだからおとなしくしてちょうだい。ほら、この台の上にアンヨをのせて。そのままタッタしているのよ。アラアラ、だめよ。しゃがんだりしちゃ。

いけない子ね。それじゃ、タッタしていられるように、この首枷からはめさせてもらうわね。ホホホホ。こんなごつい首枷ですもの、もう、台から降りることはもちろん、うつむいたりすることだってできなくなつてよ、ほらね。いい子だから、もうあきらめるのよ。

じゃつぎに、足を止めてあげましょうね。さあ、あばれないで、あばれないで。この足枷をはめれば、すぐに動かせなくなるんですからね。あばれても、無駄よ。

ハイハイ、泣かないで。もうすぐ終わりますよ。このお手々を、左右にピンと伸ばした所で止めればいいのよ。あばれたら、強く引っ張るわよ。ホホホホ、いい子なこと。さあ、これで終わりよ」

弓子のからだがかガミの前で、十字架に張られたような、哀れな格好を強制されると、

そこへ、弓子専任の美容師が、白いうわッぱりを着て現われた。

「ホホホホ。この台は、弓子ちゃんの身体検査をする台なのよ。ホラ、前のかガミをごらんなさい。弓子ちゃんのきれいなからだの線が、全然変っていないでし、う。だから、とってもくわしくからだのサイズが測れるの。このサイズを元にして、弓子ちゃんの下着や拘束具を注文してあげるわ。もちろん、全身美容をする基礎資料にも使うのよ。だから、おとなしく測っていただかなくてはだめよ。すぐに旦那さまが来て、始めてくださいますからね」

美容師は弓子に言い聞かせた。

弓子は、「むむ」とうめいて、四肢を縮めようとかがいていたが、すぐにQはやって来てニヤリと笑った。

「フフフフ。まだすこしからだが動くようだから、ちゃんとしてあげようかね。どれ、このハンドルをまわすとどうなるかな。フフフ。ホラ、足がだんだん開いてくる仕掛けなのだよ。このくらいでいいかな。いや、もうすこし開いたほうが良く測れるな。さあこのくらいで、ガマンしておくでしょう。では、こちらのハンドルをまわして、首枷をもうすこし上にあげておこうか。身動きされると測

りにくいからね」

Qは、弓子がまったく身動きできないまでに全身を上下左右に張ってしまおうと、

「では始めようか」

と、美容師から巻尺を受け取った。

「首から始めようか。どれどれ、この可愛い首には、どんな首輪がぴったりかな。よしよし、じっとしておいで。しずかにしてないと、首枷をもっと上にしめあげるよ。さて、つぎは、このきれいなオッパイを測ってあげようか。その前にお手々を測っておかなくてはいけなかったな。いつも、オイタがでないように、後にまわしたままにしておくのには、どうしても弓子専用の、きっちり合う手錠を作らせないといけないからね。フフフ」

楽しそうにひとりごとをつぶやきながら、巻尺や、その他のいろいろな特殊測定器具を用い、美容師に手伝わせて、弓子の若々しい、美しくひきしまったからだを検査し、測定した。

一人の小間使いが、それを一つ一つ大きな記録用紙に記入している。

測定は、まったく厳重なもので、その記録を見ただけで、彼女と寸分ちがわぬ人形を作ることまでできるであろう。

しかも微妙な部分は、ていねいに石膏で型が取られ、あらゆる部分の色まで、くわしい色表で彩別されるのだ。

このような厳重さは、弓子にぴったり合う専用の道具や服を作らせるためにも必要ではあったが、弓子に屈辱感を与え、身体検査の恥ずかしさを充分味わせる意味もあるのだ。そして、この身体検査以後、このハレム内にあるすべての羞恥の道具は、弓子の身体にぴったり合うよう調節されることになっているのだ。

足の先まで、念入りの検査がすむと、弓子はやっと検査台からはずされたが、これで身

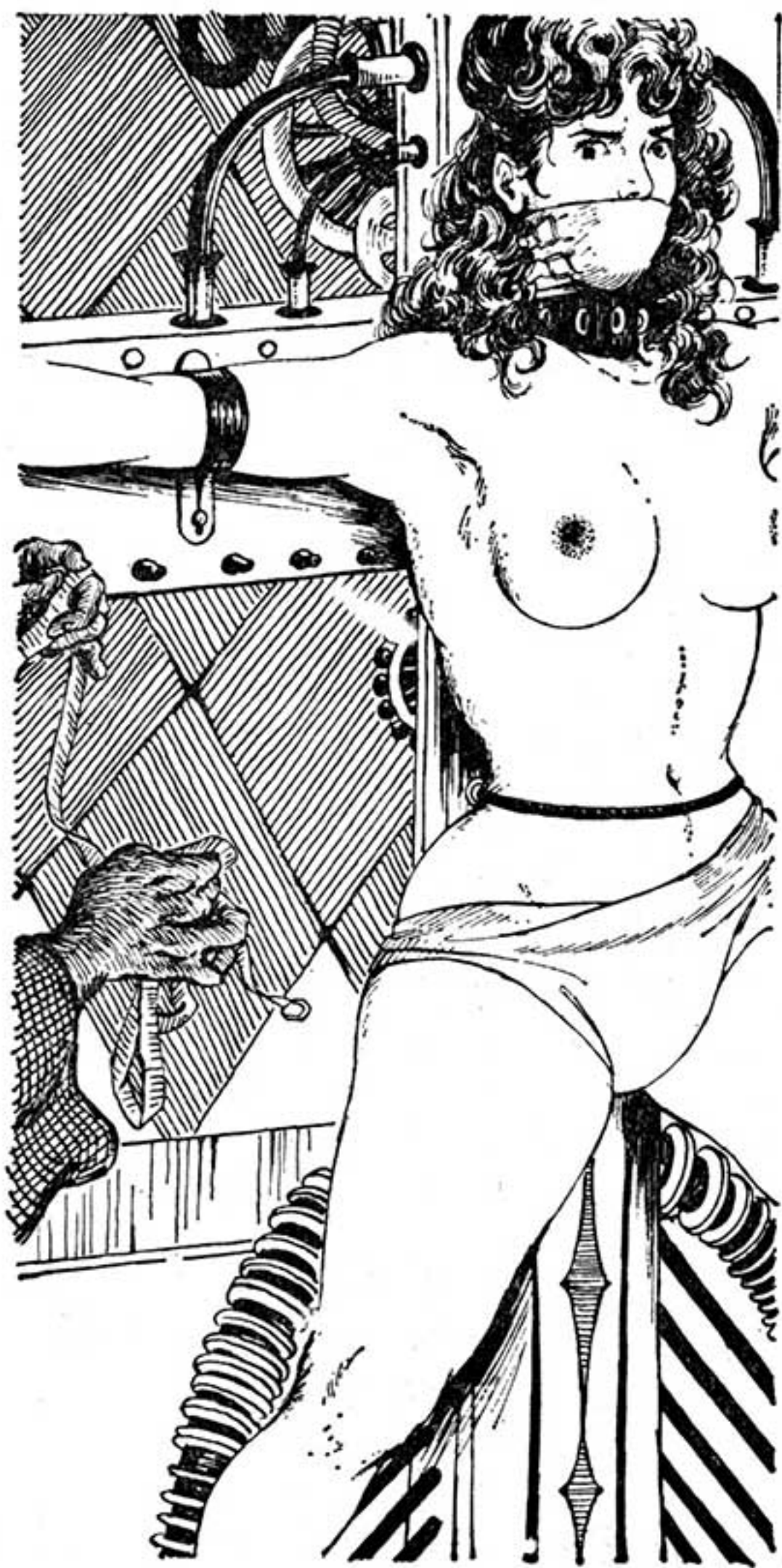
体検査が全部すんだわけではなかった。

すぐに彼女は後手錠をはめられ、検査台の横に用意されていた、婦人料の診察室にある様な検診台に坐らされ、固定されてしまった。

こうして全身の精密な検査がすむと、Qは「じゃ、このまま前のカガミでもながめながら、おとなしく待っておいで。自分のからだでも、裸の時にこういうふうには見たことはないだろう。フフフ。すぐに戻ってきて、また遊んであげるからね」

と言って、部屋を出ていった。

「むっ、むうん」



弓子はうめいたが、むろんどうすることもできない。正面のカガミには、弓子ですら見たことのないほど、彼女のからだがあますところなく写しだされていた。

そして、それは彼女自身ですら、うっとりするほど美しかった。

6

しばらくこうして待たされた弓子は、Qが戻ってくるころには、自分のからだの美しさを充分に知らされていた。

「むうん、むうん」

と弓子は、あまえるようなうめき声をだして、もうゆるしてほしいと哀願した。

「よしよし、はずしてあげよう。だけど、さつきおとなしくオシメを使わなかったから、お仕置きをするよ。いいね」

弓子はうなずいた。この恥ずかしさからのがれられるなら、どんなことにも耐えられるような気がしたのだ。

「よしよし、いい子だ」

Qは、弓子を検診台からはずした。が、すぐに弓子は、首輪をはめられ、天井から下った鎖に吊られて立たされてしまった。

「フフフ。お尻がまるだして恥ずかしいだろう。パンティをはかせてあげよう」

Qは手に持ったパンティを見せた。弓子は、またうめきもだえ始めた。

そのパンティは、さつきオシメとともに汚してしまったもので、まだぐっしりぬれたままであった。

「さあ、じっとしているのだよ。あばれると首が締まって苦しいだろう。オシメもちゃんと当ててあげるからね」

いいなから、もだえる弓子にそのぐっしりぬれたままのパンティをはかせ、その上に、ビニール袋に入れておいた、汚れたオシメも当ててオシメカバーでくるんでしまった。

「むっ、むっ」

「フフフ。すぐにオシメを使わなかった罰だよ。今度からはおとなしくオシメを使いますと約束しないかぎりはずしてあげないからね。フフフ。ぬれたパンティやオシメはつめたいだろう。じっとしているだけではからだにも悪いから、すこし運動させてあげよう。すぐにあったまるよ」

Qは、そばにひかえていた小間使いに「自転車を持ってきてくれ」と命じた。

それはすぐに運ばれてきた。

美容体操用の自転車で、台の上に車輪がひ

とつと、それを回すためのペダルがついている。

しかし、弓子をふるえあがらせたものは、サドルに弓子をまたがらせたまま降りられないようにする大きな腰枷であり、ハンドルに手を縛りつけるための皮具であった。

これは、一種の拷問を兼ねた美容体操用の自転車なのである。

「むっ、むっ」

うめきもだえる弓子を、あやしながら、オシメのままサドルにまたがらせる。小間使いはすぐにその腰枷にはめ、つぎにのけぞる足をペダルにのせて、金具でしっかり止めてしまった。

「後手のままじゃ、ペダルをふみにくいだろうから、ハンドルをにぎらせてあげようね」

Qは、そのあいだに弓子の後手錠を解き、ハンドルをにぎらせて、しっかりと皮具をはめて縛りつけた。

「さあ、用意はいいよ。ペダルをふんでごらん。いいというまでまわしつづけるのだよ。弓子のきれいな脚が、もっとすんなりしてくるからね、そのうちに、オシメもあったまってくるよ。フフフ。そうだね、なまけたりできないように、こうしておこうか」

Qは、車輪の軸に連結してある小さな機械

に二本の電線を取りつけ、その端の金具を、弓子のかわいい乳首に当て、うすいゴムキャップをはめて止めた。

弓子は、恐怖の目を見ひらいて自分の乳房を見た。

うすい生ゴムのキャップの下に、淡く色づいた乳首に密着した電極が、つめたく光っていた。

「むっ、むっ」

「さあ、スイッチを入れるよ。ペダルをおふみ。でないと、オッパイにビリビリ電気がきて痛いのだよ」

「むっ、むうん、むうん」

「フフフフ」

Qは笑いながらスイッチを入れた。

とたんに、弓子は、「むむ」とうめいてのけぞった。

電気刺激はさほど痛いものではなかったが、自由を奪われた四肢にあたえられる不快な刺激は、弓子にとって恥ずかしく、おそろしいものであった。

弓子は必死にペダルをふみ始めた。車輪が一定の回転以上にまわりだすと、乳首への圧迫は止まった。回転速度が弱くなると、自動的にあたえられる仕掛けなのだ。

Qは、車輪に適当な強さのブレーキをかけ

て、弓子の運動が効果的になるようにすると、満足そうに笑いながら、弓子の哀れな運動を見ていたが、やがて小間使いに、

「ここで食事をしよう。用意してくれ」と命じた。

食卓は、弓子ののせられている自転車の前に用意された。

すると、入口のドアがあき、このハレムの女の一人であるスマイレが、小間使いに連れられて入ってきた。

スマイレは、小さなブラジャーとパンティの上に、ピンクの薄ものでつくった小さな上着とスカートを付けて、まさにハレムの女にふさわしい格好であった。

足には、ヨチヨチ歩きができるくらいに間をあけた小さな足錠をはめられ、首輪に取りつけられている鎖は、小間使いの手ににぎられている。

スマイレは、テーブルの上に、自分で持ってきたスマイレ専用の拘束具を、一つ一つていねいにそろえて置くと、Qに深く一礼していった。

「お給仕をさせていただきます」

「よし、ここへおすわり」

Qは、自分のひざをしめした。

「ハイ」

スマイレは、おすおすと前進し、スカートをあげて、Qの両足の上に、そっと腰をおろした。

「フフフフ。よしよし。そら、あれをあらん。今日からハレムに入った新しい赤ン坊なんだ。かわいい子だろう」

スマイレは、ペダルを必死にふんでいる哀れな弓子を見て、ブルツとふるえると、あわてて眼を伏せた。

彼女には、いまの弓子の状態がよくわかるのだった。彼女もまた、こうして羞恥心をなぶられ、屈辱を耐えさせられているうちに、いつのまにか、Qに屈服させられてしまった女の一人なのだ。

弓子は、スマイレのかわった姿を見て、思わずペダルをふむ足をゆるめた。と同時に、乳首にするどい痛覚がおそった。

「むっ」

弓子はうめくと、またペダルをふむ足に力を入れた。

「フフフフ。弓子はペダルをふんでおいで。でないとオッパイがビリビリするよ」

Qは笑った。

「じゃ、給仕をしてもらおうか。そのまえに、手を出してあらん」

Qは、弓子が哀れな格好で運動をつづける

のか見とどけてから、スマイレに言った。

スマイレは、小さくふるえながら両手をそろえて差し出した。Qは、その手に小さな手錠をほどこすと、つぎにさるぐつわを手を取った。

スマイレは観念したように、おとなしく口をひらく。

Qは、満足そうにスマイレにゆっくりささぐつわをはめた。それは、スマイレの顔に合わせつつくつてある皮のさるぐつわである。

Qは、そのさるぐつわをはめられて、低く、苦しうにうめき始めたスマイレに、ビニール袋に入ったチャドルを渡すと、笑いながら言った。

「自分であててごらん」

スマイレは、しかたなくそのビニール袋から、しっとり湿ったピンク色のチャドルを出すと、自分の顔にあて、Qにつけてもらった。拒否すれば、どんなお仕置きにされるか見当もつかない。

スマイレのチャドルにはどのようなにおいがつけられているのだろう。彼女はたちまち真っ赤に肌を染めた。

チャドルをつけたスマイレは、ますますハレムムの女にふさわしい、なまめかしく美しい女になった。

Qは、そんなスマイレのすべすべとまるい肩を引き寄せると、ゆっくり食事を始めた。

スマイレは、手錠でそろえさせられたままの不自由な手で、酌をしたり、Qのために料理を切りそろえたりしながら、肌の感触をQにまかせている。

Qは、美しいスマイレと、ういういしい弓子のからだを交互に眺めながら、うまそうに食事をつづけていた。

弓子は、そのあいだに、Qの予定どおりになってきた。

苦しい足の運動で、オシメカバーの中は尿と汗でジュクジュクと気持ち悪くむれ始め、さるぐつわとチャドルに呼吸を制限されて、美しい胸が大きくあえいでいる。しかし、足を休めるわけにはいかないのだ。

弓子は必死にペダルをふみつづけた。

正面には、彼女自身の哀れな姿を写すカメラと、Qのまんぞくそうな顔が見えていたが、やがてそれも視界から遠ざかっていった。

Qは、弓子の乳首の反応がしだいにぶくぶくなってくると、刺激の電圧を上げて運動を強制させた。

食事の終わるころ、世話係が弓子のからだを調べて、そっとQに耳打ちした。するとQ

は、残念そうに乳首への刺激装置のスイッチを切った。

世話係は、「もう限界です」と言ったのである。

車輪の重さは、ちょうどQが食事をおえるころに、弓子の肉体に限界がくるよう調節してあったのである。

Qは、食事をすませると、弓子にゆっくり近づいた。

弓子は、がっくり首をたれたまま、サドルの上でのびていた。胸だけが、苦しかった運動をものがたるように、まだ激しくあえいでいる。

「フフフフ。もうオシメもあたたまったろう。よしよし、じゃ休ませてやろう」

Qは弓子を自転車からはずした。しかし、弓子はそのままそばの小さなベッドに寝かされて、再び固定された。

弓子は、じっとQのなすがままになっていた。

「苦しかったかね。ネンネさせてあげようね。だけどまだオシメはとってあげないよ。そのうちにもっとよくむれてくるからね。フフフ」

Qは、ベッドに取り付けられていたさまざまの枷で弓子を固定すると、彼女のオシメカ

バーの上を、さらに小さな電気毛布でくるみ、スイッチを入れた。

「むうん、むうん」

弓子は低くうめいて、Qに哀願を始めた。

尿と汗にじっとりとむれたオシメは、耐えが

たいものであったのだ。

しかし、Qは弓子の哀願には気がつかないように、

「じゃ、おとなしくネンネしているんだよ。

また見に来てあげるからね」



というと、うすいふとんを弓子にかけてから、待たせていたスマイレを連れて部屋を出ていった。

Qが去ると、ひかえていた世話係が弓子に近づいた。

「自転車はどうだった。いい運動になったでしょう。ホホホホ。じゃ、旦那さまが帰っていらっしやるまで、おとなしく待っていてくださいだね。いい子ちゃんですからね。旦那さま、ちょっとほかの女の子を訓練しにいらっしやったのよ。そのあいだに弓子ちゃんのお尻はオシッコで充分むれているというわけなの。そうすれば、きっと弓子ちゃんはおもしろい子になっているわ。ホホホホ。泣かなくてもいいわ。さあ、これでもごらんさないな。気がまぎれるわ」

世話係は、弓子にいろいろな絵や写真を見せながら、一つ一つ内容の説明を始めた。

それは、いずれも、このハレムの主人であるQの集めた特種な絵や写真であった。これからは、弓子の訓練の進みぐあいに応じて、コレクションの中から選んで実行させられることになっているのである。

やがて用意したものを全部見せ終えると、世話係は、

「じゃ、あとは旦那さまの帰っていらっしやるまで、おとなしくネンネしていればいいわ。あばれても、オシメが父持ち悪いだけよ」

という、弓子にあつい布で目隠しをほどこしてから出ていった。

後は、見張りの小間使いが一人残って弓子を監視しているだけである。

弓子は、暗黒のなかでオシメの気持ち悪さを、どうすることもできず耐えさせられていた。世話係に見せられた絵や写真の内容が、暗黒のなかで一つ一つはつきり思い出され、弓子はふるえていた。

こうして、弓子を二時間ほど放置したのち、やっとQは部屋に戻ってきた。

「フフフフ。どうだね、弓子。もういい子になるね」

Qは、涙でぐっしりぬれた目隠しを解いてやりながらたずねた。

弓子は小さくうなずいた。オシメの気持ち悪さと屈辱感、弓子から抵抗の気力をまったく奪っていた。

「よしよし。じゃ、そのまま、もう一ぺんオシメを使ってごらん。そうしたら取ってあげよう」

「むっ、むうん」

弓子は、イヤイヤをしながら黒くうるんだ眼で哀願した。が、

「さあ、早くするのだよ。でないと、もう一度同じお仕置きだよ」

と脅され、観念したらしく、眼をつむったままオシメを使った。

尿意もないのに、汚れたオシメを使わせられる弓子の屈辱は、どのようなものであったろう。オシメのお仕置きは、それを弓子に耐えさせるほど効果的だったのである。

オシメを使った弓子の眼からは、ふたたび涙があふれてきた。

「よしよいい子だ。泣くんじゃない。オシメを取ってあげるからね」

Qは、満足そうに笑いながら、弓子のぐっしりぬれてしまったオシメを、ゆっくりとり、パンティもぬがせると、ふたたびビニール袋に入れた。

弓子の腰は、オシメでむれて赤くほてっていた。

Qはむしろタオルを使って、何度もていねいにふき清めると、つぎに、むれた肌が痛まないうようにクリームをたっぷりぬりこみ、パフをはたいた。

弓子はその恥ずかしさを、「む、む」とうめきもだえながら耐えていたが、やがてQの

目が、ゆっくりとしたうごきにかわるにつれて、弓子の肌のがやきもかわっていった。

長い時間と、小道具・大道具その他の器具を存分に費した念入りな馴致に、ようやく、女体は苦痛とはべつの反応をしめしはじめていた。

弓子の肌の各部の神経は、この数時間のうちに、生まれてはじめての感覚を受けいれたのである。

両眼を半びらきにして、まつ毛をこまかくふるわしていた。あごをやや、うわむきに、白いのが、ひくッ、ひくッと断続的な呼吸をみせる。

その反応をみのがすQではなかった。

Qの目の奥が、ある満足に笑った。

この娘も、ようやく、一步だけ、おとなに近づいたな。

胸のなかでつぶやく。

これまでに仕込むまでの段階が、もちろん十分にたのしいものなのだが、これからさきの本格的訓練の課程には、さらに興味ある、ぞくぞくするような愉悅が待っているのだ。

その課程のあれこれを思い浮かべると、Qの頬は、しぜんにゆるんでくる。

これからが、ほんとうの訓練なのだよ、弓子、フフフフ……。

「いやッ、いやッ！」

美帆はやっとの力で声を発した。恐怖のために、かすれ声だった。世の中には、こんなおそろしい男がいるのか。人間ではない、野獣だ。

——こんな冒険なんかするんじゃない、やなかった！

美帆は後悔したが、もう遅い。

兄は助けにきてくれるだろうか。

救援の手がとどく前に、あたしのからだはこの狂った野獣のために骨も肉もひき裂かれ、むさぼりつくされてしまうのではないだろうか。

黒和田の手が肩をすべり、胸に触れた。美帆の全身が、びくりッとふるえた。身をよじった。だが、

胸にかかっている縄がくいこむだけだ。柱に縛りつけられたからだは、どうにも動かない。黒和田の手を避けられない。

美帆の顔が、死人のような色に変じた。歯がカチカチと鳴っている。いま自分の身に加えられるとして、この世のものだろうか。

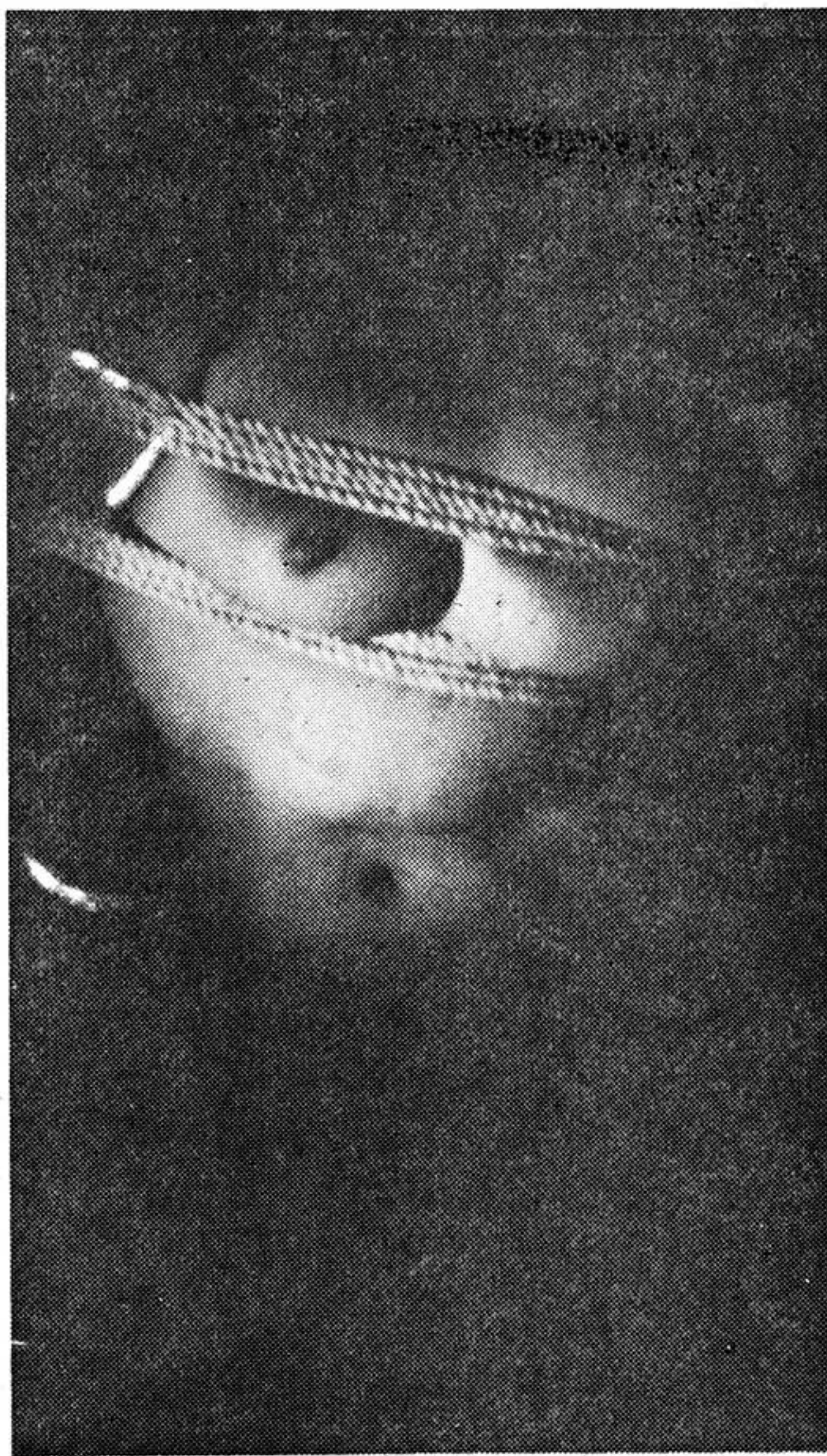
だが、これは現実だった。

美帆の上半身を縛った縄はますますきびしく、乳房のなかにくいこんでくるのだ。美帆の足が疲れ、立っていることがつらくなってきた。

膝をゆるめるから胸の縄が噛みこんでくるのだった。

このなまなましい苦痛は、夢ではない。美帆の目のなかに、黄色い閃光が走った。

(地底の牢獄・第三章より)



裏窓叢書第三集

地底の牢獄

藤見 郁・著

350 円 ㇔ 80 円

あまとりあ社・刊

大江文学と西村みゆきの

「裏窓的」分析



安東 泉

■大江健三郎「性的人間」の場合

1

大江健三郎の『叫び声』に続く力編、『性的人間』二百枚が、新潮五月号に発表された。

前作が観念過多の乱雑な失敗作であるに反し、今回の作品はいちおう最後まで、読み通させる何ほどの迫力を持つ、その意味での前進ではあった。

大江健三郎は「壁の中の人間」を書く作家と言われている。それをわたしに言わしむれば、「壁の中の観念肥大症」的作家ということでもあった。壁の中の人間は、壁の外の人間より自由がない。その範囲だけ自然観念過多の傾向を生じる。

観念過多で、しかも全心的な真の衝動性がそれに伴わないと、未整理な観念が乱雑に空転するだけで、わけのわからないひとりごての小説を書くようになる。その好見本が大江の前作『叫び声』であった。

壁とは何か、それは社会と自我である。その限りにおいては、だれでもがそれぞれの壁を持ち、その壁がさらに大きく外部状況の社会という巨大な壁と直面せざるを得ない。

社会とは何か、それは政治とモラルである。自我とは何か、それは政治とモラルとが、自己との関係において、自己を壁の中に幽閉させておくことをしいる、またしいられる、そういうレイションを意識することの中にある。

社会と自我との二重の壁が、大江を厚い仕切りで内側

に閉じこめた。そこで彼は、この不当な自我と社会の壁を、にくにくしげにながめやる。特に政治とモラルとが、彼の憎悪の要約された焦点としてきわ立つのである。

しかしその政治もモラルも、その状況に応じた通行手型さえ持てば、いとも容易に木戸御免となる。通行手型とは何か、それは天皇制度下における自由主義的現在の支配秩序体勢をうのみに受け入れることであり、その状況下におけるいわゆる良民的良風美俗の順応者となることである。

迷える小羊というが、それでもその首輪の鈴の音に、飼い慣らされている良き小羊としてのアカシをリンリンと打ち鳴らせばよい。それが通行手型である。

この通行手型さえあれば、石原慎太郎のヨット青年的自由さぐらいは確実に保証してもらえる。

2

ヨット青年の自由といえ、これは一方では、ちゃんと良風美俗の通行手型にもなるのである。一見良風美俗への反逆者であるかのようなポーズはとりながら、しかし要所所の定石を踏まえることは忘れられていない。しかし、ここに何としても、その通行手型を手にするこのできぬ人間がいる。そのひとりが大江健三郎ということになる。

突飛な発想かもしれぬが、わたしは彼をインポではないかとさえ想像する。もしそうであれば、それだけで彼は壁の中の人間でありうる一つの条件を持つからであ

る。彼の作品中には、しばしば多く男色家が登場するが、それすら、彼のインポ的イメージの反影の一つのように思えるのである。

インポのイメージとは、「壁の中のセックス」を、華麗なファンタジーにと色上げするそのものである。

だが悲しいかな、しばしば裏付となる生命力が稀薄になりがちだ。ヘソの緒として、その観念と作者本人がつながらないのだ。そうした弱点をカバーし、これを逆に攻撃用の有利な武器に転用しようとして、彼はしばしばアカデミックな政治、哲学用語を関連なく作品中にちりばめることで煙幕を張った。サルトルとか、実存主義とかの用語による思わせぶりがそれである。

インポとは、肉体的にも、精神的にも言える跛行的な思考肥大症を伴う、さううつ病類似症的な観念過多を産み、大江の場合、さういうことがあえて指摘されそうだ。

しかし、大江が「壁の中の人間」であることは、石原のヨット青年的無邪気さよりは、大きな重要問題をそこに内包し、時代に対しての問題提示の、捨身の立場というものが一方では存在する。

その立場を、かなり具体的なイメージで提示すること大江は今回の新作で効果を収めた。それが《性的人間》である。ここには、サルトルも実存主義も、思わせぶりの政治的ポーズも生なことがばや形では出てこない。特に、1、2、と二つに分かれている後半2の部分は、チャンとヘソの緒のつながった、体温のあるかなりな作品とはなった。

1と2は、それぞれ独立した別個の短編とみてよからう。作者本人は、この二つは、それぞれ関連しあつて、二つが一つになつて、そこに一つの「性的人間」という大きなテーマを醸成する効果を考へているのかもしれないが、その期待においては失敗である。

ここでは、おもに2の部分について考へてみることにしたい。

× ×

Jという青年と六十歳ばかりの老人は、路傍で結ばれた友人である。

Jは「ある朝、不意に痴漢となること」を決心し、「いわば反・性的な自己処罰の欲求」にかられている男であつた。

彼は中央線の電車の中で見知らぬ娘を愛撫した。「右手は娘の尻のあいだの窪みからその奥に向かい、左手は娘の下腹部の高みから窪み」へ、「そしてJの勃起した男根は女の腿の外側に」「もしいま、娘が嫌悪か恐怖の叫び声をあげれば自分はオルガスムに至るであろう」と感じる。

Jの敵は外部社会という壁である。社会の存在感というものに、だから彼は最も敏感であつた。Jの行動は、「百科事典を愛用する八千万人の他人どもに攻撃をかけている孤独な武将」の戦いで、そのことにオルガスムがあるのである。

Jは山手線の車中で、勇敢にも一群の女子高校生たちを相手に痴行を演じ、ひとり興奮する老人の痴漢を発見し、友人になる。

それからふたりは、いつも組んで歩いた。そうして或る日、地下鉄の中でふたりはなお勇敢な少年を発見する。彼は「トレンチコートの隠しポケットの一つの小窓から、硬い武器をのぞかせ、それを小娘のオレンジ色のコート」の尻の部分に、愛しげに憂わしげに丹念にこすりつけて」いたのであつた。

車中の人々はそれを見ていた。少年は「他人どもの目の洪水のなかでオルガスムにたつした」屈強な中年男が少年を捕える。少年は警察に引き渡されるばかりのところであつた。Jと老人は、この少年の冒険に打たれ、そこに同志愛を感じ、彼の危機をすくう。

ところが、少年は助けられたことを喜ばない。それどころか助けたふたりにくつてかかる。ぬるま湯のように安全で、危機もなく、こうしてぶじに助けられては、冒險の意味もなくオルガスムもないというのである。

「いちばん勇敢で絶望的な痴漢になつてやろう」と少年は決心し、そういう凄惨な絶望的な詩を書く期待に生甲斐を感じているのだ。

4

少年の痴漢としての観念は壁に対する闘いだといふのである。

「人間たちは二千年来、よつてたかつて、この世界を総

ゴム張りの育児室につくりかえた、すべての危険は芽のうちにつんで！ しかし痴漢たちは、この安全な育児室を猛獣のジャングルにかえることができる。——たとえば幼い女の子の腿に指をほんの一秒間ふれてみるという一動作だけで、かれはそれまでの生涯にきずきあげた、すべてのものを危険にさらすのだ」

危険のない痴漢はにせの痴漢なのだ。ここでの危険というのは、百科事典的モラルでぬくめられた社会の壁に、捨身の攻撃をかける真の勇者、真の痴漢として生きるということである。これが「性的人間」だと大江はいう。

だが、それでも大江は、少年を言わしめている。

「結局おれは体験的に詩を書きたいんだ」

正直な彼の告白である。大江の作品には、つまりこの体験的詩がないのだ。だからいらだった観念が乱雑な模式で空転し、林房雄をして、どうにも彼のものはわかりようがない、ぼくには大江作品を批評する能力がない、といったテイのかたちで敬遠されてしまう。

これに対して大江は、

「性的なものを機縁にして、人間の核に肉迫する」とか「性的なものから反性的なものへ」昇華させようとするおれの意図がわからないのか、といった形の食ってかかりようを示したが、こういう食ってかかり方自体、インポ的そういうつ症の病状が表明されるように思えるのだ。

《性的人間》は、しかし前作《叫び声》に比べれば、彼がいうところの「体験的な詩」が盛られている。それ

をいっそう完ぺきにするには、彼自身、もっと体験的に転化する必要がある。

体験的とは、あながち、実行動家としての痴漢になれば、という意でないことは、改めてことわるまでもないことであろう。

■西村みゆきのヴァージニズム

1

西村みゆきといえば、盗作問題うんぬんで騒がれた《針のない時計》の作者として、まだ記憶に新しい。《針のない時計》は、女流新人賞受賞作品として、いったん婦人公論に発表されたが、それがフォークナー作品からの盗用部分がある、との理由で間もなく賞は取り消された。

創作か盗作かで当時論議はふつとうした。だが結局受賞は取り消された。

西村みゆきのおもな作品四つ、《母の家》《祈禱》《眠れないの》《眠らないの》それに《針のない時計》を通読して思うに、彼女の盗作問題は、それほど目クジラ立ててきめつけるほどの、決定的な決め手であるとは思えない、四つが四つとも、それぞれ別個の作品でありながら、ちゃんとした一連の或るムードでつながれた、いずれも彼女にあってはりっぱに必然性をもった作品系列を成していることがわかるのである。

《針のない時計》は、やっぱり西村みゆき自身のもの

である、との印象が強い。それは一貫したウーメニズムのかおりである。ヴァージニズムと別な言い方をしてもよからうか、あの女性特有の分泌物のにおいである。

女性作家が女性であることを標榜して価値づけられている作風は多い。円地文子のセックスがそうだ。平林たい子にも別な角度からそれが言える。瀬戸内晴美にしても太田径子にしても、そこには女の性が業病のように、メンメンと口ずさまれている。

女の性を、異常な角度から抽象画風に塗り上げていった倉橋由美子や河野多恵子といった新人たちも、やはりそれも女であることをあくまでも土台においての、性の標榜である。

ところがそれらは、爛熟した女体が燃えて、とか、倒錯した性的世界の心象風景とかの形容語で紹介される、いずれも何かしら体当たり式の異様な熱気が謀体となる。力作ぞろいだということである。その力の入り方は、どこか男まさり式の、最も女が女くさい部分をカットしたあとの部分のような、抜きんでた女としての、力んだ性が叙述される。

西村みゆきは、その中であてて、その姿こそ小さく声も細々とはしているが、ともすれば忘れられがちな、最も女が女であることの女くささ、童女の放つ恥部のおおいを、指先にまさぐったかれんな桜色のツマ先に嗅がしてくるのである。これはフォークナーにはないことである。西村みゆきのものである。

『フォークナーのかかげる永遠に不動の時間の旗——そ

の旗印の下に、フォークナーの一見汚れた世界は、真に神聖といえる共同体の再製を実現している。それは登場人物を越えて、読者である私までも参加させる、恐るべき力をもっている。』

西村みゆきはフォークナーへの傾倒をこう語っているが『針のない時計』は全く別物である。

2

四つの作品、『針のない時計』 『母の家』 『祈禱』 『眠れないの』 『眠らないの』は、いずれも子宮コンプレックスのため息でつぶられていることで共通している。

『針のない時計』の頼子も、『母の家』の伸治も美子も、『祈禱』の明子も、『眠れないの』の私も、『子宮のようにとざされた家』そこに暮らしてきた、伸治も美子も、ひとりひとりの子供ではなく、母をふくめて三人の母胎同盟（母の家）という宿命的な背景でつながれている。『女たちの、眼から口からゆれる髪の毛から、腹から、性器から洩れでる匂い』（母の家）が、『いつまでも、ときさみに音をたてている針のない時計』（針のない時計）を伴奏に、西村みゆきのからだにまといついて離れない。

思春期の少女のにおいを西村みゆきは過度に意識している。その恥部の奥には子宮がある。子宮は彼女を捕えて離さない。

『今日も静雄と明子は、庭先で、牡犬と牝犬とをかけあわせていた。』

二匹の犬は、腹の底からうなるような息づかいをして、いる。犬自身がうなるというよりつるんでいる肉がうめくのだ。甘いような熱っぽい息は、明子の腕首から胸まであがってくるので、こらえている嘔吐が口までとびあがりそうだ——明子は咽喉からこみあげてくるものを、地面に吐き出した。吐いても吐いても嘔吐はつづいた。なにがこんなに恥ずかしいんだ。なにがこんなに恥ずかしいんだろ（祈禱）。この明子の羞恥は、初めて経血を見た少女の驚きに近い。この驚きにのめりこむことで、その時の羞恥と恐れとを持ったままで、西村みゆきは成人した。彼女は、従って成熟した女体の性愛をうべなうことはできない。彼女の意識とからだは、少女のままでクギづけに合った。氷柱の中の病める花のような甘ずっぱい処女のおい——処女も少女も、それだけに強く異性を夢みる。

『葉巻きを発明した男のペニス』は、やはり静雄とおなじように葉巻きほどの太さしかなく、その半分ほどの長さもなかったのだろうか。

——仲間たちといっしょに肩をならべて学校に通っていた頃でさえ、けっしてパンツを脱ごうとしなかった静雄みたいな男を、彼らはなんとおもっていただろう。彼らが腰に手拭いをまきつけもせず、素裸で相撲をとったり、筋肉のつきぐあいを誇りあったり、ペニスの大きさをくらべあって高笑いしているときでさえ、静雄はその仲間にはいることができなかったのだ。

彼らが馬のようにペニスをさらして濶歩している浴場

の片すみで、静雄はたえず、いったいどんな拍子で、彼らとびかかってきてパンツを剥ぎとって——』（祈禱）ペニスへの関心がふくらんだりおびえたり、西村みゆきは、ことば少なに控えめな調子で、しかし遠まきにこわごわと、しかも異様に繊細な目で異性の恥部をまさぐるうとする。ここに彼女のヴァージニズムの秘密がある。

3

西村みゆきは『針のない時計』が受賞した時（後にそれが取消されたが）、

「これまでわたくしは、ながいこと、自分の愛するものを、かくしておくことを愛しておりました。ひとつの秘密を、まるで黴菌のように自分のうちで養ってまいりました。それが思いがけなく他人さまの目にふれることになり、受賞のよろこびよりも、むしろ怖ろしさが先にたつような気持ちであります」

と発表の雑誌に書き添えている。これこそいつわりのない、初瀬期の女生徒の心象状況を言い表わしたものはなからうか。

小学生のころ、あのころの記憶の中に、すでに童女において強くこめられていた。それは少女の体臭であり、恥部においてであった。そのにおいを西村みゆきは困惑したように首をかしげなら、持ち歩く、セックスより子宮そのものの存在に困惑しながら——

『むしろ、それは光のささぬ子宮そのものの投影のような状態でした。私はそのなかで、すでに完全な軀をそな

えていました。

子宮の濡れた柔らかな静けさを身にまとい、吐く息もひめやかに、音もたてずに、閉ざされた扉を、次から次へとひそやかにうつっていったのでした』(眠れないの眠らないの)

4

西村みゆきのセックスは、他の女流新人たちのドラマ性や異常性とは違って、あまりにも素直すぎる。おカッパ頭を傾けながら、ママごとをしてあかん坊を寝かしつける、あの取り澄ました童女の息使いがする。

この少女の息使いにあやされて、『針のない時計』の明は、白痴の眠りを眠るのである。明は頼子の兄である。戦争中強度の神経衰弱から白痴になる。妹は白痴の兄と一つ床で、子どもをあやすように寝かしつける。兄は妹にだかれて、妹の寝衣のにおいをかいで、初めてフトコロの幼子のように安らぐことができる。

『母の家』の伸治も、同じように西村みゆきの、ままたと遊びの坊やである。絹ぼりの牢獄の中で生まれ育てられ、呼吸するすべては母親の日常が発散していた。ミルクのような日常的な空気の中で――

『祈禱』の静雄は獣医である。病める動物たちを相手に、また動物たちの交尾に立ち会う日常の中のかすかな倦怠――「女、女、女――おふくろも女、うんざりするなあ」静雄はつぶやく。堂に満ちたむせるような女生徒の体臭に、西村みゆきはへキエキしているのだ。女、女、

何と女くさいにおいでであることだろう。

『眠れないの 眠らないの』の私は盲目の鍼師である。孤独な若い女鍼師である。

『私は、たくさんの人たちの体にふれました。でも、どちらかといえば、病人や不具者の体にさわるときに、とくべつ手はいきいきとうごきました。』

みつぐちの人だの、片肺のない結核患者や、せむしや、跛の人がくると、私の手はむやみにおしゃべりをしはじめます』

少女が病者に示すあの感傷的な関心を取りまぜて、西村みゆきのおままごとは、メンメンと乙女の嘆息のように続けられる。

わたしの子宮は、なぜこんなにおうのかしら、ひとり鏡の前で、手をあげ足を開き、西村みゆきはオカッパ頭をうつむけてうずくまる。

初潮期の意識がそこでそのままストップした形で彼女は年を重ねた。それが西村みゆき作品そのもののストップを意味するのか、限界づけるのか、その点、今のところは全くの未知数というのほかはない。

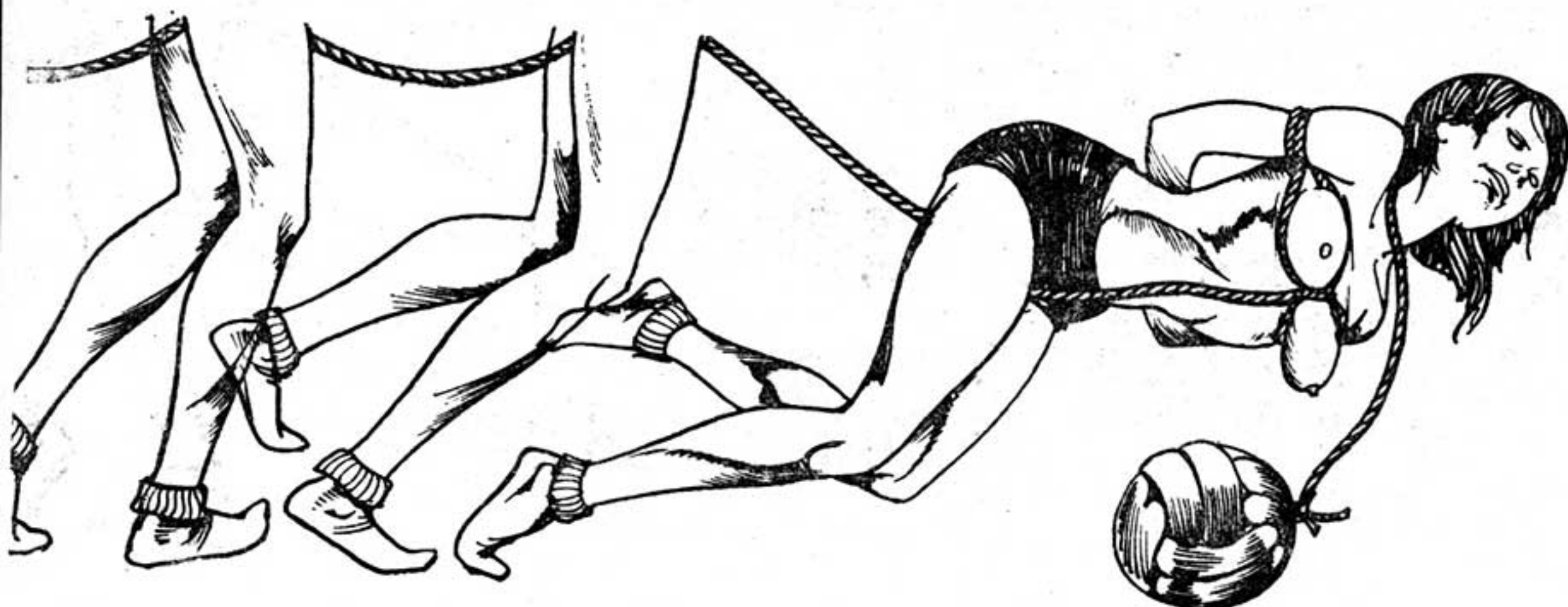


■スポーツ精神なんのその 勝たねばならぬわが母校！

お転婆学園秘密作戦

郷 保 夫

江 渕 晃 夫・絵



1

宿敵、淑女学園のバレーチームに打ち勝つために、佐渡先生がたてた作戦のうち、敵に対する憎悪と敵ガイ心を燃やすほうは、どうやら一応の成功をみたようである。

純粹でかわいらしいお転婆学院のバレー選手たちは、毎日毎日、古参部員の皮むちのもとで、きびしい訓練を耐えしのんだ。

日ごとに汚れ、臭気を増していくパンティをはきつつけ、ときには古参部員の手によって、自分のその汚れ物を鼻と口におしつけられ、打倒淑女学園の誓いを、あらたにするのである。

——このぶんなら、あと二十日ほどにせま

った市主催の体育大会までに、わがチームの実力もそうとう強いものになるぞ。

佐渡先生は、心中ひそかにほくそえんだ。そして、火のように熱い愛校精神の持ちぬしである佐渡先生は、つぎの作戦、つまり、直接、敵側の力をそぐ段階に突入することを決心した。

さて、この佐渡先生は、なかなかのハンサムであり、性的魅力も十分にそなわっている男性なので、彼に思慕を寄せる女性も、すくなくない。

同じお転婆学園に勤務する英語の女教師、伊治目鯛代（いじめたいよ）も、ずうっと以前から、佐渡先生に好意を抱いていた。

しかし、伊治目鯛代の年令は、もうすでに



三十三歳で、いわゆるオールドミスの上に、どう見ても、美人ではない。

まず第一に身長が低い。一メートル四十センチ、そこそこである。

首も肩も腰も、ひどくやせていて、肉感的という感じからは、だいぶ遠いからだつきである。

むろん乳房も小さい。からだ全体が発育不完全型で、おまけに、かなり度の強い近眼のメガネをかけている。

つまり、男性の目からみて、非常に魅力にとぼしい女性なのである。

それなのに、自分では、せいっぱい色気をふりまいて、なんとかもてようと演技するから、よけい、妙に寸たらずのいやらしさが彼女の表情やからだににじみでて、男性は不気味になり、遠ざかる結果になってしまうのである。

追えば追うほど、男は自分から逃げていくので、年じゅう、ヒステリーをおこして、生徒たちにあたりちらす。

生徒たちをいじめていると、男性から相手にされない不満が、いくらかは、発散するのであった。

佐渡先生は、まだ二十六歳の若さだが、かなり推察力のある青年だから、このオールド

ミスの英語教師が自分にあこがれていることを、前から、ちゃんと知っている。

そこで、佐渡先生の、つぎの作戦というのは、この伊治目鯛代を利用し、というよりも彼女にもひと役買ってもらい、宿敵、淑女学院の戦力を弱めようというのであった。

作戦をたてたその日の放課後、佐渡先生は伊治目鯛代を、裏通りの喫茶店へ誘った。

歓喜七分と、不安二分と、警戒一分の心理状態で、鯛代は佐渡先生のあとからついてきた。

喫茶店は、どういうわけか、その日にかぎって、満員だった。

客のなかには、お転婆学園の生徒の顔もみえる。

——これは、まずい。

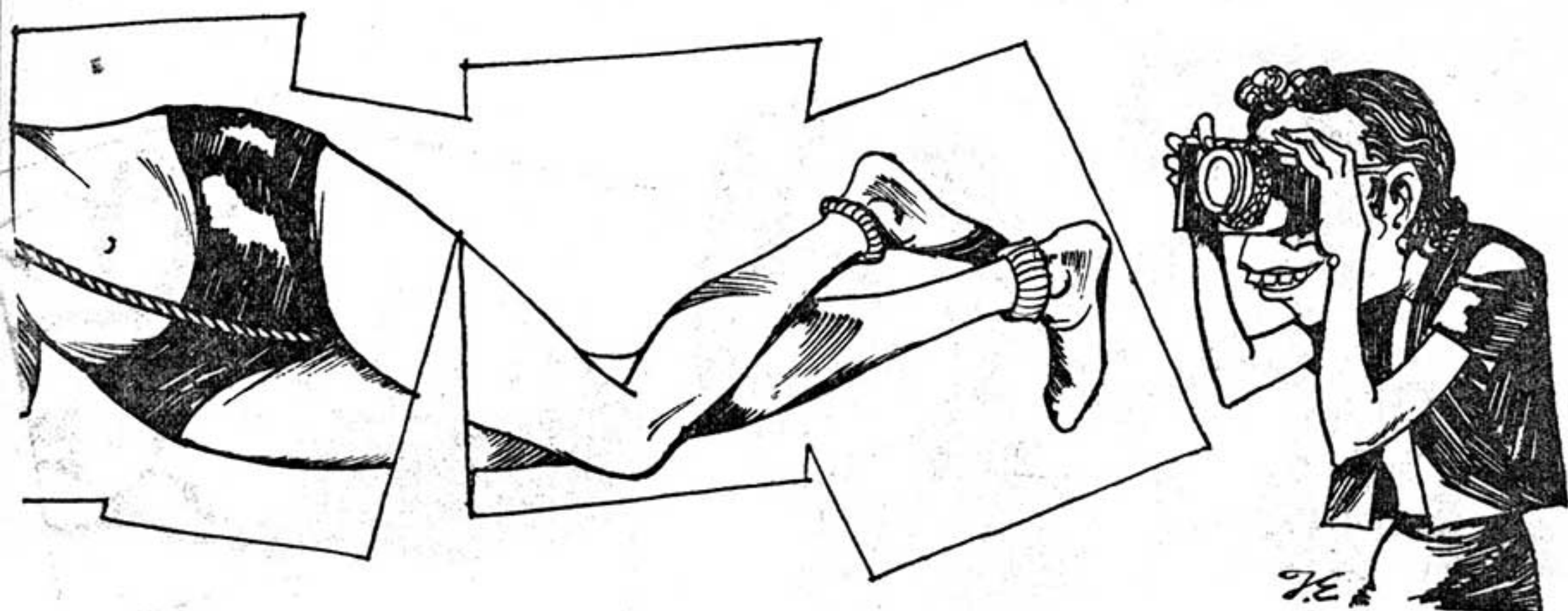
と、佐渡先生は思った。そして、

「ねえ、伊治目先生、いっそのこと、町はずれの旅館へ行きませんか」

とささやいた。

ささやいてから、三秒ほど経過すると、鯛代の表情が、ぼうっと赤くなり、近眼の目をレンズ越しのうわ目使いに、佐渡先生の顔をみあげた。うれしさに、しぜんと口もとがほころびた。

鯛代は出ッ歯なので、むらさき色の歯ぐき



までが、くちびるの外へ、にゅうツと出た。
佐渡先生は、その醜怪さに、ぞおツとして
背すじに悪感がはしった。

だが、これも母校の名誉のため、と歯をく
いしばる思いで耐えた。

旅館の一室で、佐渡先生は、鯛代に計画の
いっさいを話した。

「やってくれますね、伊治目先生。これは、
園長先生も、教頭先生も、すでに諒解済みな
んです」

佐渡先生は、熱をこめていった。

その熱にひきこまれて、うなずきながらも
鯛代の表情には、ためらいがうかんだ。

とみた佐渡先生は、目をとじ、心臓の鼓動
をとめて、肉づきのうすい鯛代の肩を抱きし
め、かたちのわるいくちびるにキスした。

そして、目をとじたまま、ささやいた。

「この計画が成功したとき、そのときこそ、
ぼくのこのからだを、三回だけ、あなたにさ
さげます。お約束します」

うっとりしながらも、鯛代はがめつくいつ
た。

「三回だけ？ まあ、ケチね」

そして鯛代は、佐渡先生の耳にいった。

「せめて、七回にしてくださいませんか？」

佐渡先生は、観念し、血を吐くような思い

でいった。

「いいです、七回——」

「それじゃ、手つけとして、このまま、この
お部屋で一度——」

鯛代のあつかましさは、いいように発展し
ていく。オールドミスのずうずうしさだ。

——しかたがない。

佐渡先生は、心のなかで、悲壮なうめき声
をあげた。

2

淑女学院からほど近いところに、白バラ補
習塾という、塾がある。

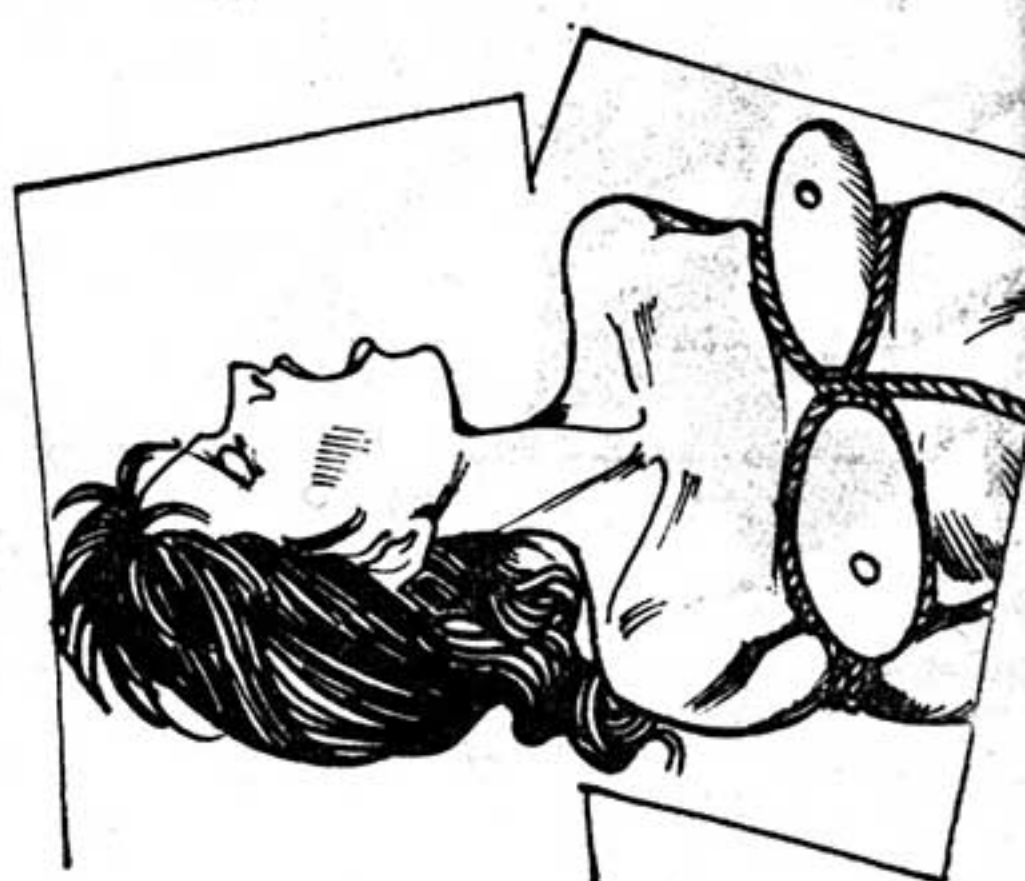
欲野深男（よくのふかお）という、もと大
学の教授が経営している。

この塾は、設備もよくととのっているし、
生徒のひとりひとりに対して、ていねいな個
人教授をするので評判がよかった。

白バラ補習塾にかよって勉強するものは、
そのほとんどが、淑女学院の生徒である。

淑女学院バレー部のキャプテン、波多野志
呂子（はだのしろこ）も、この塾の熱心な生
徒であった。

学院の体育場で、はげしいバレーの練習を
くりかえし、午後五時ごろ、ようやく切りあ
げた波多野志呂子は、いそいで白バラ塾へや



ってきた。

「おなががすいちゃったけど、きょうは早目に勉強を終えていただくことにして、ごはんはお家へ帰ってからたべることにしようかしら」

と、つぶやきながら、波多野志呂子は、いつもの個人学習室へはいってきた。

すると、いままで見たことのない女性が、先生のいすに腰をおろして、彼女のくるのを待っているふうである。

「波多野志呂子さんですね」

と、片手をメガネにかけて、その女性は微笑した。

「はい」

彼女は、すなおにこたえた。かすかな不安が、このとき、彼女の心をよぎった。

「いままで、あなたに英語を教えていらした先生が、こんど、きょうにおやめになりましたので、きょうから私が、あなたのお相手をするようになりましたの。どうぞよろしく。」

私の名は、伊治目鯛代と申します」

メガネをかけた小柄な女性は、そういうと軽くあたまをさげた。

「はい。よろしくおねがいいたします」

波多野志呂子は納得し、ていねいに礼をかえた。この動作だけで、彼女がいかに品の

いい礼儀正しい家庭に育ったかということがわかるようであった。

伊治目鯛代は、むろん、佐渡先生の作戦によつて、この白バラ塾へ派遣されてきたのである。

そして、これは、お転婆学園側が総力をあげて後援している計画でもあった。

お転婆学園は、白バラ塾の経営者、欲野深男に、莫大な金をつかませて、前任の英語教師を、むりやりにやめさせ、あらたに伊治目鯛代を採用させたのである。

鯛代の前任校の名を、むろん、白バラ塾の生徒たちには、伏せてある。

「あら、あなたは淑女学院の生徒さんですね。まあ、すてきなこと。淑女学院の生徒さんは、みんな上品で、あたまがよくて、おきれいな方ばかりだというではありませんか。そのうわさは、やっぱり本当でしたのね」

ここで鯛代は、ラムネびんの中のガラス玉を鳴らすような笑い声をたてた。

——やさしそうな先生だわ。

と、不覚にも志呂子は、そう思ったのである。

あたまがよいといっても、そこはまだ、おとなになりきらない年令の悲しさであった。さきほど胸をかすめた不安は、きれいにな



くなっていた。

事実、はじめの二、三日は、この伊治目先生の教えかたに、意地悪なところはひとつもなかった。

非常にやさしく、親切で、志呂子はものたりないほどであった。

きびしい勉強をしたいからこそ、正規の勉強のほかに、補習塾へかよっているのだ。

なまぬるい勉強なら、しないほうがマシではないか。

——この女の先生は、やさしすぎてたよりないわ。

志呂子は、不満だった。

しかし、この不満は、一週間後から、みごとに消滅していったのである。

3

「さあ、志呂子さん、このページを読んでごらんなさい」

伊治目鯛代が、指をさしていった。

しかし、波多野志呂子は、そのページの下調べが十分ではないらしく、読むことはどうやら読んだものの、つぎに訳をつけることを命じられると、困惑した表情でうつむいてしまった。

「どうしたんです？ 志呂子さん」

鯛代のメガネが、カミソリのように光る。

志呂子の白い頬が、羞恥のために赤くそまつた。

「先生、ごめんなさい。あの、バレーの練習に時間を多くかけてしまったのですから、勉強してまいりませんでした。すみません」

志呂子の耳たぶも、えりすじも、うなじまでが、まっ赤になっている。

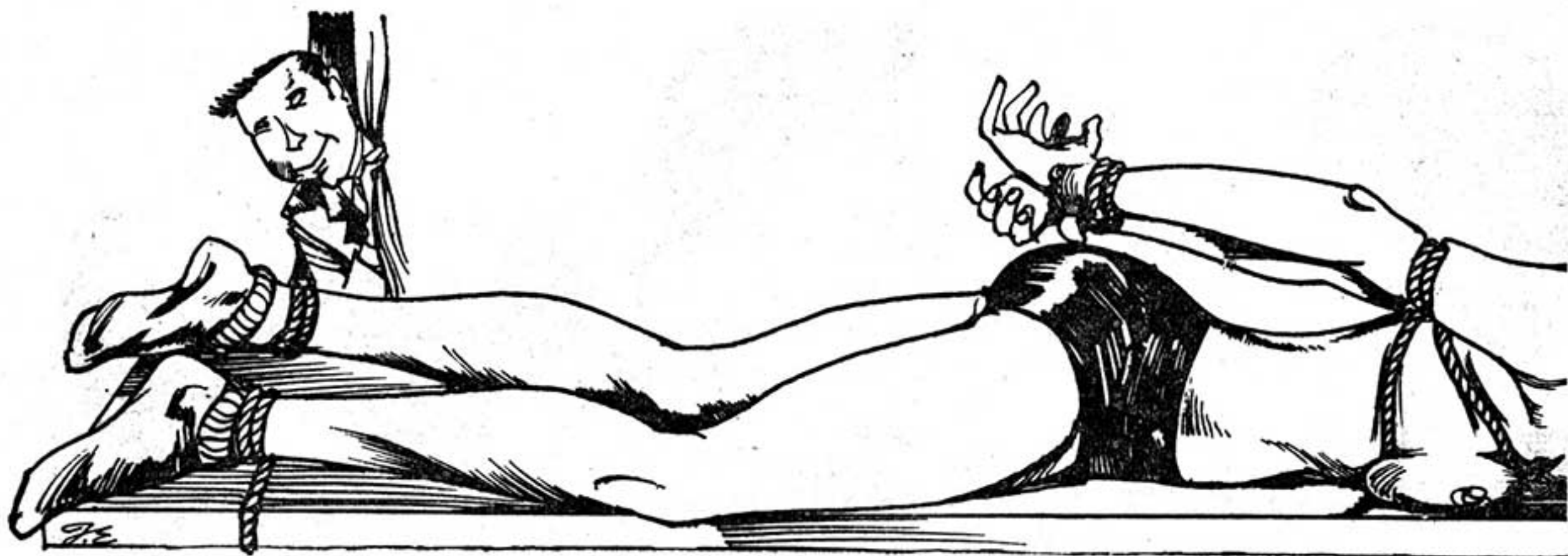
日頃はよく勉強ができて、それを誇りにしている志呂子である。それだけに、たかが一ページの英訳ができないなんて、恥ずかしくてたまらないのだ。

鯛代の小さな鼻が、ひくりとうごいた。その鼻のわきから口にかけて、しわがぎざまれた。当人は威厳をつくっているつもりなのである。

「志呂子さん、あなたは来年、大学をうけるそうじゃありませんか。いまがいちばん、たいせつな時なんですよ。バレーの練習ぐらいで、もっとも大事な英語をなまけるなんて、あなたらしくありません。もっとしっかりなさいな」

「はい、すみません」

「私はねえ、志呂子さん、どうしてもあなたに、来年進学してもらいたいのです。私がこの白バラ塾に就職して、はじめてお教えする



生徒さんに、どうしても大学試験を一度でパスしてもらいたいです。私の気もち、あなたにもおわかりでしょ？」

「はい、ありがたいことだと思っています、先生」

「そのためには、私はどんなことでもするつもりよ。あなたに、うらまれてもかまわないの。憎まれてもかまわないの、あなたに、たとえ、鬼のように憎悪されても、あなたが、みごと大学へ入学してくれたら、私はそれで満足なの。いまの私の生きがいは、それだけなの」

鯛代先生の目には、いつのまにか、なみだがうかんでいた。自分で自分の熱弁に興奮し酔っているようである。

「先生、とんでもございません、私がおうらみするなんて。先生、ほんとうに私がいけませんでした。おゆるしく下さい」

純真無垢な志呂子は、いまにも泣きだしそうである。

「では、これから私のいうことなら、なんでもきいてくれますか？」

「もちろんですわ、先生。私、それほどまでに先生が、私のことを思ってくくださるとは、夢にも思いませんでした」

感激で、志呂子の声はふるえている。

「それは、ほんとう？ 私のいうことなら、なんでもきく？」

「はい、先生」

しめた、と鯛代は心のなかで声をあげた。

「では、反省のために、私が、いいというまで、そこに立っていなさい」

「はい」

一瞬のためらいののち、すなおに部屋のすみに立った。

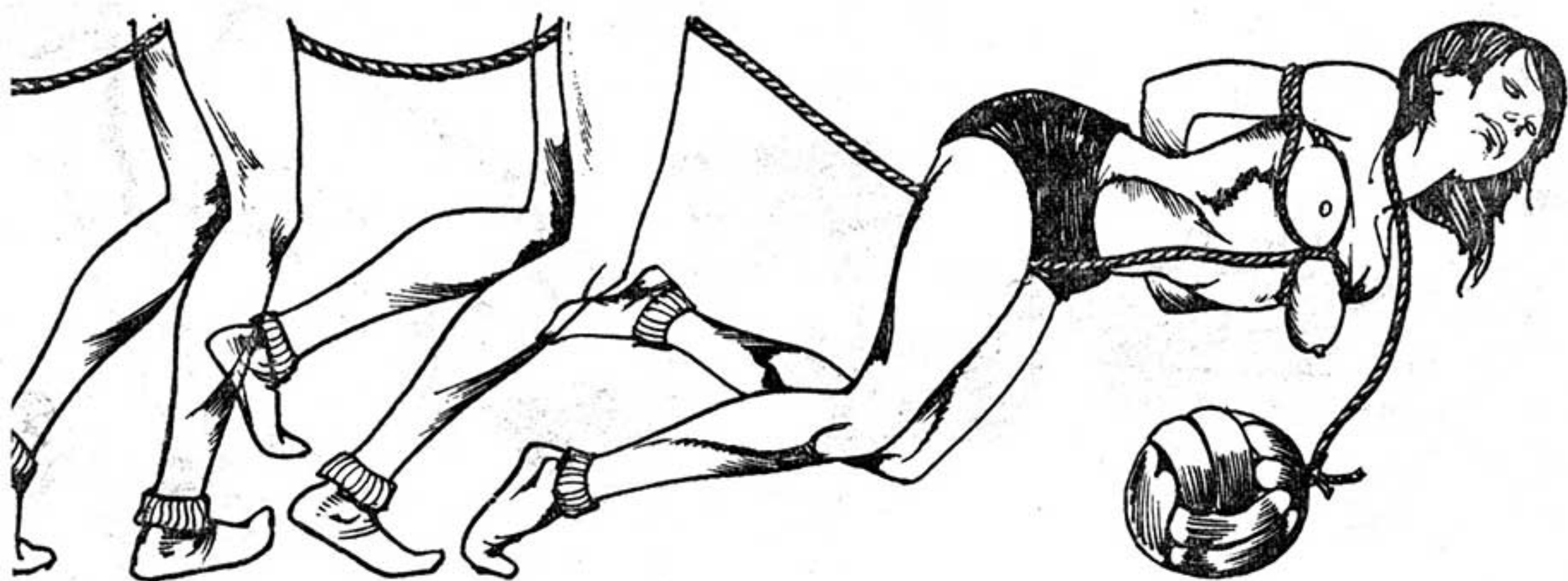
「ああ、ちょっとお待ちなさい。ただ立っているだけでは、痛くもかゆくもなくて、とても反省の刺激にはなりませんね。やはり、こういう場合には、なにか身心にこたえるような立ち方でないと……。むかしの小学校ではよく水のはいったバケツなんかを持たせたのですけれど……。ああ、そうそう、立っているあいだ、自分の悪い点、自分の心の弱い点などを、よく反省できるように、ちよつと縛っておきましょう」

縛っておきましょう、と鯛代先生にいわれたとき、さすがに、志呂子はぎくりとした。

鯛代先生が、机のひきだしから、縄の束をとりだしたとき、志呂子は思わず、二、三歩後退した。

「先生！」

「いいえ、心配なさらなくてもよいのよ。私



はあなたが、かわいくてかわいくて仕方がなのよ。だから、こんなお仕置きめいたことをするの。わかってくださるわね」

「でも、先生」

たじろぐ志呂子に、鯛代先生はもう手かげんをしなかった。

「そうね、しわになるといけないから、洋服はぬいだほうがいいわね。私はね。あなたにどうしても来年、大学へはいつもらいたいのよ。いいですね。よく反省してください」

鯛代の手が、志呂子の肩にやさしく置かれた。まるで肉づきのいい肩が、憎らしい。

「さあ、おぬぎなさい。あなたご自身のためなのよ」

やさしい声音でいわれると、純粋な心をもつ志呂子は、つい、ほろりとして、服をぬぎはじめるのであった。

「だいじょうぶよ。あなたと私は同性だし、このお部屋には窓というものがないから、だれかにのぞかれる心配もないわ」

鯛代が、なぐさめるようにいった。しかし鯛代の目は、らんらんと光って、若くて美しい同性の肌に、早くも嫉妬の色をはなっている。

「あら、あなたのは、黒いパンティなのね」
鯛代がいった。

たしかにそれは、絹製品の黒いパンティであった。ひと目で高価な品と知れる。

かたちよくぶつくりと肉づいたおしりを、黒い絹パンティは、まるで愛らしく包んでいた。ももの肉づきがよく、すらりと長い足。すべての肌の色は、ぬけるように白く、そのために、ぴっちりした絹パンティは、いっそう黒く、魅力的だった。

鯛代先生は、大きなためいきを、ふうッと吐いた。同じ女同志でありながら、白い肌と黒いパンティの対照の、あまりにも美しく、きわだっているのを目前にして、鯛代は嫉妬と羨望のためいきをもらしたのである。

しかし、うらやましがってばかりはいられない。

「さあ、手をうしろへまわして。そう、そうして左右の手首を、かさねるようにして。そうそう、すなおですね。そのまま、手首をかさねているのですよ。私は、ほんとうに、こんなことは、したくないのよ。わかってくれるわね。さあ、縄をかけますよ。そら、がまんしなさい。これも、あなた自身のためを思えばこそなのよ。さあ、ちよっときつく縛りますよ、それッ、うんッ」

「うッ、あッ、痛ッ！」

「辛抱しなさい。あなたの将来を思えばこそ



なんだから。さあ、こうして縛った両手首を上にくいぐいッとしほりあげてと……これから縄を胸にまわして縛りますからね。いいこと？……それッ、それッ！」

「あッ、痛いッ、先生、お乳が……」

「えッ、お乳の上に縄にかけては、いやだっというのね。なるほど、それもそうね。私も女だから、その気もち、よくわかるわ」

「もう、もう、ゆるして……」

「なにをおっしゃるの。いまはじまったばかりじゃないの。ほうら、ごらんさい。あなたの胸のふたつのかわいらしいふくらみが、ぶっくりとくびれて、すてきな眺めになったわ」

鯛代の手が、誘われるようにのびた。ふたつにくびれて、ぶくんととびだした乳首を、やさしく、二、三回、さかなでした。

「あッ、先生、やめてください！」

志呂子は、身をよじった。髪がゆれて、左の目の上におおいかぶさった。

白い上半身に四、五条の縄目。なぜか、鯛代の目にも、ショッキングな光景だった。

女の英語教師は、ごくりと、のどを鳴らした。一瞬、嫉妬の感情よりも、純粹に恍惚が鯛代を襲った。美しいものには、勝てない。はッとわれにかえり、鯛代先生はいった。

「まだ縄があるのよ。あとは、どんなふうに縛りましょうか？」

「先生……」

といったきり、志呂子は絶句した。

この英語の先生の意図に、志呂子はようやく不安を感じたのだった。

「べつにご希望がないのなら、こんどはちょっと、変わった縄り方をしてみましょうね」鯛代の手は、一種のリズム感をともなって縄の束をほぐした。

足と足のあいだを、タテにぎゅうツと、縛りあげようというのだ。

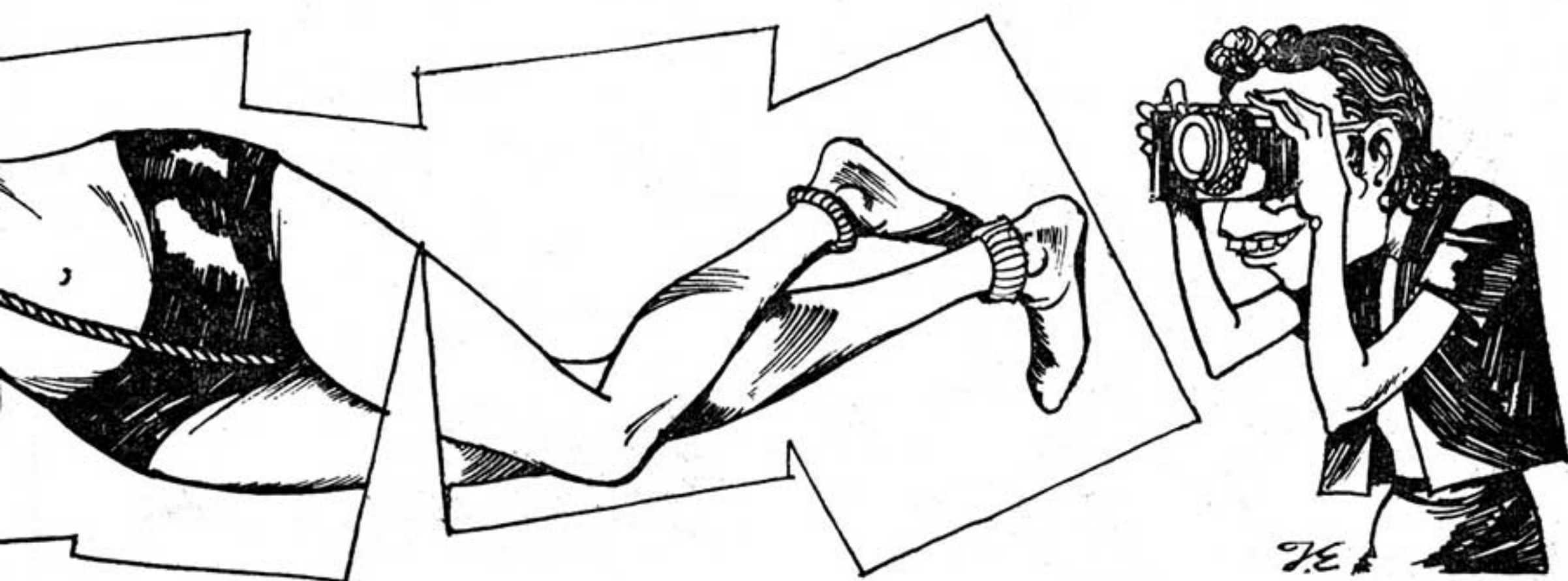
鯛代は、すでに縛ってある志呂子の手首にもう一度、縄をかけた。

白い彼女の手首は、早くもむらさき色になっている。その縄を、ぐいと下方へひっぱった。腰よりもさらに下へひいた。

足と足のあいだへ、縄をくぐらせた。

縄は志呂子のからだの前へのびた。その縄じりを胸までひきあげ、乳房を巻いてある横縄へつなげた。

それから、もういちど、縄じりを下へひいた。前から腰のうしろへとまわした。そしてまた、うしろ手首の縄へからげてとめた。この作業中、志呂子はもがきつづけた。「あッ、あッ、先生、むッ、むッ」



ひざをとじ、肩をふるわしたが、すべては無駄であった。

「辛抱しなさいね、志呂子さん。これもみんな、あなたのためになることなのよ」

鯛代先生のひたいからは、汗がにじみでている。

タテ縛りは完了した。それはじつに珍妙なユーモラスな格好だった。

「先生、先生、ごめんなさい、ゆるして」

赤いかわいいくちびるをひらき、白い歯をのぞかせて志呂子はあえいだ。

身をくねらせるたびに、志呂子の顔は赤くなった。タテ縛りに縛った縄は、だてに縛ったわけではなかった。

うしろ手首をうごかしたり、腰をひねったりするたびに、タテ縛りの縄は、生きもののように前後にこすれるのだ。

志呂子の顔が赤くなるのは、タテ縛りの縄の躍動によるのだ。

「うう、ううッ……」

志呂子は歯をくいしばった。もう身をくねらせることはできない。

伊治目鯛代の視線が、志呂子のその部分にそそがれ、目が笑いをうかべているのだ。

「志呂子さん、そのポーズのままで、よく反省をしなさいね。来年は大学へ進学するんで

すものね。それも一流大学でしょ。このくらの苦しみに耐えられなけりや、とても合格はおぼつきませんからね。そうそう、もうすこし、反省しやすいようにしてあげましょうね。あなたは、そうやって縛られたまま、このお部屋のなかを散歩するのです。あるきながら、いろいろとお考えなさい」というと、鯛代先生は、志呂子の背後へまわった。

志呂子の手首からは、一メートルほどの縄じりが垂れさがっている。

鯛代は、その縄じりを右手につかんだ。

「さあ、あるくのですよ」

「いやです。先生、ゆるしてください」

と、志呂子は哀願した。敏感な志呂子は、いま足を交互にだしてあるくと、どんな結果が生じるか、もう、さどっていた。

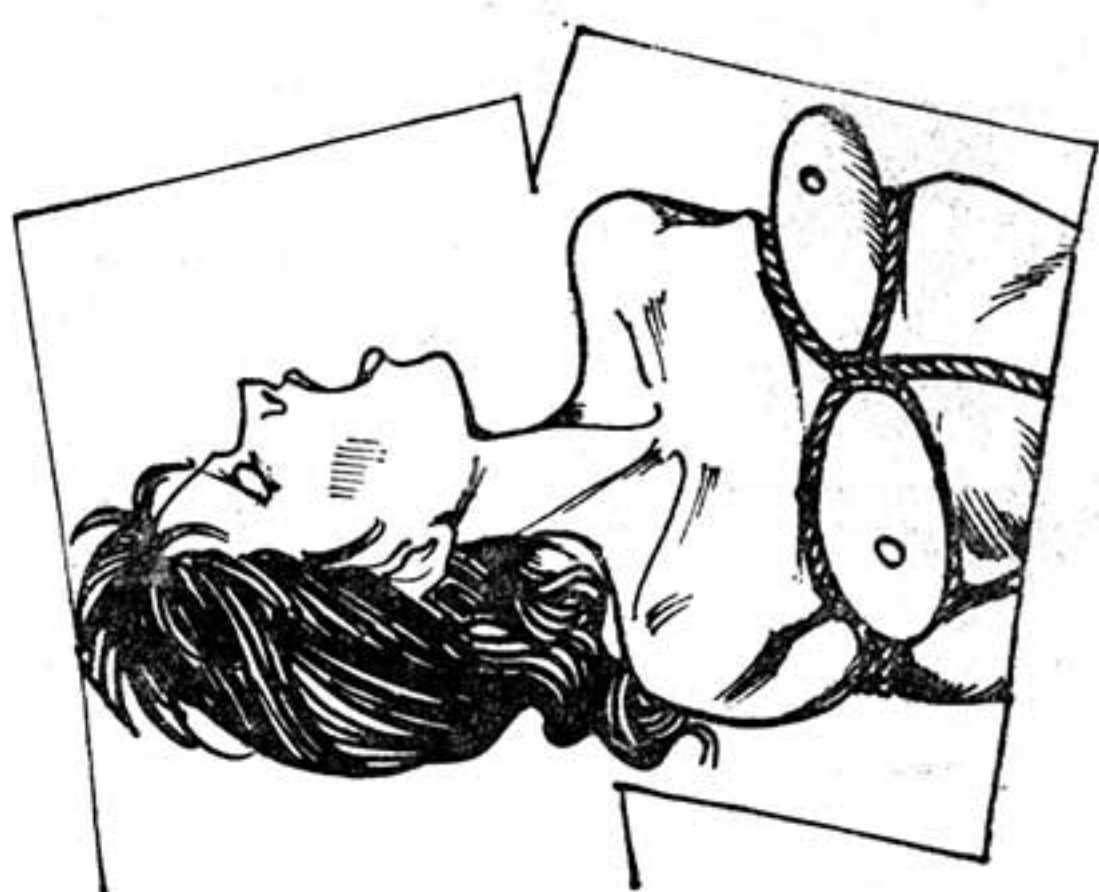
身をくねらせただけでも、タテの縄は微妙に責めさいなものである。

あるいたら、たまらない。いくら黒いパンティをはいていても、たまらない。この羞恥には、耐えられそうもなかった。

「どうしたの？ さあ、あるきなさい」

右手ににぎった縄じりを、ぴしりッとし志呂子のおしりに鳴らした。

「あッ」



と、志呂子の口から小さな悲鳴があがる。痛いほどではないが、奇妙に恥ずかしい感じである。

それでも、彼女はあるきだせなかった。

「先生、ゆるして。もう、なまけたりしません。バレエの練習も、ほどほどにします！」

さけぶように、悲痛な声で志呂子はいう。半分は泣き声だった。

それが、伊治目鯛代の耳には、美しい歌のように、こころよくひびくのだ。

「だめです、あるきなさい！」

鯛代がにぎった縄じりは、むちとなって、志呂子のおしりを打った。

黒い絹のパンティに包まれた肉のまるみは弾力のある音をたてた。ぴしり、ぴしり。

縄じりのむちは、つづけさまに志呂子のおしりをたたいた。ぷりぷりと、左右のふくらみがゆれた。

「あるきなさい、あるきなさい！」

鯛代の声も、いつのまにか、うわずっていた。自分よりも数倍美しい同性が、いま不由な身をもだえている。なにをしようと、思いのままだ。錯覚の勝利感である。

「ゆるしてください、先生、あッ、痛いッ」縄のむちに追われて、ついに志呂子はあるきだした。

右足から左足、右足、左足……。

タテ縄が、急激に活動を開始した。

志呂子の腰が、半かがみになったまま、すくんだ。全身の血が、羞恥に逆流した。

「どうしたの？ さあ、あるきなさい。つづけてあるきなさい」

縄じりのむちは、はげしく志呂子の黒いパンティをたたいた。

思わず、また二、三步、志呂子は進んだ。きゅッ、きゅッと縄がこすれた。

その感覚に、志呂子の神経は、火のようになった。頭の頂天までうずき、しびれた。

「よろしい、ストップ」

号令をかけなくても、せまい室内である。六、七歩もあるけば、行きどまりになってしまう。

「さあ、こんどは、すこし休ませてあげましょうね」

鯛代先生は、横から志呂子のからだを抱きかかえた。

小柄な鯛代の腕では、ちょっと無理のようだが、彼女は熱心につきぎの計画を実行に移した。

志呂子のからだを、机の上に腹ばいにさせて、両足を、その机の脚に縛りつけた。

「さあ、ゆっくりとお休みなさい。このベッ



ドはちょっと固くて、お気の毒だけど」

鯛代は、この重労働で全身から汗をながしていた。愚かれたような顔をしている。

机の上にうつ伏せにされた志呂子は、いっそう哀れな格好だった。机の脚に、両足首を縛りつけられてしまったのである。

天井をむいた黒いパンティのおしりに、二条の縄が、タテに走っていた。

鯛代先生は、そのそばのいすに、腰をおろした。ゆっくりと生徒の白い足をみた。

「美しい子というものは、どんなポーズになっても、美しいのね。憎らしいわ」

と、低いつぶやきをもらした。それは、本心にちがいがなかった。

「ううん、うッ、うッ、くるしい。うむ、うむ、あ、あ、あ……」

うつ伏せだから、たまらない。自分の体重で、自分のふたつの乳房をおしつぶしているのだ。

肩も痛い。背中にねじあげられている左右の腕も痛い。縛られた手首は、もう苦痛をとおりにこして、しびれていた。

もがけばもがくほど、タテにくいこんでいる縄が、いっそうあばれる。

「うッ、うッ、うううッ！」

生まれてはじめての感覚であった。志呂子

の顔は、まっ赤になっている。

鯛代先生は、メガネをはずして、ハンカチでレンズをふいた。汗でレンズがくもったのである。

「さあ、いかが？ ゆっくりと反省してくださいよ」

4

苦痛が、だんだんとはげしく、志呂子の身におそいかかり、身うごきもできず、彼女はうめいた。

「うッ、うううッ！」

たたかれるわけではない。

だれの手も触れてはいない。

ただ、机の上に固定されているだけだ。

しかし、苦痛はえんりもなく志呂子の全身におそいかかる。

「ウフーン、ムムーン、ム、ウン、ウウン、ウーン、先生、ウウム、ユ、ユルシテ……勉強

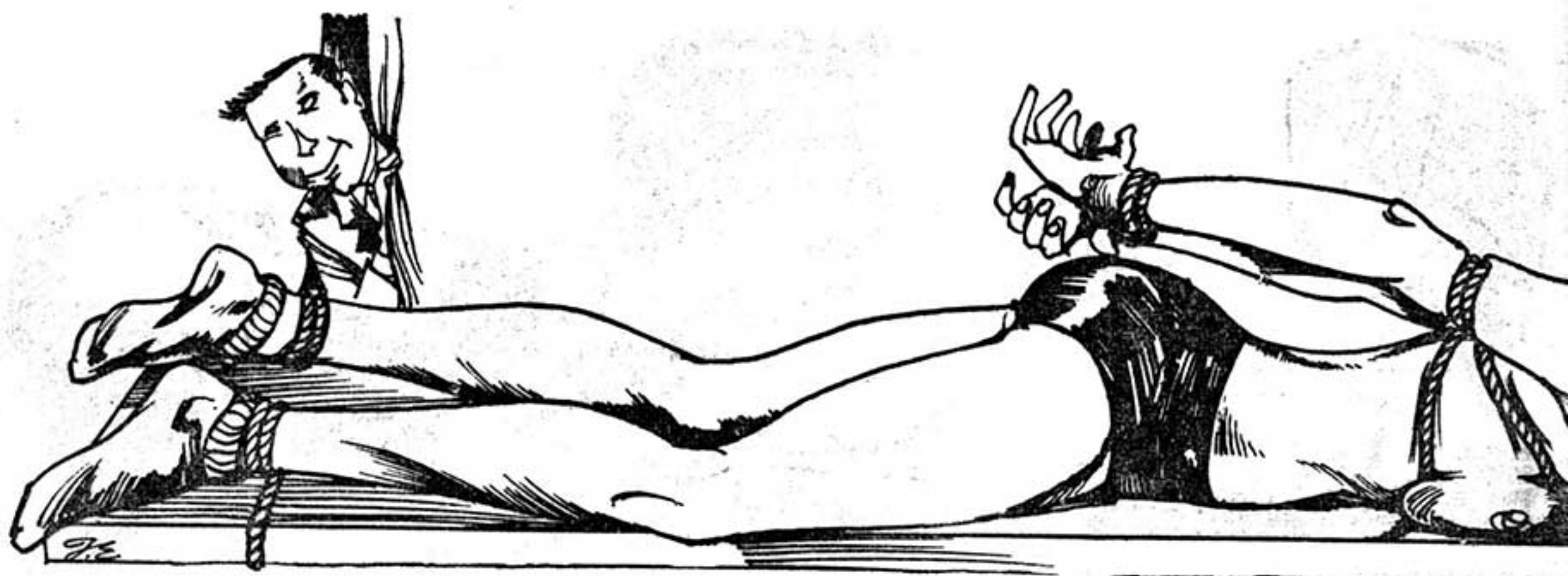
強します、勉強するから……ウ、ウ、ユルシテ……。おねがいです……わかりました、よく反省できました……ウフーン、ム、ム、ム

ウーン、ウーン、ウ、ウ……」

もうプライドも虚栄心も、すっかりすてた

志呂子だった。

「だめですよ。そんな声では、まだまだ、ほ



んとうの反省とはいえませんが。もうすこし、そのまま置いてきましょう」

鯛代先生は、微笑しながらいった。

そして、ゆっくりといすから立ちあがり、なにを思ったか、鼻を志呂子の腰のそばへ寄せた。

「クン、クン」

と、鯛代は犬のように鼻を鳴らした。顔を横にふって、にがい表情をしてみせた。

「こんなにきれいな顔やからだをしているくせに、あなた、ずいぶん、くさいパンティをはいているのね」

と、鯛代は志呂子の耳にささやいた。

志呂子の顔が、屈辱にまっ赤になった。

汗くさいパンティをはいているわけではない。清潔な絹パンティをはいていたのだが、さっきからの執拗なお仕置きで、汗まみれになり、それがにおうのだ。

パンティを汗まみれにしたのは、鯛代先生ではないか！

「ク、ク、クウッ！」

と、志呂子ののどから、泣き声がもれた。

屈辱の悲しみであった。

「あら、あなた、泣いているのね。ずいぶんとあなた、感傷的なね。そんな泣き虫ではとても一流大学へはいれないわよ。まだまだ

だ反省心がたりないのね」

といいながらも、鯛代先生は志呂子の両足を縛った縄をとき、彼女のからだを、ようやく机の上からおろしたのである。

しかし、うしろ手タテ縄縛りは、そのままだった。これで解放してしまうような、伊治目鯛代ではないのだ。

さっき縄の束を取りだした机のひきだしから、こんどは、小型のカメラを取りだした。

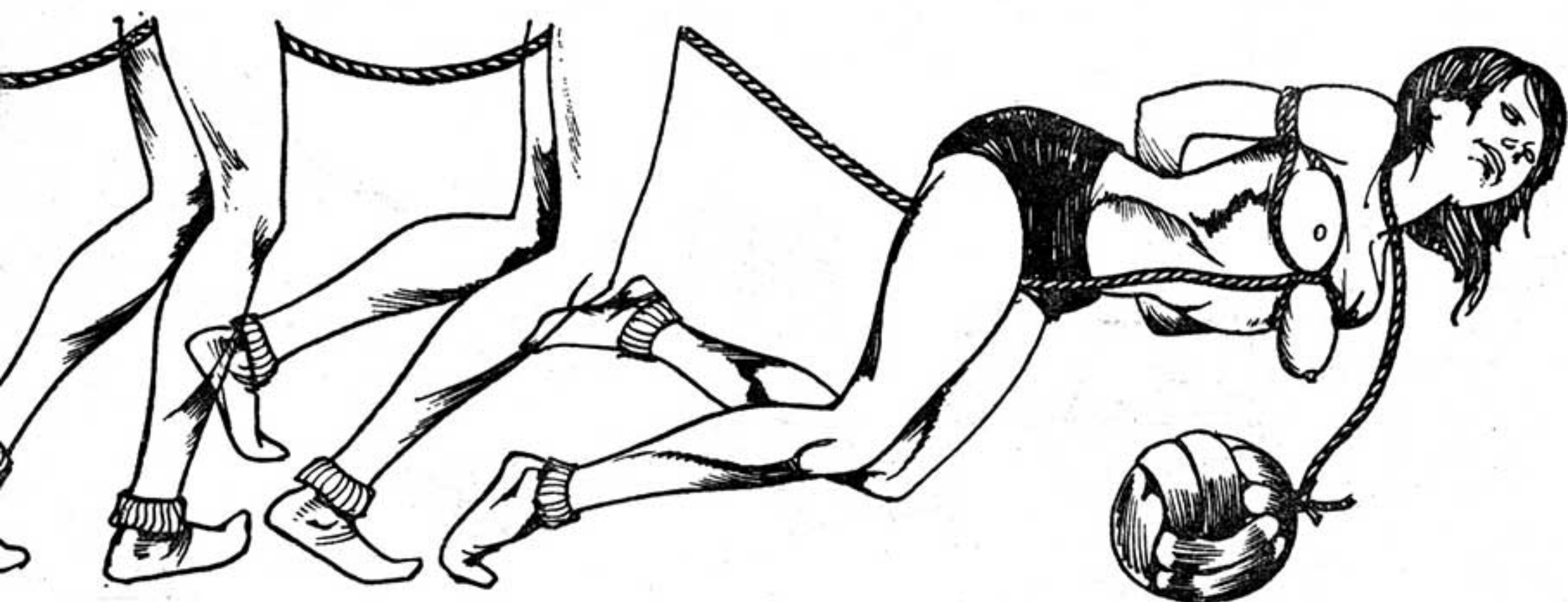
「いいこと、志呂子さん。私はこれから、あなたのそのすがたを、写真にたくさんうつします。というのは、これからあなたが、勉強をなまけなくなったとき、この写真をあなたにおみせして、激励するためなのよ。わかったわね」

このことばの終わらぬうちに、志呂子は猛烈にもがきはじめた。縄からぬけだそうとした。いくら哀願しても、ききいれてくれる鯛代先生ではない。こうなれば、満身の力をこめて、このいましめを自分で解くよりほかにない。

こんな醜体を、写真にとられるなんて、想像しただけで羞恥に死にそうだ！

だが、縄はとけなかった。ゆるみもしなかった。

あばれればあばれるほど、志呂子の姿態は



みじめな、なさけない、あられもないポーズ
となって、鯛代のカメラにおさまっていく。
かちり、かちり、とシャッターを押す音が
志呂子の耳にひびく。

「おねがいです、もう、もう、やめて！」

志呂子は、ゆかの上をごろごろところがっ
た。レンズから逃げまわった。

室内はせまいのだから、いくらころげまわ
っても、すぐ壁にぶつかってしまふ。

それでも、志呂子は逃げた。うしろ手タテ
縄縛りのままころがるのだから、たいへんな
苦痛である。志呂子の顔は、なみだでぬれて
いた。

三十六枚のフィルムに、志呂子のみじめな
三十六態が、明確にやきつけられた。

「よく辛抱したわね、志呂子さん。それだけ
反省すれば、もうだいじょうぶね」

志呂子の縄はようやくとかれたが、その白
い肌には、くっきりと縄のあとがしみつき、
妖しい美しさをかもしだしていた。

5

さて、それから三日後。

お転婆学園の園長室では、河馬ヅラの園長
のほかに、キツネそっくりの教頭と、それか
ら佐渡先生、合計三人が集まって、ひそひそ

と話しこんでいた。

「ふうむ、なるほど、ひとは使いようッてい
いますが、あの伊治目鯛代くんが、こんなに
みごとな仕事をしてくれるとは思いませんで
した。なるほどねえ」

と、キツネ顔の教頭が、口のさきをとがら
せて感嘆する。

三人のひざのあいだのテーブルの上には、
伊治目鯛代が撮影した、れいの写真が、もう
できあがっているのである。

三十数枚を、ぜんぶキャビネにのぼしてあ
る。あのかれんな波多野志呂子の姿態が、あ
ますところなく、焼きつけられている。

「なかなか、アジなもんだね」

と、河馬園長が大きな鼻の穴をふくらませ
ていった。息を吸ったり吐いたりするたびに
園長の黒くてふとい鼻毛がゆらぐのである。

鼻毛のゆらぐときは、園長の気げんのよい
証拠ともいえた。

——波多野志呂子。なんという美少女なん
だろう。こんなきりょうのいい生徒は、さん
ねんながら、わがお転婆学園には、ひとりも
おらんわい。

と、園長は思った。

「まあ、これだけいじめつけておけば、敵側
の士気にも、だいぶ影響があると思います。」



なにしろ、この波多野志呂子は、キャプテンですからね」

と、佐渡先生がいった。

「ほんとうに、ご苦労でしたね。いや、佐渡先生、私たちは、あなたの功績をたしかにみとめますよ」

と、キツネ教頭がいった。

「ところで、このタテ縛りというやつ、なかなか、おもしろそうだね」

といって、河馬園長は、ちらと佐渡先生の顔に視線をやった。

「はあ？」

「写真ではなく、いちど、実際に見てみたいもんだね。ねえ、教頭先生」

と、てれくさいものだから、園長は教頭に同意をもとめた。

「そうです、そうです。じつは私もいま、それをいおうと思っていたところでした。いいですなあ、タテ縛りの実験。いや、これも勉強のひとつですからな。だれか私たちの周囲に、いいモデルはいませんか。いや、うちの生徒ではまずい。……あッ、いた、いた。ねえ、園長、うちの女事務員にひとり、ちょうどいいのがおりましたよ」

「うちの女事務員？」

「ほら、河合総子（かわいそうこ）ですよ、

河合総子」

「なるほど！」

と、園長はテーブルの上を、ほんとたたいた。

——なるほど、あの日本人形的美人事務員なら、申しぶんない。

と、佐渡先生も心のなかで、ひざをたたいた。そして、縄をかける役目は自分だな、と思うと、それだけで胸がどきどきしてきた。

「じつはね、園長。私はあの娘の、いわば、いのちの恩人なんです。だから、私の命令には、たいていのことなら、服従します」

キツネは、ほそくとがらせたくちびるを、ちよろちよろと舌をだしてなめた。

「ふうん、そんな事情があったのかね」

河馬は目を、針のようにほそめる。

「佐渡くん、きみ、すまんがね、事務室へいって、河合総子を呼んできてくれたまえ」

キツネが命じた。

「はい、かしこまりました」

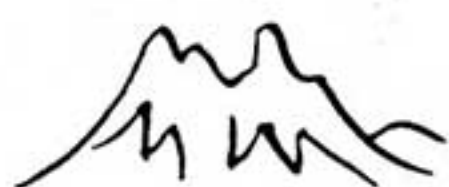
佐渡先生は、いすから立ちあがった。

彼の脳裡には、早くも河合総子の、なよなよとした、なめらかそうな手足と、それにからんでいく縄の色がうかぶのである——。

コレハオドロ記③

さるぐつわ の起源

左次郎



①

岩穴のトドは
ともりのはしり



②

話のたび
にみんなの
笑いもの



③

オペラは
話上手な娘



④

オペラが
話しだ
すと
たちまち
人の山



⑤ オベラの

話上手に
感激した

トドは

さっ

そく

プロポーズ



⑥

しかし
残念

みごと

ひじ鉄



⑦

されば

常法どおり

にと

暴力結婚に

およんだ

とたん



⑧ 女ごころは

不思議なものよ

「あなた!!

死ぬ

ほど

大好き」

ときたもんだ



⑨



⑩

トドの岩穴で

二人の愛の

生活が

始まる



⑪ 三カ月ぶりに二人が
岩穴を出ると



⑫ オベラ

友だちが
山と
待ち
かまえ
ていた



⑬ そして
オベラ
の
話が
始まる



⑭

ところが
大変!!
話は全部
トドとの
愛の
行為に
ついてである



⑮ おどろいた
トドはオベラの
手をとって



⑯ 岩穴へ!!

穴があったら
はいりたいと
はこのこと



①⑦ トドはなやんだ



①⑧ なやんだすえ



①⑨ これなら



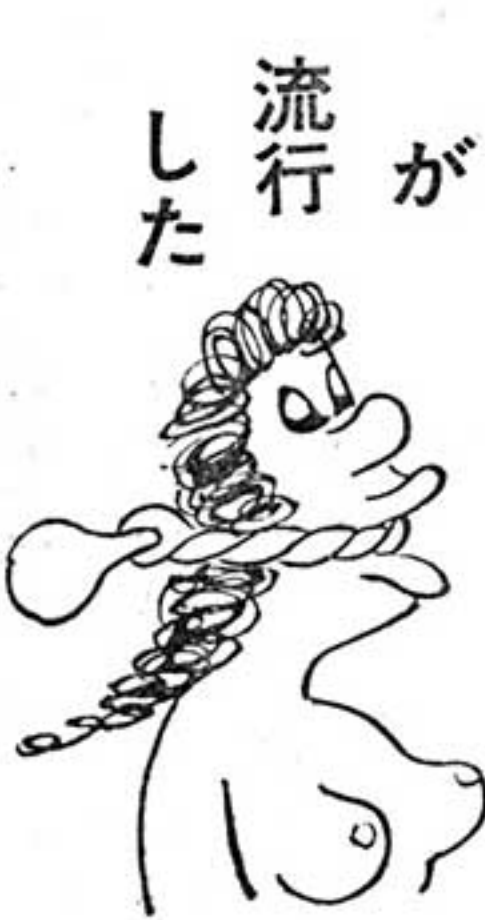
安心
して
二人
で
出か
けら
れる



②⑩ 珍らしいことは

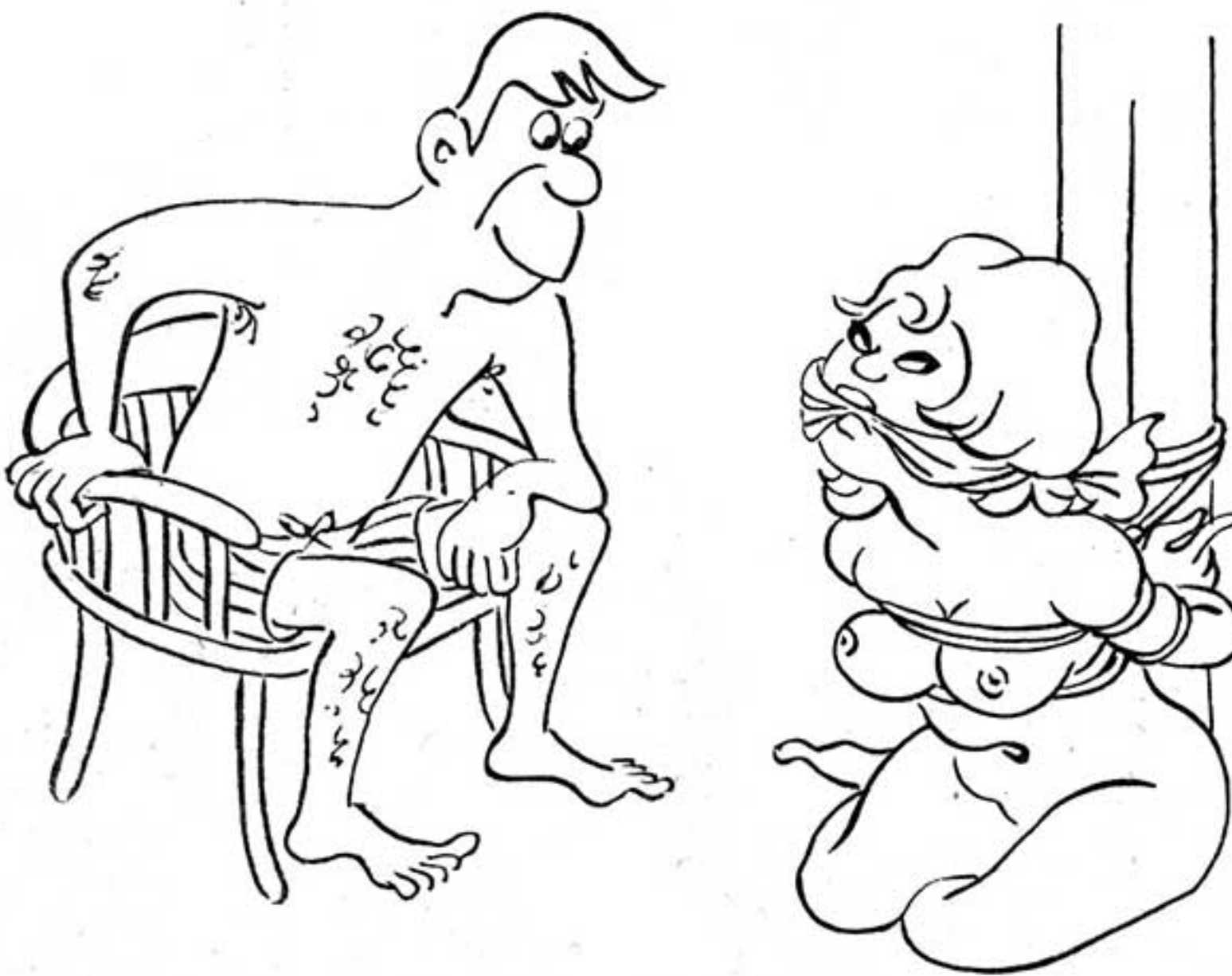


真似
した
い
ろ
な
さ
る
ぐ
つ
わ



②⑪ そして現代

豊かなほほに
くいこむ
さるぐつわに
魅かれる
男たちの出現
となった



紅のライフル



復讐にたちあがった美貌のガン・ウーマン
だが山猫モーガンは一枚うわ手だった！

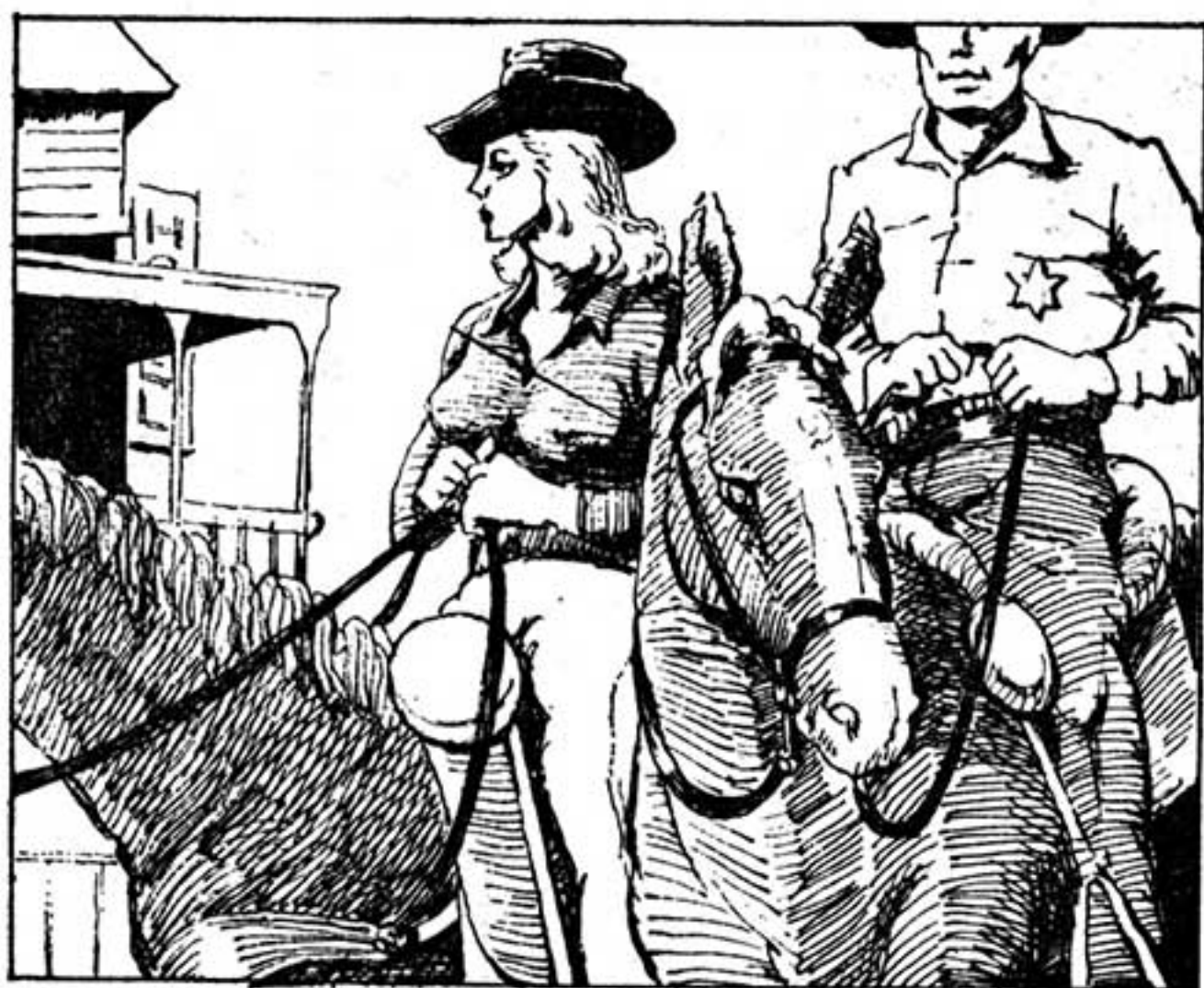
祖父江 新・文
落合 竜二・絵

① 二人の旅行者

小さな町ではあるが、無法の町として知られるアリゾナ州のトゥムストンに、ホコリまみれになって二人の旅行者が到着した。

二人はコロラドからはるばるやってきたもので、たくましい男は保安官助手のマリック・クラントン。いまひとりにはキャスリン・パーマー、美しい女性だった。

このカップルは町にはいるとさっそくモンク保安官をおとすれた。



② 駅馬車強盗

キャスリンの弟、フランク・パーマーは駅馬車の助手だったが数日前、駅馬車強盗のため射ち殺された。

生存者の証言で犯人はアリゾナの山猫と呼ばれるジェイク・モーガンであることをつきとめたキャスリンは、けなげにも弟の復讐のために、マリック・クラントンはこの無法者を逮捕するため彼の本拠地トゥムストンへやってきたのである。





③ 老保安官

モンクは初老の温厚な保安官だったが、彼女らの申し出を迷惑がっているふうである。言葉のはしばしに、ひどくモーガンを恐れているようすが聞きとられた。彼はこの町で、モーガンを対手にすることの不利を、論すように話すのだった。彼の話によると、モーガン一味はいま町にいないで、明日あたり帰るらしい。町の酒場に、ロンダという情婦がいるとのことだった。

④ 酒場の歌姫

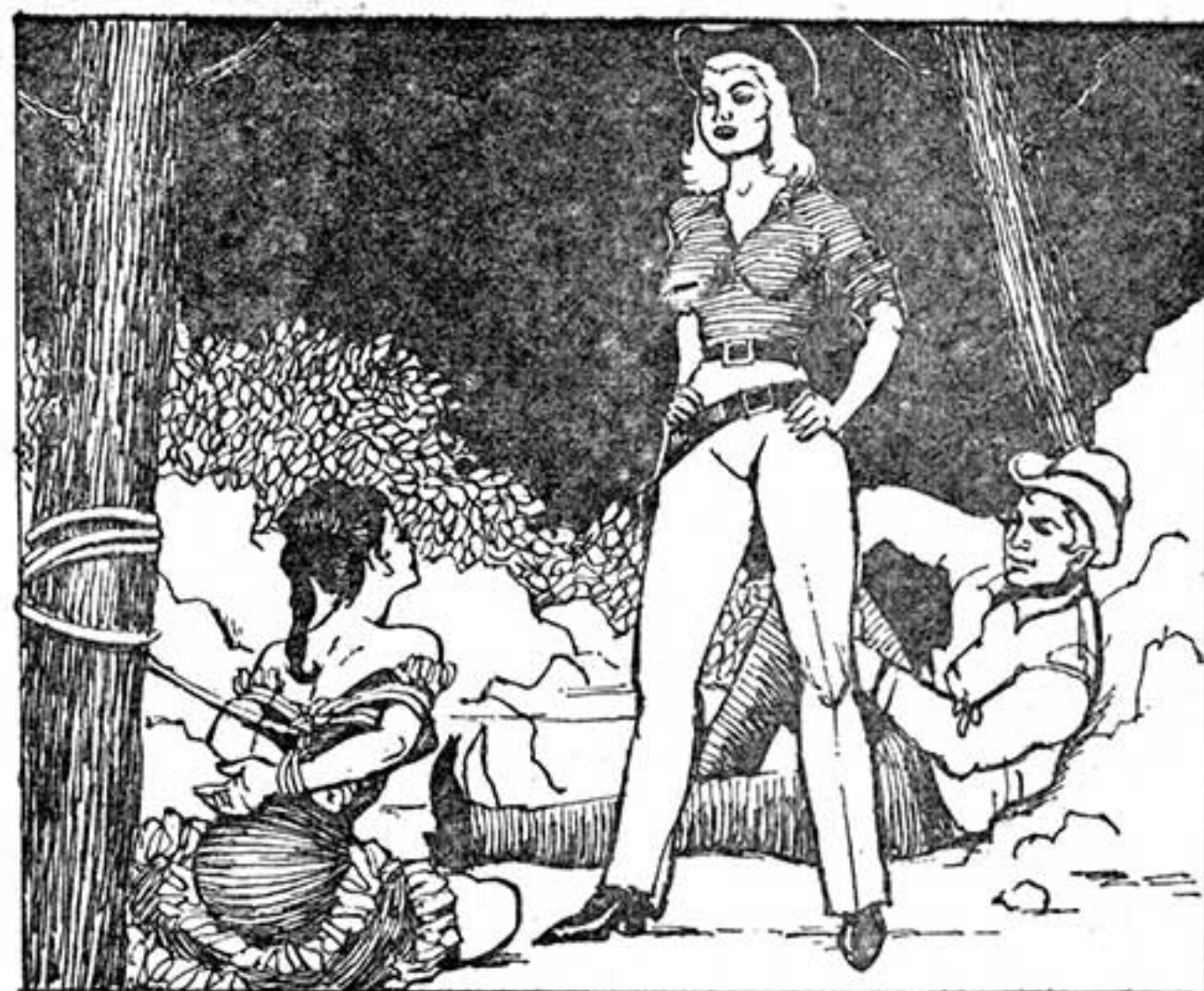
白人とメサシコ人の混血娘、ロンダは酒場の歌姫だった。夜毎、町の荒くれ男をまえに唄い、踊る。彼女は歌い終わると汗にくずれた化粧をなおすために二階の自室にはいった。鏡のまえにすわったロンダが、壁に映った男の影に思わず声をたてようとしたとき、大きな掌が彼女の唇を塞いでしまった。あがらう手首に、堅いロープが巻かれる。



⑤ 窓の外

マリクはロンダの手足を縛り、堅く猿ぐつわを噛ませると肩にかついで窓の外に出た。「キャシイ、うまくいったぞ。どこだ」「ここよ。さあ早く!」酒場の裏手に、から馬をひいたキャスリンが待っていた。酒場の男たちがロンダのいないことに気づいたときは、キャスリンとマリクの姿はもう町に見えなかった。





⑥ 山のなか

町を遠くはなれた、淋しい山のなかだ。

ロンダは後ろ手に縛られたロープの端を、立ち木につながれていた。

「あたしをこんな目にあわせて……。モーガンは黙ってるはずないわ。あしたになれば、お前たちきつと殺されてよ」

キャスリンの平手が、激しくロンダの頬に鳴った。

「お黙り！ 黙って山猫のために祈るのよ」

⑦ 野獣

キャスリンは女の呻き声を聞いたような気がして、寝床からムクリと頭をあげた。

みると、マリクの寝床がもぬけのから。彼女は銃をとって声のするほうへ近づいた。

危機一髪。そこに下着を剥ぎとられたロンダが猿ぐつわを噛まされてころがっており、獣になった男が挑みかかろうとしていた。

「マリク！ こんなことだろうと思ったわ。さあ、去って。あんたの手は借りないわよ」



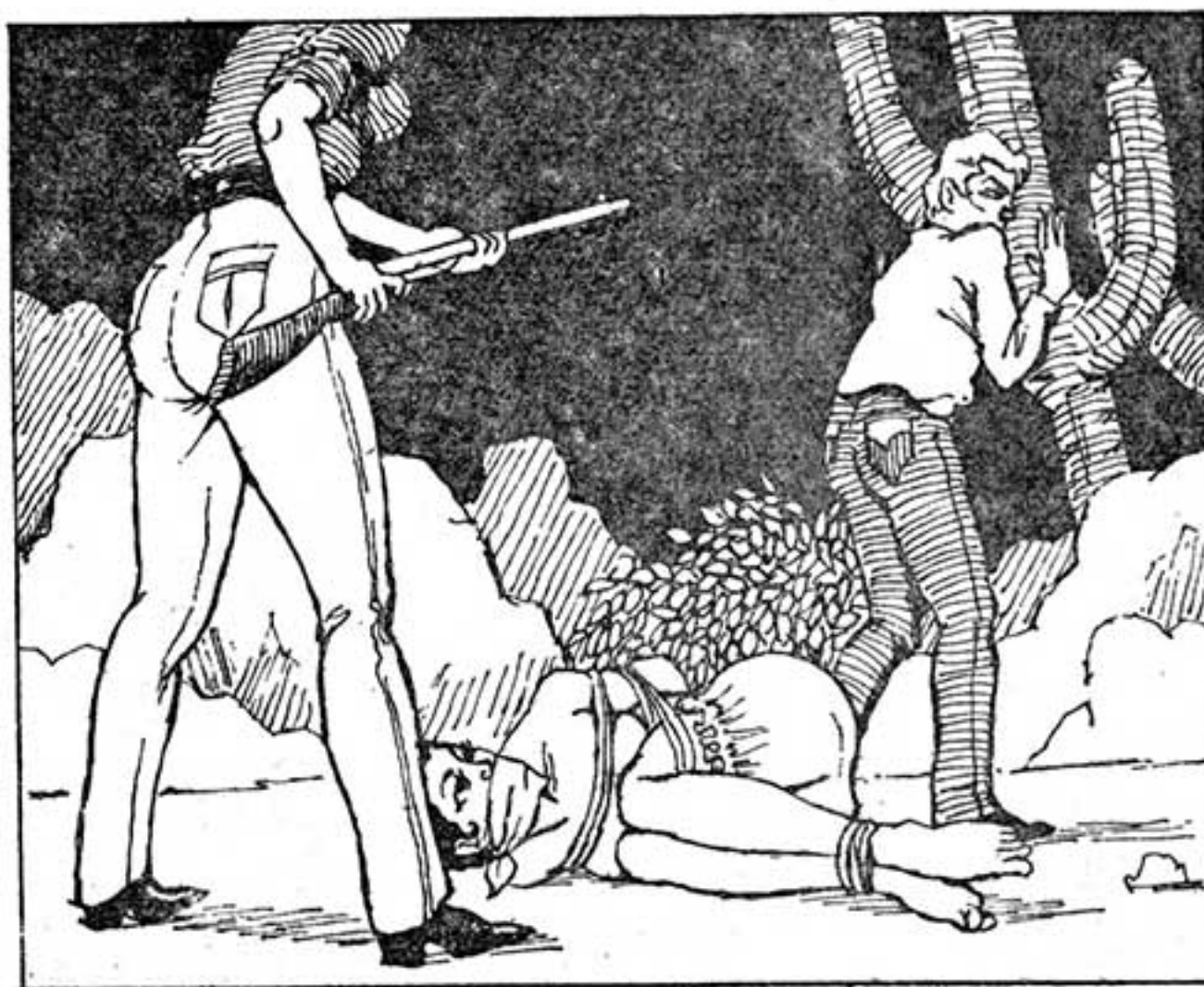
⑧ 女ふたり

キャスリンに銃口を向けられて、マリクは去ってしまった。

「ますますモーガンにかないつこなくなったわね。それにしてもどうしてあたしを助けたの。でも恩に着ないわよ」

「醜い男は誰でも許さないわ。わたしには勝算がある。あんたがモーガンの愛人なら、彼はうかつに手出しできないはずよ」

キャスリンは冷たい眼でロンダを睨んだ。





⑨ 山猫モーガン

夜明けにもかかわらず、酒場はモーガンの手下たちがとぐろを巻いていた。彼らはマリクが入口に立つといっせいに銃口を向けた。「俺はモーガンの味方だ。ロンダのいどころを知ってる。モーガンに会わせろ」

——ロンダの部屋で、不敵にもモーガンはグッスリ眠っていた。

「俺の名はマリク、キャスリンにうらみがある。手を貸すぜ」



⑩ 手は借りねえ!

いきまぐ手下たちを制して、モーガンは単身マリクに従った。

「あれだ! 二人でやればいどころだ」

マリクは山の岩肌を指さして叫んだ。

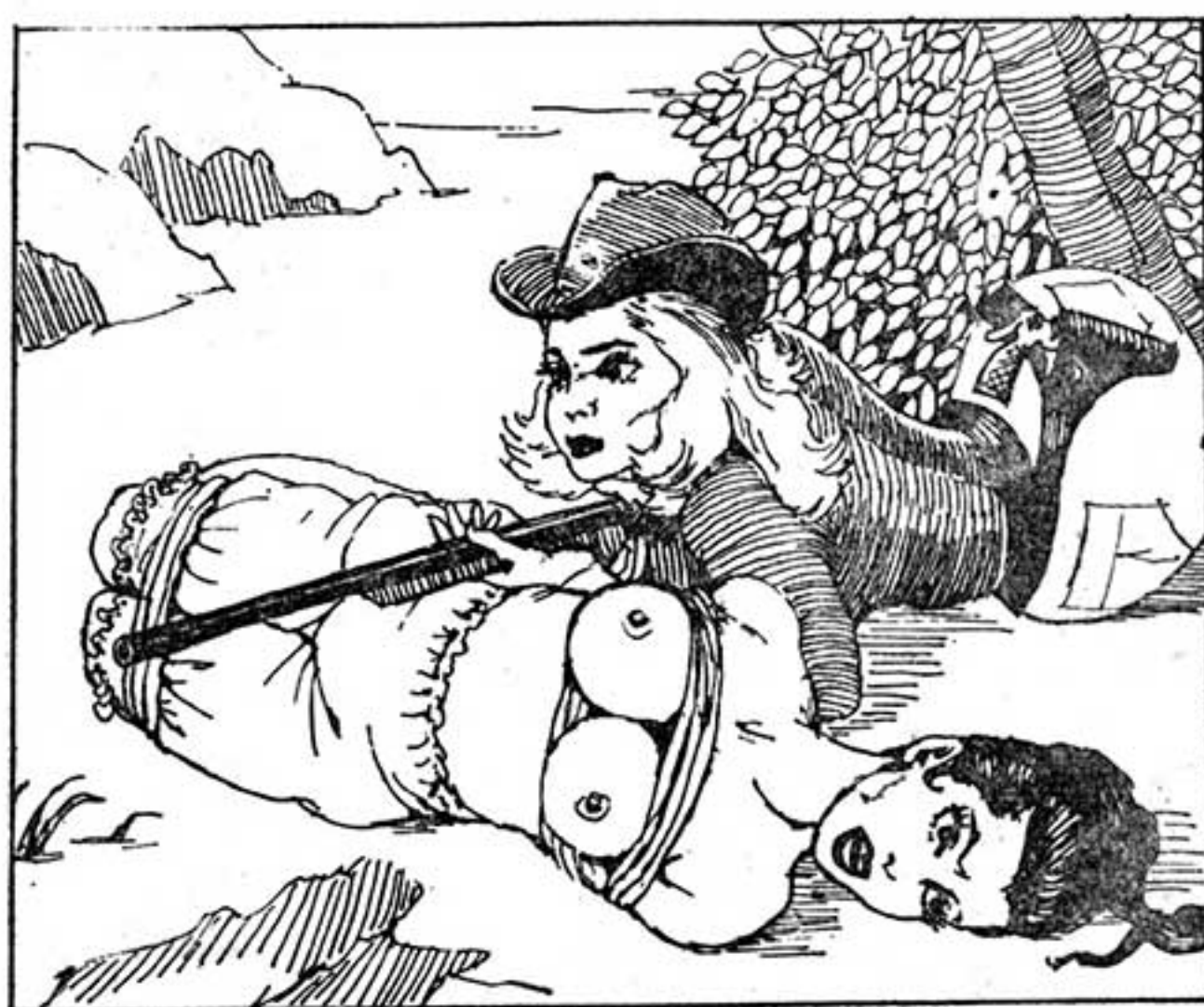
「女にふられた裏切り者の手は借りねえ」

馬上の二人は瞬間に拳銃を抜きあつたが、

モーガンの拳銃が一瞬早く火を吐いた。

声もなく、マリクは馬から転落する。モー

ガンは馬を降り、悠々と山に向かった。



⑪ 生きた楯

銃声で、キャスリンはモーガンのきたことを知り、銃をとって身構えた。キャスリンの楯になっているのは縛られたロンダだった。

こうすればモーガンも容易に引きがねは引けまいと考えた、キャスリンの策である。

だが、キャスリンを発見したモーガンは、拳銃を手にしてシリシリ肉迫してきた。

「モーガン! こないで! 撃っては駄目」

ロンダは必死に叫んだ。



⑫ 失敗

キャスリンがまず発砲し、モーガンは応射した。さすがアリゾナの山猫の腕は確かだった。彼の銃弾はキャスリンの襟を、ロンダの腰をかすめた。

そして、キャスリンは作戦の失敗に気づいた。このままだとロンダの生命があぶない。ロンダも知った。モーガンはやはり冷酷な山猫だったことを。

キャスリンはついに立ち上った。

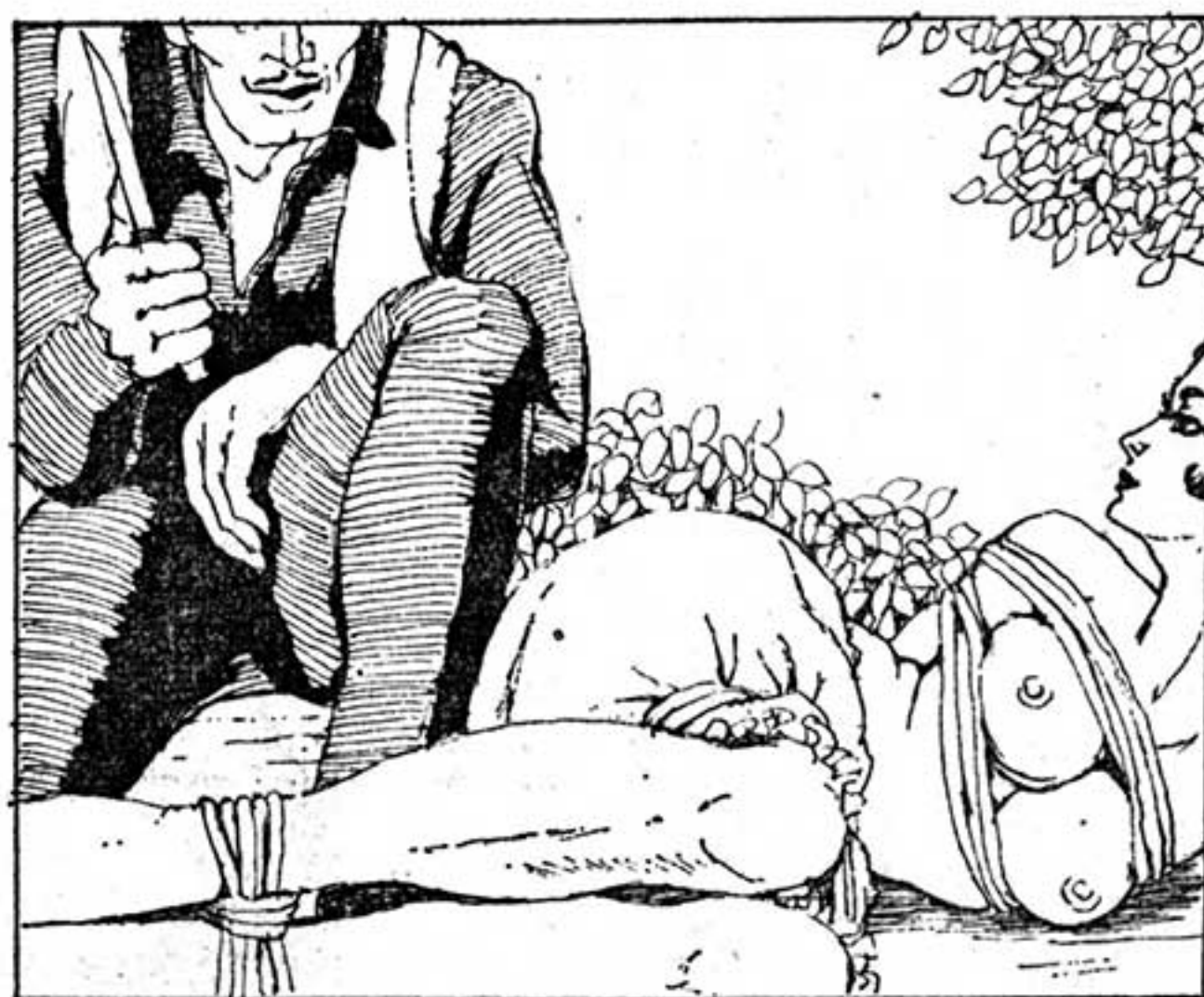


⑬ うしろを向け!

モーガンはチャンス逃がさなかった。キャスリンが傍らの岩かげに飛び移ろうとしたとき、モーガンの銃弾のために銃をはじきとばされてしまった。

「動くな! 手を上げろ!」
拳銃を構えたまま、モーガンはゆっくり近づいてきた。

「ガンベルトをはずせ。後ろを向くんだ」
勝ち誇るモーガンは白い歯をみせた。



⑭ 燃える目

彼はキャスリンの両腕を後ろにねじると細引きで手首を縛り、口を割ってスカーフを噛ませてしまった。そしてナイフを抜くとロンダの手首を縛っているロープを切り放った。

「ロンダ、いい格好だったぜ。あとは自分で解きな。解いたら酒場に帰って、すぐ仕事にかかるんだ」

冷たい言葉に反して、キャスリンを見るモーガンの眼がキラキラ燃えていた。



⑮ 必死の抵抗

「さあ、てめえはこっちへ来るんだ。さっきの礼をさせてもらうぜ」

苦勞して縄を解いているロンダを尻目に、モーガンはキャスリンの腕をつかんでせきたてるのだった。キャスリンが必死に抵抗するのを、彼はかまわず引きずっていった。

「ジタバタしても無駄だ。アリゾナの山猫に手向かいしたお礼を、てめえのからだにたっぷりさせてもらうぜ」

⑯ 山猫の本性

モーガンはキャスリンを岩かげに引きずってくると、荒々しく草むらに押し倒した。助けて！ 叫ぼうにもキャスリンの声は、非情な猿ぐつわに押しもどされた。

「フッフフ、ほんとうなら殺してもいいところだが、俺の女にしてからロンダの酒場で働かせてやる」

山猫の本性むきだしに、キャスリンに挑みかかったとき、モーガンの背で銃声がした。



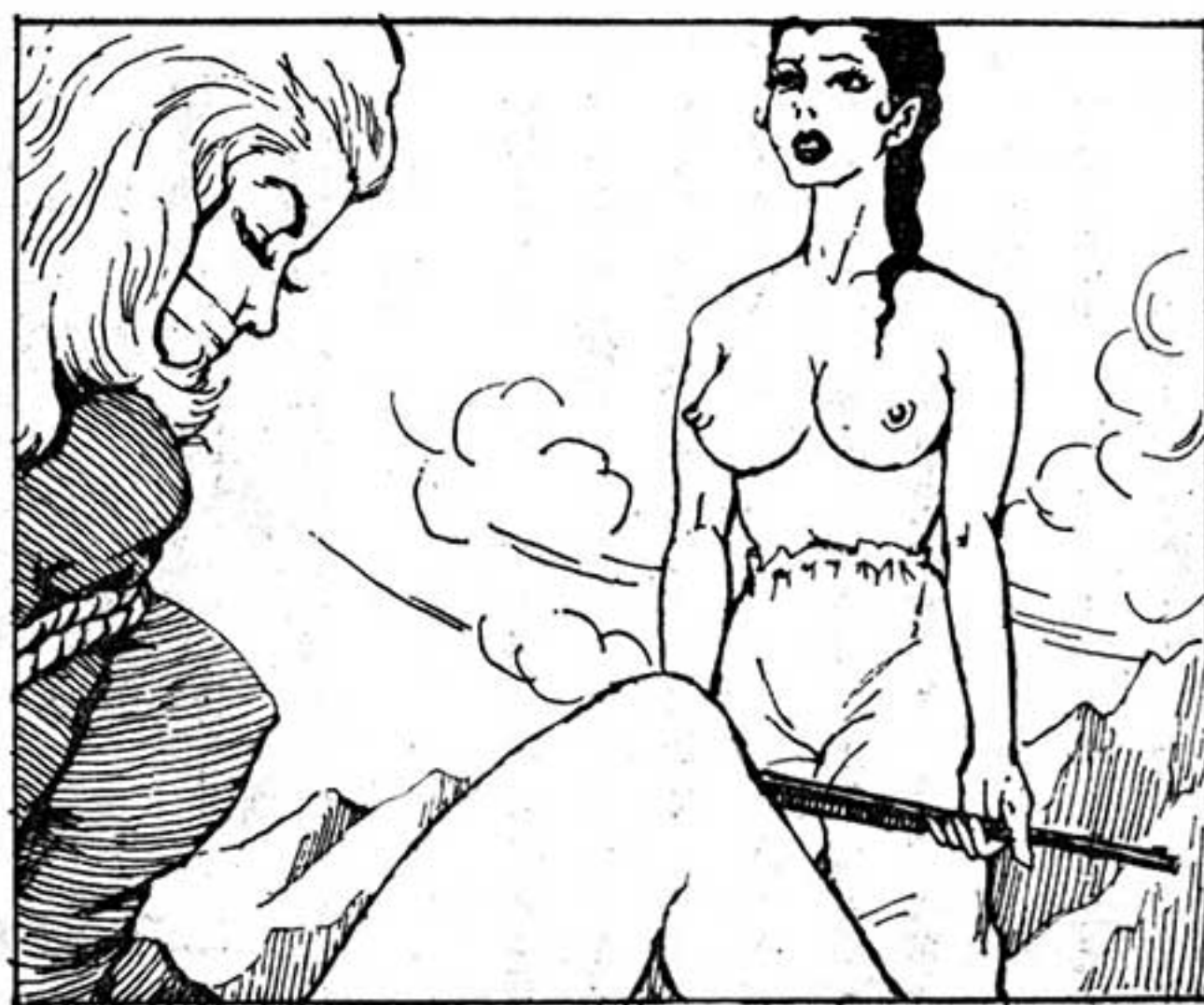
⑰ 女のなみだ

モーガンはキャスリンの上に倒れかかったきり動かなくなってしまった。

キャスリンが顔を上げると、銃を手にしたロンダがうつろな目をして立っていた。

「こうなるより仕方なかったのよ。今日はつきりとモーガンの冷たさを知ったわ。そしてあんたはわたしを助けてくれたわ。でも……もう駄目。こんなに愛してたのに……」

ロンダの頬に、涙がつたって落ちた。





ほも紳士録⑧

愛を愛するLの女

かびや・かずひこ

秋吉 巒・絵

①女のなかの“女” をもとめる

N子のはじめて私を訪ねてきたのは、昨年の春のおわりころと覚えてい

手紙をもらったのは、その二年前の彼女の十八歳のときで、その後、両三度便りがあったが、こんど東京に職を得るようになったからということ、郷里のS県から上京して訪ねてきたのである。

愛人のR子（東京在住）という女性と同道であった。

N子はオープン・シャツの袖を腕まくりで、ズボン姿、初対面のあいさつもそこそこに、あくらを組んで、タバコをふかしふかし、いせいのいい調子で話しはじめた。

そこには、未知の人間、とくに自分よりはるかに年長の男とはじめて会うことの、わかものらしい羞恥をごまかす、というようなポーズも感じられないではなかったが、なんにしても、その潤達な態

度が、私にはきもちよかった。

そんなふうなN子であったが、私は、彼女から、さほどかわいた感じはうけなかった。むしろ、声柄などは、程よいしめりけがあった、女性らしい魅力がある。

容貌や姿態からうける感じなどは、一〇〇パーセントとはいわないが、多分にウェットだ。色の白いはそおもて、目鼻立ちがチンマリと整っていて、小柄なひきしまった体軀。

ふりそでのきものでも着せたらさぞ可愛いだろうナ——と私は思った。

が、このN子、同性愛の分類からいったら、完璧にA男性型Vなのだから、神サマは悪戯なものである。

N子の愛人のR子は、完全なA女性型Vと、私はさいしょから感じていたが、話をきいてみると、はたしてそうであった。

かつて芸能界にいたころ、男のような性格と特異なマスクで知られている、レスボス趣味の一女優

から、受け身のかたちで愛された経験がある、ということだった。

N子とは、二年前に、ある人の紹介で知りあい、数回の文通ののち、S県へN子を訪ねていった。

そのとき、和服にさんじやくという姿で、駅前に立っていたN子を見たとき、その一発の印象で、N子に魅惑され、「このひとこそ……」と心をきめたということだ。

純然たるW型のR子が、自分をむかえるべく、艶美なきものスタイルで駅前であっていたN子に、一目でぐいと心を掴まれた——つまり、R子は、N子のなかのA女Vに牽引されたのである。

この話は、いままでの私の蒙をひらいてくれた。

私はそれまで、パッシブ・タイプのW型女性が、同性に惹かれる場合、その愛のポイントは、すべて同性のなかのA男Vにあるとばかり思っていたのだが、R子のようなケースもあることを知って、ひとつ勉強をしたのである。

いや、むしろ、あいての同性の

なかのA女Vにひかれることこそ、レスボス愛の本質というべきであろう。パッシブ・タイプのウィルニギン（女子同性愛者）の場合と、アクティブ・ウィルニギンの場合とを問わず……。

R子は更につけくわえて、次ぎのようにいつている。

「女性のなかの『女』をもとめるといっても、メソメソグジグジ型のひとはいやです。ハッキリして、それでいていくぶんオセンチで、甘いやわらかなところのあるひとに惹かれますわ」

「いくぶんオセンチ……」うんぬん以下のことばは、N子にたいして望んでいる意味のようであった。

②その男性嫌忌

竹を割ったようにカラッとしていて、女性にはめずらしく、秘密性がほとんどないN子は、私になんでも話してくれるし、みずからの告白的な手記にも、すはだかの体を投げだしている。

N子は芸者を母として、生まれる憐れみ、いとおしみ。そう解釈することによって、N子の異常なまでの男性嫌忌は、私にははじめて納得がいくのである。

このことをN子は、

「私は男女の愛のつながりで生まれたのではなく、女の肉体を金銭で買う男性の、セックスの欲望で生まれたのだ」といつている。

N子はこのことから、みずからの生誕を呪うとか、インフェリオリティを感じるというよりも以前に、そうした男性——男性一般にたいする嫌忌、憎悪の念を、はげしく燃やしている。

ものごとくに淡泊な彼女が、この点に関するかぎりには、異常と思えるばかりに激しい。

私は思うに、こうした男性憎悪の裏側は、そうしなければならなかった母親にたいする、かぎりないいとしみなのではなからうか。

それほどに、N子は母親を愛しているのだ。

「自分自身よりも愛することのできる唯一人のひと——母」と彼女がいつている、その母親にたいす

る憐れみ、いとおしみ。

その解釈することによって、N子の異常なまでの男性嫌忌は、私にははじめて納得がいくのである。

彼女の男性嫌忌を、いつそう強めていく、もひとつの由因がある。

それは小学五年のころ、N子家の近所に、彼女が兄のように慕っていた十八歳の少年がいたが、あるときその少年が、彼女に本を買ってやるから……とのことで、彼女にいたずらをしたのだ。

そのことを彼女が母親に告げなかったらしいのは、こどもながら、そのことに快を覚え、それが差すかしかったためでもあらうが。

が、後年になって、あの少年はみずからの欲望のために、こどもの自分をだましてオモチャにしたのだ、とわかったとき、彼女は、だました少年を憎むとともに、男にたいして嫌忌を覚えるようになった。と語っている。

この場合の男性嫌忌の裏側は、自分自身にたいするいとしみであ

ろう。

いずれにしても、こういう例——こどものころに年長の男性にいたずらされたという例は、女性の多くからよく聞くことだが、それが男性嫌悪の因子となったということは、私はほとんど聞いたことがない。

N子の場合は、前記のような母にたいする愛慕や、自己愛慕が、他人にまさって、よほど強烈であったためにそうなった、と私は解するわけなのだ。

③最初の実験として

N子の同性愛の歴史は、中学にはいつてから始まる。

学校は男女共学だったが、男の生徒にはまるで関係がなく、同性の級友や上級生のなかに、心をひかれるものをみいだしていた。

このころN子は、オナニーを知った。それはおそらく、小学五年のときに十八歳の少年からいたずらされたことが、誘因となっていたのだらう、ひとり知ったので

ある。

すきな女生徒の顔や姿をおもいうかべながら、N子は自慰に耽った。

現実にも、それらの少女にちかづいた。が、愛を告白するまでの勇氣はなかった。さりげなくつきあい、むしろ意識的に、おてんばにふるまっていた。

そうしたことは、私なども、少年時代に覚えがある。ひそかに思慕をよせている異性または同性（私の場合はたいてい、年下の少女か少年であったが）にたいするとき、わざといたずらっぽい言動をすることが、よくあったものだ。テレ屋のテレかくしなのである。

こんなふうで、二年三年とすぎ、三年生となった夏、そのころ出版されていた「F」というSM趣味の雑誌に、レスボスのことがしるされて、記事を見つけ、その筆者へ雑誌社気付で手紙を出したことがあるというから、他とちがった自分の同向を、すでに自覚し、思いなやんでいたのであろう。

卒業近くなったころ、N子は、ある機会で同級のA子という少女と親しくなった。

と、まもなく、A子はN子にモーションをかけてきた。N子にとっては、生まれてはじめて同志を得たわけだ。

さほど好きな相手ではなかったが、このひとならば、自分が今まで頭に思いついていたことが実験できると、N子は確信をもった。N子は、かけられたモーションに応じた。

ふたりは同性愛的なつきあいはじめた。

さいしょのほどは、ラブレターのやりとりか、手を握りあうくらいが、せいぜいであった。

ある夜、A子がN子の家へ遊びにきているとき、とつぜん「接吻をしない？」といって、部屋の電灯を消した。

が、N子はあいてをだけなかつた。

十二時近く、家へ帰るA子を送るべく、N子はいっしょに戸外に

でた。街は積雪で白くうずもれていた。

雪明りに、A子の顔がほの白く、N子のそばにあった。N子はふいとA子をだくと、そのくちびるにくちびるを重ねた。それは自然にやすやすとおこなわれた。

このことは、N子が案外にムード派であることを現わしている。みかけはいかにもドライを装ってはいるが、彼女のおおねには、しつとりとした「濡れ」がひそんでいると、私は観察している。

いや、彼女自身、それを知っているからこそ、前記したようなテレ屋のテレかくしで、ことさらにドライがった言動をする、といったほうが、正しいかもしれない。

そのドライがった言動は、極端に現われる。この場合も然りで、この二日後に、N子は、A子にたいて断交を宣言している。

断交の理由として、

「A子との接吻をキッカケに、異端の世界へズルズルとおちこむであらう自分を、おそれ、いとおし

むとともに、このことを母が知ったら、どんなに歎くだらうかと思つて……」

という意味のことを、彼女はいっている。たしかにそれは、真実の思いだったのであろう。

が、後にも記すが、その断交は、その後、彼女のほうから破っているのだ。

④ 憧れと現実と

中学を卒業して、十七歳のとき、「S」というアブ趣味の雑誌（というよりも会報のような、十ペーシ内外の仮綴じの小冊子）の読者になつていたが、まもなく、その雑誌にS趣味の記事をかいているK子という二十六歳の女性と、手紙で知りあうようになった。

半年ほど文通していたが、その翌年の厳冬、母親にはスキーに行くとの口実を設けて、K子に会うべく上京した。

K子と会い、「S」誌の編集者Hもまじえて、その夜三人はいっしょにすごした。

「あたしはSじゃあるけど、レスボスじゃないのよ。だからLは遊びでやるんだけど、いい？」

とK子はいった。愛などというものは、カケラほども窺われない、かわいた調子であつた。

N子は捨て身の構えで、夜の床に身をよこたえた。いまさら否の応のということは、自分のプライドが許さない。N子は目を半眼に閉じて、木偶となつた。

そのN子の身体に、K子はクンニリングスをおこなつた。

N子はレスボスの美に憧れていたのだ。レスボスの美とは、ふたつの同じ性の霊と肉とが渾然一体となつて、はげしく火花を散らすものでなければならぬ、と彼女は信じている。

が、K子の態度からは、霊的のものはおろか、いつわりの愛のかげすら、すこしも感じられなかつた。

N子の憧れは、みことなまでにうちひしがれた。



⑤ 十字架を背に

その年の六月のおわりころ、中学卒業後東京に出て働いていたA子が、帰郷して、電話交換手の実習を受けていることを、N子は知つた。

N子は、ある日、A子をおのが家に誘つて、前のこと——断交のことを詫びるとともに、いままでどおりつきあつてくれと、かきくだいた。

「そのときの私の心は、彼女を愛するからなのというのではなく、ただ女の肉体をだきたかつたのです」

とN子はいっている。

霊肉一致を理想とする彼女の考えとは、矛盾するようだが、これは彼女の極端なナルシシスから解釈できる。

N子は自分自身がかぎりなくいいとしい。愛する自分自身を幸福な境地におくために、相手からだけ愛のことばをもとめればいいのか。そして自分は、本心は相手を

愛していなくとも、いつわりの愛のことばを、相手の耳にささやく。

それでじゅうぶんに、その場の愛のムードは醸しだされ、自分はもちろん、相手をも幸福にするこ

とができる。というのがN子の考えなのではなからうか。

そして、このあたりが、彼女の心に、ドライとウェットとが同居している所以であろう。

N子のことばに、A子は首をタテにふった。

「いままでどおり、あなたを愛するわ」ともいった。「泊ってもいいわ」とさえいった。

すべて、N子の計画どおり、事が運んだ。

その夜、N子は、A子の紅唇と豊胸をほしきままにすることができた。が、シャイデは、どうしても許さなかった。

N子はその後も、A子と逢うごとに、あいての肉体をむさぼりもとめた。女体のすべてを知りたかったのだ。

このころから、N子は、いまま

で漠然としていたレスボスというものが、身体でわかるようになってた。そして、自分が完全にウールニギンであることを、はっきりと自覚するとともに、その十字架を背負って生きようと心をきめた。

神がくれたウールニギンという現実を、細い体にうけとめて、そのままに満達に生きるためには、こんないなかにはダメだと思

った。

東京へ出よう——N子は極秘に家出を計画した。A子をみちずれ

にすることにした。生活手段のためである。

東京行きを決心すると、N子は、いまま

で腰のへんまでのばして、長い髪を切って、ボーイッシュ・バブとした。自分がレスボスにおける男性型Vであることを自覚したので、外貌にもそれを徹底

させたかったからだ。

細心の計画のもとに、N子は、ある日、A子とせしめしあわして家出した。が、駅にくるとまもなく、追ってきた家人につかまってしまった。A子のほうからもれたのだ。

N子がA子を誘ったということ

で、N子の母親は、A子の両親のところへ詫びに行った。愛する母へのすまなさで、N子は一晩じゅう泣きあかした。

⑥Lの同志たち

家出と心をきめるとすぐ、N子は、勤めていた市内の会社を、母親にないしよでやめてしまっ

た。

N子はふたたび職に就こうとせず、毎日ひまをもてあまして、ずるずると怠惰の生活をすごした。

望みをかけていた東京行きが、ペシャンコに壊れたことの、反動の無力であらう。わざとのように、無力感のなかに身を没した。



じ店の若い女給を「妻」にして、同棲しているということだった。

この「同志」Hと、N子は大いに意気投合して、友達として交際するようになった。

去年の夏、Hが上京したとき、N子はHを同道して、私を訪ねてきたことがある。

最初、私は、Hを男とばかり思っていた。

七三に分けた刈りあげの頭髮。色こそ白く、ひげのない顔だが、ギョロリとした眼の光り。広い肩幅。扁平な胸。メンズ・ウェアのシャツ。男物のズボン。男物の腕時計。男物のくつ、等々……。

どこをどうみても、十八、九歳の少年としかみえないのは、私の鈍感のせいばかりではないようだった。

話をきいて、はじめて女とわかり、このひとがクリトリスやシャイデを具えていることが、ふしぎに思えたくらいである。

ウールニギンというよりも、むしろ、ギナンドリー（男化）か、

理解者であり、やはりレスボスの同志でもある自分と同年のC子と

会って、この道のことなどを話しあっていたが、ふと、あいてのグラマーな肉体に衝動を覚えるままに、モーションをかけた。

C子はすぐに応じた。

そのときはワン・ステップのつもりのN子だったが、C子から自分を好きだといわせたい願いが途中から起こり、二度三度とデイトを重ねた。そしてついに、C子の口から「愛している」といわせた。

前にもいったように、ナルシシ

スの現われた。

A子は女ごろこの敏感さで、N子のうわきを感じとったらしく、逢うたびに、N子にさぐりをいれてくる。

N子としては、A子とC子のふたりともひきつけながら、適当につきあうつもりだったが、あまりにうるさく問いつめてくるA子にうるさくなつて、ある夜、酔ったまぎれに、

「もうあんたとは別れよう」

とどなりつけ、交わりを絶った。

A子と絶交してすぐ、N子はバーテン見習いとなった。水商売の雰囲気の中に生育した彼女にとって、こんな職業がすきなのだ。まもなく、N子は、自分の勤めている店の近くの酒場の女バーテンが、同性愛者らしいことを小耳にはさんだ。

さっそく会って話してみると、はたして「同志」であった。N子より五歳年長で、真正の男性とみ

まचाがうようすをしていた。おな

デッフェミナチオ(女性脱化)に属すると、私はみた。

おもしろいことに、単独またはR子といっしょのときは、活潑で男性的にみえていたN子が、Hと並ぶと、ひどく女っぽい。女っぽくしかみえないのだ。

私はおかしくなつて、おもわず笑いだしてしまい、N子から、めっ！とニラまれたのを覚えてゐる。

話がそれだが、N子は、その後C子とはいくたびか歓をまじえていた。C子はそのころ、男との乱交をはじめていたが、N子は、男を知ったC子に、セックスの無遠慮な質問をして、女体についての自分の知らなかった知識を得た。

そのC子とも、やがて別れた。

A子からは、近く結婚するといってきた。

C子もA子も、結局は男性のも

⑦その愛の技術

N子とR子との愛の同棲生活は

あしかけ三年ごしの現在までつづいている。

このことは、R子がそれだけ大人に成長したせいとも思われるし、たがいに努力しているのかもしれない。いずれにしても、これだけ長くつづけば、結婚と同意義とみてよからう。

愛撫の形態や方法は、A子やC子との場合とはちがってきたと、N子は報告してきている。

その一つは、能動・受動のポジションが、劃然と区別されなくなったというのだ。つまり、そのときしだいで、N子がいままでとは逆のパッシブに位置することもあるし、R子がアクティブの立場をとることもある。

また、両者が相互的なこともある。そしてその場合は、アクメを同時にさせることに努力しているらしい。

が、両者の同性愛のタイプや嗜好の上から、N子が能動、R子が受動となることのほうが多いようだが、これはむりもあるまい。

その二つは、器具を使用していることだ。

器具とはもちろん、「俗陽」であろが、男性器にたいして極端に嫌悪感をいだいているN子は、そのような名称は承知すまい。

これを使用するようになった動機は、クリトリス感覚よりも、シヤイデの感覚やボルチオ感覚のほうがすぐれていることを、両者が知ったためらしい。

このことは、R子もN子も、それぞれの肉体が、じゅうぶんに成熟してきたことの証左といつてよいだろう。

そしてそれだけに、その愛撫技術にも、いろいろと工夫をめぐらすのであろう。

が、N子は、レスボス関係において、セックスの愛撫が第一義的のものとは、もちろん思っていない。むしろ、第二義第三義のものと、現在では考えているようだ。

彼女は、私によせた最近の手紙のなかで、次ぎのようにいつている。

『レスボスの関係において、いちばん大切なものは、セックスの行為などではなく、愛情であると思

います。たがいに愛しあい、いたわりあう愛のころ、それです。

こんなことは、いまさらいうまでもないことですが、このころつくづくそう感じるようになりまし

た。たとえば、ふたりのセックスが、スムーズに融合しないとしても、

たがいに愛のころがあれば、レスボスの関係はいつまでもつづくでしょう。

レスビアンは愛の貪食家です。愛をもとめ、愛をむさぼり食います。

レスビアンは愛のボヘミアンです。愛にさまよい、愛に生き、愛に死んでいきます。

レスビアンにとって、愛こそがすべてといつてもいいのです。』



① 夕立ち

すさまじい夕立ちだった。

ひたち川の水面に、銀色の針が無数に突きささり、白いはげしいしぶきをあげている。

——おや？

みかえり銀次の足が、雨のなかに、ふいととまった。女の悲鳴がきこえたのだ。

銀次は雨しぶきの視界を、ぐるりと見わたした。だが、変わった風景は、どこにもない。

——空耳か？

と、女のように白い素足を、ふたたび一步前に踏みだした。

このとき、銀次の耳へ、こんどははっきり、女の悲鳴がとどいた。

雨しぶきのなかで方角をたしかめると、土堤をおりきつたところにある大銀杏のかげに、えんま堂がある。

悲鳴は、その古びた堂のなかからひびいたのだ。

——旅の女を雲助どもが捕え、えんま堂へひきずりこんで手ごめ的一幕、とくれば話はおあつらえむきだが。

銀次の赤いくちびるが、にやりとした。

ところが——

えんま堂のなかでは、その、おあつらえ通りの、あられもない光景が展開していた。

日光街道栗橋宿の街道はずれ、ひたち川の渡し場にたむろする雲助人足どもが、この雨に立ち往生した旅の女の美しさに、いやしい炎を燃やしていたのだ。

外は土砂ぶりの雨。堂のなかは暗かった。

② えんま堂

銀次は堂縁にかけのぼり、きつね格子を左右にひらいた。青白く稲妻が光り、これまたおあつらえむきに、堂のなかを、ななめに照らした。

「やッ、なんだ、うぬは！」

雲助どもがわめく。

「ひとの難儀をみすごしにできねえタチの、みかえり銀次という、いい男だ」

銀次の横顔を、また雷光が照らした。

堂内のすみに、荒縄でうしろ手に縛りあげられた女がひとり。そして、そのそばに、恐怖に身をすくませている五歳ほどの女の子がいた。

危難にあっているのは、どうやら旅の母娘らしい。

いなかの豪農か、名主の女房といった身なりである。

「あッおたすけ、おたすけを！」

銀次をみると、身をよじって女がさげんだ。

「でえじようぶだ。もう安心だよ」

「なにぬかす。野郎、やっちまえ！」

三人の雲助が、三方からなぐりかかった。

その下に軽く身をくぐらせた銀次の手から、稲光りよりも青白い、あいくちが光った。

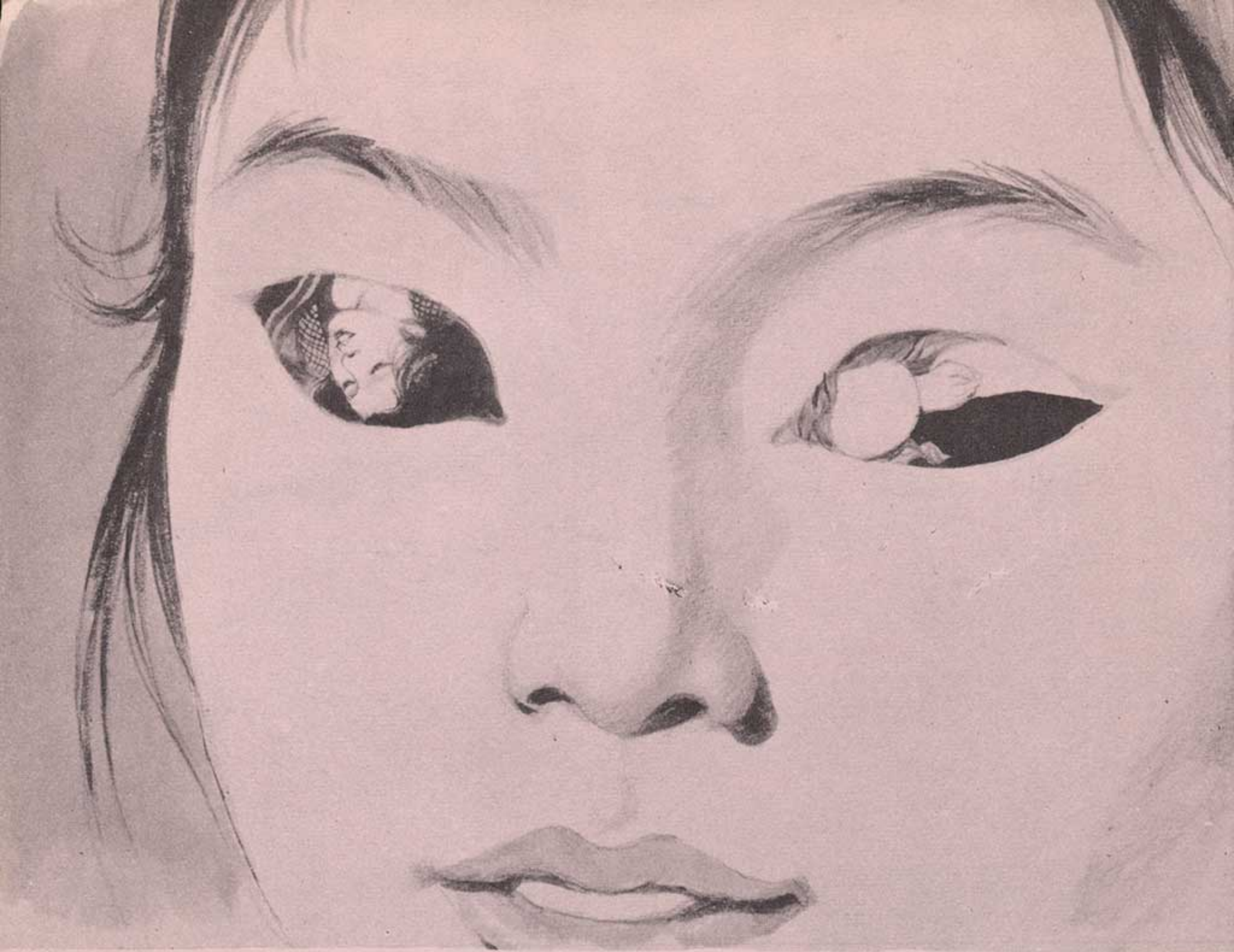
「わあッ！」

雲助どもが悲鳴をあげた。三人の向こうずねが、いちどきに斬りはられ、血しぶきがとんだ。

いかにも、けんか馴れた銀次の身のこなしだった。

雲助の足からとび散った血が、ちいさな娘の顔にはねた。娘は、無心な表情で舌をだし、その血をなめた。





③ 旅の仇夢

その夜――

銀次は、あやういところをうまく助けた旅の母娘とともに、宿屋の一室にいた。

「いいよ、いいよ。そんなになんども札をいわなくたって。でも、まったくお前さんたち、あぶなかったなあ。運よくあつしが通りかかったからいいようなもの、もしあのままコトが運んじまったら、いまごろどうなっていたか、わかったもんじゃねえぜ」

膳の上に銚子がならび、銀次はいい気げだった。

女の名は、しの、と自分で名のつた。蟬人形のように肌の色が白く、不気味なほどの美しさであった。

「娘は、絹と申し、当年とって六歳になります」

と、おしのはいった。自分と娘の名は教えたが、自分が、どのだれその女房であるとは、いわなかった。

銀次がそれをきくと、巧みにはぐらかした。銀次の風態、ことばつきも、ひと目で遊び人と知れる。

おしのは、警戒したのかも知れなかった。

銀次は、おしのに酌をさせて、なおも酒をのんだ。

「おい、おれは、お前の、いのちの恩人だっけなあ」

銀次の右手が、おしのの肩へまわり、左手は胸乳へへびた。

多少の抵抗は予期していたのに、あっけなく、おしのは銀次のひざにくずれた。

ついさつき、えんま堂で、顔にはねた雲助の血をなめたお絹が、母親と男のもつれあうすがたを、しずかにみつめていた。りこうそうな、大きな目であった。

④ ねばり肌

みかえり銀次は、小悪党だった。江戸でたくさんの人をだまして金をうばい、役人の手がまわったので旅へ出たのだ。

色が白く眉が濃く、鼻すじがすっきりとおって、口もとに愛嬌がある。粹でいなせな遊び人風態は、江戸の娘ッ子どもが、ふりかえって眺めるほどであった。

当人もそれを承知し、自分で「みかえり」などといういい気な肩書きをつけている。

栗橋宿の旅籠の一夜が明けた。

——いい女だ。

銀次は舌を巻いた。顔やすがたの美しさもさることながら、肌の感触がたまらなかった。

はじめは、じつとりとしめりけをおびている肌が、しだいに燃えて熱く乾き、燃えさかるとともに、ふたたび汗にしめって、こんどは、ねばりつくような吸引力をみせるのだ。

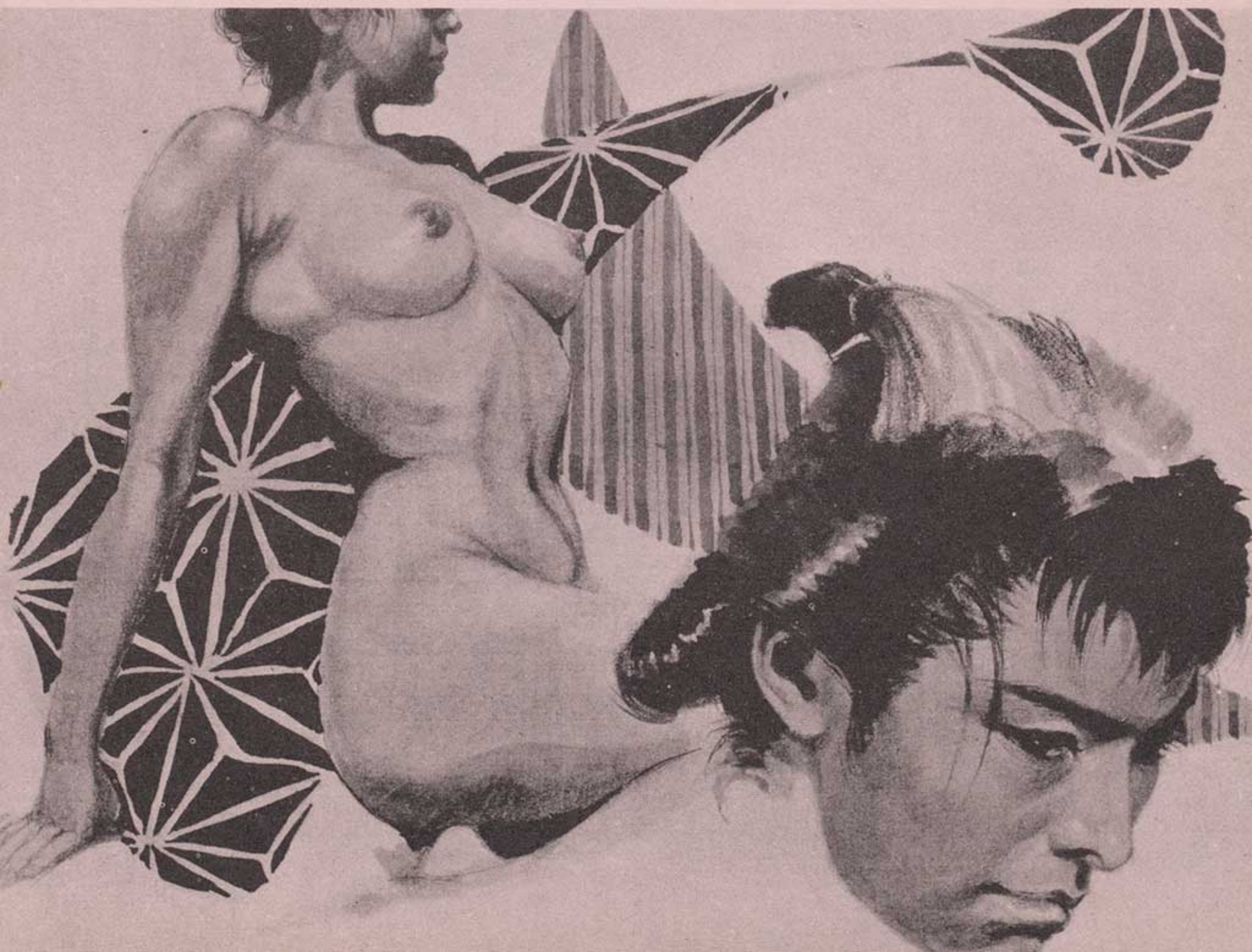
——役人に追われている旅でなけりや、なんとかもう二、三度は抱きてえもんだが……。

色事師でもある銀次は、そんな未練を抱いた。だが、そんな悠長な旅ではない。同じ宿場に遊ぶほど金の余裕もない。そうだと銀次は思いついた。

——この女を、娘ごと、間々田あたりの女郎屋へ売りとばし、それで路用の金をつくらう。

この思いつきを、たちまち実行に移した。

上玉である。娘のお絹にしたところで、あと六、七年もたてば、客の前にだせる。三十両に売れた。





⑤ 夜の悲鳴

それから、十年たった。

日光街道、間々田の宿へ、ひょっこりと銀次があらわれた。

いなせな風貌に、追われつづける男の陰影と年相応の渋み加わり、しかし、相変わらずのみかえり銀次だ。

悪事はまだやめていない。江戸を追われても身軽に諸国を逃げまわり、ほとぼりのさめたころ、また江戸に舞いもどって、小ゆすり、かたり、つつもたせ、と小さな悪事をこまめに働くのである。

そしてまた、身辺の危険を敏感に嗅ぎとると、御用と踏んごまれる前に、江戸をずらかる。

こんどの旅もそうだった。ただし、ずらかりぎわに、千住の賭場でひと晩あそんだのが、とてつもなくついてふところには百五十両ばかりの金が、ずっしりと重く、さながら大名気分だった。

間々田宿の、笹乃屋という安女郎屋の二階に泊まりこんだその夜、銀次は厠へ立った帰りの廊下で、ふと、女の悲鳴をきいた。

——ふん、お定まりの折檻部屋だな。

好奇心がわき、悲鳴のもれる部屋をのぞいた。

思ったとおり、お定まりの図が、妖しい極彩色でゆらめいていた。

ふとい縄でうしろ手に縛りあげられた若い女が、暗い天井から吊りさげられ、割れ竹のむちで叩かれていた。

責めているのは、この店の主人らしい。

さすがの銀次の目にも、妖しく強烈な光景だった。

⑥身請け

主人の手のむちが、また音をたてる。

ひえーッと、女の下半身がけいれんし、白い足が緋色の裾をはねてさらけだす。銀次は、ごくりと息をのむ。

「このあま、まだ小娘のくせに仮病を使って不貞寝するとは、まったくふてえ女郎だ。こうしてくれるわ！」

主人はわめき、女の腰をまた激しく打ちする。

「待ちねえ、おい、ご主人、まア待ちねえよ」

板戸をあけて、銀次は部屋のなかへ入りこんだ。

縛られている女の顔を見て、銀次はいきなり、ぶるつとふるえた。いい女なのだ。

乱れ垂れさがった髪を、赤いくちびるで、きりつと噛みしめ、うらみのこもる目で耐えているその凄艶さ。

——江戸にだって、こんな女はいねえ！

銀次は、たちまち決心した。

「おい、ご主人、この女はおれが買った。いいや、身請けする。今夜、この場で身請けする。売ってくれ！」

さけびながら銀次は自分の部屋へかけあがり、胴巻きをつかむと、また折檻部屋へもどってきた。

「これだけだせば、文句はあるめえ」

百両の金を、主人の鼻のさきに突きだした。

「江戸のお方は気が早いというが、まったくだ」

主人はあきれ顔で、しかしこの取り引きはすぐにまとまった。

銀次は、吊られている女の顔を見あげた。目と口を半びらきにして、無言である。すごいような肌の白さだ。

もう、自分のものだ、と思うと、つい手がのびた。





⑦ 血のにおい

一年後、銀次はまた江戸へ舞いもどった。

間々田宿の安女郎屋で買った女、お絹も一緒だった。

銀次はもう、お絹から離れられない。

いや、お絹のぬめ肌から離れられなくなっていた。

じつとりとしめりけをおびたお絹の肌は、夜のたびに
はげしく燃えて乾き、燃えさかるとともに、ふたたび汗
にしめって、こんどは、ねばりつくような吸引力をみせ
るのだ。

——これと同じ肌を、どこかで抱いたことがある。

銀次はいつもそう思うのだが、それ以上のことは思っ
だせない。銀次にとって、女の数が多いのだ。

両国の回向院裏に、まるで新世帯のような家をもって
銀次とお絹は悦楽の日々をむさぼっていた。

そのうちに、貯えがなくなってきた。お絹はわがまま
で、非常なぜいたくを欲するのだ。

しかたなく銀次は荒かせぎに出た。小さな悪事では、
小さな金しか得られない。

お絹の心を満足させるために、銀次は押し込み強盗を
働き、人を傷つけ、あやめるまでになった。

銀次が、はじめて人を殺して金をうばった夜、夜具の
なかで彼のかえりを待っていたお絹が、むっくりと身を
起こした。

「おや、血のにおいがする。どれ、お前さんの、あいく
ちを見せてごらん」

お絹は、おそろしいほどの力で、銀次の懐中から、あ
いくちを奪った。そして、刃を行燈に照らした。



⑧ 魔性肌

——あッ！ 銀次は戦慄した。

あいくちについた血糊を、お絹は舌をだして、ぺろりとなめたのだ。ぺろぺろ、ぺろぺろと、猫が油をなめるようになめた。

「思いだした！」

十年前の、あの夕立ちのえんま堂を——。

「そうだよ。十年前、お前は栗橋の宿屋で、あたしの、おっかさんを犯したね。あたしの見ている前で。その上おっかさんとあたしを売り飛ばした。おっかさんは、あれから、まもなく死んだよ……」

くちびるについた血を、お絹は舌のさきでなめた。

「そ、そ、それでお前は……」

「かんちがいしなくてもいい。あたしはなににも、かたきを討とうなんて思ってやしない。ただこうして、毎日をおもしろおかしく、ぜいたくさせてくれればいい。安心おしよ。逃げなくてもいい。あたしの肌を知ったからには、どうせ逃げられやしないけどね」

お絹は、のどをころがしてわらった。

そのとおりだ、と銀次は思った。この女の、ぬめ肌の魅力からは、もうとても逃げられない。そのための負担が、どんなに重く苦しいものであっても逃げられない。

いままで女をもてあそび、多くの女を不幸にしてきた罰だ！

銀次は胸のなかで、絶望的なうめきをあげた。
地獄だ、底のない、ぬめ肌地獄だ！

砂の上の船

モデル……エダ・キリコ

カメラ……吉 田 久



こころをひとに　さらせども
げにもとなげく　ひとぞなき

からだを海に　さらせども
目ひとつとむる　ひともしなき

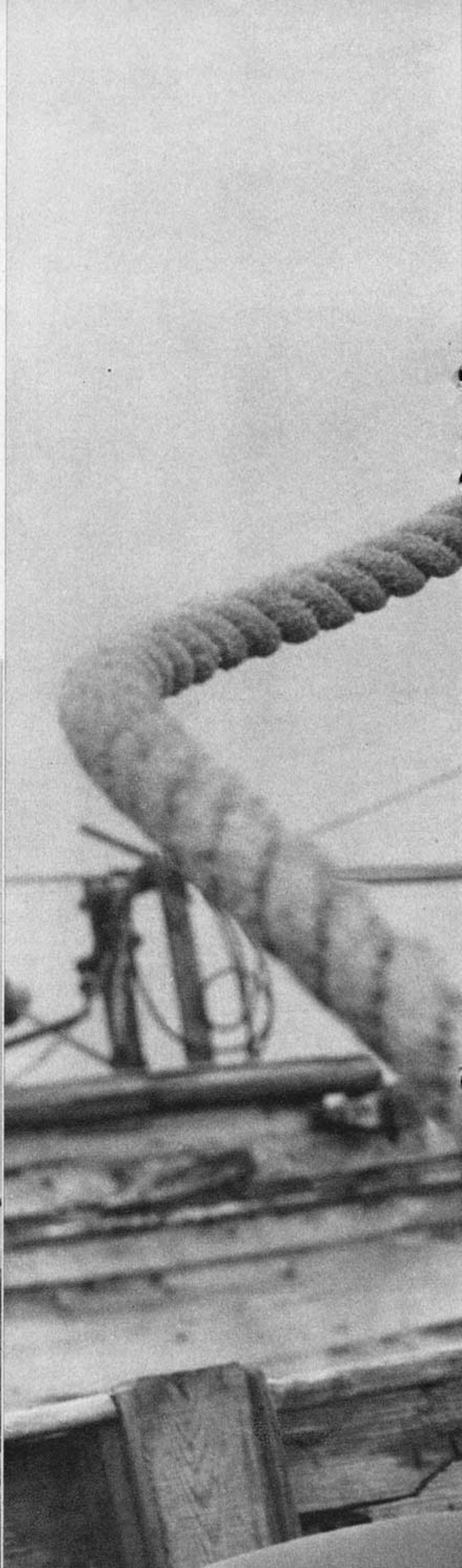
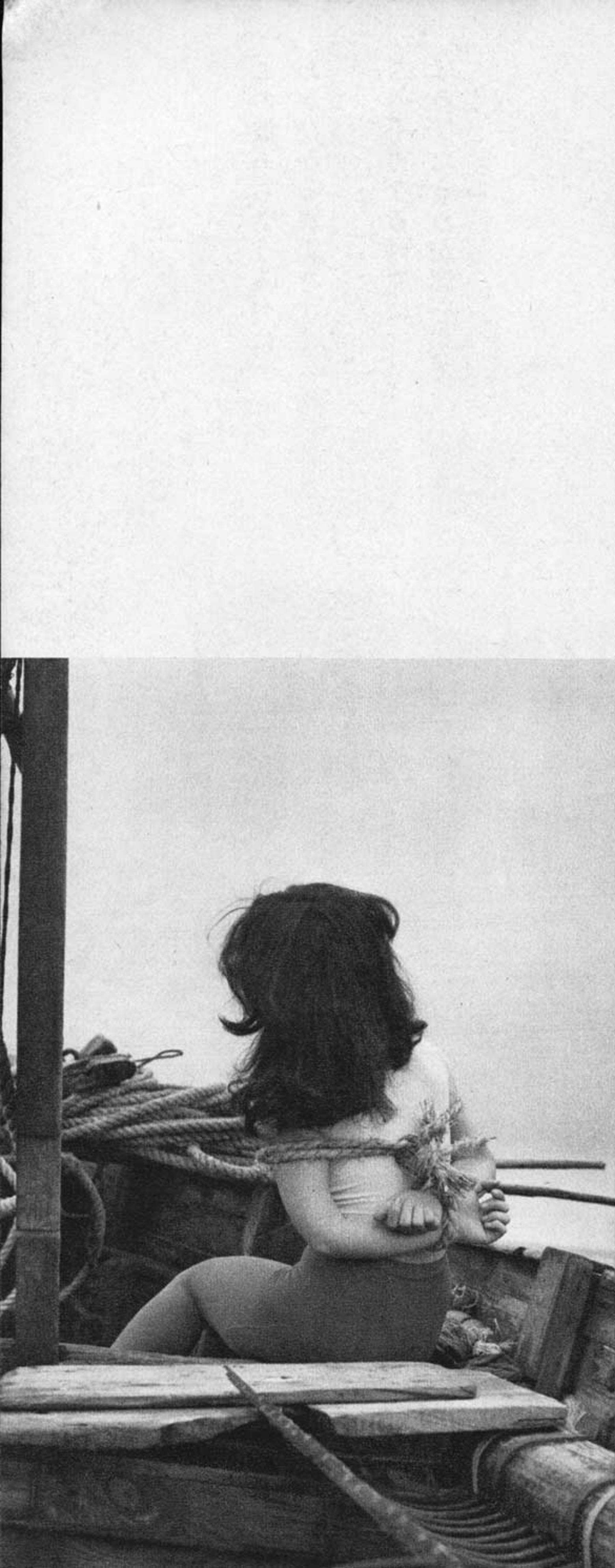
こころのいたで　血をふけど
あなやといたわる　ひとぞなき

はだにふくのは　風ばかり
潮にしめりし　風ばかり









この波あらしきうみべに
わがひかる真実をすて

この不実なる砂原に
ほろびたるわが恋をすて







泣かまほしさに われひとり
砂に埋もれし 船のうえ

海のかなたへオレンジ色で
しずむ夕陽の つれなさよ

泣かまほしさに われひとり
だあれもない 船のうえ

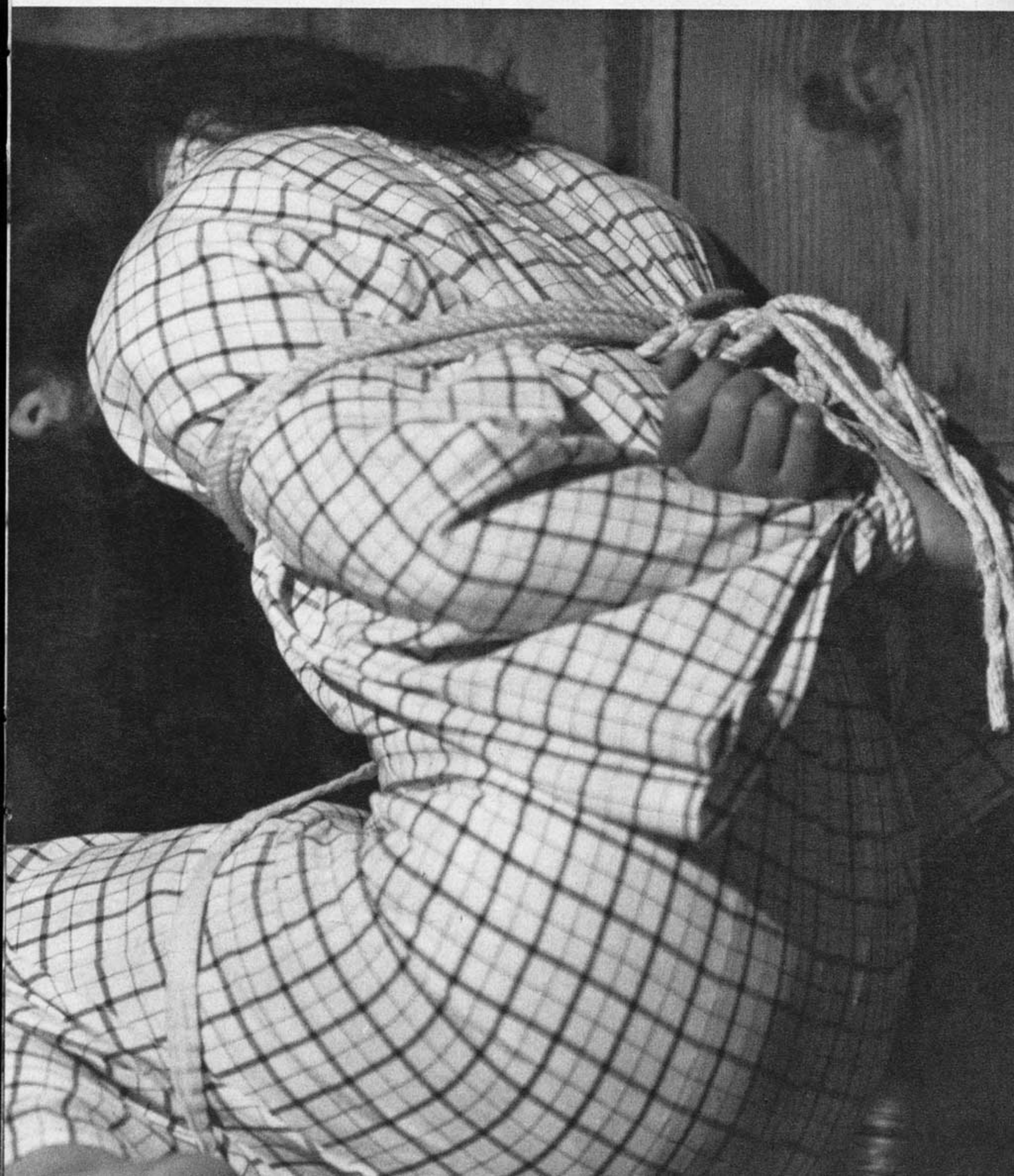




漁師宿にて

モデル……エダ・キリコ

カメラ……吉 田 久





したたるものは月しずく
しずかにたまる眼のなみだ

おんなであれば堪えがたし
しんじつひとりは堪えがたし

すたれし浜の漁師宿
屋根よりもるる月あかり





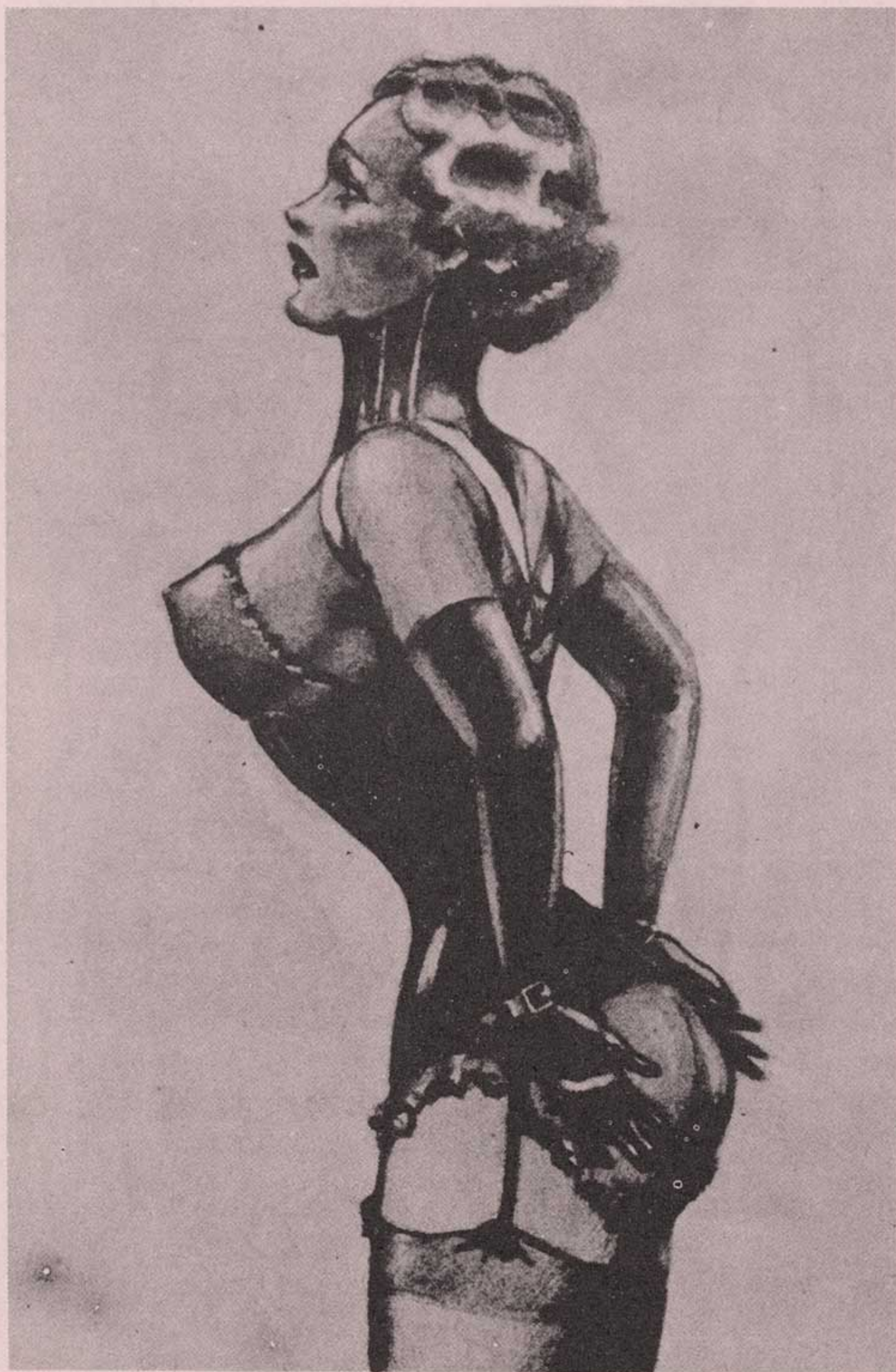
うつつより　はかなしうつつ
ゆめよりも　くるしきゆめ

ひと恋うて　旅にいで
まよいてとまる漁師宿

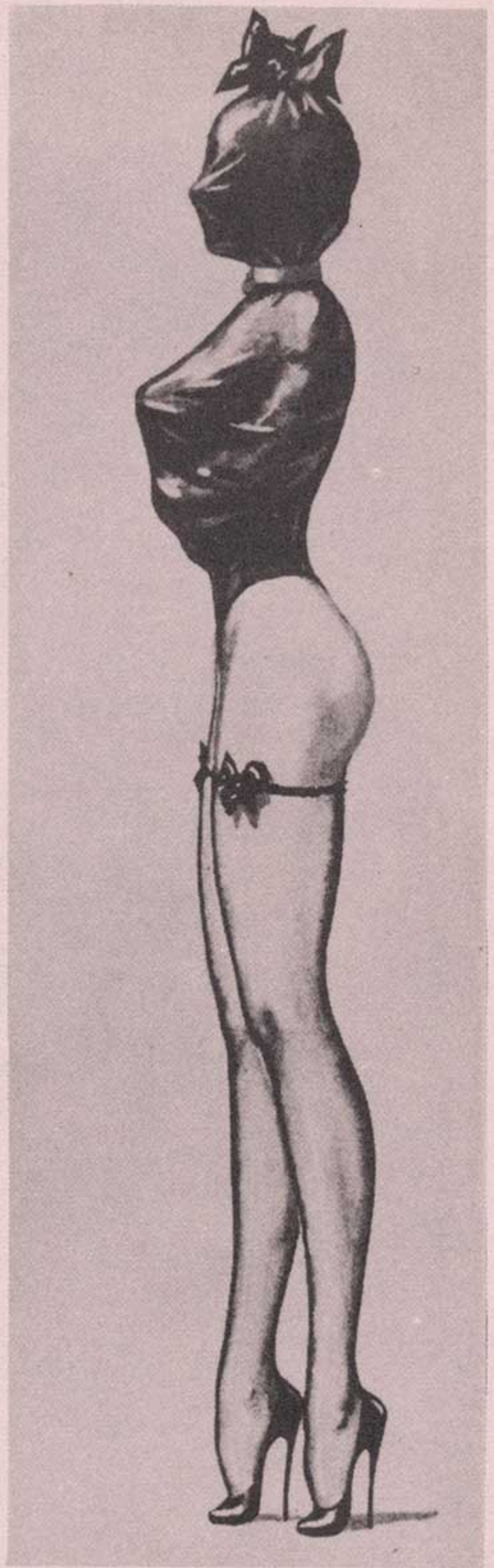
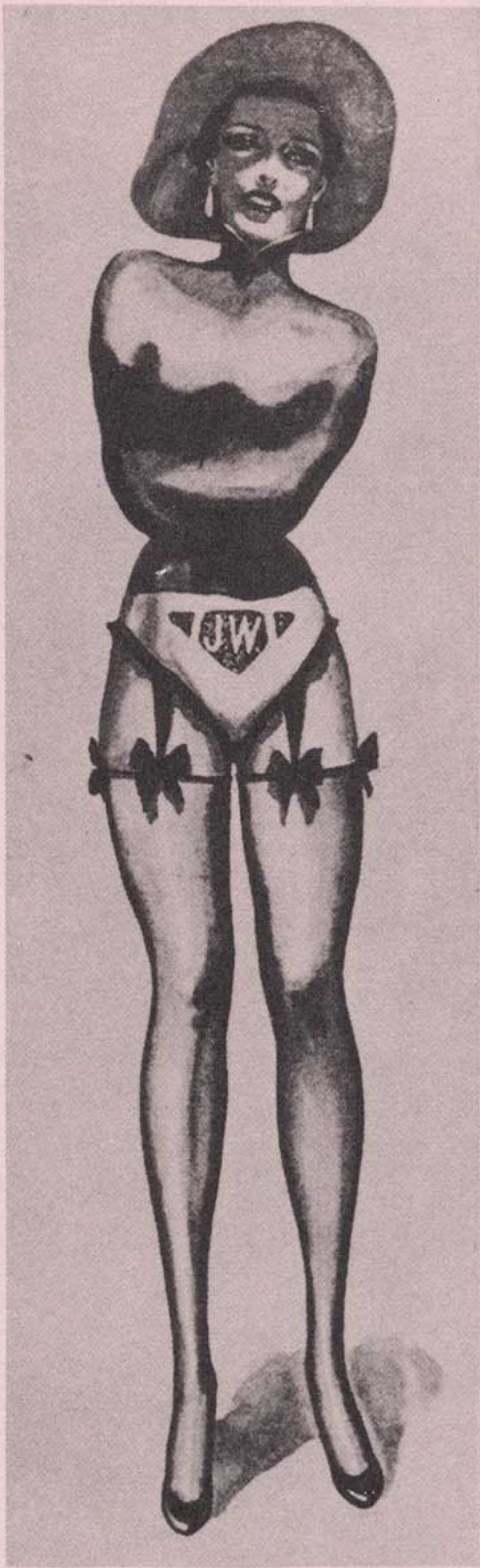
夏の夜のわがひとり
せつなきうみべの漁師宿

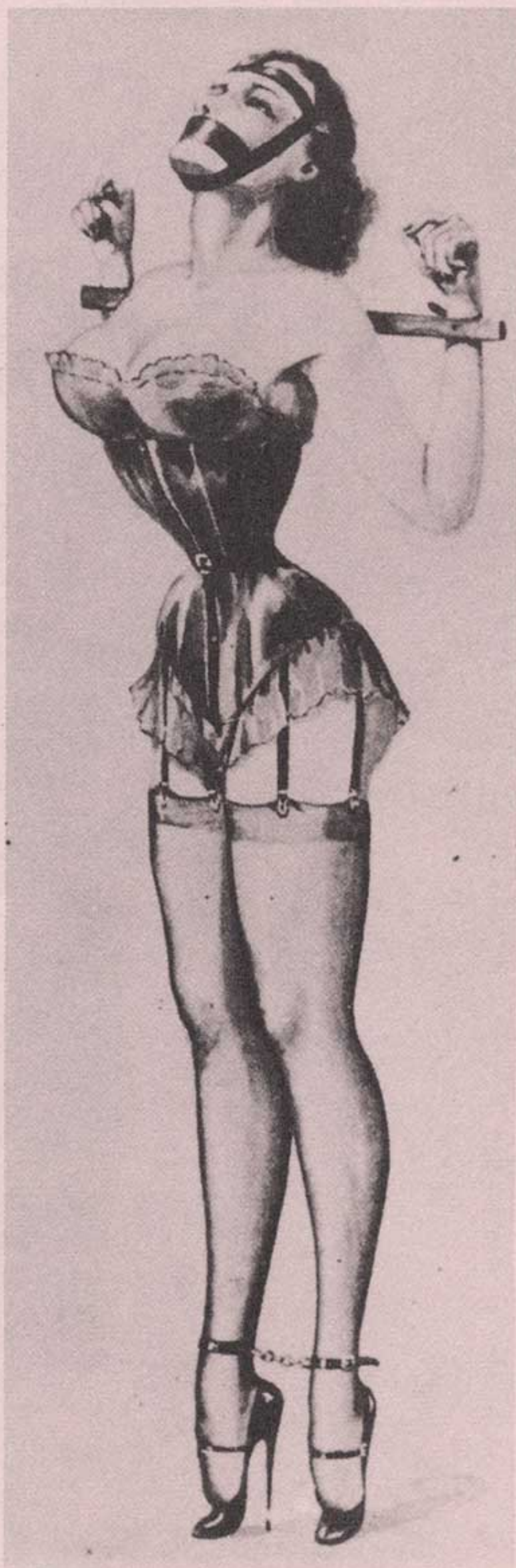
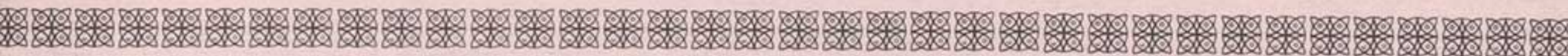


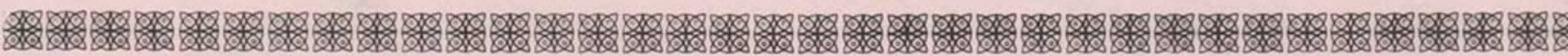
海外 S M 画傑作展



フェニクス商会・特約



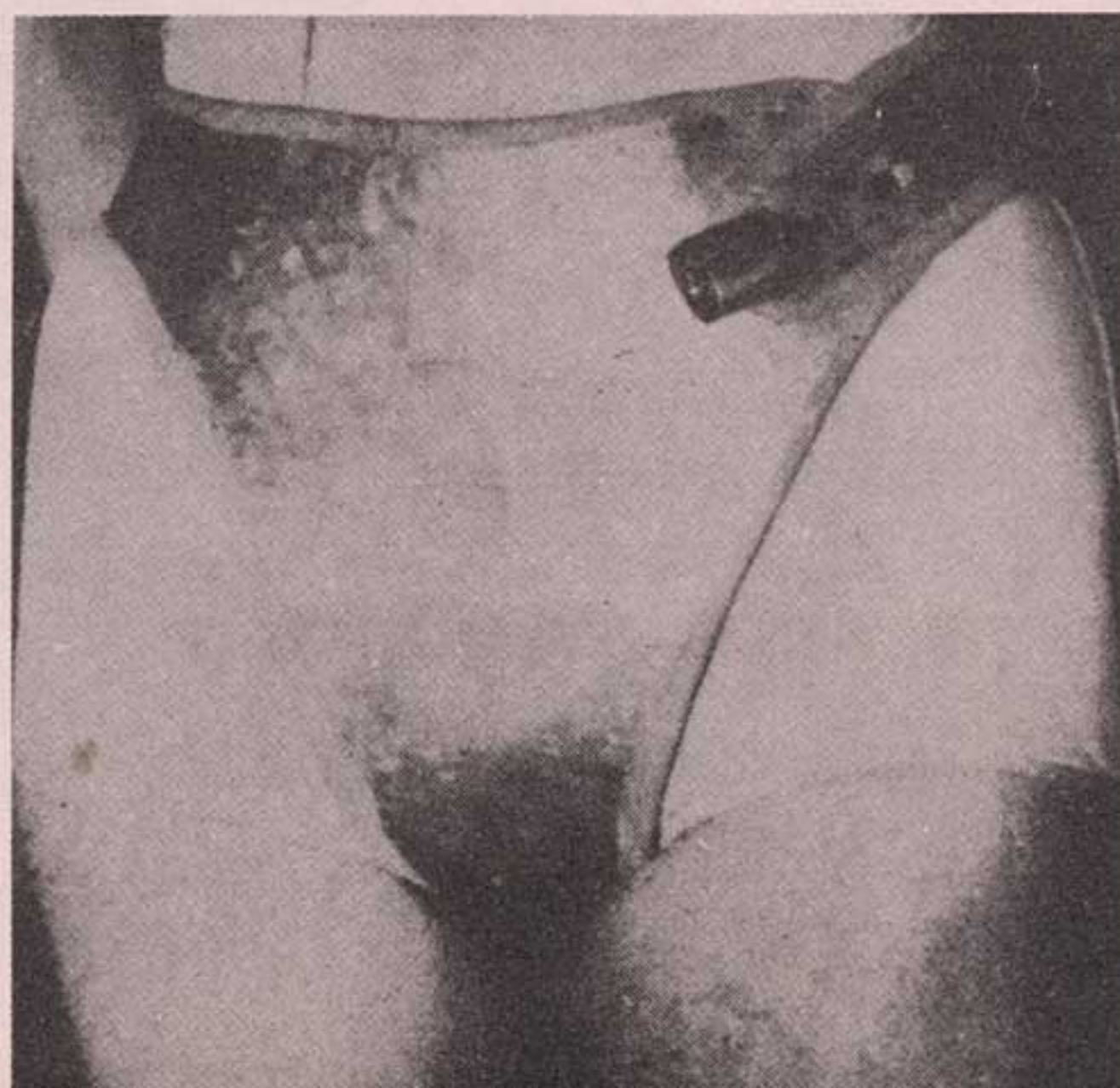


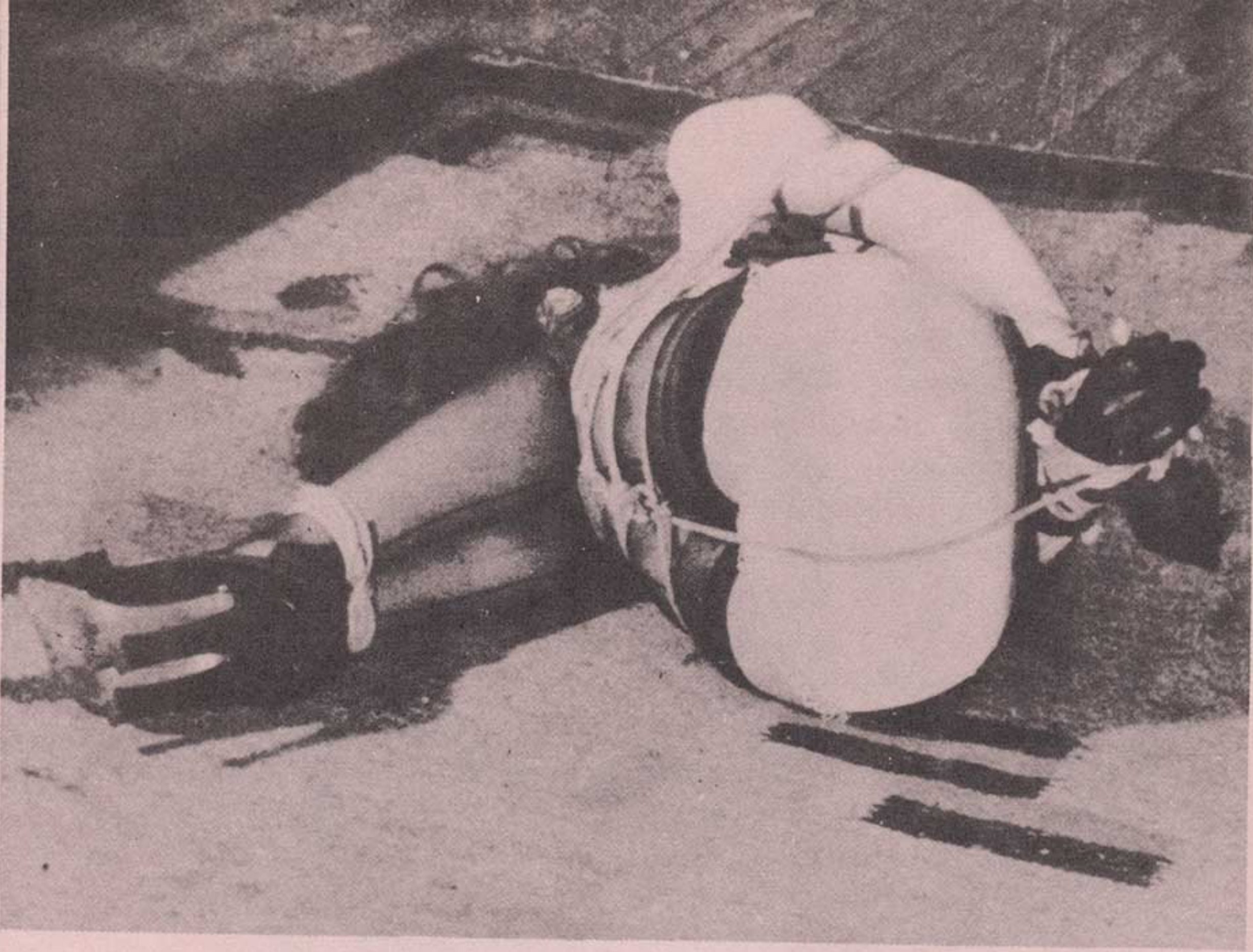


海外S M フォト傑作展



フェニクス商会・特約



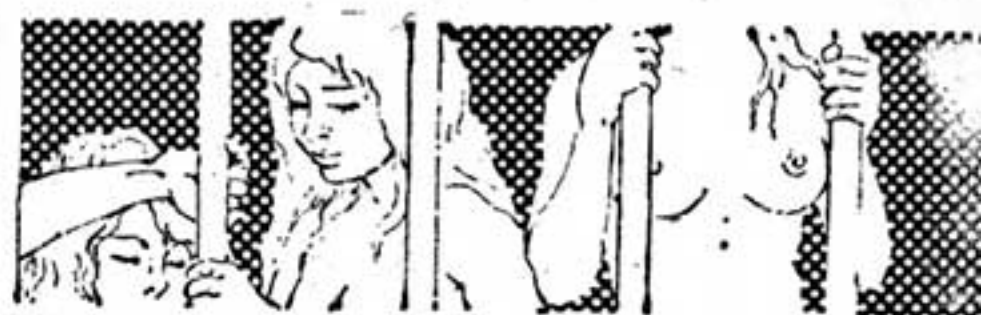








裏窓タウン



武智演出の映画

「女・女・女物語」

もんだいのサド写真撮影シーンは、比較的早目に登場する。

うす汚ない和室に、三人の女が現われ、これがみんな縛られモデル。男のカメラマンに縛りあげられ、写真に撮られるという、なんのドラマもない、そのものズバリのS趣味シーン。

女の二の腕に縄がぎりぎりくいまむところが、アップになる。大型画面で色彩がついているので、かなり強烈である。

三人のモデルのうち、和装の下着をはだけたポーズもあり。そのどぎつい色調は、和装縛りマニアには、大いによろこばれる演出となっている。

すくなくとも、ウソが目立たないのである。緊縛された背面の両腕も、しっかりうつす。ただし、縄のかけ方がシロウトっぽく、いささかお粗末だが。

さらに、モデル女性たちに、美

的情緒がとぼしかったことも残念のひとつ。

しかしながら、マニア諸氏にとっては、まず、ごらんになって、失望のない映画であろう。

そして、つくづく思ったことは「裏窓」の写真撮影現場を、なんとかして、愛読者諸氏にお見せできないものだろうか、ということである。

おそらく、この「女・女・女物語」にあらわれたSシーンの、数倍の充実感を、わが親愛なる愛読者諸氏にあたえるであろうから、である。

それはさておき、この映画にはSM的感興をもよおすシーンが、ほかに数度登場する。

乳房の小さな女性のそれに、ふとい注射針をさしこむ整形手術の場面なんか、異様な迫力がある。

うすいとはいえ、あきらかに女性の隆起をもつ乳房の、ふもとへんよりやや上の部分へ、ぶつりつと針を突き立て、ずぶずぶッと押しこむ感じ。

すでに麻酔の注射をうたれていて、当人はもうなんの感覚もないのだろうが、なにしろお芝居ではないのだから、見ているほうはとても痛そうで、ゾクゾクする。

ナントカという薬物を注射したそのあとの乳房を、二人がかりでぎゅうぎゅう揉むところなんぞも見ようによっては、たいへんな乳房責め。

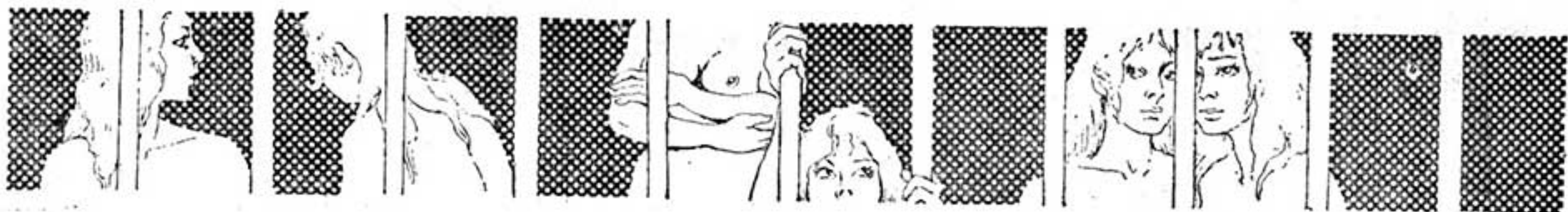
それから、イレズミされる女の姿態にも、アブ的迫力が感じられた。

刺青師(もちろん男)が女の背中へのしかかるようにして、チクチク針を突き刺すのだが、これもやはり、ずいぶん痛そうである。

しかし、彫られる女性はかなり美人であつたし、できあがったイレズミの、あまりにも鮮明な美しさは、どうもドキュメンタリーにしては、できすぎていた。

ほかに、若い女たちの、アパルト遊びというのが、数種紹介される。

縄を使って首をしめ合ったり、



へんなところを縛りあったり、こんな遊びを実際にやっているのかどうか知らないけど（おそらくウソだろうとは思うけど）このシーンなど、あきらかにアブ的興味を観客に押し売りしている感じであった。

色調のどぎつさも関係して、全体に不潔感のただよう、そして、それなりにおもしろいといえはたしかにおもしろい、ケツサクな映画であった。

（豊）

武智鉄二氏の

サディズム

さて、その「女・女・女物語」を演出した武智鉄二氏について、「週刊新潮」六月三日号が「武智鉄二演出という暴露趣味」という五ページの特集をやっている。

中に、まことに「裏窓」的な文章が登場するので、ご紹介してみよう。

（前略）

「日本ではああいう映画は珍しいと思って、はじめは取り上げるつ

もりでいたんですけど、見てみると『世界女族物語』の亜流も亜流お客にコビるばかりで、あんまりひどいんでやめたんです。武智さん演出というから少しは新しいものがあるかと思ったけど、ちょっと見せたのは最初のヌード能のシーンだけで、あとは完全に小林悟さん（注）当映画の演出補。元新東宝）の映画じゃないですか」（キネマ旬報編集部談）というのが大体の評価だったのだ。

しかし、演出者のご当人はいかにも自信たっぷり。むしろ、より以上に露悪的な「浣腸遊び」（そんなものがあるのかどうか知りませんが）が撮れなかったことを、しきりに残念がるのである。

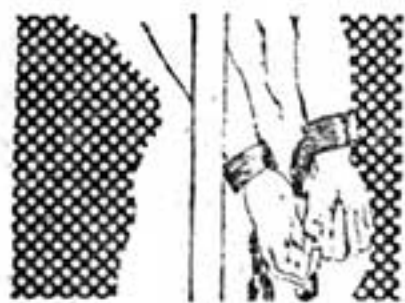
「まあ、あちら（製作者の佐野博重氏のこと）の、最初の考えは夜の観光映画を作りたかったんですね。しかし私がやるとなると、観光映画は作れないんでねえ……。

全体の意図は日本の女性の疎外の問題を扱うということです。そのテーマに従って「浣腸遊び」とい

うのはショッキングな場面としていいんじゃないかと思ったんですがねえ。ほくはそれを入れたかったんです。今の若い人は、演劇的な要素でカタルシスがあるんじゃないくて「浣腸遊び」のようなところでカタルシスがありはしないかと思ったんです。

ところが映画人というのは、浣腸というとすぐ排泄物を考える。なんていうか、非常に現実的というか、非常に自然主義的なんですねえ。

いろいろ前衛演劇なんかやっている、たとえば浣腸のイメージがほくにあると、それを実現するのは説明しないで可能だけど、映画を製作するとなるとそれを説明することがうまくできないし、図柄やイメージが通じないんです。映画人はどうも自然主義リアリズムなんで、演劇にはそれがなく、そこがぐい違ってくるんです。つまり映画人は、浣腸というウソコそのものというふうに感じるらしいんですよ。ほくには帝王切



裏窓タウン



開に対して浣腸の黄色という感じが、ひよっとあったんです。しかし、それができなくて残念だったです」

演出補の小林悟氏は、その「浣腸遊び」に抵抗した一人だった。「あのへんはほくらとどうも次元が違いますね。つまり、われわれの感ずるエロと少し違うんです。

女が浣腸をし合ってガマンする表情、ガマンし切れずに汚物を出してしまう表情に快感を感じる、とおっしゃるんですけど、そういう意味で最初は抵抗を感じましたね。

でも、それはいろんな面から考えてみても不可能なんですよ。だいたい固執してたけどまあそれで、一たんはプランを立てたんです。ただ、問題はそれをやってくれるタレントがいらないんですよ。それで、逃げながらとらえて、という方法を考えたんですけど、ほく自身が美的に持っていけなかったところもありますけど、やっぱり映倫なんかでどうしても問題になり

ましようしねえ。

あの映画はドキュメントといっても、やっぱり、かなり演出はしました。「アパート遊び」なんかはセミヌードのタレントを使ったりしたし、ジャズを聞いているフアンキー族なんかはあらかじめ断わってはおいたけど、連中は睡眠薬を本当に飲んでいて、それは画面に出ていたと思うんですよ。断髪する尼さんもタレントです。あれは確か松竹の人だと思いましたけどねえ」

「『アパート遊び』なんか××××（禁じられた映画）みたいでとってもフケツ」と試写会での感想をもらしたお姐さんは、もし、「浣腸遊び」が現われていたとしたら、何というだろうか。

それはそれとして、「彼のどぎつい方法は、なにも最近はいまいったことではない」と、戸部銀作氏（演劇評論家。かつて武智氏と「女形不要論」「武智主張について論争した人」）は、その浣腸主義(?)を歴史的に証明する。

「谷崎潤一郎氏の『恐怖時代』を彼が演出して関西で初演した時、延若（当時延二郎）は足を本当につねられてアザだらけになったと語っていた。そればかりでなく、その時使った血ノリはすさまじいもので、今でも語り草になっているほどだ。

最近の例では、去年九月の『蜀雛尼』。歌右衛門、勘三郎がやったが、強かん場面で初日の日に悲鳴をテープで流して、あまりにひどいというので二日目にやめた。常にそういうことをする。特に舞踊は、自分でやるからこういう種類のものが集まる。趣味を実演して楽しんでいる。しかも、自分の女房（川口秀子）にやらせる。ハッキリいうと、彼はサディストであり、マゾヒストではないか。女房にやらせるのは、どちらの趣味なのか。だからカブキ審議会で団十郎と山本富士子を共演させる作品として『眠狂四郎』を選び、天下の美女を犯させようという気持ちにもなる。手とり足とり演出



するのは楽しみだろう」などという人もでてくるわけだ。

こんなこというのも、彼の仕事、企画は、そう理解するのが一ばん早く、しかも納得がいくからだ。普通の人間なら女房にやらせるなど、考えられない。川口と結婚前新解釈の『道成寺』をやったが、犯される時の悲鳴たるや大へんなもの。また俳優座劇場でやった『悪七兵衛景清』（広末保作）では、吊しの責め場を延々と見せた。サディストの典型だね。こういうサディスティックな方法や露出趣味は、片っぱしからやってきているから、今さら映画で驚くことはない」

（後略）

という次第で、これもまた、ケツサクといわずばなるまい。

ことに、小林悟氏の談話など、まことに「裏窓」的情感をおぼえる。

なんにしても「有名」なひとがナニカすると、ずいぶん、さわがれるものです。

（豊）

映画

「悪徳の栄え」の話題

ごぞんじマルキ・ド・サドの代表作「ジュステイーヌまたは美德の不幸」と「ジュリエット物語または悪徳の栄え」を映画化した、フランス映画「悪徳の栄え」が近く日本でも公開される。

「ジュリエット物語または悪徳の栄え」の前編が、さきにはんやく出版されて発禁処分をうけ「第二のチャタレー事件」として法廷にもちこまれたことは、本誌の読者だったら、どなたもごぞんじのはず。

折りも折り、この映画の公開が一般の話題を呼ぶことは、まず、まちがいのないところ。

原作に選ばれた二つの小説は、ともに美德を愛する妹娘ジュステイーヌと、背徳的な姉娘ジュリエットの生き方を対照的に描いたもので、時代背景は小説の書かれた十八世紀なのを、映画では第二次

マは、ドイツ軍占領下のパリからはじまる。

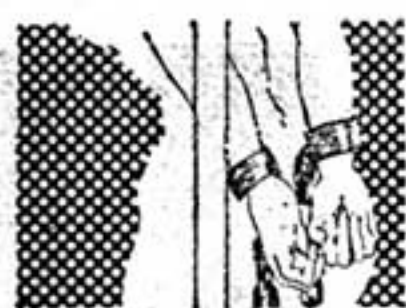
姉のジュリエットは、勝利者のナチス軍幹部に平然と身をゆだねて安楽に暮らし情事にふけっている。一方、妹のジュステイーヌはドイツ軍に捕えられたレジスタンスの闘士をひたむきに愛し、姉の生き方になじめない。

ジュリエットの背徳と、ナチスの冷酷な手段、それに対するジュステイーヌの清純さは、きわめて対照的で、はじから異様なふんい気をかもしだす。

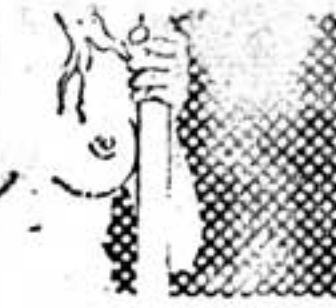
舞台はやがてドイツに移る。姉妹はここでも、正反対な生き方をし、それぞれ異常な体験をするが、ドイツの敗北と同時に姉は悲惨な死をとげ、妹は解放されて終わる。

脚色は作家のロジェ・バイヤンと、この映画の監督で、前に話題作「危険な関係」や「戦士の休息」を手がけたロジェ・バディム。

出演者ジュリエット・アニー・シラルド、ジュステイーヌ・カトリューヌ・ドヌーブ、ナチス軍将校



裏窓タウン



『ロベールオッセン、オットー・E・ハッセ。』

この映画の見どころは、サドのモラル、つまりサディズムを、どうスクリーンに表現しているかというところ。

具体的には、同性愛や、ナチス軍の音に聞こえた残酷な拷問を、どんな方法で描写しているかというところだが、バディム監督は、すべて行為そのものを直接的には描かず、その行為によって人間に起こる反応——ゆがんだ表情とか、みにくい顔のクローズアップ——などをとらえることによって間接的に描写している。それでいて効果はあざやかで生々しい。残酷シーンの描写には、こんな方法もあるということだろう。直接法がいかに、間接法をとるかは、見る人の「好み」によるが……。

いわゆる、サドの思想とは、ほど遠い因果応報のストーリーだが現在の情勢では、いたしかたのないところであろう。

(忠)

粋な判事さん

ロンドンの法廷で、リチャード・エルウエス判事は、

「女の子というものは、ショートスカートで暮らしているもので、美しいすらりとした足が珍重される」

と述べたのち、

「被告は、美しい原告ビビアン・ベチット嬢に対し、損害賠償として、百四十万円を支払うべし」と、いい渡した。

これは彼女のスクーターが自動車に引っかけられて転倒したとき彼女の足に大きなひきつきをつくり、まっすぐな足が曲がってしまったからである。

「これは一種の奇型で、若い女性の痛恨事であり、醜い足に不幸を感じるのは当然である」

と、判事は若い女性の足の価値を高く評価した。(RP)

文明国の判事さんは、さすがに粋なものである。女性の足の美しさを、堂々と公言してはばからな

い。フェチシズムを、みずから認めている。

あたりまえだ、と思うひとは、もうこの国では「文明人」だといえるだろう。

女性の足を、フェチシズムの対象としてとらえると、すぐに、「この女の写真は、足をだしすぎている。いやらしい。女の足は、足そのものがワイセツだ」という、えらいえらいお方が威張っている一等国も、同じ地球上に、存在しているそうだから。

(春)

白衣心酔と女権制と

「女性は男性のどこに惹かれるか」と題する、マスコミ・センタ―によるアンケートの調査結果が「週刊大衆」の6月8日号に紹介されている。

すこしでも女にモテたいとこいねがついているであろう、男の心理につけこんだ記事で、それだけにいままでも雑誌などで、いくどか扱われたテーマであり、格別めず



らしいことではないが、そのなかに裏窓的な眼で分析したい項目が二、三ある。

その一つは、初対面の男性から第一印象的にひかれる点についての質問にたいして、調査対象たる一二六名の女性の四割ちかくが、
△純白のYシャツ姿に魅せられるV

と答えていることだ。

△白Vの魅力、もっと極端に言えば、△白衣フェチシズムVともいうべき性的嗜好で、これは、女性のみならず、男性にもみられるが、女性のほうが格段に、このフェチシズムにヨワいように思える。

そしてそれに附随していえることは、W分子がふつうの男性よりも多い男色者には、この白衣フェチシズムが、ほとんどすべてのものにみられることである。

記者の知る男色者の大半が、同性の白のシャツ姿とか、白の六尺ふんどし姿に、強く魅縛されることを告白している。

この嗜好の因子は、女性のほうはその△白Vのなかに包まれたい、△白Vに緊縛されたいというような、被動的・マゾ的のものであり、また男性のほうは、その△白Vを汚漬したいというような、攻撃的・サド的なものであること、いうまでもあるまい。

男色者の場合はそうしたMとSとがからみあったものが、この嗜好の因子となつていふように思うが、その両者の多少を比較すれば、M的のもののほうがまさっているようにみられる。

△白Vは異性にも同性にもモテる——逆にいって、記者のような白シャツぎらいな人間は、性愛的に、女にも男にも無縁ということになるのかもしれない。

も一つは、△男性のおしゃれはどの程度を理想とするかVの問いにたいして、

△清潔感を望むV五三%

△流行の服装をするV一四%

△化粧品をもつV八%

△アクセサリーをつけるV四%

という回答があり、△身なりにかまわぬほうがよいVの答はゼロであることだ。

こうした女性の要望に応えるためか、さいきんは、男の服装——服のみならず、下着などいっさい——が目だっておしゃれ化、とくに女性化されているだけでなく、男性用化粧品がとぶように売れているといわれる。

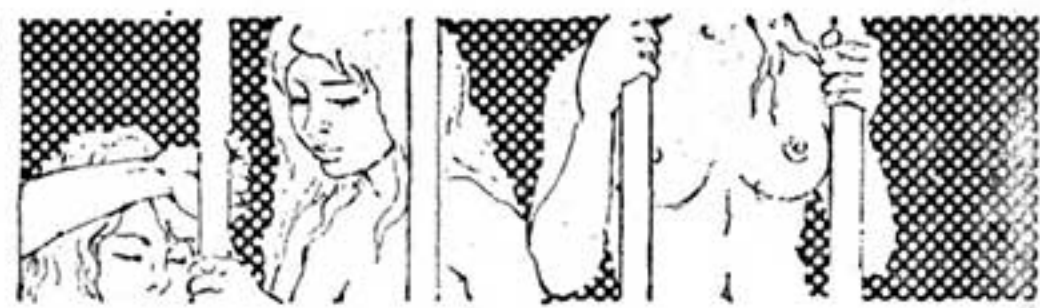
人類性生活の歴史をみるのに、父権制社会では、女の美しさが問題にされるが、母権制社会では、男の美しさが問題にされ、男は女の性的の観照の対象とされるために、化粧に苦心したことが、あきらかである。

ちかごろのゲイ・バーには、女性の客がふえてきたために、ボーイは女客の歓心を買うのに汲々としているということは、前に本欄にもしるしたが、こうしたゲイ・ボーイとおなじような傾向が、どうやら一般の男性にまで波及してきたらしい。

このように、男性が女性の性的



裏窓タウン



観照の対象となってきたというのは、母権制社会到来の前触れであるのかもしれない。

そして、そうなる、前記した△白Vの魅力の分析も、やがて逆に訂正しなければならぬことになるかもしれない……。

「女が男をおいまわすことこそ、生の力というものである」——バーナード・ショーは、いみじくも喝破したものである。(か)

カツギ屋残酷物語

ご存じ東北本線や常磐線は、俗に「カツギ屋本線」とよばれ、関東各地から東京へ、米を運ぶカツギ屋の乗客が多い。

その大部分は農家の主婦や娘たちだが、個々にやっていたのでは、手入れを食ったときなど、なにかと都合が悪いので、地域別に東北会、常磐会などと称する強固な組織を作っており、最近では更にグリーン隊と結びついて、彼等を自分たちのボディ・ガードに利用している。

つまり、商売がやりやすいように、彼等に護ってもらうかわり、利益の何分かをとおし前として彼等に納めているのだ。

これはパチンコの景品買いや、キャバレーの用心棒など、資金源を断たれたグリーン隊にとっての新しい資金ルートで、常磐線あたりでは、米一斗につき、五十円から百円程度徴収するおとし前が、一日十万円にはなるといふから相当なもの。

それだけに、カツギ屋にとってはその中間搾取が痛いらしく、がめつい女たちはなんとか米の枅目をごまかして、歩合の額を減らすとする。

だが、グリーン隊の方でも心得ていて、女たちの不正？には始終監視を光らせている。

そして、インチキを発見すると、他へのみせしめを兼ねて、凄惨なリンチを車内で堂々と展開するのである。

リンチのやり方は、列車のデッキに引きずり出して撲る、蹴ると

いった軽いものから、時には「火責め」「重石責め」などもやる。

火責めというのは、トイレに連れこんで上半身をはだかにし、タバコの火を胸一面にところかまわず押しつけるもの。

女の悲鳴は車輪の響きにかき消されて、絶対車掌に感づかれる心配はない。

重石責めの方はもっとサディスティックで、女を車内の通路に抑向けに寝かせ、その胸や腹に商売物の米袋を積み重ねてゆく。

これは相当こたえるらしく、腸が圧迫されて大小便をもらし、最後には呼吸困難になって気絶、窒息死寸前までゆくことがあるという。

こんなことが、法治国、日本の国鉄列車内で、なかば、公然とこなわれているというからおどろく。

(狛)

あるお便りから



「前略、編集部のみなさま、毎日ご苦労さまです。本当にご苦労さまです。七月号を本日書店にて入手いたしました。私は毎月購読しておりますが、今月号から五十円値上げとは、少々痛いですが、物価高の折りとして、仕方がないことと思います。今月号の編集後記を読んで、つくづく感ずることがありました。私は、裏窓ほど、いわゆるSMについての造詣のふかい編集部は、ほかにないと思っております、どうしてこの半年ばかりの裏窓が、以前ほどの迫力がいいのかふしぎに思っておりますが、飯田編集長の後記を読んで、なるほどと思った次第です。ほう大な犠

牲をはらって、ようやく手に入れた新憲法、出版と言論、表現の自由も、ちかごろだんだん破壊されていきそうな気がいたします。私の考えでは、どうしてSMと犯罪が結びつくのか、結びつけようとする方が、よほど非人間的犯罪精神の持主だと思います。しかし、こんなことも、しょせんは泣く子と何とかで、私がいくら力んだところで、仕方のないことかも知れません。そこで、お願いがあるのですが、本物のSM主義に徹した作品、写真、絵などを、本物のSM主義者たちにおわけくださるわけにはいきませんかでしょうか。私はしがないサラリーマンなので一カ月にせいぜい二千元ほどしかだせませんが、このようなことをお願いするのは、今後の社会情勢は、ますます表現の自由を束縛していく方向にむかうと察し、わが愛する裏窓に、歯がゆい思いをするのは耐えられないからです。そのよい例が、臨時増刊号です。発表された三月ごろから、首を長く

して待ちかねたあげく、手にとつてがっかりしました。予告された鬼頭暁先生の絵すら載っていないありさまです。すぐ失望の手紙をお送りしようと思ったのですが、日夜ご苦労ご苦心の編集部ご一同さまのお氣持を考え、がまんした次第です。まことにわがままで、ご迷惑なお願ひとは思いますが、書店店頭に発表しては、刺激のつよいと思われる作品、絵、写真のなかから、法律的にみてさしつかえのない限りのものを、私も熱烈なる愛読者におわけ頂けるようなんらかの方法をお考え下さい。心の底から、お願い申しあげます——（以下略）

以上のような内容のお便りを、この数日間のうちに、数十通いただきました。表現のちがひ、文章の巧拙はあれ、お書きになられたそのお氣もちを考えると、すべて血のにじむようなお手紙でした。読者のお氣もちは痛いほど、私の胸にひびきます。なぜなら、私もかつては純粹に読者であり、このようないわゆるアフ誌の発売日を待ちこがれ、書店に行き、一度で買う勇氣をもたず、店内のあらぬ方角に視線をやりながら、ようやく一冊をもとめて胸に抱きしめ、いっさんに家に帰った記憶を、きのうのように思いだすからです。あのころの苦しさ、そして、しびれるようなよろこびは、自分ながら、いじらしいもののように思えます。愛読者諸氏もよくご存知のように、いま私は、その点に限っては、恵まれた立場にあります。仕事とはいえ、若い女性をずいぶんこの手で縛りました。さまざまの反応をたしかめました。編集長というこの立場によって、夢にまでみた望みを、ほとんどかなえさせてもらいました。告白しますとただ夢をみることだけしかできなかった頃の、ひたすらな心を、私はたしかに失いかけております。それゆえに私は、七月号の編集後記で「百枚撮った写真のうち、つまらないものだけをのせて、あとは捨てる」という、読者にと

つては、ショックにちがいない一文を、うっかり書いてしまったのです。そして、数日後に、その反響が机上に山積。長い長いお手紙で、自分の恥ずかしい内面をすべてさらけだして「迫力のある作品を」と望まれる読者のお氣もちがよくわかるだけに、そしてまた、雑誌を一部でも多く買っていたきたい編集長の氣もちとしても、どんなに複雑な心境か、これはちよっと、おわかりください、ともいえないところです。たくさん読者の（まことに失礼ないいかたですが）哀願にちかようなお手紙をいただいて、いろいろ考えてみました。そして、ようやく、そのひとつを考えつきました。それは「SM同人誌」という組織の方です。小説を書ける人は小説を書き、絵の描ける人は絵を描き、写真を提供できる人は、写真を提供し、なにも提供できない人は、その本だけを買う、というやり方です。むろん、この本は書店の店頭にはだしません。同人だけしか手に入れることのできないものにします。ですから、内容もかなり専門的に、高度にできるといわけです。（話はちがいますが、この同人誌に投稿された作品の中で「裏窓」に掲載可能のものは、積極的に、どしどし本誌に採用いたします。結果としてこの同人誌は「裏窓」の二軍的存在、いや、前衛的存在となるわけです）ただしこれは、かなり高価な本になるでしょう。本というものは、印刷部数がすくなくねばなるほど、一部あたりの価格が、非常に高くなるものなのです。私のこの趣意にご賛成のかた、また、ほかにもつと名案がある、というお方は、どうか、飯田豊一宛にお手紙をください。もし、編集部あてでは、だれかに読まれてまずいというお方は、私の家のほうでもけっこうです。（千葉県市川市北国分町二四四二）どのようなことでも、ご相談ください。そのご相談の内容にまじめなお氣もちがうかがえればかならず、ご返事を差上げます。もちろん「裏窓」の編集兼発行者の立場にかけて、個人の秘密は厳守いたします。ご信用ください。

話は前後しましたが「六月臨時増刊号」について、前記の読者のほかに、二、三、耳の痛いご批評をいただきました。（もちろんよかった、たのしかった、とお寄せくださった読者の方も、たくさんおられました）おっしゃる通り、予告した鬼頭暁先生の絵も掲載できない現状、どうかお察しください。これは、鬼頭先生にも申しわけないことを致しました。

と申しますのは「増刊号」用に、鬼頭先生は、十数枚のすばらしい作品を完成され、編集部にお持ちくださったのですが、そのあまりにも強烈な迫力ゆえ、私は、そのほとんどを「没」にしてしまったのです。しかしながら、そのようにご不満の多い「増刊号」でも、近い将来には、お目にかけることがむずかしくなる氣配が、なきにしもあらず、という予感があります。これは、編集長という立場をはなれ、個人としても、まだお買いたいにならないお方に、おすすめしたいと思います。やがては集めにくくなるコレクションの一部として――。最後になって、なにやら宣伝めいたことになりました。ながながと書きつらねましたが、この特殊な、あまりにも特殊な雑誌の編集長の真意を、どうか、おくみとりください。（飯田豊一）

裏窓「六月臨時増刊号」売り切れぬうちにお早くどうぞ！

売り切れたら二度とお手にははいりません



処女、令嬢奉仕から人妻奉仕、そしてそれが夫婦奉仕へ、やがて夫婦奉仕が三者願望、つまり密通する男女への奉仕と転変する。

常識的な性感からいっても、青春期から成人期、成人期から老人期と、この三つの階段を経るに、青春期を特色づけるのに処女崇拜がある。成人期には人妻願望、成人から老年に移るころのようやく円熟の度を加えての女性遍歴、妾をたくわえたりするのもこのころの年代に多い。それは経済的にもゆとりが出てくる年ごろだから、自然そうなるとばかりも言いきれない。三者願望の欲求がそうさせるのである。そしてこの三者願望において、最も男子のセックスを高揚、再生せしめるのは、人妻との姦通である。これが中・高年者のセックスだ。

若い学生が年上の人妻と交渉を持つようなケースもあるにはあるが、この際の姦通は、たいてい主導権は人妻のほうにあり、学生はただ種馬のように、一種の自瀆用器具として利用されるケースがほとんどである。

さてマゾヒストにおいても、この姦通は絶えられない刺激源となる。これがMの三者願望で、姦通する男女に奉仕するケースがこれであろう。

姦通であるからには人目をばはかる。夫婦の営みでさえ、恥ずかしき秘事として人目を避けて行なわれるので、これが不義密通ということになる、なおさら事は慎重に運ばねばならない。

マゾヒストからこれを言えば、夫婦奉仕というのは夫婦の営みの場にはべるといふことであるし、三者願望は不義密通の男女の秘事の現場にはべるといふことである。もちろんどちらのケースもなか



■体当たりマゾヒズム論・13

ああ、ぼくは

王子と女王の前で虫けらになり
三者奉仕に溺れたい

水尾 究

江渕晃夫・絵



なか困難である。そして特にMにおける三者願望は、至難中の至難ケースというのほかはない。

だから、それが果たせられた場合、あえて大げさな言い方をすれば、エヴェレスト初登頂ほどの感激がそこにはある。

2

先号ではH子、K氏という、一種変わった夫婦への奉仕のことを書いた。今回はそれが発展して、K氏の姦通とその現場での三者奉仕のケースのことを述べてみようと思う。

その前に、もう少しK氏の変った人となりについて、補足的に説明しておかねばならない。

K氏が某教団の熱心な信徒であることは、先号でも述べた。彼は教団の歌が好きである。お得意回りに愛用のオートバイをすつとばすが、とぼしながら教団の歌を歌う。威勢のいい軍歌調である。その勇ましい調子のよさが彼を陶醉させているようである。それに加えてH子の熱心な指導がある。K氏の表面上の亭主関白振りを、うまくおだてまたたしなめながら、天晴れ賢妻振りを目立たず見せている。この御しやすい単純な男が、H子にとっては肝心のただひとりの男であった。その意味でH子はK氏を深く愛していた。K氏は糸の切れたタコのように、ちよつとでも目を離すと、仕事をさぼって遊びに出歩く。だが、やっぱり帰ってくるころはH子のもと、彼は女房を母親のように思っ甘えたりすねたりしている。彼はH子なしでは、結局みなし子みたいにししか生きられないであろう。そのことをK氏は十分承知している。その意味で、よく浮気はするが彼は妻を愛している。妻に操縦桿をゆだねて、安心しきっている。その妻が、絶対だと保証する教団の教義を、彼はうのみにして立命

のテイだ。

こうしたK氏の単純さが、複雑な陰影を放つことがある。それは彼の変質的な一面が露呈したときのことである。

K氏が留守でH子とふたりぎりのときがしばしばある。この前もそうだった。だから好機とばかりぼくはH子をくどいて、足なめをやったりした。ところがその後、同じような好機に出くわした折、ひざまずいて足をなめようとする、H子はそっけない態度で、彼が見てるからダメ、といってつぶねた。K氏は明らかに今は留守で、どこにも居ないことになっている。それは確かだ。その彼が見ているから、というH子のためらいは、やはり人妻としての本能的な貞節感から、そのおそれからそうなのであろうと、軽く聞き流していた。この前の時はなめさせてくれたのに、どうして今日はこんなに用心するのだろうか、と、不満に思ったりした。

3

ぼくもうっかりしていた。K氏にそんなくせがあるとは知らなかった。そこは夫婦で、H子は夫のくせを前からよく知っていた。そしてそのことだけはH子にとって、最もがまんならない、ことなのであった。

K氏がぼくにニヤニヤと笑いかけて、意味ありげにこういったものだ。

「カアちゃんの足をなめたんだってな。えらく気持ちが悪かったって言ってたぞ。ズーンと頭のテッペンまでしびれたってさ。あれであそこをなめられたら、こたえられないだろうって」

いきなりこんなふうに言われたので、いくら相手がたわいのないK氏だといっても、少しはびっくりする。第一、H子がそんなふう

なおしゃべりをしたとは意外だ。H子は細面できつい顔立ちをしている。きつい顔と、おしゃべり好きの顔とはまるでタイプが違う。それがこんなふうなK氏とツツ抜けであったとは、ちょっと裏切られたような感じだ。だが考えてみると、K氏とH子はオシドリ夫婦だ。ふたりには秘密などお互いにありつこない。何でもオープン——とすれば、ぼくの足なめのことなど、別に秘密でも何でもなく、むしろ寝物語の座興として、格好の話題を与えたただけのことにすぎなかった、そう判するほかはない。

そこがまたK氏の風変わりなところなのであろう。彼はセックスのこととなると目がない。目がないうあまり、同好の士となると、それだけでうれしくなつて、それが妻にかかわることであっても、少しも気にならないばかりか、同じセックスにもだえる友人として、嫉妬するよりは同志愛が先立つ、そんなところが見られるのである。

でも、ぼくはK氏の真意がはかりかねた。それでその時はだまっていた。彼が見ているからダメ、とつぶねたH子の真意もはかりかねた。見ていようといまいと、どうせツツ抜けなんだろう、と、彼女に食ってかかりたい衝動もどこかでしていた。

つまりこのころまでは、まだK氏は、ただ単に、単純さだけをま

る出しにした男としてしかぼくの目には映っていなかった。だがぼくはそれから間もなく、それまでに見なかったK氏の複雑な陰影を、或る夜の出来事ではっきり見せつけられることになった。

4

その日の夕方、途上でK氏と偶然に行き合った。面白い話がある

から、すぐ来てくれ、と彼は言った。そうして自転車を走らせて行ってしまった。何事だろうと、ぼくはあとから歩いていった。先にK氏が帰宅して、自宅で待っているはずだった。そうとばかり思っていた。慣れた家のことで、勝手口からだまって上がりこんだ。だれも居そうにない。K氏が帰っているはずだがと、声を出して呼んでみたが返事がなく、おかしいな、と思つてるとフスマがあいてH子が顔だけ出した。ぼくの顔を見ると安心したのか、今度は寝衣姿の全身を現わした。

「昨夜ほとんど寝てないので、今やすんでたところよ」

弁解がてらにそんなことを言った。しどけない格好である。だが、相手がぼくだと、まるでタカをくくった感じで安心しきったところがある。その程度の男にしかぼくは見られていないのだ。

だがK氏が居ないのはおかしい。先に帰って待つてゐるような口ぶりで自転車を走らせていったK氏、——どこか寄り道でもしているのだろうか、ぼくはH子にそのことを尋ねてみた。彼女はまるで心当たりがないという。そして面白い話とは、いったい何であろうかと、ぼくといっしょに頭をかしげた。

いったんぼくは、勝手口から表に出て、遅れてくるK氏を待つ気味合いで通りを見た。付近は住宅地で生籬が続いている。その向こうにK氏の姿が見えた、と思つたら、くるとこちらに背を向けて、小走りに急いで向う角を曲がった。全く意外だったので、ぼくはK氏を追っかけて角まで行った。もうどこにも彼の姿はなかった。どこかに隠れたとしか思えない早さである。何で隠れたのか、そう思つて引き帰してくると、表庭にちゃんと彼の自転車が置いてある。いずれにしても、一応ここまで帰ってきたことは確実なのだ。人を自分のほうで呼んでおきながら、少しばかり腹立たしく思いなが

ら、また勝手口から上がっていくと、H子はさっきの寝衣姿のまま、固い表情ですわっている。

「あの人のぞき見の趣味が、また始まった」そんなことをつぶやいていた。

人を呼んでおきながら、自分はこっそり身を隠す。それも妻が寝衣一つで寝ているところへ男をやつて——男と妻が人目をしのんで密通をする。その現物をどこかで見張つていてそれでK氏はどうする気でいたのだろうか。H子の弱味を、こんな形でにぎる必要があるとでもいうのであろうか。その落とし穴にうまくかけようとしたK氏の思惑が何だか不気味にさえ思えた。

5

K氏が家の中にはいつてきたときは、いたずらの最中を見つけた坊やのように、きまり悪げなニガ笑いを浮かべていた。

「うちのかあちゃんがね、君になめてもらいたいんだって」

テレ隠しの意味があつてのことには違いないが、当の妻君を前に置いて、こんなふうに言つてのけるK氏の意図は、全く想像外のことに思えた。夫に比べると妻のほうはどうにかまともである。第三者を前において、こんなふうにあけすけ言われたのでは、到底だまつているわけにはいかない。

「あたしがいつそんなこと言つて」

激しい見幕だった。K氏はちよつとびっくりしたような表情になったが、テレ笑いをこれでいっぺんに霧散させた。しぶい顔になった。ぼくのほうをその顔で見たが、テレ笑いの手前、引っこみがつかないといった感じがあつた。そこへH子が追い討ちをかけた。「あんたなんか変態だ。広い世間に、いったいだれが自分の奥さん



によその男をけしかけて喜ぶ人がいるの。おまけにそれをのぞいて見て興奮するっていうんだからね」

これでK氏は追い詰められ、完全にきめつけられた形になった。夫としての体面まるつぶれだ。彼にも恥じる心があった。だから猛然と怒った。

「なんだっていいじゃないか。浮気をさせてやろうというんだから、やりやいいじゃないか。こんな話のわかる旦那が、ほかに居るかい。それを何だってんだ。変態だ、変態だって、バカにすんな」

火のついたような怒り方で、手荒くH子を突きとばした。何すん

のよ、H子が怒って叫んだ。そこでK氏は猛烈な勢でH子をなぐりつけた。根が頑丈なK氏のこと、勝気ではあるがヒ弱でやせぎすのH子なぞひとたまりもなかった。見る見るハナ血を噴き出して顔面蒼白となり、痛い、痛い、と悲鳴まじりの泣き声をあげた。K氏はそれでも狂ったようになぐりつけるので、ついに見かねてほくはその間に割っていった。K氏の見幕が恐しくもあったが、そうするほかなかった。K氏はそれから二つ、三つ、またハナ血のH子の顔をなぐっておいて、やっと暴力も終わりになった。

ほくはその時、まざまざと暴力の凄さを目のあたりに見た。

H子がもつとがっちりした体格の女だったら、そうまでは感じなかったであろうが、H子はきしゃしゃでやせていた。それに顔色もよくはなかった。たわいもなくハナ血を噴き出した。そのハナ血の上をK氏の大きなコブシが容しやなく打ちすえた。ダッ、ダッというように、肉がハじける音がほくの下腹部にもひびいた。まるでこわれそうであった。H子は苦痛のあまり悲鳴をあげてのがれようとしたが、K氏はつかまえて離さなかった。

ひとしきり、そうした興奮が高まって過ぎたあと、皆放心したようにだまっていた。H子の寝衣のエリにハナ血が散って赤く染まっていた。彼女はクチビルをかみ、泣いていた。H子はマゾヒストではなかった。だから夫の暴力には耐えられなかった。まして常識はずれの理不尽な理由による暴力を、どうしてがまんすることができよう。

「今度こそ、本当にあんたとは別れるわ」

H子は静かな調子で言った。

「どうしてだ」

K氏の語調には、悪ふざけのあとの、子どものようなおびえがあった。

ほくはこの状況を見ていて、ふとH子があわれに思えた。結局は弱い女の立場というものが、つくづくと実感された。こういう状況は、これまでにまたたび繰り返されてきたのだ。そのことがふたりの会話でわかった。そしてそれまで結局は離婚という破局をどうやら回避したように、H子が今何と試みてみたところで結局は今回

もやはり元のように夫婦としての生活が、元の延長線上に同じように続けられていくことになるのであろう。夫が変態であろうと、H子にはK氏しか掌中の男はいない。そのあわれさがH子にあった。K氏には何のたくらみもなかったのだ。妻がほかの男と密通をする、その現場を見て楽しむ以外に目的はなかった。その現場に妻の中の新しい女を見つけようとする、それがK氏の三者関係だった。こういう、持って回った夫婦の關係に、何か新しいものを求めようと模索するK氏の変質的部分は、日ごろの彼の単調さを突きくずす複雑な陰影をはらんでいた。この陰影にほくは初めてK氏の中の人間を見た。

ほくはK氏に提案した。ほくの中の人間と、K氏の中の人間とが、ここに結びついた。

見たいという欲求は、見られたいという欲求ともつながり合っているのではなからうか。

K氏は或る人妻と関係していた。人妻の家庭はふたりの子どもと、平凡なサラリーマンとで波風一つ立たぬ平和な風景だった。はた目から見て、K氏のどこにこの人妻を魅せる力があるのか、判断できそうにもない。痴呆じみたK氏の単純さまる出しが、女の警戒心をゆるめてしまうのであろうか。

つまりほくは、このふたりの情事の立会人となったわけだ。見る立場から見られる立場、このアイデアは結構何かの斬新な刺激をほつするK氏の欲求に、ピタリとマッチする何かがあったようである。

だが作戦と演出が必要であった。ただでさえ人目をしのばねばな

らぬ間柄だというのに。セックスの現場にはつきりと第三者を立ちあわせる、こんなことを承知する女がいるはずはない。そういうシヨを職業とするプロ女性ではなく、相手はしろうとの奥さんなのだ。

だからぼくの白痴演技は、実に重要な決め手となるのである。

幼稚園を中に取り囲むように、古びた都営住宅が立ち並んでいる。その一軒にぼくはK氏と同行した。

奥さんの前で、K氏は必要以上にぼくをバカ、バカと呼んだ。三十近い奥さんは、何だか気の毒そうにぼくを見ていた。

子どもがふたり居る。男の子と女の子。K氏がおみやげのキャラクターを与えるとたわいもなく喜んで、早速しゃぶり始める。

「このおじちゃん、犬とおんなじだから、ほら、そのしゃぶったキャラクターをそこにおいて、おあずけ、許すって言うてごらん」

子どもたちはおもしろがって、ホントかなというようにいたずらっぽい目を光らした。それをK氏がけしかけた。

「ワンといえ」

男の子が言った。女の子も、ワンと言ってごらん、と続けて言った。

ワン、ワンと鳴いたあと、おあずけのキャラクターをしゃぶって、ぼくはキョトンとした目付きにうれしそうな表情を現わした。

「いいかげんでよしなさい」

奥さんが見かねたように子どもたちをたしなめたが、男が完全なばかであることを、これで確認したといったようすであった。

8

子どもたちを遊びに出したあと、窓をしめカーテンを引いた。奥

さんは複雑な笑い方をしている。

「だって、この人がいるんだもの」

やはりいくらなんでも、ぼくの存在は気になると見える。

「なに、こいつばかなんだから、何にもわかりやしないさ。大丈夫だってば」

K氏の説得は強引一点ばり、しかし強引さがやはり何といってもこの際は一番のようだった。

「おい、ばか。おれの足をなめてみる」

K氏はきたない足裏を突き出した。多脂質のこととて、真黒によごれている。K氏の足裏をなめることは、彼との打合わせの項目にはないはずであった。男の足裏は、ぼくにとっては不潔以外の何物でもなかった。しかし第三者としての女性の目をそこに意識すると事情は違う。不思議な陶酔感が猛然とわき起こるのである。これが三者関係の魔術だ。

一方、K氏のこの臨機応変の思いつきは、単純な彼の才覚からすればできすぎとも言えた。目をつむり、言われたとおりに足裏に舌を当てたが、アブラくさい臭気がムツとハナをついた。

「何だってこいつはなめるんだから。かあちゃんだってなめてもらってるんだ。よかったら股倉もなめるんだ。いい気分だぞ」

「そんなことまでやるの」

奥さんは少しばかり興味にそそられた声を出した。

「なめてもらおうといいよ」

K氏はぼくのほうに、

「奥さんのをなめてみな」

四つんばいのような格好で、ぼくは奥さんのほうにはっていった。本気で頭を入れる気であった。それが公然と許されていた。鼓動が



激しく高まった。

「いや、だめよ、そんなことしちゃだめ、ホレ、あっちに行きなさい。行けってば」

奥さんは激しくほくを拒んで突きつけた。そこでどうしたものかとK氏のほうをうかがうと、彼は目を細めて、ただニヤニヤ笑ってばかりいた。

9

ほくはK氏の猛然たるさまを見た。野牛のようなたくましさがあった。

それは佇立し怒張っていた。その弓なりにそった逸物が、敢然と進行していく目のあたりの光景は、ひどくダイナミックで健康だった。ほくはK氏が男であることを、つくづく見せつけられる思いだった。単純で一風変わっていたにしても、彼はあくまで男であった。奥さんは盛んにほくの存在を気にし、ためらいがちにK氏をこぼんだが、有無を言わせぬ単純明快なK氏の行為が彼女のためらいを圧倒した。

「おい、ばか」

急にK氏が振り返ってほくを呼んだ。片目をつぶって笑ってみせる。戦場における武将のような、余裕のある笑いだった。

「奥さんの足を吸うんだ」

ハッと我に返ったように、ぼくは女のほうの乱れたモスソのかわに、急いで顔を寄せた。高揚した男女の臭気がそこにはこもっていた。

「いや、いや、ばか」

ぼくの顔を奥さんは蹴りつける、がぼくは目の前に交錯してもだえる女の足のハラを口で捕えた。女の口からうめき声もれた。それはK氏の男としての手練がさせるものである。それをぼくが足ユビを吸うことで助けた。

奥さんは呆けたように居ずまいを直してすわった。そしてぼくをにらみつけるように見た。

「後口に、仕上げとしてなめてもらったらどうだ」

冗談なぞでなく、K氏は大真面目に奥さんにそう言った。彼も、彼女も、激しい運動のあとの、せわしない息使いをしていた。

「いくらばかだといっても、そんなことまではさせられないわ」

奥さんの声には、しっとりとしたうるおいがあった。

10

このような奉仕をすることはマゾヒズムとしては確かに一つの頂点である。

女王と奴隷、という二者関係が高まって、女王と王子と奴隷、となったとき、効果はどうだろう。もちろんM派には男性に隷属する意思なぞさらさない。まっとうな立場からいけば、女性隷属が本筋であろう。ところがその二者関係が三者願望になったとき、Mはより高度なものとして発展する。Mの心は人間失格を望む心である。我と我が手で、いっさいの人権らしき人権をすべてはぎとって、無人格の状態で女性の前に伺候する心である。女性がそして、本当に

相手を見無視できるのは、実に二者関係ではなく、三者関係においては無いだろうか。女が女であることの歓喜にひたるその現場にこそ、第三者は完全に虫けら同然に見無視されるのである。

女王と王子と奴隷、これが王子と女王と奴隷とすればどうだろう。ただ女王と王子の順位が、王子、女王というふうに入れ替わっただけにすぎない。同じようなことと思われるかもしれぬが、これは決して同じではない。

女王が主体でそこへ王子がやってくる、そこには奉仕をする奴隷がひかえていた、ということと、王子が主体で、そこへ女王がやってくる、そこには奉仕をする奴隷がひかえていた、という似たような二つのケースのニュアンスの相違は微妙である。

いずれをと問われたら、ぼくは後者を選ぶ。女王が主体でなく、王子が主体であることを選ぶというのは、日ごろのぼくの持論からすれば、ひどく矛盾したことのように聞こえるかもしれない。また事実、大変矛盾しているように確かに思える。

だが、Mの本題は凌辱にある。凌辱は日常性の倒錯、ひっくり返しによって強調される、女が初めから、伝説の国アマゾンのように、歴然として支配者としてあったなら、Mの欲求は別な形をとって生じるように思える。MがMである感激を味わうのは、主体である王子に従属する女性の一步下がったその立場を、その弱さを、男の目でちゃんと捕え、ちゃんと見きわめていればこそ生じるのではなからうか。弱い女が、弱さの中に散見的にSを見せる、そのひっくり返しがあってこそその凌辱ではなからうか。

ともかく、三者願望の中でも、考えてみればこのように、ニュアンスの相違としては随分複雑に、多種多様なケースが考えられるようである。

落合 竜二・画



●この夏の流行は スリーブレス(袖なし)



●そして ロープのアクセサリー!





—— 鬼 頭 曉・絵 ——



——落城悲図——

■映画・演劇・出版物に現われた

現代マゾヒズム文化時評

⑰

森下 高 茂

アメリカ誌

「フォア・メン・オンリー」

これは、はいて捨てるほどあるアメリカの実話誌のうちでは、かなり有力なものの一つです。

だいたいこの種の雑誌は、わが国の週刊誌や月刊誌の大部分と同様に、真実性にとほしいデッチアゲの埋草記事がのせられていることが多いのです。ここに紹介する（一九六〇年八月号）は、これらの話の内容とは別に撮影されたものですから、それなりの価値があります。

同誌十三ページからはじまる体験記「十年間ロシアの女子ラーゲルに捕えられて」という、ジョン・ノーブルという人の体験記（正しくいえば体験記風なフィクションともいうべきでしょう）です。

“ソビエトの女子看守は、男性看守と異なるところはなかった”というキャプションで掲げられたこの写真を見ると、ソビエト・ロシアにおける、この服装は女性軍人の外出用の正装であるということですが。

つぎに、この写真は軍人であって看守ではないことです。これらを考え合わせると、まさしくフィクションであることを暗示してい

るのです。しかし女兵の写真としては、価値のあるものと考えますので、ここに紹介するわけです。

本誌「裏窓」について

J・パウリー教授の私見

J・パウリー氏は、最近の名著「倒錯性愛の諸問題」によって、急激に注目された西ドイツの学者です。

氏はハンブルク市内のハンスおよびカルラ・W・ラッセン書店から、その著書を出版しているため、同社とかなり頻ぱんに交信している私のもとへ、昨年（六二年）十月に手紙をくださってから、氏は月に一、二度くらい交信をつづけてくれています。

昨年の十二月に、本誌「裏窓」十二月号および一月号（六三年）をパウリー氏に送りしました。

本誌「裏窓」のように、比較的自由な雰囲気のもとに、SM関係のみを内容とする定期刊行物が、いまの日本に存在しているということをおは氏は知らなかったのです。

それは、誇大な性器をえがいた浮世絵などに見られる日本の性風俗しか知らないことの無神経なところを、パウリー氏を通じて知らせたかったのです。



アメリカ誌 <フォア・メン・オンリー>

この私のもくろみは、やっとこの四月五日に至ってその反応がはねかえってきました。

氏の手紙によると――、

『この雑誌（裏窓）が、アメリカの諸冊子とちがって、各方面の微細にわたる倒錯傾向に對して、万遍なく門戸を開放していることは私にとって、すばらしい発見でした。かつて私は、一友人から日本のK誌という本についてきいたことがあります。しかし、それは私どもの予想したように、同人誌的なものになりませんでした。

▲注▼英国には同人誌として世界的に有名な「ロンドン・ライフ」「ドメスティック・マガジン」「フォア・メン」各誌があり、それらはみな豪華な外装と内容とを持っている。

この雑誌（裏窓）は、それらにくらべ、さらに、おどろくべき豊かさを、そのとりあつかう作品の内容の属する年代（時代）についても持っているようです。

私が、さし絵から判断するところでは、まず貴国の独特の伝統的な素材をふまえた上、それによる絵物語――。また、中世ヨーロッパの宗教審問に題材をとった、大へん特長あるさし絵集。そして急速にアメリカナイズされた近代の倒錯風俗と古今東西にわたった作

品など、要領よく配分されているようです。

これらのテーマの属する文化的領域や区分はアメリカよりも、むしろヨーロッパに属しているようです。なんとすれば、アメリカの出版物は（いたずらに概念的）なフェティシズムに拘束されているきらいがあるからです。その上、私は（とくに倒錯者のために作成されたものでない普通の対象——映画、スポーツおよび出版物等——が、倒錯的な対象として取り上げられていることを、大へんなおどろきを持って発見しました。

私は、この雑誌（裏窓）を学友フリードリヒ・テーレン氏に見せました。かれは「鞭打愛好者の世界」によって、いちやく斯界の名声を担った人ですが、かれもまた、異常な期待をもって、この雑誌（裏窓）のとりこになりました。（愛好者としてでなく研究者としての意——森下・註）。

かれ（テーレン氏）は、目下執筆中の百科事典的著作であるほう大な「実行行為および空想による鞭打愛好者の実態」という書物のなかで、ぜひこの雑誌（裏窓）にふれたいという熱心な布望をされました。（以下略）

以上がJ・パウリイ氏の本誌について私によせた手紙の一部です。

なお本誌（裏窓）は、西ドイツにおける、「不良文化財輸入禁止法」の例外書誌として認められました。アメリカおよび西欧での倒錯性愛関係書に対する制約は、きわめてきびしいものがありました。そして、いまやテーレンの著書——かれの著書は、すみやかに各国の、とくに欧米の心理学教室に対して配布されます——を通じて、各国にその名を知られたわけです。

テーレン氏は、一項目を割いて、氏の意見と分析とを記述するはずです。この事実は刮目してよいと思います。いまや、日かげの花は、陽光の下にはいだしてゆこうとしているのです。パウリイ氏は、感動をもってこう書いています。

『この種の公開出版物を出版しつづけることは、まさしく正当な権利であります。また、それ自体すばらしいことと言わねばなりませんまい』と——。

私は、いまや性倒錯が病気ではなく、個人的傾向（それは、なにびとによっても保証される、個人の自由、表現、信条等の自由とひとしく擁護されるべきものです）という認識がたかまりつつあることを感じます。

一九三三年に最後の著作のなかで、マグヌス・ヒルシュフェルト博士は、だからこう書

かざるをえませんでした。

『この世界には多くの症例があり、それは多くの区分に分類される患者が存在していることを示している』——と。

そしていまや、パウリイ氏やテーレン氏もその卓越した著作に『かれらは』とか『これらの人びとは』と、複数の代名詞を用いているのです。

いまの日本では、こっそり書店の裏口から買い求めたり、カバーをしなければ手にすることができない出版物でさえ、しかし、その夜明けは、すぐそこまできているのです。



妖美詩 〈生血を吸う女〉

ゲテ物映画ファンというものは存外子どもっぽい無邪気さがあって、たわいのないゲテ物にも、たわいなく喜ぶものである。

ゲテ物映画のお名じみに「ドラキュラ物」がある。美女の生血を吸う怪物、のチャンピオン。何度も何度も墓の中から生き返って、チャッカリ何食わぬ顔で時の知名

士になりおおせているところがおもしろい。いつなんどき、吸血鬼の正体を見せるか、のスリルがある。その上、血を吸われ

た美女たちが、ひとりひとり吸血鬼にとたんに早変わりするのも結構涼気を呼ぶスリル感となって盛り上がる。なんとも楽しいものである。

▲生血を吸う女▼という封切映画は、ドラキュラ物とは全く別のもので、女自身がドラキュラのように、血を求めてさ

まよい歩くのではない。悪者は彼女の父、風変わりな学者がそうである。彼は犯罪にからんでの人形造りに迫真の腕を振るい、さながら本物同然の死体人形を、公衆の観覧に供している。首を吊られて目をむき舌を出し、あるいはゲンノウでぶんなぐられてギョツと虚空をつかむ人形が、陽気な手風琴の伴奏で舞台の上を自動式に流れる仕掛けである。

実はこの人形、みんな本物の死体であったというのがミソで、娘が大変な奇病で絶えず人の血を大量に必要とするところから、学者の父親は娘かわいさのあまり恐しい殺人者となり、血をみんな抜きとっては人形にした、というわけである。最後に破滅のときがくる。追い詰められて狂ったようになつた彼が、手当たり次第に投げたランプで火事になる。自動式の人形たちが、半分燃えながら、陽気な手風琴の音につれて、無台の上を流れるくんだり、怪しい詩情が盛り上がる。妖美詩の好見本であろう。



撮

影

行

エダ・キリコ

モデルの件に関しては、ぼんやりしているうちに、話が調子よくはこんでしまつて、私は、小雨もようの冷い朝、飯田橋の駅頭へ立った。

雨は次第に激しくなり、先生は、なかなか迎えに来てくださらないし、これから始まるうとしていることに怖れをなしはじめていた私は、内心、「こりやしめた！」と。

ところが、そうはいかなかった。あやういところで先生は、おいでなすつたのだ。

そこで私は、車につけられるし、雨は小降りになるし、車は依然として、千葉県十九里浜へ向けて、走りつづけているし、私はと言え、先生御持参のおにぎりをパクつく以外、なんにもなすすべを知らない。

とにかく、おっかないのである。

「先生」などと代名詞のつく類の人物は、どうしても私にはおっかないのである。

で、編集長殿のお役目はと言え、県命に私の気持をほぐすことに相成った訳だ。

だが、勿論、私はもうそれ程子供じゃないし、何時までも据ねてる訳にはいかないってことも、ちゃんと心得ていたのである。

念入りにメイキャップを済ませた私の顔は、もう「もの」のにおいがしたし、私自身とは、何の関係もないのだという気もしたし、脱がされ、縛られ、ころがされて、私は玩具なのだどテクサレる必要もなくなった訳だ。

裸に近いでたちでの撮影は、寒かった。

だがひくい灰色の空、そして灰色の海、濡れた砂浜、白い無数の貝がらと、浜にあげられた数々の漁船、そのどす黒い姿体、風、雨、まっ赤なタイツ、全て劇的で、そして、きょうのドラマのヒロインは、私なのだ。

何を隠そう！

大変愉快だったのである。

何よりも愉快だったのは、一本のあらなわが、編集長の手で私の両の乳ぶさに喰いこまれ、冷い砂のうえに倒され、灰色の空と対面させられたことである。

そのために、寒さだの、冷たさだの、痛さだの、そんな感覚の大部分がまひしてしまっていたということだって考えてみれば、たいへん愉快なことである。

で、私には、なんとなく解るような気がする。

縛られるということ。

縛るということ。

これは大変素晴らしいことなんだってこと。

波にあらわれて出来た砂の芸術を、最初にぶっこわすあの気持。

つまり、どうしようもないってこと。

だがここで、サドだの、マゾだのに関して青くさい意見など吐いたところで本当にどうしようもない。

仕事は要するに、時間を感じさせないくらいもの珍らしく、そしてまた、おもしろかつたのである。

先生にしろ、編集長にしろ、しばしば「裏窓」的冗談を吐いてくださるし、私の心情は、常に笑える状態にあった訳だ。

さて、その夜、「夜」ですぞ。

私は、ついに、まんまとおだてにのり、貧しい胸のふくらみを、レンズの前にさらす破目に陥ったのである。

夜はやはり、脱ぎたくなるようにできてい

るのだろうか。

とにかく脱いでしまった。

が、やはり他人の面前では恥ずかしいことなのである。

セミヌードには生理的に嫌悪を感じてはいても、やはり恥ずかしさとは、妥協せずにはいられなかった。

ってことは、たいへん残念なことである。

その夜、私が感じたことは、お座敷趣味は

嫌だってこと。

たいへん不潔だってこと。

やはり、私は常に、ドラマの背景は自然であることを望む次第だ。

それにしても、その夜の私達のねぐらは、おそろしくくたびれたそれであった。

たいへんな佗しさである。

こうして、なんにもなすべを知らぬ夜は、男と女が、ここにこうしているかぎり、浮気

でも……って気になっちゃうってことは、きわめて自然なことだ、

「え、どうだい？」

「私、たまには独りでネたいです」

「たまには、ちがう男とだってイイダロ」
なあんてきわどい会話など飛びだす始末。

だが残念なことになんにもなかった。

そこがまたいいところである。

「雑誌には、顔はできるだけ出さないようにしますからね」

などと編集長。

彼の優しいお心づかいが、それともふた目と見られぬひどい顔なのか。

とにかくひがんでしまいたくなる。

ま、こんなこと、どうでもよろしいでしょう。

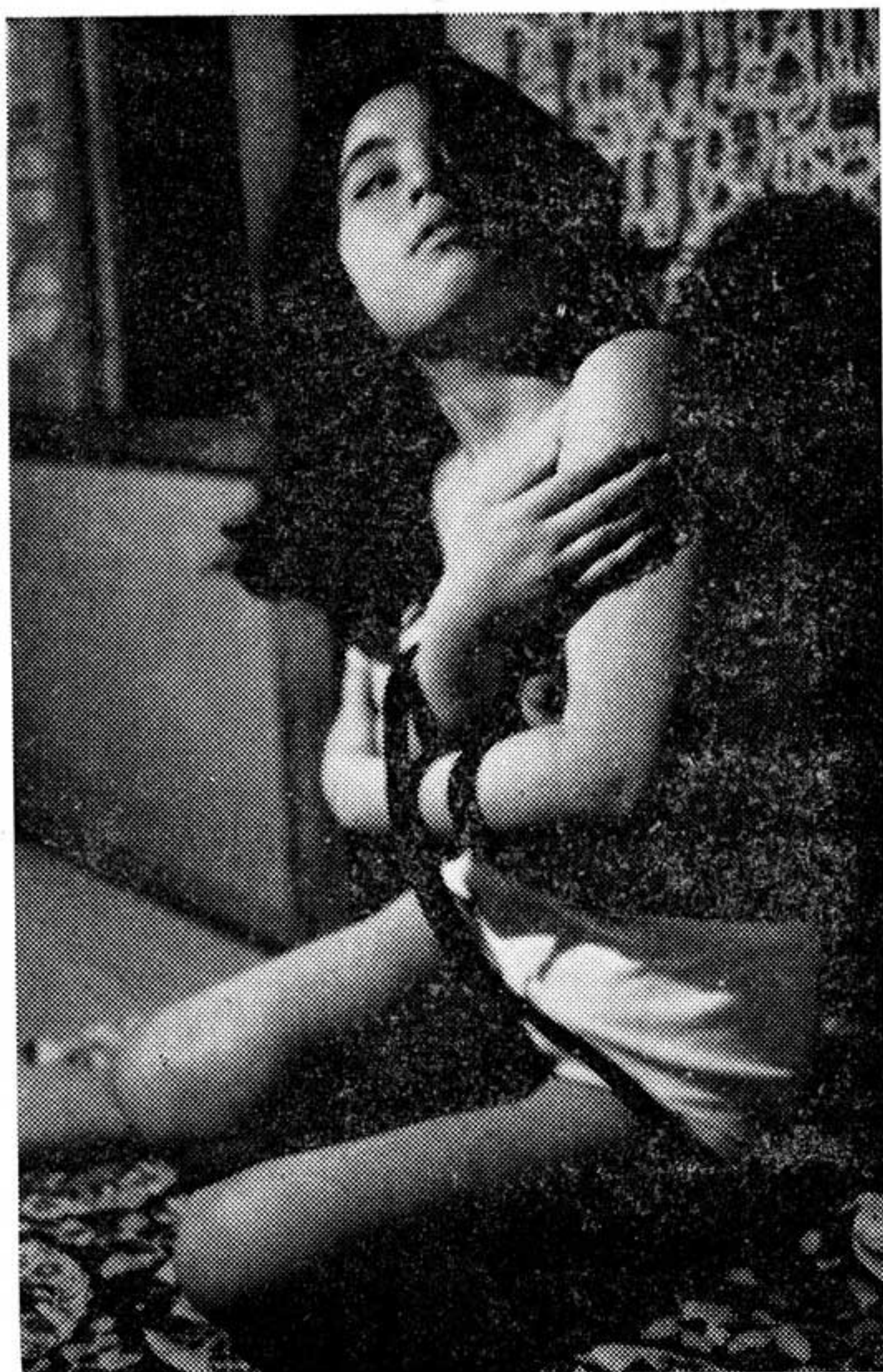
数十時間ぶりに東京の匂いをかいだ時は、
真実嬉しかった。

東京の空気は、やはり私にとってこのうえもなくおいしいのである。

ただ、それだけのこと。

良い経験をしたとか、いい思い出になるだろうとか、そういった気持ちがあまりないことは確かである。

ただ、時が止まらないで、ちゃんと動いてくれたことに感謝したいだけ。



密林の美女

文・黒部恭治
絵・中川彩子



「ニシマ、あの騒ぎはどうしたの。部落に何かあったの。なんだか様子が変わだね」

インド奥地の原始境、カリヤール族の部落の小屋で、女性探検家山影清美は案内人の娘ニシマにこうたずねた。

ビルマ、インド、東パキスタン、三国の国境線が入りまじるあたり、どここの国の領土ともつかない大ジャングルの奥の原始部落だ。人口約一千。酋長は王と称している。

インドの古代文化を研究する目的でやって来た若い清美は、各地の部落を訪れて、研究資料を集めながら、ついにこのカリヤール部落へやって来た。ここに住みついて、もう一カ月になる。

「お客様、昨夜、王様の御殿に泥棒が入りました。王様の御秘蔵の象牙が盗まれたので、兵隊がみんなの家を家探しして廻ってます」十七になる案内役の少女ニシマは、不安そうに顔を曇らせて清美に説明した。

×

国王の財物を盗むのは殺人よりも重い罪とされている。犯人は裸にされてジャングルに捨てられ、野獣の餌食にされてしまうのだ。「お客様、昨夜は家にいなかったでしょう。どこかへお出かけだったのですか」

「昨夜？ あたしは森のはずれのチャブルさ

んの家に呼ばれていたの。あそこの娘さんが、おなかをこわしたから診てくれと言われて」

清美は微笑しながらアリバイを説明した。

どこでもそうだが、原始部落は医療知識が低い。医者も薬もなく、病気になるれば、迷信的な蛇神教の祭司と巫女にお祈りをしてもらう。容易に治らないし、治ってもお礼をどっさり取られる。六十を越した祭司の老人は、アリアン系の若く美しい巫女と共に、広大な神殿にぬくぬくと暮している。

そこへ清美がやって来た。彼女は医薬品を豊富に持ち、神戸にいる父親が町医者を開業しているの、医療知識にも通じていた。

×

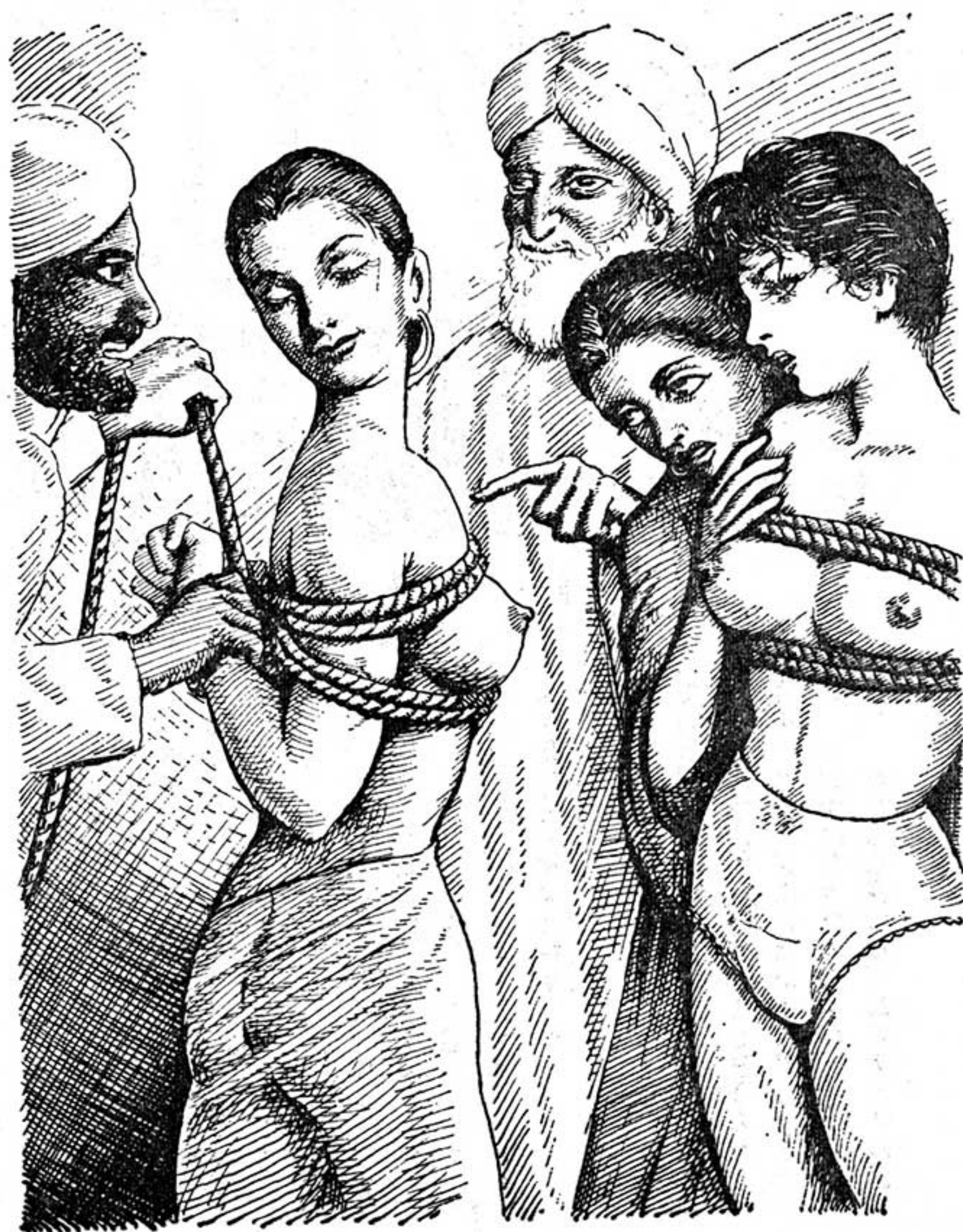
ある時、ニシマの父親が肺炎にかかって苦しんでいたのを、清美がペニシリン一本で治してやった事がある。それが評判になって、彼女は部落中から病人の治療を頼まれるようになった。彼女は快よくそれに応じた。

「あのお客様は神様だ。どんな病気でも治して下さる。もう祭司も巫女もいらねえぞ」

こういう評判で彼女はどこでも大歓迎される。おかげで研究も大いにはかどった。

が――

「お客様、祭司と巫女の二人に気をつけて下



さい。あの人達は何をするかわからないわ」

少女ニシマがいつも心配してこう言った。

「大丈夫よ、ニシマ。人間は悪い事さえしな

ければ、何が起っても平気なのよ」

清美は笑って少女の心配を打消していた。

こうして一カ月目のけさ、突然、王宮に盗

難事件が起り、兵士達が部落中の家という家の家探しを始めたのだ。

×

やがて十人ばかりの兵士が清美の小屋へもやって来た。その先頭には白髪の老祭司と、白衣をまとった巫女の二人が立っている。

「客人、王命によって、あんたの住居も調べさせてもらう。よろしいじゃろうな」

「はい、どうぞ」

「よろしい。それ、皆の者」

祭司の差図に、兵士達はドヤドヤと入りこんで、小屋の中を調べ始めた。

間もなく――

「あッ、あつたぞ、象牙だ！」

一人の兵が、窓下に敷いてあつた一枚の草ムシロをめくって大声を上げた。そこにはまさしく一本の象牙がころがっていた。

「あらッ、それは――」

驚く清美、そのさまを冷い目でジロリと見やった祭司が言った。

「それこそ盗まれた品じゃ。さては、昨夜、王宮に入った賊はあんただったのじゃな」

×

「違う。あたしは覚えはありません」

「覚えがなくて、どうしてこの象牙がここにあるのじゃ。そのわけを言いなさい」

「それは……」

昨夜、自分はチャブルの家へ病人の治療に行っていた。その留守中に賊がこの象牙をここへ隠したに違いない。

「あたしは知りません。でも、あたしは昨夜チャブルさんの家へ泊ったのです。チャブル



さんに聞いて下さい」

祭司はにやりと気味悪く笑った。

「チャブルの家はさっき調べた。が、チャブルはお前など泊った事はないと申したぞ」

「えッ、そ、そんなはずは……」

「チャブルは昨夜、だれも来なかったと申し

ておるわ。いい加減な嘘ではだまされぬぞ。

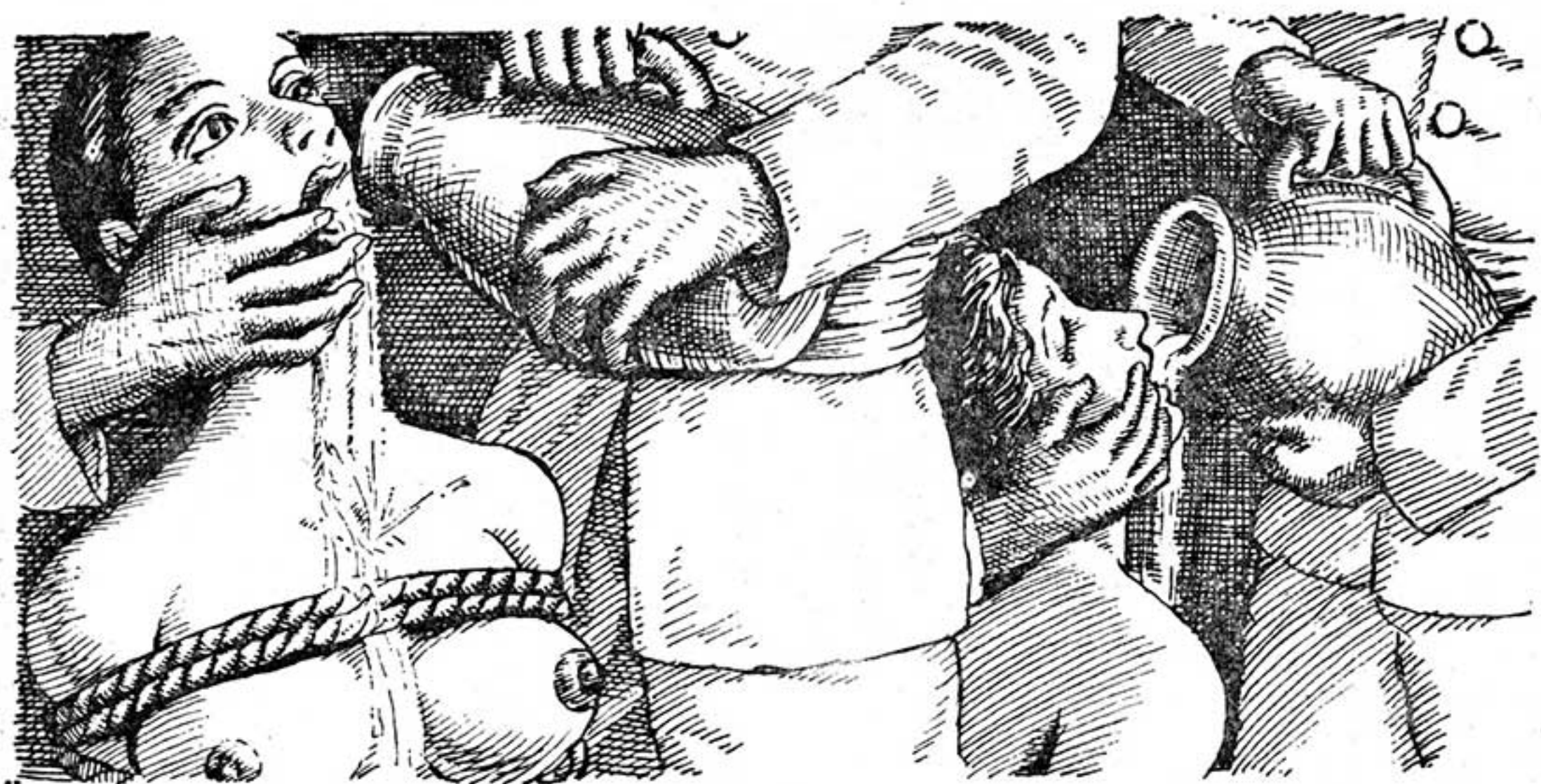
皆の者、この異国女を引き立てい！」

兵士達はたちまち彼女の腕をつかまえた。

「あッ、待ってちょうだい、待って！」

×

叫んだが兵士達は耳もかさず、寄ってたか



って清美の手を取り、足を取った。

「にくい異国女を、掟によって処刑するぞ。」

それ、この娘を縛り上げろ」

「ああッ、待って、それだけは許して——」

必死の叫びも空しく小屋の壁にこだまするばかり、みるみる服が剥ぎ取られてゆく。

「助けて、だれか……あーッ」

火のような恥ずかしさ。パンティー一枚の姿でぐいと引き起こされると、ブラジャーを失った乳房が大きくむき出し、大勢の視線がそそがれる。胸を押さえようとする両腕は、無慈悲に背へねじ上げられるのだ。

清美はぐったりと首を折ってうなだれた。

「よいさまじゃ。それ、縄を掛けろ」

祭司がせせら笑って命令した。むき出しの乳房の上から、キリキリと縄が掛けられ、彼女の裸は高手小手に縛り上げられた。

×

「待って。お客様を縛るのは待って。お客様は泥棒じゃない。泥棒はほかにいる！」

高手小手に縛り上げられた清美に取りすがり、そう叫んだのはニシマだった。人々を見廻して、少女は一生懸命に叫んだ。

「私は知ってる。泥棒がだれだか知っているわ。今まで恐ろしくて言えなかったけど、お客様がお気の毒だから、思い切って言うわ」

「何じゃと。それは一体だれだというのか」

祭司はぎょっとした顔で少女をにらんだ。

「ニシマ、それはだれなの、言って！」

清美は思わず縛られた身を乗出した。ニシマは青い顔で右手を上げ、思い切ったように祭司の横に立っている巫女を指さした。

「泥棒はこの人だわ。昨夜、この人はお客様の留守中に、この窓の外から、何だか細長いものを、ごそごそ窓の中へ押しこんでいた。私はちょうどそこを通りかかって見たの。白い着物に見覚えがあるわ。泥棒は巫女様だ」

×

巫女は不敵に笑った。

「この私が泥棒ですって、ニシマよ、神に仕える巫女を盗賊呼ばわりするからには、お前にもそれ相当の覚悟がおりだろうね」

ニシマは青ざめながらもうなずいた。

「よし、そのような疑いを受けては、私もこのままでおれぬ。祭司様、異国の娘と、この私と、どちらが真の犯人か、存分にお調べ下さい。私達二人を同時に拷問にかけて、どちらが先に白状するか、お調べ下さいまし」

巫女はきっぱり言い切ると、自分の帯を解いて、着ていた白衣をするりと脱ぎ捨てた。

「兵士共、私も縛るがよい、それ」

腰布一枚の裸になって巫女は兵士を促し、

静に自分から両手を背中へ廻すのだった。
「よう申した。皆の者、巫女を縛れ」

祭司の言葉に、兵士達はおどろかかって、
巫女の裸に縄を掛けた。

「兩人とも歩け。神殿で拷問にかけてやる」

「ううむ、う、うッ、ム——」
大神殿の中に清美の苦悶の声がひびいた。
大きな蛇の像を祭った祭壇の前に、二人の
女の拷問が同時に行われている。

天井から二本の鎖が吊され、その下に二つ
の白い肉体がうごめいていた。

鉄鎖の他端に二三人づつの兵が集まって、
同時にギリギリギリ……と引き絞っている。
二人の裸がみるみる宙に浮き上がってゆ
く。

「ううッ。あ……ッ」

高手小手の縄目がギリギリ吊上げられ、乳
房に食いこんで来る。思わず胸をそらし、爪
先立ちになって体重を少しでも支えようとす
る清美だった。足先で床を探り、ぐるぐる回
転しながら二本の脚を踊らせる。全身が真直
にのび、細いウェストが一そう細くくびれ
た。

だがその隣に、顔色一つ変えず、微笑さえ
浮べた巫女の裸が悠々と宙に吊られていた。

×

「打て、巫女をむち打って責めるのじゃ」
吊責めが利かぬと見た祭司の命に、一人の
兵が鞭を持って進み出た。

びしり！ 竹の鞭がつんざくような音を立
てて、宙に吊られた巫女の背に食いこんだ。

巫女は平気な顔だった。

びしり！ と第二撃、三撃、四撃——しか
し、巫女は相変らず全然感じない顔だ。

「ええ、二人がかりで前後から打ちすえろ」
祭司の命にまた一人が進み寄った。二人の
兵は巫女の前から、背と言わず、胸と言わ

ず、腹と言わず、腰と言わず、雨あられの鞭を浴びせた。

「どうだ、まだこたえぬか」

手たれるたびに、巫女の裸はゆらゆらと宙にゆれ、まるでブランコにでも乗っているように、巫女は目を細めて気持よさそうに数を読んでいた。

「九十二、九十三、九十四……」

×

「今度は水だ、水を飲ませろ」

鞭も利かないので水責めの番になった。宙吊りのまま、巫女のそばへ台がおかれ、一人の兵が巫女の顔を上へ向け、口を聞かせた。今一人が大きな水瓶を抱えて、巫女の口へ水を流しこむ。

みるみる、宙に吊られた巫女の腹が樽のようになふくれ上がった。水瓶の水が残らず胃の中へつきこまれた。

次ぎの瞬間——巫女の口から滝のように吹き出した水が、大洪水となって室内の者を残らず激流の渦に巻きこんだ。

「わあッ、助、助けてくれ！」

兵士達は悲鳴を上げて水中にもがいた。

「み、巫女様、許して下さい。わしらが悪かった——」

気がつくとも激流は跡形もなく、何事もなか

ったように微笑している巫女の姿があった。兵士達はふるえ上がって後ずさりした。

×

ヨガの秘法を始め、インドに古来から伝わる魔術を会得しているらしい。恐るべき妖女だ。兵士達は顔見合せした。

「何をしている。もう一度、巫女を縛れ。拷問をやり直すのじゃ。意気地なし共め」

祭司の厳命に、兵士達は恐る恐る巫女に近づいた。

「巫女様、祭司様のご命令で。もう一度、縛らせて下さいますか」

巫女は胸をそらせて笑った。

「何べんでも、縛りなさい。大体、縄の掛け方がゆるいから、あたしが術を使えるのよ。」

さあ、今度はしっかりお縛りなさい」

兵士達は何が何だかわからず、夢のような気持で、言われるままに巫女の鞭に縄を掛け直すと、夢中でキリキリ縛り上げた。

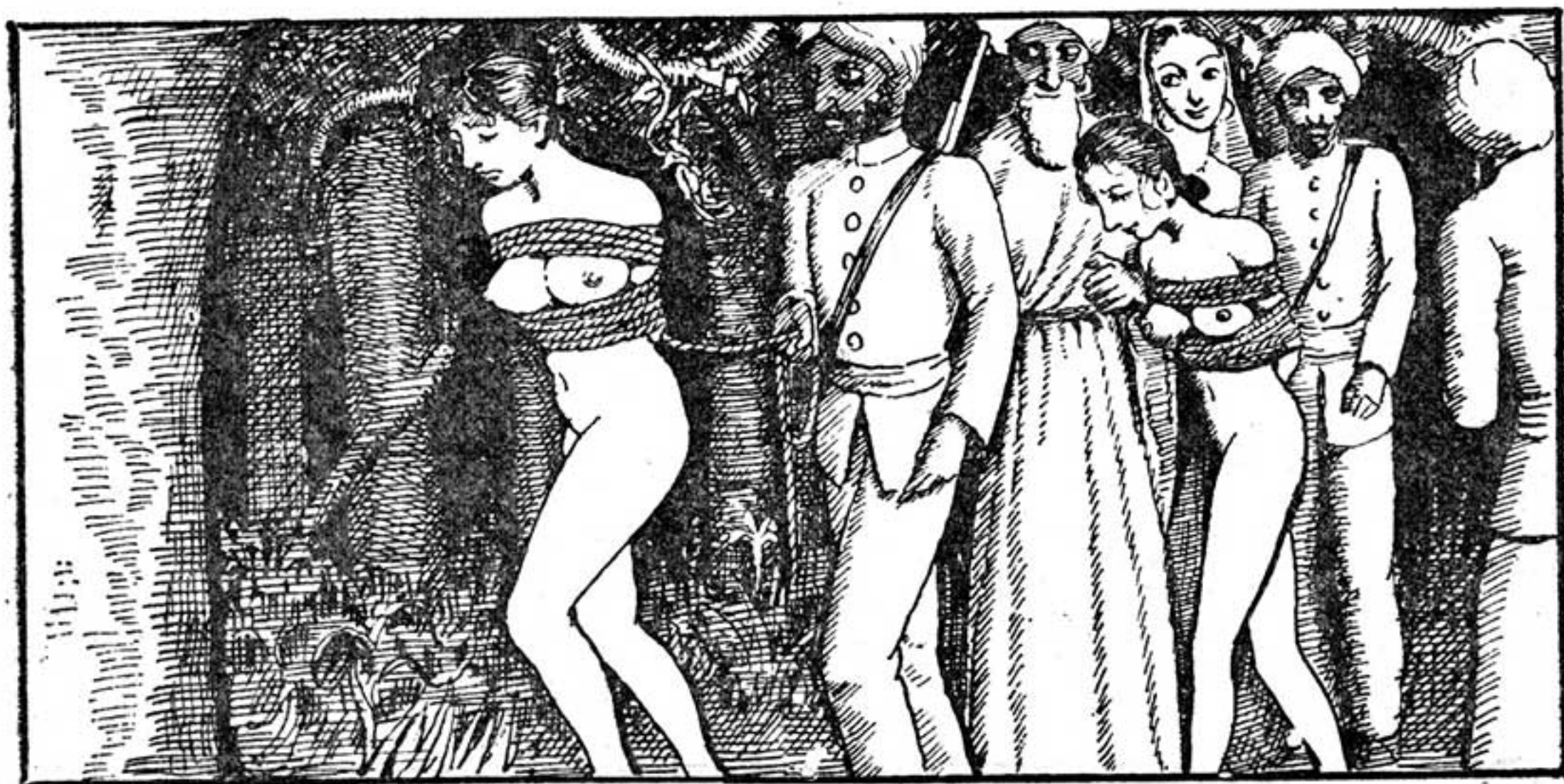
「ううん、今度は利いたわ。あッ、痛……」

巫女は苦痛にたえかねるように、顔をしかめてうめいた。

×

「それ。今度は車責めじゃ。車にかけろ」

縛られた巫女の鞭は高さ一メートルほどの太い丸太の横木にくくりつけられた。



高さが中途半端なので、立つことも坐ることも出来ない巫女は両膝を突き、中腰の姿勢で立っていた。

三人の兵が背後で彼女の両足をすくい上げて引いた。巫女の上体は横木にくくられて水

平に吊られてしまった。

両足が背後へ伸ばして緊縛される。二人の兵が前に廻って、その縄尻をつかむと、横木の上を通してぐいぐい引っ張った。

巫女の上体が宙に廻転した。

横木を心棒にして、巫女の柔軟な体がうねうねと逆海老の形にそり返ってゆく。

さすがの巫女も苦悶の声を上げた。

横木に吊られたままの逆海老責めだ。上体を横木に固定されたまま、両脚が天井を向き



腹と胸が逆さまに吊り返る、人間車輪だ。

×

「次ぎは異国の娘だ。並べて車にかけろ」

見ていた清美は思わず悲鳴を上げた。

吊り責めだけでも半死半生の清美だった。

その上、巫女と同様に裸打ちと水責めで息も絶え絶えになっているのだ。

兵士達は容赦なく彼女の裸を巫女と並べて横木にくくりつけた。両足がすくわれ、上体がガクンと前のめりに横木に吊られた。

「うッ」

乳房に食込む縄目の激痛。両足が緊縛されて縄に引かれた。背骨がめりめりと音を立て胸と腹が引き裂かれる痛苦！

頭のシンに火が渦巻いた。彼女は思わず叫び出していた。

「うう……むっ、ゆ、許して。は、白状しますから許して！」

「なに、白状すると。王の象牙を盗んだことを認めるのにじゃな」

「は、はい。ううッ、認めますから許して」

×

気がついた時、祭司と巫女とが勝ち誇った顔で清美の前に立っていた。

「異国の娘、汝は国王の象牙を盗んだ罪によって密林に追放する。ニシマも同罪じゃ。皆

の者、この娘たちを密林へ引っ立てろ」

「ああ……」

最後の羞恥と絶望の声を上げたが、もう抵抗する気力はなかった。

間もなくニシマも引き立てられて来た。恐怖のあまり少女は口も利けない。兵士達は彼女を捕えてしまった。

「ふふふ、二人ともよいさまだわ。さあ皆、二人を縛り上げて密林へ追い立てなさい」

巫女が二人を眺めて嘲笑した。

清美はふたたび引き起こされ、改めて、前よりもきびしく縄を掛けられて無残に縛り上げられてしまった。

×

密林の奥に、清美とニシマは、立木の枝から吊られて、辛うじて足先で身を支えていた。あたりは夕闇が迫っている。

くやしい——巫女との拷問くらべに負かされ、覚えの無い罪を白状させられた。祭司と

巫女の奸計におとし入れられたのだ。こんな所で、ニシマと共に、みじめにも縛られて野獣の餌食になるのか、くやしい！

清美は歯を食縛り、身もだえした。が、どうすることもできない。

突然、前方の草むらから、真黒な野獣の影がのそりと現れた。

「あつ、黒豹！」

ニシマが恐怖の声を上げた。清美は必死に足に力を入れ、身をもがいた。が、高手小手の縄目が一そうきびしく、乳房に食いこむだけだった。

黒豹は清美をめがけて飛びかかった。

×

その時、一本の矢が飛んで何て、黒豹の首筋に音を立てて命中した。

「お客さま、ニシマよう！」

かなたから叫び声がひびき、弓矢を持った男が駆けつけて来る姿が目に入った。

「あつ、あなたはチャブル！」

かけ寄った男の顔を見て清美は叫んだ、チャブルは弓矢を捨てて彼女の前に平伏した。

「申しわけねえですだ、お客様。わしは、祭司と巫女の二人に買収されて、お客様を裏切った。わしは、たった今、国王様に何もかも申し上げ、お二人を許してもらって来た。今ごろは祭司と巫女の二人が兵隊につかまり、牢にぶちこまれているはずだよ。お客様、かんべんして下せえまし……」

「あたし達、助かったの、助かったのね……」
縄を解かれた清美は、気のゆるみでぐったりとなりながらも、ほっとして、ニシマを抱き寄せ、深い深い息をついた。

女の争い

五 所 章

都 築 峰 子・絵



四方が灰色のコンクリートの壁だった。窓というものが、ひとつもない。

ゆかは、古びた固い板だった。天井からはほこりだらけの裸電球がひとつ、ぶらさがっていた。にぶい光りを投じている。

ビールのあきびんをつめた木箱なんかが散乱している。すみに水たまりがある。

やっと目かくしがはずれた。見ると、その目かくしは、汚らしい手ぬぐいだった。

マミは、あたりをみまわした。

——地下室だな、おみせの……と、思った。

キャバレー「ノンシャラン」には、地下室が三つほどあるが、そのうちで、いちばん小さい、あまり使うことのない部屋だった。

マミは、うしろ手に縛りあげられていた。縛られるとき、あまり抵抗しなかった。縄は存分に、肌にくいこんでいた。呼吸をするのも苦しい。肩で息をする。

両手首が、しっかりと背中中に固定されている。みごとに縛ったものだ。マミは感心してわずかに首をふった。

ふつうの縄ではなく、へんなヒモで縛っている。わかった。ビニールのコードだ。

縄よりも細目で、だから肌によりきつくいこんでいるのだ。

マミは、スリップ一枚だ。うすいピンク色の、ナイロン製のやつである。その下には、これももちろんナイロンのパンティ。裸ではないが、裸も同然である。

マミのからだは、固い板のゆかの上に、ころがされている。

夏だからいいようなもの、これが寒いときだったら、冷凍人間になってしまう。

——死ぬのはいいけど、凍死なんてのは、あまり好きではないわ。

と、マミは思った。

死、ということばを思ったとき、マミは、

ああ、そうだ、と思った。

——あたしは、自殺しかけたんだっけ。

男にふられ、そのくやしさに、睡眠薬を、
ばりばりたべて死のうとしたのだ。

ウィスキーをグラスにつき、睡眠薬の錠剤
を、サカナのようにして、やっと三粒ばかり
たべたときだった。

「マミさん、マミさん」

ドアの外で、男の声がした。

「なによウ、いまちよつと、いそがしいの」
と返事したが、男はまだ呼んでいる。

うるさくなって、ドアをあけたら、いきな
り、男がふたり、部屋のなかに押し入ってき
た。

「なんだい、あんたたち！」

と、さけんだが、その口はたちまち布でふ
さがれ、畳の上にねじ伏せられた。

左右の手首がつかまれ、背中へねじあげら
れ、そして、ビニールのコードだ。

乳房の上にもそいつがくいこみ、痛くてた
まらない。目かくしもされた。

マミの部屋は、このキャバレーの建物の、
三階にある。部屋といっても、三畳だけの、
ただ寝るだけの場所だ。

つまり、マミは、住みこみ女給、いや、住
みこみホステスだ。

ふたりの男に縛られ、かつぎあげられたマ
ミは、そのまま、地下室へ急降下というわけ
だ。

なんのために縛られ、こんなところへ連れ
こまれたのか、マミにはまったく、わからな
い。

ふたりの男の人相には、みおほえがある。

この界わいをうろついているチンピラだ。
顔は知っているが、口もきいたことのない
相手だ。うらみをうける理由は、すこしもな
い。

マミを地下室に運びこむと、ふたりのチン
ピラは、どこかへ行ってしまった。

深夜の地下室に、縛られてころがされてい
るマミひとり。

さるぐつわはされていないが、この部屋で
いくら大きな声をだしても、だれの耳にもと
どかないだろう。

一階には、宿直のボーイが、ふたりいるは
ずだが、いまはぐっすりねむりこんでいる時
刻だ。

腕が痛い。とくに、二の腕のいちばんやわ
らかなところに、ビニールのヒモがくいこん
でいる。

マミは、肩をすこし、ゆすってみた。

「痛ッ！」

ヒモはゆるむどころか、いつそうきびしく
肉にきざみこんでくる。肉と肉のあいだに、
陥没しているのだから、たまらない。

盛りあがった肉が、むらさき色になってい
る。手首だって、そうだ。十本の指を、そつ
とにぎってみると、つめたくなっているのが
わかる。

マミは、腰に力をいれ、両ひざを、すこし
曲げてみた。いくらか、ラクになる。

胸と腕と肩と背中あたりに、ぎりぎり、コ
ードで縛られ、すごい力で巻きあげられてい
るため、その痛みに神経が反応して、いまま
で全身が硬直していた。

いくら自殺途中のマミにしても、生きてい
るうちは、やはり、すこしでも、ラクにして
いたい。これは人情であり、本能である。

さすがに、深夜の地下室は涼しい。涼し
さるほどだ。そのせいか、蚊がいない。

——こんなに縛られた上に、蚊なんか刺
されたらたまらない。それこそ蚊責めだわ。
からだじゅうが赤く、はれあがってしまう。

と、マミは思った。

同じかたちでねていると、下になったほう
が、すぐにしびれて痛いので、反転する。

積極的に逃げようとは、思わない。そのう
ちに事態が、なんらかのかたちで、変わると

思っている。

このとき、この部屋のドアがあいた。

はいってきたのは、女だった。

マミは、女の足をみた。スリッパをはいている。

「どうしたい。すこしは身にこたえたかい」

女がいった。

マミは首をねじあげて、女の顔をみた。

「なあんだ、あんたか」

女は、この店で働く同僚の、えり子だ。

えり子のスリッパの足が、マミの肩をけつた。憎悪のこもった目で、マミの顔を見おろした。

「泥棒猫！」

と、マミの顔へののしった。

「チンピラふたりを使って、あたしをこんなところに押しこんだのは、あんただね。だけど、どうして……」

えり子の足が、マミの乳房を踏んづけ、マミは、ぐうッとうめいた。

「復讐だよ、女の復讐だよッ！」

えり子の手が、マミの髪の毛をつかんだ。つかんだまま、上へひっぱった。マミの目じりが、吊りあがった。

「起きろ、ねてるんじゃない！」

髪の毛をつかんでひき起こし、マミのから

だを、コンクリートの壁の前にすわらせた。

マミの背中が、壁にふれて、肩のあたりがひやりとした。湿っぽい。

「いいからだをしてるね。ちくしょう！」

えり子は、平手でマミの頬を、ぱちん、ぱちんとたたいた。かなりの力だった。

マミの顔がのけぞった。なぐられたあとの頬が、たちまち赤くなった。

えり子の憎悪の原因が、なんであるか、わからない。

わかるのは、えり子が逆上していることだけだ。いまは、落ちついて理由をいえと言ったところで、無駄である。

えり子のヒステリー性を、マミはよく知っていた。同僚である。先輩であった。

同僚ではあるが、友人ではない。むしろ、仲がわるかった。あまり、口もきかない。

えり子は、いつも神経質そうな美貌をひけらかしている。頭の回転が早く、りこうである。たいていの女は、自分より頭がわるいきめこんでいる。

マミは、短期大学をでている。絵を勉強している。自分の本業は油絵で、キャバレーはアルバイトだと思っている。

それを口にだしたことはないのだが、いつものまにか、えり子に知られ、しだいに憎まれ





て、敵視されるようになった。

自分より学歴のあるインテリ女性の出現が
えり子にはくやしいのだ。勝手に比較し、勝
手に嫉妬しているのだった。

そのへんまでは、マミにもわかる。しかし
その嫉妬だけで、こんなに逆上し、なぐった
り、けったりしているとは思えない。

えり子の目は、血ばしっていた。

「あたしはね、お前を、めちやくちやにして
やりたいんだ！」

えり子の手が、マミの乳首をつねり、ぎゅ
うツとねじあげた。これには、マミもたまら
ない。思わず、ひいーッ……と悲鳴をあげ
た。女同志だから、相手の急所もよく知って
いる。こんどは、右手の親指と人さし指をま
るめ、乳首をめがけて、人さし指で、ぴいん
ッとはじいた。また、ひいッと声があがる。
「ちくしょう、すべすべした、いい肌をして
るね、シミひとつ、ないじゃないか！」

五本の指をたてて、マミののどから胸もと
をひっかいた。白い肌に、五本の線がひかれ
た。えり子のツメである。まるで猫だった。

「やめてッ、まるであんだ、きちがいね！」

たまらなくなつて、マミはいった。

「なんだって！ きちがいだって？」

えり子の目が、青白く光った。病的な光り

かただ。マミは、ぞツとした。

「ようし、きちがいらしい、復讐のしかたを
してやるわ！」

憎悪をこえた、呪いの目だった。えり子は
立ちあがり、せまい室内をみまわした。

ビールのあきびんが、目にはいった。その
一本をつかんだ。

びんのなかには、半分ぐらいの液体がはい
っていた。ビールびんの中にはいつているの
だから、ビールだろう。客が残したやつだ。

「この腐ったビールを、むりやりお前の胃の
なかにのませてやる。腹をこわして死んじま
いな！」

そういうと、えり子は、左手でいきなり、
マミの鼻をつまみあげ、ねじりあげた。

「うわッ、むッ、むッ！」

マミは思わず、口をあける。そこをすかさ
ず、歯と歯のあいだへ、ビールびんの口を突
ッこんだ。乱暴にねじこむ。

「わッ、わ、わ、わあッ！」

びんをさかさにする。ごぼごぼと、ビール
がマミの口のなかへ流れこんだ。

すっかり気のぬけたビールだ。にがさが消
えて、すっぱくなっている。

マミの口から、その古ビールがあふれた。
あごからのどへ伝わり、胸乳がぬれる。

「ぐふ、ぐふ、ぐふッ！」

と、マミはむせた。こらえようとしても、ビールはのどを通過し、胃のなかへはいってしまふ。すごく気もちがわるい。吐きけがする。

腐ったビールは、すぐになくなった。三分の二はマミのひざの上へこぼれ、あとはどうやら、むりやり、のまされてしまった。

カラになったビールびんを、マミの口からひっこぬくと、えり子は、にやりと笑った。

「このビールびんの口をね、もういちど、お前の口のなかへ突っこんでやる！」

えり子は、逆上して赤くなった顔でうめいた。そして、その行動に移った。

びしゃッ、という音がした。ぬれた布切れが、コンクリートの壁に投げつけられた音である。ビールでぬれたパンティだった。

パンティは、片手の中ににぎりしめられるほど、小さくなっていた。壁に淡いシミをつけて、パンティは、ゆかの上に落ちた。

パンティを壁にたたきつけたのは、えり子である。パンティの主は、マミだった。

えり子は、ビールびんをにぎりしめた。

「へたな抵抗をするとね、よけいに痛いんだからね」

ごっん、という音がした。マミが、ふたた



び、ゆかの上に、あおむけにねかせられ、マミのあただが、固いゆかにぶつかった音だ。

「ばかッ、ばかッ、なにをするのよ！」

マミはうめいた。えり子の行動の目的をさとして、さすがにあわてた。

「あたしの正男さんをとった憎い女、こうしてやる！」

マミは、おそろしい力でおさえつけられ、もう抵抗する気力をうしなった。マミは自由にさせながら、そうか、そうだったのか、と思った。えり子はしきりにわめきつづける。

——やっつと、わかった。この女の、逆上の

理由が……。

正男を奪った、と言った。

そうか、正男は、前にこんな女とも関係していたのか。これは、マミには、いささかのショックだった。

「ほくにとって、きみははじめての女性だ。ほくは、きみが好きだ。純粹の愛情をささげる。神に誓って、この初恋を成就させる。ほくと結婚してくれッ！」

ずいぶん熱っぽく、正男はマミをくどいたものだ。こんなに熱烈になんども求愛されたら、たいていの女は、陥落する。

……

マミは、正男の求婚に応じようと思った。経済的に考えてみても、けっして悪い相手ではない。

正男は、このキャバレーの経営者の長男である。来年、大学を卒業する。そして、音楽家をめざしている。作曲の才能は、すぐれたものであるらしい。

「マミはほくと結婚後も絵を描くんだ。ほくは妻としても、画家としても、マミを愛しぬく！」

ずいぶん、うまい殺し文句を、正男はささやいたものだ。マミは恍惚となった。

その正男が、どこかの、ゴルフの道具を作る会社の社長の令嬢と婚約し、来春、学校を卒業と同時に式をあげる、ということ、マミは、きのう、きいた。

正男に会ってたしかめたら、否定しないのだ。マミは、がつくりきた。やっぱり、正男を愛し、正男との結婚の幸福を夢みていたのだ。

そこで、自殺を決意し、やりかけた……。やりかけた自殺をさえぎったのが、やはり正男にだまされていたえり子だったとは、いささか、皮肉な話だ。

ビールびんの口が、マミの口のなかに、はいたり出たりしている。マミはうめいた。

えり子なんて、まったく、つまらない女だと、マミは思う。そんなえり子に興味をもつて、たとえアソビにしろ、くだいたという正男も、たいした男ではなかったらしい。

——よかった、自殺なんてしなくて、よかった！

と、マミは思った。ビールびんの先端が、また、ぐぐぐうツと侵入してきた。

正男の攻撃は、まったく電光石火だった。マミは、二週間で身をまかしてしまったの

だから。天才的な、ドンファンなのだろう。

正男の相手が、早くももう変わってしまったということ、えり子はまだ知らないのだろう。哀れな女だ。自分も哀れだが、えり子ほもっと哀れだ。

いまのえり子の一言で、まるで熱病からさめたように、マミの正男への愛はさめてしまった。だが、えり子はなおも、あの男を愛しているのだ。愛しているからこそ、こうして嫉妬にくるっているのだ。びんのうごきがはげしくなり、マミは、まゆをしかめた。

「えり子さん」

と、マミはいった。

「やめてよ。あなたに、お話しすることがあるの」

マミのこのことばは、しかし、えり子の耳

にはいらなかった。夢中になって、うごかしている。マミは歯をくいしばった。

生きたい、生きなければならぬ。あんな男のために、いのちをうしなっては駄目だ。

マミのからだは熱くなった。

はじめて、人間らしい痛覚が、マミの全身をおそった。

マミの左右の腕をきびしく背中にいまして、たビニールのヒモが、針金のような強さで、肉を責めつけている。腕や胸の肉が、くびれあがっている。

「えり子さん、や、や、やめて！」

マミの腰が、一瞬、宙に浮いた。

裸電燈が、赤っぽくマミの顔を照らした。

えり子は全身に汗をかいている。

「ま、まって、えり子さん。あなたも、あたしも、被害者なのよ。こんなことをしていても、なんにもならないのよ」

悲鳴に似たマミのことばも、えり子の耳は受けつけない。ふたりとも、水を浴びたような汗だ。苦痛とはちがう声をマミがあげた。

ひとりの男をあいだにはさんで、女同志の争闘である。その男はもう、この二人から逃げてしまったというのに、まるで、白いけものようなすがたである。

■彼女は器械の中に身をゆだね
そのまま溺れこんでいくのだった！

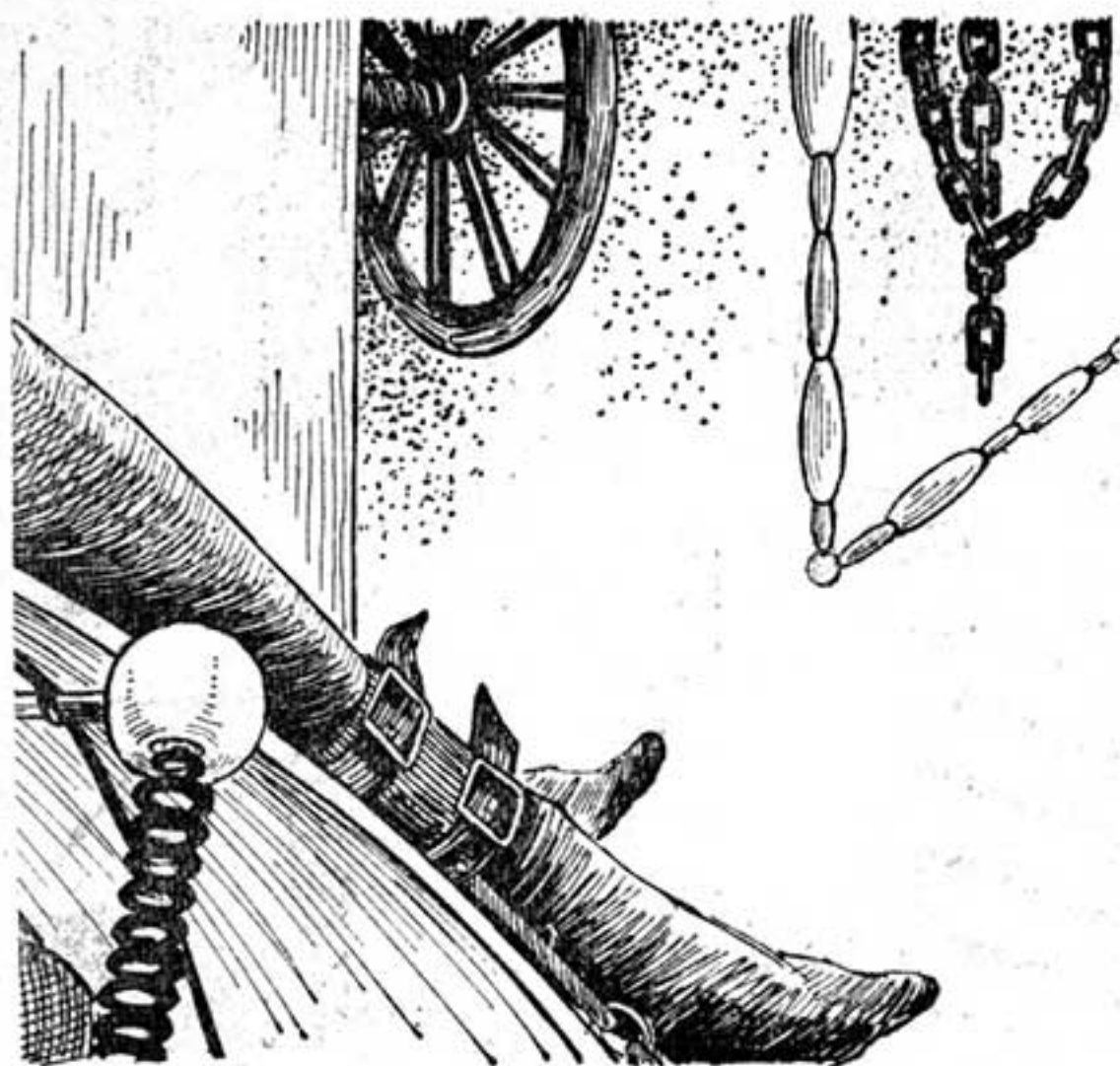
フイギュア・トレーニング

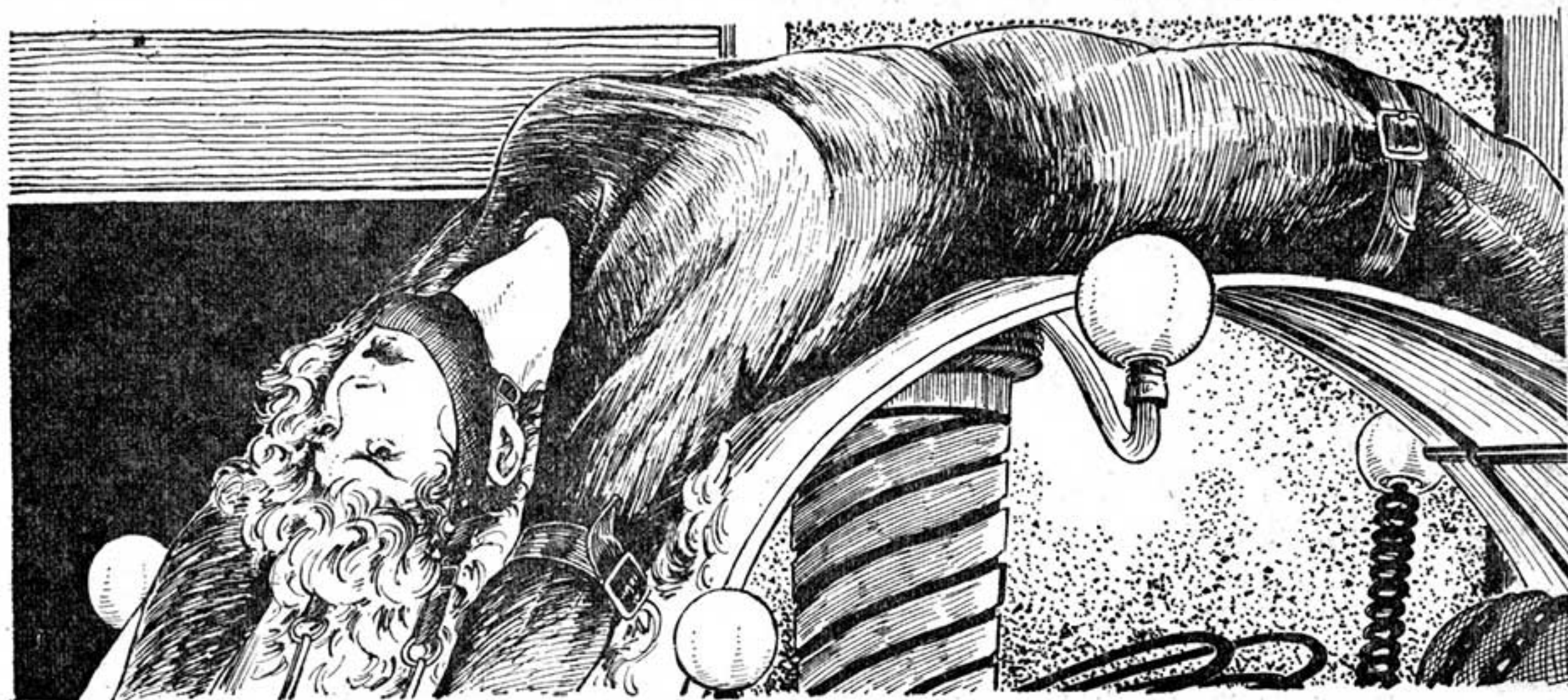
春川 光彦

鬼頭 暁・絵

—
西銀座から新宿へ向かう地下鉄は、時刻の
せいか比較的すいていた。
多少アルコールの入った身体を、どっかり
と座席におちつけると、それがいつものくせ
で重森明夫は、前の座席に坐っている乗客の
顔を右から左へ、じろっと一通り見渡した。
一人ひとりの服装人相から、その連中の生
活、職業を類推してみるのが彼の趣味の一つ
である。

その晩の乗客も、殆んどが山手の住宅街へ
帰るサラリーマンかBGたち。学生が二、三
人まじっている。サラリーマンもその服装と
顔立ちを見れば、一流会社に勤務しているか、
三流会社で安月給にあえいでいるのか、将来
出世する可能性のある男か、まったく見込み
のない男か、彼にはすっかり判るような気が
するのだ。見知らぬ男たちを眺め、観察し、
現在の自分の境遇と比較して、重森明夫はひ
そかに優越感を味わい、また劣等感や男性特
有の嫉妬心を噛みしめたりしている。





ひと通り見まわしてみても、彼は自分の斜め向こうに、飛び切り変った興味万点の男が一人坐っているのに気がついた。

まず靴。その男の靴は足の大きさにはおかまいなしに、ぺたんとだらしなく横にふくれあがっている。長い間、およそ手入れなぞせず遠慮会釈なしに履き潰された結果、現在の形になったのだろう。もし、買うつもりだったら浅草の裏にある古靴市場で、一足百円くらいで売っている代物だ。

白っぽくなった黒靴に緑色の靴下、茶系統のよれよれのズボンの上には、灰色のボテッとした厚手のオーバーが覆いかぶさっている。

もう、およそオーバーコートの季節ではない。せいぜいがスプリング。車内を見まわしても、厚ぼったい冬オーバーを今だに着ているのは、その男だけだった。

しかも、そのオーバーの物凄さ。襟の折りがえしのおどろくべき大きさは、とても戦後の作品ではない。生地のかたびれ方、型の古さと、これも浅草の古着屋の産物か、情け深い方によって、男に恵み与えられたものだろう。

よく判らないが、男の年齢は多分三十代の半ば。昭和の初期の産物と思われるこのオー

バーは、まず男のために誂えられた品物ではない。

オーバーの膝に置いた男の手には、太めの毛糸で編んだ黒い手袋。これも、男の身を案じる人の手づくりだろう。しかし、模様一つない毛糸の手袋はいかにも野暮ったい。

口には白いガーゼの、ごくありふれたマスク。全体にそれが薄汚れて、しかも鼻孔の当る部分が特にひどく黒ずんでいるのは、この男が不精者で、その上、空気の甚だしく汚染したところに、長時間いたことを物語っているようだ。

貧弱な黒いセルロイド縁の眼鏡に、油気の全然ないボサボサ髪。顔は茶色く生気が感じられない。眼鏡の下で皮膚も、かなりたるんでいるようだ。

赤坂見附駅で、客がどっと乗り込んで来ると、重森の位置からは、もうその男が見えなくなってしまう。

（あれはどういう男なんだろう。下町の汚い町工場の経営者か、その使用人か。そうだ、浅草行の地下鉄だったら、ああいう敗残者のスタイルの男が、時に乗っているものだ。だが新宿行の丸の内線には珍らしい男だ）

新宿三丁目へ着くと、どやどやと降りる乗客に混って、男も席を立った。反射的に重森

も扉口へ向かう。彼の降りる駅は本当ならもう一つ先なのだ。そして小田急へ接続する。

重森は腕時計を見た。十時少し前。まだいいだろう。散歩がてら、男のあとを少しつけてみて、場合によったら、新宿の御無沙汰しているバーに顔を出してやろう。とっさの間に、それだけの決心をした。

男はいつの間にかマスクをはずしている。
(これから外へ出るというのにどういふつもりなんだろう)

馬鹿みたいにポカンと口を開け、めくれた唇から黄色い乱ぐい歯がぬっと突き出している。疲れ切った表情、土気色をした不健康な肌。肩を小さくゆすりながら、前かがみになって、ひょこひょここと頼りなく歩いて行く。
地下鉄口から外へ出ると、電車道を横切つて、男は裏通りへ消えていく。追分と言われるあたりだ。

(あの男は、身体が悪いんだ。長期療養者に違いない。きっと十年以上も療養所に入っていて、やっと最近出て来たのだ。人生になんの希望も持てず、周囲の厄介者になって、じめじめと生きていく。あれはそんな男だ。
だから、もう春だというのに、あんなにたくさん、ごていねいに着こんで。着れば身体にいいと思っっているんだ)

哀れな男は、バーや飲み屋の裏小路を歩いていく。

次ぎの大通りへ出た。その角に、夜目にも白く新築の四階建てビルがそびえている。

一見、病院のような建物だ。

男はその玄関に立つと、ためらいもせずと呼鈴を押した。

玄関に明りがつく。扉が内側から開かれて、「お帰えりなさいませ」

若い女の声だ。パタパタと廊下をかける二人の足音が聞こえる。

「お帰えりなさいませ」

迎える声が重なって、男は部屋に入ったようだ。

(なんだ！ たいそうなお迎えじゃないか。まるで、ご主人様だな)

ビルの看板には「フィギュア・トレーニング」「桂木美容研究所」と大書され、玄関の表札には「医学博士、桂木清信」と記されている。

(美容研究所とあの病みあがりの男か、これはちょっとおもしろい取りあわせだ)

重森は暗闇でつぶやいて、たばこに火をつけた。

重森明夫、彼の職業は、実話週刊誌の編集長である。

二

その夜から二日後、一人の若い女性が桂木美容研究所を訪れた。

ペーシユの薄手のコートをまとった、長身の派手な顔立ちの女である。堅気のお嬢さんのようでもあり、バーかクラブに勤めているホステス嬢のようにも見える。

待合室に通されて、案内書を手渡された。

『……当美容研究所は、皆様の肢体をより美しく整え、完全なスタイルに訓練することを目的とし……』といった文字が見える。

間もなく所長の桂木博士が姿を見せた。

女は田上理恵と名乗って、

「お友達から、先生のことをうかがってまいりました。あたくし、先生にご相談して、もっと……」

「もっと、おきれいになりたい」

桂木はちょっと首を曲げて理恵の顔を窺った。

「あなたは、なかなかよいお顔をしています。しゃる。ちょっとコートをぬいで下さい。そう、貴女は少し猫背ぎみですね。ウエストも、もう少し細い方がいい。頸に余分な脂肪がついている。ここへ通ってみますか？」

田上理恵は診察室へ通された。



「ここに、全国的美容研究所が集まって作成

した、六三年型の女性の美しいプロポーションの傾向について、というパンフレットがあります。かいつまんで申しあげると、

- 1、身長に対する体重が減っている事。
- 2、バストは大きくなっている事。
- 3、ウエストは極端に細くなっている事。
- 4、ヒップはバストに較べて差が少なくなっている事。

5、頸は細く、すんなりとなっている事。

とまあ、こういうわけなんですけど、あなたのおからだを考えると、幾分トレーニングす

る必要があるようですね」

診察室の隣りは、訓練室という金文字のプレートが入口に嵌め込まれている。内部にはさまざまな美容器械が置かれているらしく、ブーンという小さいモーターの唸りや、カタッ、カタッというリズムミカルな器械の運転音が、絶え間なく伝わって来る。

「中を見えますか？」

訓練室の内部は、ところ狭しとばかり、大掛りな器械が据えられ、全身を黒のトレーニング・タイツに包んだ五、六人の女性が器械に身体をはさまれるようにして訓練を受けて

いる。

壁側の二人は、モーターで小刻みに揺れる巾広のベルトを腹や腰に当てて、じっと身をまかせている。贅肉や無駄な脂肪を取り除くための、よくクラブ等で見かける美容器械だ。

なんのためか、中央の女は薄い板の上に、あお向けに寝て括りつけられている。首に皮製の首輪をはめ、手足も伸ばして上下に強く引っばられているらしい。器械のモーターが動いて、周期的に板の中央部が高く盛り上がる。板が半円形にまで曲がると、括りつけられた女は板の上で、海老のように身体を反りかえらすのだ。身体を上下に引かれていてかなり苦しいらしい。

「ううむ」

板の彎曲が極限になると、女の顔が真っ赤になって、低い呻き声がもれる。

もう一方の壁側では、絞首台のような大きな機械の中で、女が宙吊りになっていた。

頭から後頭部にかけて、黒い皮製の首輪が巻かれ、その皮器具だけに体重の全てをかけて、ぶらんと空中に吊られている。

頸が細く伸びきり、皮具が頸に喰い込んで痛々しい。顔もゆがみ、眉が吊り上がっている。

「見た目にはちょっと残酷ですけど、なれ

ば別になんともないですよ。中世紀のイギリスの貴婦人が皆やった方法で、猫背をなおし、背を高く、頸を美しくするのには一番効果的な方法です」

桂木博士の説明で、理恵は取りあえず三カ月ほど通ってみることにした。

入会費、千円。トレーニング指導料、月額二千円（三カ月分前納の事）。器械使用料、月額千円。等と書かれた書類を渡された。

訓練は週三回。月、水、金、の昼間約二時間ということだった。

三

新宿の駅近くにある喫茶店へ、美容研究所帰りの田上理恵が立ちより、間もなく重森明夫が姿を現わした。

二人は並んで席を取る。

「どうだった？ 理恵ちゃん。何か変わったところはなかった？」

「そうね、わりと繁盛しているみたいよ。美容法としてはちょっと変っているようね。他所と同じこともやっているけど、なにか極端なものもあるわ。もっともこの頃の美容研究所はどこでも、思いついたことをやるらしいから、一がいには言えないと思うわ」

「所長の桂木というのはどんな男？」

「そうね、年は三十五くらい。もうちょっと若いかな。背の高さは普通。重森さんくらいね。色が白くて、ほっそりしていて、顔はちよつと神経質なお医者様タイプ。眼が澄んでいて、そう、歯並びがとっても綺麗で魅力的だったわ」

「ふむ。このあいだ話したような男は見たか？ 病人みたいな、顔色の悪い、乱ぐい歯の男」

「それが、全然わからなかったわ。それにあのビルは四階まであるし、地下室もあるらしいわ。廊下の突き当りにエレベーターもあったし、なかなか贅沢な建物よ」

「実は、君を待っているあいだ、あの近所の米屋や、果物屋で、桂木研究所のことをいろいろ聞いてみたんだよ。そうしたら、案外にあの家は小人数なんだな。桂木先生は独身で家族はなし。居るのは住み込みの助手と、内弟子のような女性が四、五人というわけなんだ。家族にも、使用人の中にも問題の男に該当しそうなのはいないってことなんだな。そのくせ、近所の連中はあの病み上がりの男をよく見かけているんだよ。かなり前から、ちよいちよい訪ねてくるというんだ。朝早く、あの建物から出て来たところも見たことがあるから、泊まっていくことも多いんじゃない

か、と言っている。それにしても、あの、お帰えりなさいませ、と言うのはおかしいんだけどね」

「私、明後日から、あそこへ通うことにしたんです。そのうち調べられますわ」

重森明夫が編集している週刊誌は、かなりキワ物を掘り出して書き立てる必要があった。以前から抱いていた、美容研究所の中には、多少いかがわしいのがあるんじゃないか、という思惑と、持ち前の好奇心が結びついて、部下の女記者、田上理恵を桂木研究所へもぐり込ませることにしたのだ。

理恵はこういった探訪記事には、過去何回か経験があった。特に彼女の容姿は今度の仕事に向いている。

そして、重森明夫は、今年の秋にでも理恵と一っしょになる。世帯を持つつもりでいた。

四

翌々日、約束の時間に理恵は桂木美容研究所の待合室へ入った。

看護婦のように白衣を着た女が、理恵を訓練室の隣りの更衣室へ案内した。

簡単に身体の寸法を計った上で、黒い全身用のタイツが持ち出される。パンティだけ残して着衣をすべてぬぐと、足先から頸まです

つぼりと着せられた。背中がチャックで締められる。理恵の身体の線がくつきりと現われた。

訓練室へ入る。

「まず、頸の線を整えましょう」

桂木博士が近づいて、理恵の頸の長さを目測すると、皮製の縦に長い首輪のような物を持って来た。

首輪は長さ十二、三センチもあろうか。黒い柔らかい皮でつくられ、縦に金属の支柱が五、六本取りつけられている。

理恵は頸が長い方だった。首輪がその細い頸に巻きつけられ、背部で締められた。強く締めすぎれば理恵は呼吸が出来なくなってしまうだろう。しかし、桂木博士は手際よかった。呼吸にはさほど不自由でない程度に理恵の頸をびっちり締め上げたのだ。

唾液を呑み込むのがちょっと不自由だったが、理恵は苦しくはなかった。ただ、首輪に頸が押し上げられて、うつむくことも、左右を向くこともむずかしくなってしまった。

そして、理恵の心はなにか観念してしまっていた。桂木博士の指導のままに身体をまかせ、すべてを甘んじて受けなければいけないのだ、とそんなふうに考えはじめた。まだ経験はなかったが、身体を縛られたときの気持ち

はこんなものだろうか、と思った。今、理恵は身体の一部を他人の手で縛られてしまった。そう考えると、なにかジーンと熱いものが身体の中にひろがってくるのだった。

理恵はつぎに壁ぎわの器械で、ウエストに巾広のベルトを当てられた。スイッチが入ると小さき振動が快く理恵の身体に伝わってくる。じっと目を閉じて器械に身を委ねた。つぎの訓練は、最初の日に見た絞首台のよう大きな器械である。

器械の脇の壁には一枚の油絵が掛けてあった。中世の貴族の生活を描いてあるようだ。「これは、昔のイギリス貴婦人の美容法ですよ」

桂木博士が理恵の背後に立った。

「貴婦人達は、スタイルを美しく、ほっそり見せることに夢中でした。そうして、こんな方法を発明したのですね」

油絵に描かれた若い娘は、首に皮の器具をはめて、床上一メートル位のところにぶら下げられている。召使いの男がロープを引いて、娘の身体をなおも高く吊ろうとし、娘はかわいい両手に鉄の錘をしっかりと握って、頸に加わる重力をより強力なものにしようと努めている。

「この方法は、頸と背筋を整えるのには大へ

ん効果的なのです。ただ少しずつやらないと頸の関節が脱臼したり、頸の筋を痛めたりします。なれてくれば、この絵のように両手に錘を持ったり、足に錘を加えたりするんですが、まあ、田上さんも徐々にやってみましょう」

理恵は皮の首輪を外された。代りに、絵の娘が使っているような皮の器具が持って来られた。皮具は理恵の頸と後頭部に巻きつけられ、耳の下で締められる。絞首台の枠の中に入り、鎖が頭上で巻かれて、理恵の首は引き上げられた。爪先でやっと立てるくらいにして器械は止められた。

「最初はその辺から始めましょう。気分が悪かったら言うてください」

踵を床に着けようとする、全身の重みが理恵の細い頸にかかってくる。

首筋がちょっと痛いけれど、背骨がずっと延ばされて、悪い気持ではない。

時間がたつにつれて、頸にかかる重力はしだいに大きくなっていく。皮具があたる頸と耳のあたりが痛くなってきた。耐えられないほどではない。理恵の背筋を電流のように、表現できない快感が走った。吊られた身体が熱く、しびれるような心地よさだ。

理恵は、その瞬間、自分がなんの目的でこ

の研究所へ通っているのか忘れていた。

（こんな気持ちになるなんて、私は他の女の人とちよつと感覚が違うのかも知れない）

なん十分たつたろうか、鎖の音がして、理恵は床に降ろされた。

「あなたは少し猫背だから、ショルダー・ブレイスをしておきましょう」

助手の女が、茶色の皮製品を持って現われ、皮具は二つの丸い輪と、それを連結するたくさんの皮紐やベルトでできている。

黒のタイツをぬがされ、裸の上半身へじかに器具をきせられた。左右の腕をすっぽりと輪の中へ通し、皮具を背中へせおった形になると、桂木博士が後に回わって皮紐をいろいろに締めはじめた。

ちようど肩甲骨のあたりで強く締め込まれると、肩が後へ引かれ、理恵は自然と胸をそらせた姿勢になった。

「このショルダー・ブレイスは、アメリカではデパートで販売して極く一般に使われているものなのです。あなたもこのまま、夜寝るときも着けていられるといいんだが」

「大丈夫ですわ。私。でも、お風呂に入るときは……」

理恵は公団アパートのひとり暮らしである。ちよつと妙な格好をしていても、人目に

つく心配はなかった。

「入浴の時もこのままにしておいて下さい。

なればそう気にもなりませんよ」

ショルダー・ブレイスをはめた身体を、理恵は洋服でかくして外へ山た。

新宿の雑踏の中を、なに喰わぬ顔をして歩きながら、理恵は遠い子供のころを思い出していた。

理恵が小学校へ入ったころ、二つ下の妹に脱腸があることがわかった。

医療器械屋が呼ばれ、なん種類もの脱腸帯が取り寄せられた。脱腸帯には強力なバネが仕込まれている。

「このバネは強くて痛そうね」そう言って母親は総ゴム製のものを求めた。

妹の幼い股間にゴムの脱腸帯が固く喰い込んだ。泣いて嫌がる妹が、理恵にはかわいそうでならなかった。妹への同情は、やがて、もし自分が妹の立場だったらどうだろう、という感情に移り変った。

妹が嫌がり、母親があきらめて脱腸帯をタンスにしまい込んでしまうと、理恵はそつと取り出して、お手洗いで自分の身体に装着してみた。妹の小さな脱腸帯は、理恵の股間にぎっちりとはまった。そのとき、小さい

理恵はなぜか身体中に言い知れない興奮を味わっていた。

それから十数年、忘れていた肉体の喜びが理恵の身体の中によみがえってきた。

街を歩きながらも、コートの下の彼女の肉体は、いかつい皮の矯正器具で厳しく縛られているのだ。理恵の心の中には押えようのない興奮が激しく渦を巻いていた。

五

重森明夫は多忙だった。週刊誌は年中締切



りに追われている。

田上理恵は一日おきに出社して編集を手伝い、週に三日は取材と称して会社を留守にしていた。

「その後、桂木研究所はどうだい？」

編集長の重森に訊かれても、

「あまり記事になりそうなことはなくてよ。

他所と同じようね。でも、私、いい機会だからせいぜい通ってきれいになっておくの」

といった調子である。そして、原稿を整理しながらも、何かぼんやりと考えにふけっていることが多くなった。

理恵が桂木博士のもとへ通いはじめて一カ月もたったころ。所用で新宿へ出た重森明夫は何気なく研究所の方へ回って見た。

十メートルほど先に研究所の建物が見えてきたとき、すぐ目の前をあのかみ上がりの男が歩いて来るのに気がついた。明きらかに、桂木美容研究所から出て来たばかりのようだ。

時刻は昼過ぎ。たしか、研究所は休みの日のはずだ。男はさすがに、例のオーバーは脱いでいる。しかし相変わらずマスクをかけ、オーバーに勝るともおとらない汚ない上着をひっかけている。

重森は当然のことにように、尾行をはじめた。男は地下鉄に乗る。重森がはじめて彼の姿を見た西銀座駅を過ぎた。

本郷三丁目駅でおりると、男は、都電通りを左へ歩いて行く。真砂町といわれるあたりである。

戦災をまぬがれた、古びた小さな家が続いている。男は細い路地に曲がった。袋小路の突きあたり、今にも倒れそうな朽ちかけた二階家に姿を消す。

間を置いて、重森はその家の玄関口をうかがった。

表札はなく、代りに「高岸義手足製作所」と書いた木札がぶら下っている。「義肢・コルセット・矯正具製作研究」と薄れた小さな文字も読みとれる。

（義足屋か！　ますますおもしろい取り合わせだ）

重森は袋小路の出口にある汚い喫茶店に陣取って根気よく男の出て来るのを待った。

二、三時間もしたころ、男は前かがみの貧相な歩き方をして表通りへ現われた。大きな風呂敷包みを持っている。

やり過ごして、重森は二階家を訪ねた。

細い格子のついたガラス戸を、音をたてて開けると、すぐ前は板の間の作業場のようになっ

ている。石膏の白い粉が床にこぼれ、隅に積まれた皮革類の臭いが鼻をついた。

「何んですか？」

牛みたいな男が顔を出した。無精髭を生やし、穴のあいた黒いトックリのセーターを着こんでいる。

「今、この家を出ていった人ね。通りで見かけたんだけど、あの人の事について聞きたいんだ。昔、終戦直後に大変世話になった人にそっくりなんだよ」

「うちの親父さんですか？　あたしや昔のこととは知りませんよ。最近、お世話になってるだけだから」

その男は全く重森のことを疑っていない。

「あの人はここに住んでいるの？」

「いいや、ここはあたしだけでさ。親父さんはどこにいるのか、何んでも新宿の方らしいですがね。週に三回程、ここへ来て、仕事の注文を置いて製品を持っていくんです」

「仕事と言うと……確かあの人は昔は……」

「仕事はこれですよ。うちは義足はほとんどやってませんでね。コルセットと、それから皮の矯正具が多いですね。親父さんは方々の病院から注文を取って来て呉れるんですが、最近じゃ、あたし一人じゃつくりきれないほどでさ」

重森は男に煙草錢を渡して外へ出た。

あの病み上がりの男は、やはり新宿の桂木研究所に住んでいるんだろう。そして研究所と義足屋の二つを利用して、なにか妙なことをしているに違いない。

田上理恵に、もう一步ふみ込んでさぐらせるべきだ。

六

一カ月の間に、理恵のトレーニングはかなりの成果をあげていた。

研究所へ着くと、まだ待合室にいるうちから黒い縦長の首輪を締められた。それは、三時間後に訓練を終えて外へ出るまで、ほとんどはずしてもらえなかった。

首輪をはめたまま、ウエストや腿にベルトを当て、自転車や、ボートこぎの運動に汗を流した。絞首台のような器械——博士はそれを使つての訓練を、垂直懸引法と呼んでいたが、その懸引法にもすっかり慣れた。懸引の時間も長く、重力もすこしずつ大きくしていつて、一カ月たった今では、理恵の身体は完全に宙に吊られるようになった。彼女の細い頸は、体重の全てをかううじて支えている。博士は、油絵の少女のように、あなたも今に両手に錘をぶら下げられるようになります。

よ、と言っている。

懸引法は理恵のもっとも好きな訓練の一つだった。シヨルダー・ブレイスも理恵の汗と脂ですっかり黒ずんできた。

重森明夫が義足屋を発見した翌日、理恵は特に話したいことがあるから、と桂木博士に二階の応接室へ招かれた。

「あなたは太へんいい素質を持っていられる。田上さんの身体は、まだ十代の少女のようにやわらかい。訓練しだいではすばらしい身体に造り変えることができるのです。私は今までの研究結果の全てをあなたの中に生かして見たいのです。私にまかせていただけませんか」

理恵は小さくうなずいた。

「訓練は毎日、一定の時間を置いて繰り返さなければなりません。一カ月か二カ月、入院というか、ここにやり住んでいただけませんか。お部屋は用意します。私は理恵さんを完全な女性の身体に仕上げてご覧にいますよ」

理恵はその場で決心した。ただちに車で衣類を取りに帰り、桂木研究所の二階にベッド付きの小さな部屋を用意してもらった。会社には電話で一カ月の休暇をもらいたいと頼んだ。桂木ビルは、四階三階が博士の住居。二

階が、住み込みの助手と、理恵の部屋。一階が訓練室。そして、地階も特別の訓練室になっていた。

翌日——。

理恵ははじめてその地下室へ案内された。そこには、今まで見たこともないような大型の器械がたくさん並んでいた。皆、いちように恐ろしい形をしている。拷問台のようなものもあった。

桂木博士は、先ず理恵を垂直懸引台の中に入れた。頸から後頭部にかけて、皮の懸引具を巻きつける。モーターが回って、理恵の身体は床上五十センチほどのところで宙に吊られた。

鉄製の錘が運ばれた。まず一個、首を吊られて、下も向けない理恵が手さぐりで受けとる。続いてもう一個。五キロの錘が、左右の手にしっかりと握られた。油絵の少女のように。理恵の体重が増加して、頸筋がキリリと痛む。

「むむっ、むーっ……」

身体中が熱くなってきた。背筋からしびれるような快感が全身に走る。

懸引は、五分間の休憩をはさんで十分ずつ数回繰り返された。終ると、博士に助手の三人がかりで、背筋にマッサージが加えられ



る。

その夜、博士が直接理恵の部屋を訪ねてきた。手には二枚の写真を持っている。

「これは肋骨の写真です。ごく普通の身体と、コルセットを使用して見事に整えられた身体と。まあ、言うまでもなく、ウエストは普通より少し細めに整容した方がいいのです。よく、コルセットで胴を締めると身体に悪いといいますが、あれは誤りですな。ウエスト・ニッパで一カ所だけ締めるのは確かによくはないが大きなコルセットを使って長時間に、胸から腹、腰と全体に整えていく分には

一向身体に害はないのです。この写真をごらんなさい。この女性はウエスト十二インチ。

肋骨の下部の数本が内側につぼまった形になっているでしょう。その代りに上部の肋骨は、左右に大きく発達している。こうなればいいのです。でも、それには十二、三歳の頃から始めなければ駄目です。理恵さんでも、これに近い形には出来ると思いますよ。さっそく、明日から少しずつやってみましょう」

理恵は新たな期待に、喜んで賛成した。

つぎの日、身体の寸法がいろいろに計られ、最切のコルセットが製作された。

それは、丈夫な帆布を柔らかいピンクのサテンでおおい、薄い鉄板を芯として縦に入れた恐ろしく強い、固いものだった。

コルセットが肌にふれたとき、理恵はピクッと身体をけいれんさせた。

背中の合わせ目に締紐をかけて、桂木博士が力一杯締めあげていく。最初の晩は二十二インチに締められた。理恵は身体が自分の身体と思えないほど、固い殻に閉じ込められてしまったことを知った。

コルセットは乳房から腿のつけ根まで、随分と大きなものである。しっかりと固められた、腰のびっちりとした手ざわりを楽しんで理恵は、はあーっと大きく息を吐いた。

その日から、黒い皮の首輪と、ピンクのコルセットは、一日中二十四時間、外すことを許されなくなった。

夕方、ただ一度だけ、入浴する時外してもらって、その後に全身の激しいマッサージを受けることになっている。

マッサージが終れば、再びコルセットがきつく締められる。毎日少しずつ桂木博士はウエストを細く絞っていくのだった。

コルセットに首輪の毎日。夜、寝るときはさらに、ショルダー・ブレイスが厳しくはめられる。場合によっては足にまでコルセット

を締められるのだ。

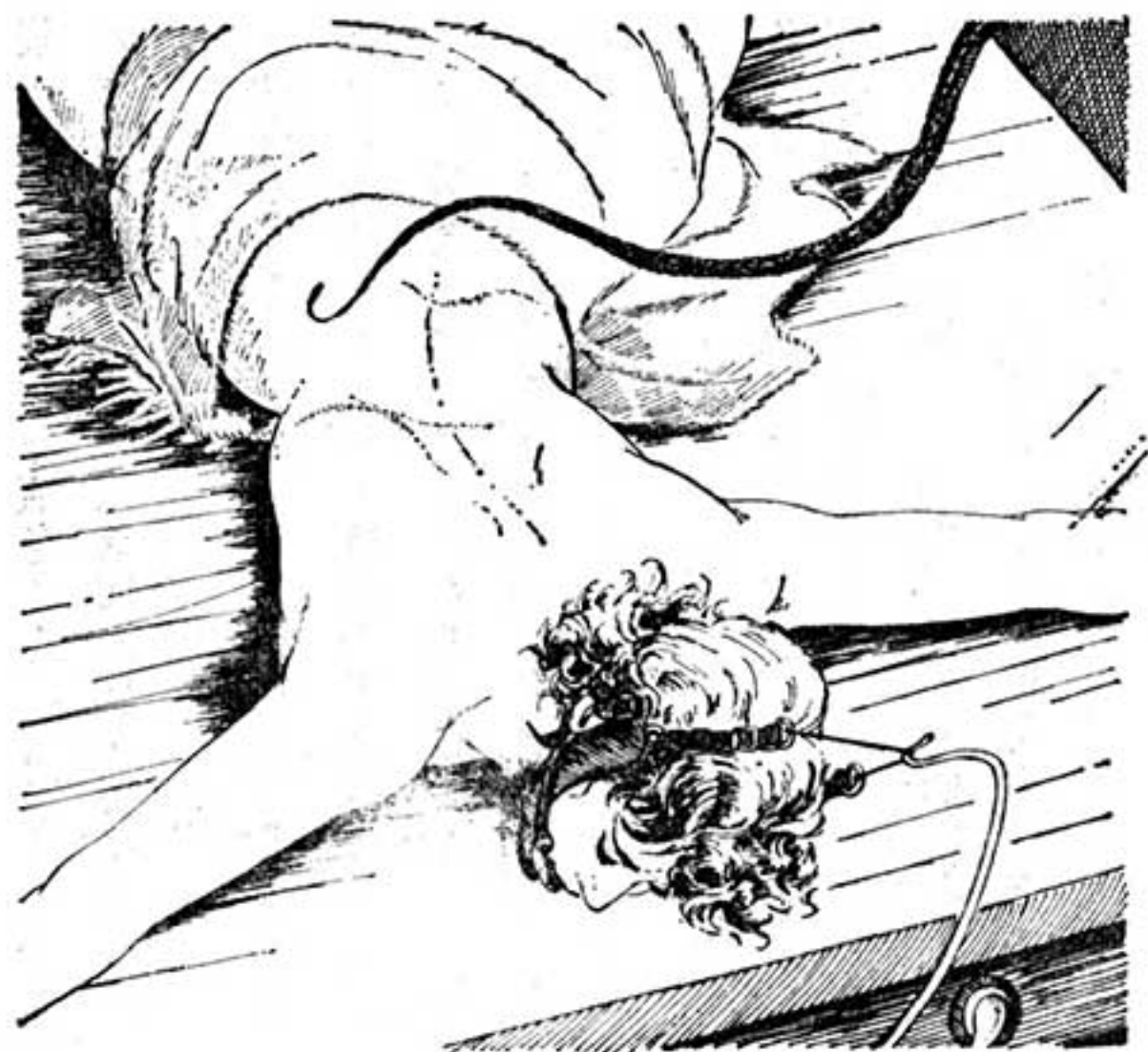
昼間の激しい訓練で、綿のように疲れ果てた理恵は、不自由な矯正具の身体のまま、ベッドに倒れるようにして眠った。寝返りをうつたびに、理恵の矯正具はキュッキュッと不気味な音をたてる。

理恵が入院して一週間目、その日から新しい、特に激しい訓練が開始された。

地下室の中央にある、振子のついた巨大な機械の中へ、理恵は押し込まれた。特に首輪とコルセットは外された。

「今日から、これをやってみよう。これは背椎側彎症患者の治療機械を私が改造したものだ。全身の屈曲、旋回といった運動をリズムカルに、しかも強力な懸引を加えつつ行なうことが出来る。毎日、時間を決めてやりますから少し苦しくても辛抱して下さい」

理恵の身体は、たくさんの鉄のパイプに囲まれていた。ハンドルが回わされると、鉄の腕が左右から延びて、理恵の腰をがっちりとかみ固定した。上半身は、周囲のパイプに皮紐や厚いベルトでつきつきと括りつけられた。手首も、肘も、肩も縛られた。顎には、例の懸引用の皮具が締められ、十分に上方へ懸引された上で、額の部分にベルトが巻かれて、頭も後方の金具に縛りつけられた。足も、



左右にひろげた位置でパイプに固定された。完全に縛り終わると、博士は理恵の身体を手で押して検査した。がんじがらめに縛られて、理恵が微動だも出来ないことを確かめた上で、機械にスイッチを入れた。

モーターが唸り、振子が前後に動くのにつれて、縛られた理恵の上半身も、前後に激しく振り回された。腰を軸に屈曲体操の要領で、理恵の身体は前に屈み、後に反り返えり、ガクッ、ガクッと激しく動かされる。

徒手体操でゆっくりやっていたときは、何でもなかった運動も、機械の力で強引にやら

れると、かなりこたえた。しかも上体は懸引力でピンと上方に引き上げられている。五分もたたないうちに、理恵の腹筋はしびれ、頭がぼーっとかすんできた。

「はっ、はっ、はっ、はっ……」

機械の動きに合わせて、理恵の口から洩れていた吐息が、いつしか悲鳴に変わっていた。

「ああっ、あっ、あっ、ああっ……」

声が弱くなった頃、開始して十分もたった頃だろうか。スイッチが切られて休憩が与えられた。首を吊られて、呑み込むことの出来なかった唾液が、べっとりと皮の懸引具をぬらしている。腰の辺のパイプが操作されて、次にスイッチが入ったときは、理恵の身体は左右に振り動かされた。

左右に身体をねじった後は、ふたたび前後に、さらにもう一度左右に。

理恵の身体はいつ果てるともなく、巨大な機械の中で翻弄されていた。もう腰の辺の感覚は全く無かった。理恵は訓練をはじめて、初めて苦しいと思った。

一時間も継続されたらどうか、理恵の肉体の苦痛が頂点に達したと思われた時、彼女の意識は潮のように急速に遠のいていった。

気を失った、蒼白な顔の理恵の身体を、機械は尚もしばらくの間、振り回わっていた。

訓練は毎日、規則正しく繰り返えされた。半月もすると、理恵が身体につける矯正具も、次第に数を増していった。

黒皮製の縦長の首輪に代って、同じ物がセルロイドで製造された。それは先ず、ギプス包帯で理恵の頸の型を採り、それに合わせてこしらえたもので、完全に理恵の頸に密着した。

セルロイドと金属の支柱で出来た首輪は恐ろしく固く、はめられた理恵は、下はもちろん左右を見ることも全く出来なくなってしまう。

巧妙な、近代的な首枷だった。

ショルダー・ブレイスも、セルロイドの板を背負った、固い物が出来た。

コルセットも予備に、もっと強い、苦しい線を持ったものが製作された。

苦しいが、しかし、理恵には楽しい、しびれるような快楽を伴った毎日が続いた。

理恵は編集長の重森へ、週に何度となく電話をした。こちらは無事です。心配しないで下さい、と。理恵には、今の彼女の環境を、重森によって邪魔されるのが恐ろしかったのだ。

ウェストは一日一日と細くなっていった。そして懸引法は、また一段と激しいものに

変った。その日、垂直懸引機の前に立たされた理恵は、今日から足首に重錘を結びましょう、と宣告された。

「今日のはちょっと苦しいですよ。苦しいからといって、もし懸引機の中であばれたりすると、頸骨を痛める心配がありますから、今日は、あなたの手を背中で縛らせてもらいますよ」

いうが早い、博士は理恵の手首を背後に捻じ上げた。両手をキッチンと揃えて重ねる。

理恵の背中にはショルダー・ブレイスの締紐が何本も附属していた。皮の締紐は即座に利用されて、アツというまに理恵の両手は、背後で動かなくなってしまった。

懸引力が強くて歯を痛めるから、という理由で、スポンジの小片が、口の中に噛まされた。口を閉じ、顎を皮の懸引具で引かれるとスポンジはさるぐつわの役を果たした。

理恵の身体が宙に浮く前に博士は小さなスイッチを、背後の理恵の手に握らせた。

「異常にどこかが痛んだり、耐えられなくなったときは、このスイッチで合図なさい。降ろしてあげますよ」

モーターが回って、理恵の身体は高々と宙に吊された。床上、一メートル程のところから下っている足首に、皮の懸引具がはめら

れた。その懸引具にはやがて、一つ二つと鉄の重錘が括りつけられる。

まず五キロ。続いて十キロ。
「ぐうっ……」

理恵の舌はスポンジに押さえられ、顎は懸引具に圧迫されて、言葉にはならない。

すさまじい刺激が、頭から足の先まで突き抜けた。苦しい、しかし、何んという心地。

理恵の胸は高鳴り、全身は興奮に溢れていた。

十五キロ。

「うーむ。う、う、うーっ……」

垂直懸引機の中で、理恵の身体は長く伸び、意識はしだいに薄くなっていた。

二十キロ。理恵はとうとう手の中のスイッチを押さなかった。そして、失神した。

意識のなくなった理恵の身体は懸引機から外され、丹念にマッサージを加えられて、エレベーターで居室へ送り返えされる。

苛酷な懸引は、二日目毎に行なわれた。理恵はその恐ろしい日を、半ば期待して待つようになっていた。

入院して三週間目。さらに新しい訓練が加えられた。鞭打ちである。

「昔、ロシアの官廷では、なにかと口実を設けて召使や踊り子達を鞭打ったそうだ。当時

のロシアの娘達が、血色のいい、すばらしい肌をしていたのは、すさまじい鞭の洗礼を受けたからだ、とよく冗談に言われたものだが、私の考えるところ、これは一理あるのだね。鞭で打つという事は、肌を鍛えるためには大へん効果的なものだ」

そんな話のあとで、理恵は、白塗りの大きな鉄板の上へ、うつ伏せにして縛りつけられた。首は例の懸引首で上方へ、手足は大の字に拡げて鉄板の四隅へ強力に引き寄せられた。

完全に動けなくなったところで、口にはさるぐつはが噛まされた。皮の一片を口の中へ押し込まれ、さるぐつは、後頭部できっちり締められた。

スイッチが入ると、鉄板が上下左右に細かく振動をはじめた。磔けられたまま、全身を小きざみに揺られるのは快適だった。鞭の期待を裸の背中に集めて、理恵は目を閉じた。

ヒューッ！ ヒューッ！ 二度三度鞭が空に鳴って、第一撃が背中に打ちおろされた。

続いて、太腿に、腰に、第二第三の鞭が矢つぎ早やに理恵の柔らかい肌に加えられる。

思ったほど、激しい痛みではなかった。

「うっ、うっ、ううーっ」

それでも、理恵はかすかに声をたて、鞭の

動きと共にかわいい腰をちよつと宙に浮かして身もだえた。

鞭は、細い皮紐を数本編んで太くした代物だった。博士の特別な工夫があるのか、打ち方に手心が加えてあるのか、鞭は鋭い音のするわりには痛みが少なかった。耐えられないほどではない。理恵の肌は、体内をかけめぐる興奮に赤く色ずき、心臓は高鳴って、息も苦しいほどだった。鉄板を汗にぬらし、ぐったりとなった理恵は、やがて博士に抱きあげられた。

「理恵さん。あなたはいつまでもここにいてほしい。僕と結婚してくれませんか」

七

重森明夫のところへは、理恵から、たびたび電話がかかって来た。そして一ヵ月。彼女から封書で、さらに一ヵ月休暇を延長してほしい、と言って来た。重森はぜひ会いたい、と何度も頼んだのだが、そのつど拒絶された。

何んとかしなくては、と思っていた矢先、重森は三たび、あの病み上がりの男に会ったのである。場所は湯島だった。手に大きな風呂敷包みを下げ、お茶の水駅から地下鉄に乗る。重森はためらうことなく、男の後をつけ

た。行き着いた所は、やはり桂木美容研究所である。玄関を入ろうとして男は、突然、振り向いた。道路に立ちつくす重森に声をかける。

「重森さんですね。お入りになりませんか」男の乱ぐい齒は黄色く、声は意外に若々しかった。名指して呼ばれてたじたとになった重森は、そのまま強引に応接室へ通された。「ちよつと、お待ち下さい。着替えて来ますから」

と言って男は姿を消した。

（この建物のどこかに田上理恵がいるのだ。しかし、彼女は一度も今の男に会ったことが無いと言っている。あの男はまるで主人顔に振舞っているのに）

待つほどもなく、今度は白衣の男が入って来た。一目で桂木博士だと知れる。

「やあ、お待たせしました。桂木です。あなたはだいたい、私のことが気になったとみえて、ずいぶん、後などつけて来られましたね。でも、私も今日はあなたにお話ししたいことがあるのです」

「じゃ、あの、さっきの男は……」
「そう、私ですよ。私の変相もちよつとしたものでしょう」

重森は眼を疑った。話には聞いていたが、

変相などということが、そんなにあざやかに出来るのだろうか。確かに、背丈も顔つきも、あの男に似ていると言え言える。しかし、まず顔色、博士の肌は、健康色に輝いている。「顔色なんか、ドーラン化粧をすれば簡単ですよ。それに歯。重森さんは歯が一番気になるのでしょ」

確かにそうだ。博士の歯は白く、歯並びは美しい。

「これは総入れ歯なんです。私はちょっと変わった趣味がありましてね。幾組もの総入れ歯を作って、時々取り替えて使用するんです。歯を全部入れ替えると確かに人相はだいぶ変わりますね」

博士は平然と笑っている。

「あなたは田上理恵さんをご存じですね。あなたの週刊誌がここへ送り込んだ……」

「いや、あの、彼女が話しましたか」

「間もなくこの部屋へ来るはずですよ」

扉が開いて、白衣の助手に伴われて、理恵が姿を現わした。今まで風呂に入っていたと見え、ぬれた身体にバスタオルをまとった姿である。

「見て下さい。私の研究と訓練の結果を」

バスタオルが、理恵の身体から落ちた。

桃色に上気したその肌、その身体のなんと

見事なこと。博士の二ヵ月間の訓練は、確かに素晴らしい成果をあげていた。均勢のとれた完全な肢体を誇示しながら、理恵は重森に近寄った。

「重森さん。私はこの田上君と結婚します」

「結婚！」重森は素っ頓狂な声をたてた。

「田上君！ 君は一体……。そうだ、それに

桂木さん！ あなたは何んなのです。結婚だなんて。あなたにはそんなことができるのですか？ 僕は知っているんだ。君はまともじゃない。変相して、義足屋と研究所を操って……」

「でも悪いことはしていませんよ。たしかに義足屋も持っている。あの男の失業救済のためだ。ここで使用する器具もつくれるしね。変相は私の趣味ですよ。たしかに私は少し変わっているかも知れない。しかし、重森さんみたいに他人を詮索して、自分が優越感を味わおう、なんていうのも普通じゃない感覚ですよ。私は女性のフィギュア・トレーニング、つまり姿勢、肢体の訓練を生涯の仕事としています。田上理恵さんは私の研究を理解し、協力し、そして私の愛情を受け入れてくれたのです」

(何を言ってやがるんだい)

夜の新宿を、重森明夫は一人ぶつぶつ呟りながら歩いていった。

(あなただって普通じゃありませんよ、か。それに悪いことはしていませんよ、だってさ。それじゃあの変相は何んなのだ。趣味だけであそこまで徹底さする必要がどこにある。あの変相は、下町の貧民窟へもぐり込むのにはうってつけの格好なのだ。山手では直ぐ目につくあの服装も、下町では一番目立たない姿になる。)

あ奴はそこで貧乏人の子供を買うか、雇うかくらいはしたんじゃないだろうか。あの機械で責めて、片輪にしてみましたかも知れない。

なにがフィギュア・トレーニングだ。あ奴は、被虐トレーニングと呼びたいところなんだろう。一つ調べてやろうか。でも、あの自信満々のようすじゃ、減多に尻尾は出すまいな)



■残党狩り悲話



切支丹散華

北村仙也 東 桂史・絵

(一)

「お役人さまア……おおい、お役人衆よーウ……」

夕映えに真紅に染まった山道を、手を振りながら大声をあげて走ってくる男があった。遠目にも伸び放題のザンバラ髪、陽に灼けた真黒な顔からは、年令さえも読みとれない

異様な風態である。

「……何者だ、彼奴は」

手綱をしほって、馬上から腹立たしげに徒歩の役人に問いただしたのはこのあたり一帯

枝

の代官松井長門だった。四十を越した巾広い顔は、汗と脂にまみれていた。この暑い盛りを日がな一日、山から山へ、峰から峰へ、歩き回った後だった。

——島原の乱直後の事である。

原城陥落の際、夜陰に紛れて天草を逃れた切支丹の残党は、厳しい詮議の目を逃がれて、山深く逃げこんだと言う。

松井長門が、彼の支配するこの土地にもそれらしいものが潜入したという噂を耳にしたのは、つい昨日のことである。時を移さず今朝明け方から、役人達を指図して山狩りを試みたのだった。

しかし目指す切支丹は、一人も見当らなかった。今は全く疲れ果てて、代官所への帰路についていたのである。

「ええ、何奴かと申すに」

「はは、あれは……」

長門の不興に狼狽した下役人が答えるより早く、その男は疾風のように駆けこんで来た。

「何奴か、貴様は」

怒気を含んで馬上に鞭をかまえた長門を、怖れ気もなく見返しながら、

「へへ、あつしはこのあたりの非人頭の忠七ってんでして」

「その非人が儂に何んの用と申す」

「へへっ」

狡猾に笑いながら、忠七と名乗った男は答えようとしない。

「うぬ」

怒りに顔面を真赤に染めて、振り下した長門の鞭を、飛鳥の様にかわすと、忠七は下卑た笑いをなおも口辺に漂わしている。

「斬れ、この下郎を斬り捨ていっ」

命令一下。役人がバラバラッと忠七をとり囲んだ。その柄頭に、一せいに手のかかるのを横目で睨んで、

「へへ、慌てちゃいけねえ、え、旦那様、あ

つしはお伺いしてえことがあるんでさ」

「云え、早く申せ」

「へっ、そのう、旦那様。切支丹を捕めえりや、お上から褒美が頂けるってのは本当なんですかい」

「なにっ、切支丹と……」

代官の眼がぎらっと光るのを見て、忠七は得意気に胸をそらした。

「へっ、そうなんでさ、あの女は間違えなく

切支丹でさ。あつしの眼に狂いはねえ」

「なに、女？」

不審そうに問い返した長門に、こくりと「つうなずいて、忠七は一息にしゃべりだし

た。

「あつしの身内のもんが、つい今し方、林の杣道で見つけたんでさ。女は大木の根方に後手に縛りつけられて居りましてね。いえ、それが気を失っていたんでさ。それを、そいつがあつしらの溜りにかつぎ込んで来たって寸法なんで。——ところが、その女がいっこうに眼をさまさねえ。あつしら髪の毛ひっぱったり、鼻ひねりあげたりしても、とんと気がつかねえんで、へえ。鼻んなに笹の茎を突っこんでやっても、とんと利き目はねえ。——そこで、あつしは気付いたんでさ。こいつはてつきり南蛮渡りの眠り薬でやられなんだとね。ところで、そういつた薬が手に入るって云えば、切支丹の外にはねえ。だから、あの女は切支丹にかかわりがあるに違えねえと、あつしは睨んだってわけで……。オットット、いけねえ、忘れものをしていやしたよ、旦那様。実は、この紙切れが、その女が縛られていた木の幹に貼りつけてあったんだそうで……」

慌てて懷ろを探ってとり出したのは、四つ折りにした紙一片。

「何にせ、あつしらあ、読み書きには縁がね

えと来てやすんで」

忠七に差し出されて、長門はその紙きれを



開いて見た。

途端、長門はうっと息をのんだ。

薄紙に、墨くろくろと、

一、原城生き残りの宗徒一名、

右、進呈致すものなり

脂ぎった額をぐっとひきしめて、長門は、

「よし、忠七とやら、われらを案内せい」

「合点だ。なに、ほんの目と鼻ん所で……」

は

でも、旦那」

山道を引き返ししながら、忠七はずるそうに眼を細めた。

「たんまり、はずんで下せえ。何にせ、それってのが滅法いい女なんで。野郎共が夜っぴて可愛がってやるって息まくのを、あっしが代官様からご褒美を貰ってやるからって、なだめて来たんでやすからね、へっへ」

道はいよいよせばまって、長門は馬を降り、役人を従えて枝道に踏みこんだ。

そして小半町程、やがて木の間を洩れる焚火が見える場所に辿りついた。

「おうい、野郎共、お役人さまだぞお」

ひと塊りに、地面に群がっていた非人共が、その声にはじかれたように一せいにとびのいた。

長門は、地面にうつぶせに転がされた女を眼にした。足早やに近ずいて、なおも未練氣に女の顔を撫で回していた非人の一人を、膝頭でけり上げた。非人は恨めしそうに底光りのする眼を長門に向けた。

「なあに、いいやな」

忠七が非人の肩を叩いて慰めるように云った。

「代りに旦那様が、たんまり恵んで下さるっていうからよ」

下役人に命じて、長門は女を抱え起こさせた。

忠七の云う通り、おそらくは強い眠り薬を利かされているのだろう。女は役人の腕に抱えられても、ふっくらした喉をのけぞらしたまま、昏々と眠っている。

十八か、九だろうか。明きらかに由緒ある家の娘と思われる、気品に溢れた透き通るように美しい面差しの女だった。

土の上に房々と乱れ散る黒髪。匂うような頬に咲いた紅い蕾の唇。そして、こんもりもり上がったなやかな鼻の形の良さ……。

「ねえ、旦那様、いい女でしょう」

顔をのぞきこんで、忠七が苦しそうに太い息を吐いた。血走った眼をギラギラと光らせながら、

「旦那様のお役にたてる心づもりがなかったら、あつしら夜つびで鬨りものにしてくれるんだが——。あの口、あの鼻つき、あの胸のふくらみ具合……ええ、畜生」

(二)

遠くかすかに、木立を縫って人事が洩れて来た。

兵馬は転げるように山道を滑り降り、藪陰に身を潜めた。

宵闇がうつすらと、地に伏した兵馬の背を包む。

息を殺していたが、人事はそのまま途絶えたようだ。

(空耳だったのか) ふっと大きく息を吐いて、兵馬は苦笑した。人里近いとはいえ、こ

うまで脅えている自分自身が情けなかった。泥を払いながら立ち上がりとして、そのまま地面に崩れ落ちた。牀中の力が、みるみる抜けて行くように感じられる。

疲れ切っていたのだ。ここ二日、一睡もない兵馬だった。このまま泥の中にのめりこんで、眠ってしまいたいと思ふ。

と、ある女の顔が兵馬の臉にくっきりと浮かび上がった。

(ああ……美奈)

力なく呟いて、兵馬は氣をとりなおし、泥の上にべったりと胡坐に坐りこんだ。一本差しの大刀が、ずっしりと腰骨にこたえる。

(美奈……美奈、いったいお前は何処に行ったのだ……)

昇り始めた十三夜の月を見上げて、兵馬は美しい許嫁の花のような顔を思った。不覚にも涙がこぼれて、兵馬の顔を濡らした。

山奥の掛小屋から美奈が姿を消したのは、二日前の夕刻である。薪拾いかと、始めは氣

にも止めないでいたのが、夜遅くなっても帰らず騒ぎになった。

十数人いる原城生き残りのこの一群の誰も、その行方に心当りはなかった。

とりわけ狼狽したのは、近く祝言をあげることになっていた兵馬である。

彼は、氣も狂わんばかりに掛小屋の周辺を探したが、無駄だった。美奈が一人で里へ行くことは考えられなかった。

原城が陥ちて、捕えられた数十人の女達がどんな悲惨な運命にあったかを、兵馬達も噂にきいていたのだ。

そのなかには黒い眉をした臍たけた女房や、雪のよりに白い胸をふくらませた美しい娘達もいた。九州各地から集められた非人癪病やみの群に、彼女等は見物人の面前で、思うさまに凌辱され、果ては水磔けにかけられ、苦しみ悶えながら死んでいったと云う。それを知っている美奈が、里へ降りるわけもない。

(まして、生死を共にと誓った二人ではないか)

兵馬は何度も自分に云い聞かせた。事実、美奈も祝言の日を心から待っていたのだ。

山奥深く雨露を凌ぐにさえ充分とは云えない

い小屋暮しでも、ここには怖るべき役人が現われる気遣いはなかった。衣食住すべてに貧しくとも、祈りに溢れた心豊かな毎日だった。愛し合う二人は幸福だった。

しかし、その二人に時折暗い影がさすことがあった。

原源之進が、美奈に横恋慕していることだった。一刀流の使い手で、頬のこけた、蛇のように執念深い男だった。折あらばと美奈を狙い、果ては手込めにもし兼ねないようすだった。

美奈が失踪した時の、彼の雑言に、兵馬はいま改めて、齒ぎしりする想いだった。

「誰がお主の女のことなど知るものか。それ程心配なら、木につないでおけば良かったろうに……。はっはっは」

大口開けて、源之進は嘲笑したのである。

（彼奴、斬れば良かった——）

今さらのように、兵馬は唇を噛んだ。

しかし、こうしても居られない。兵馬は疲れたからだに鞭うって、藪から這い出した。

人里近くまで探しても見当らぬのでは、最早や絶望というより外はない。しかし、兵馬はあきらめ切れなかった。

（俺は探す。命にかけて探し出して見せる）
ようやくの想いで山道に這い上がったと

き、兵馬は今度は紛れもない甲高い笑い声を耳にした。

彼は、傍らの大木の陰に素速く走りこんで身構えた。

二人連れの男達だった。汚れた着物をまとったその二人が、忠七身内の非人であろうとは、もとより兵馬の知るはずもないところだった。

「……それがよ、おめえ。なんとも途方もねえべっぴんでよ。俺あ、こう、ぶるぶるって身震いしたくれえよ」

「へーえ……」

「根っからの生娘でよ。面つきのいいこと、胸が固くふくらんでいてよお」

「そいつをうちのお頭は、手つかずで代官に売ったってわけか。惜しいことだったなあ……」

「うむ、……あの代官ときた日にや評判の色好みだ。いい女ときたら見境いもねえ。それに女は切支丹だって話だから、たっぷり拷問にかけて楽しんでるに違えねえ……」

誰憚らず淫らかな声をあげて、二人は兵馬のかくれた大木の脇を通りすぎようとする。

（切支丹の女……）

はじかれたように、兵馬は隠れ場所からとび出していた。

「待て、待ってくれい」

大手を拡げて立ち塞がった武士に、非人はおどろいて立ち上どまった。

「いや、おどろかせてすまなんだ。拙者、ちと尋ねたいことがあってな」

非人は互いに警戒の目を光らせながら、口を開こうとしない。

「その、——今お主たちが話していた女のことだ。ちと心当りがあってな。……いや、これはうっかりしていた。ほれ、これを遣わすほどに……」

懷中を探ぐって、兵馬は小粒をとり出して見せた。

と、非人の汚れた顔に、卑しい笑いが浮んだ。

「これはどうも、旦那様……。で、話ってえのは……」

「うむ、そのお主達の話していたのは、年頃十九位、色の白い娘のことではないか」

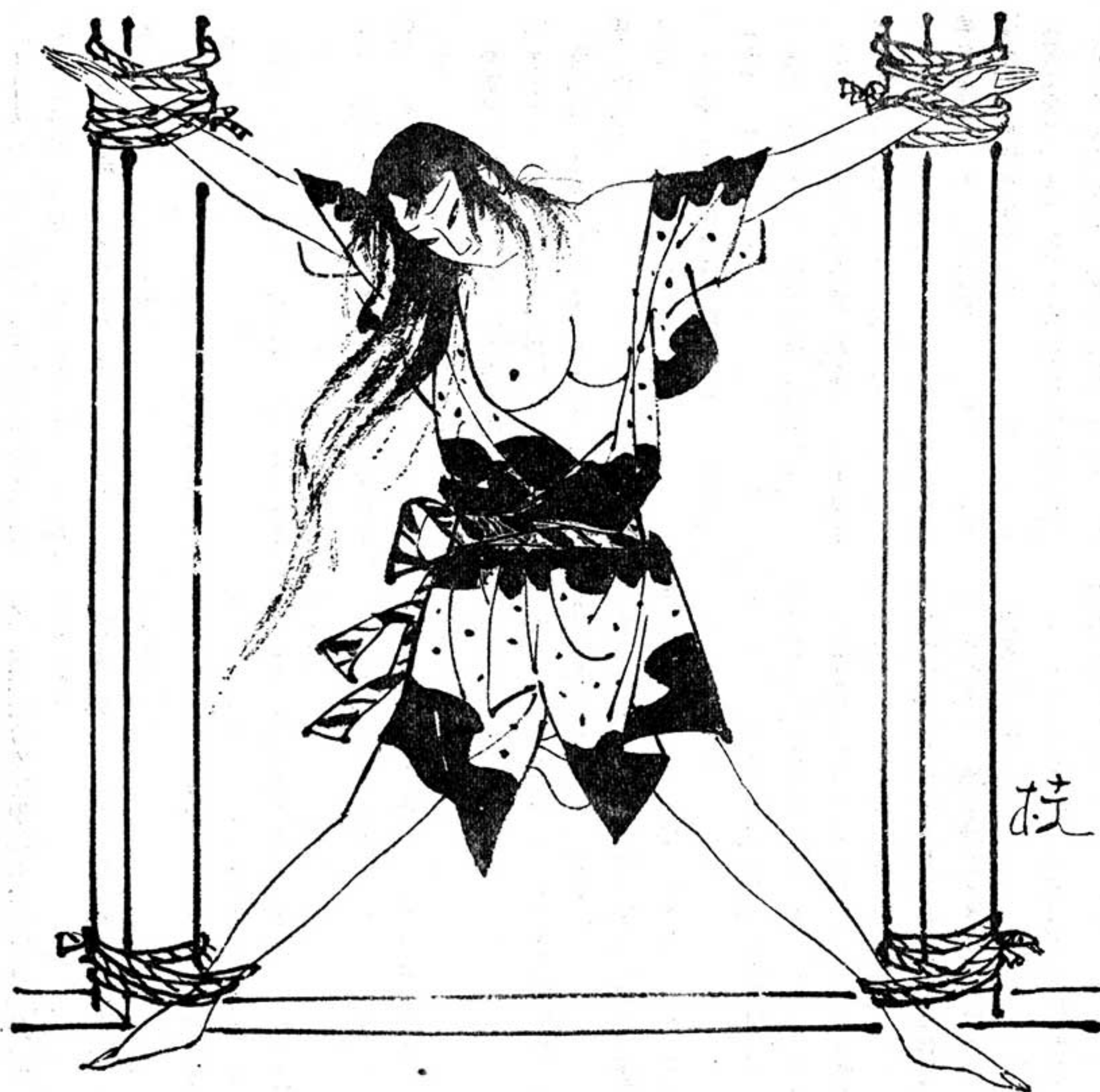
「へえー。旦那様良く御存知で」

兵馬の顔が見るみる苦しげに歪んだ。

（そうか、やはり捕らえられたのか）

「それにしても、なにゆえ人里近くまで出て来たのだらう」

額に浮いた油汗を拭いながら、兵馬は思わず口に出して呟いた。



「ああ、そのことですかい」

と、若い方が手柄顔にしゃべりだした。

「なんでもこのあたりの木に、女は縛りつけられていたんだそうで、へえ」

「なに、縛られて？」

思いがけぬ言葉に、兵馬は息をのんで蒼ざめた。

「へえ、眠り薬がかがされておりやしてね。

そして後で聞いたんだが、その木に「切支丹進上」とかって貼り紙がしてあったそうなん
で——」

凝然として、兵馬にその場に立ちすくんでしまった。

（誰が、誰がいったいそんなむごい真似を）
がつくりと首を落とした瞬間、原源之進の不気味な顔が、ちらと兵馬の脳裡をかすめた。

（うぬ、彼奴だ。源之進めに違いない。叶わぬ恋の意趣晴らしに、彼奴が企んだのだ）

顔色を変えて、考えこんでいる兵馬のようすに、非人は互いに眼くばせをかわしていたが、やがて年かさの男が不気味に思って声をかけた。

「旦那、え、旦那。いったいあんたあ、誰なんですかい。何んで女のことをそんなに聞きたがるんで——」

はっと、兵馬は我に返って、

「うむー」

「そら云えめえ、へっへ。お前さんは、おい、切支丹だろう」

「そうとも。あの女の仲間に違いねえ」

（しまった——）瞬間、唇を噛んだ兵馬は、腰をひねりざま、抜きうちの一刀を浴びせかけた。

「ぎえーっ」

若い非人が絶叫と共に、地にのめった。

「貴様を生かしてはおけぬ」

兵馬は血刀を振りかざし、逃げ出した年かきの非人を追いかけた。

「おーい、山の衆っ。人殺しだぞおう、切支丹だあー」

大声で喚きながら、男は山道を一散走りに見る見る小さくなってゆく。

（不覚だった）あきらめて、兵馬は道を引き返した。

若い男はけさがけに深々と斬られ、血の海の中で早くもこと切れている。

兵馬は血刀を下げたまま、木にもたれて大きく肩で息をした。

そのまま数分——。兵馬の臉には、美奈と源之進の二つの顔が、もつれあい、からみ合った。

（ああ……美奈、美奈……）

涙がつつとすべって、地面にしたたった。

ふと、ただならぬ気配を感じて、兵馬があたりを見回したときは、すでに遅かった。

とつぷりと暗くなった木立の間から、礫が風を切って襲ってきた。と、同時に背後から、どつと喚声があがった。

「それっ、そいつが仲間をやったんだあ」

「畜生」

「ぶち殺しちめえ——」

手に手に、棍棒をかまえた非人の群れは小石礫をとばしながら、木の間がくれに、どつと押し寄せて来た。

（ここでは死ねない。逃げるのだ）

血刀を振りかざして、兵馬は非人の群にとびこんだ。

「それっ、出たあ——」

「おっとり囲んで、ふん縛るんだあ——」

右に左に、二三人は斬り捨てたろうか。血風のなか、魂切る絶叫を後ろにきいて、兵馬は一目散に丈高い草むらに走りこんだ。

横なぐりに棍棒が兵馬の肩を叩きつけた。

礫が頬の間に突きささった。

血まみれになって逃げる兵馬に、非人の追跡は執拗だった。暗やみの中を、悪夢のように非人の棒に追われ続け、兵馬は、よろめき

ながら走りつづけた。

どれ程の時がたったか、——ふと気付いた時、兵馬は崖下の草地に転がっていた。非人の声が、遠くかすかに風に流されていた。

立ち上がるうとして、躰中に灼けつくような痛みを感じて、——兵馬はそのまま、気を失った。

(三)

「どうじゃ……決心はついたであろうな」

座敷牢の戸を潜りながら、長門はいきなり声をかけた。

昼なお暗いこの牢部屋の壁にかけられた責め道具は、不気味な光を放っている。

女は素肌にも薄ものをまとったままの姿で、後ろ手にくぐられて隅に転がされていた。

「ええ、決心はついたかと申すに……」
ずかずかと側によって、えり首を掴んで女を引きずり起こした。

「うっ」

と、かすかに呻いて、女はそのとき黒々と濡れた瞳を、苦しそうに見開いた。

その顔を脂ぎった手で撫で回しながら、眼を細めて、

「うむ、どうじゃ。儂の云うことを聞く方が得だと判ったであろうな。切支丹などのくだ



らぬ教えを捨てて、儼のものになれば、それ、うまいものも、美しい衣しようも思いのままじゃ」

びたびたと顔をさすりながら、

「これ、返事をせぬか」

「ご返事なら——きまっております」

女は顔をそむけて、始めて花のような唇を開いた。

「なんと——」

「なんと申されようと、同じでございます。」

私はキリスト様を裏切りはいたしませぬ」

怖れげもなく云い返されて長門の顔面は、

さっと紅潮した。

「おのれ、よくもよくも」

可愛いさ余つての憎さ百倍、——長門は黒髪をわし掴みにすると見るや、ぐいぐいと力

を入れて仰向けさまに引っぱった。赤い口を

二つに割って苦悶する、美しい顔を噛みつく

ように見つめながら、

「うぬ……それでは、山小屋の在処も、人数

も、いっさい儼にはうち明けぬというわけだ

な。——よし、ならばその方の肌に聞くばかりだ

が、それで良いというのだな。その方のような美しい女なら、さぞ責め甲斐もあろう

というものじゃ。ふふふ、——儼の責めは、ちと齒応えがあるぞ。その雪のような肌に焼火箸をあてようか。逆さ吊りにして、眼鼻口から血を吐かせようか。それとも氣を失うまで、鼻から水を注ぎこもうか。……おう、そうじゃ、先づ手始めにやんわりとゆくことにしようぞ……」

酔ったような、赤ら顔にぎらぎらと脂を浮かせて、長門は女を小脇に抱えて縁先に出た。

「これ、誰ぞこの女を柱にくくりつけい」

庭の二本の柱に、女は四肢を大の字なりに拡げられて、縛りつけられた。乱れた裾から雪のような腿が、折からの陽に悲しく映えた。

女は黒髪をゆすり上げ、切なく喘いだ。

弓の折れを手にして長門は、美しい犠牲の前に立った。くびれた顎に指をかけて、顔を起こさせた。

女は、観念したもののよう瞳を閉じた。

長いまつ毛が小刻みに震えて、深々と影を落とした。

「どうじゃ、女。あくまで強情を張りつつけるか。——それとも山小屋の在処を白状するか。ええ、どうじゃ」

女はかすかに首を横に振った。

長門はいきなり手をのばし、女の胸をかき

むしった。

乳房が白々とこぼれて、陽の光に激しく隆起する。

見る見る長門の瞳に残忍な炎が、めらめらと燃え上がった。

長門は弓の折れで、女の肌をところ嫌わず、突きまくった。

なめらかにうねる白い咽喉元、豊かな乳房から、震える太腿までも——。

手首、足首を縛られて、逃げようもなく、女は悲しく身をよじるばかりだった。灰白い花の様な頬に、薄紅の血がのぼってゆく。

「云え、女。仲間はどこに居るのだ。さ、云え、——云わぬとあらば」

黒髪を拳にまきつけて、長門はぐいと女の顔をのけぞらせた。

こんもりとした白い鼻の、形のよい小鼻が、切なく震えた。

「いっそ、この鼻をそいでくれようか。うぬ、どうじゃ」

わし掴みにした髪に、いよいよ力をこめながら、長門は無骨な指で、女の鼻をつまんだ。

息さえ出来ぬ苦しさが、女の総身を貫いて、女は、身悶えのけぞり蛇のように体をくねらせた。

長門はもてあそぶように、なよやかな鼻をつまんで離し、離してはまたつまんで強くひねり上げる。

「うぬ、脅してはないぞ」

狂ったように叫んで、長門は小刀の鞘を払うと、鼻の峰にびたりと押し当てた。

そのまま、鼠をなぶる猫のように、刃の腹でびたびたと、ふっくらした鼻を叩く。

必死に顔をそむけて、女は無残な刃の攻撃から逃がれようとする。波のよううねる白い胸のふくらみを楽しみながら、

「ふふふ、云わぬことではない。こんなことになったのも、みんなお前の心柄よ。わし

の話さえ素直にきいてくれたなら……ふふふ、こんな惨めなことにはならずに済んだもの

のを、どうじゃ、苦しいか。……苦しめば良い。もっと、もそっと……もがけば良い、せい

ぜいもがいて、色っぽいようすを見せてくれい。ふふふ、鼻がなくなれば、どんな顔になるか。……何にかも心柄のせいじゃ……」

もがきつつける女の顔を見つめている長門の眼が、見る見る残忍な光を帯びる。

「うぬ、観念せい」

刃を宙にかざすと、陽の光がきらりとすべった。

「ああ——」

血を吐く叫びが女の咽喉を洩れて、つと涙が一滴、頬に糸を引く。——と、恐怖の余り、女はがっくりと首を前に折って失神した。

気落ちしたように、長門は刃をとりおとし

て、
「ふふ。まあ良いわ。眼がさめるまで待つとしようか。——それからゆるりといっためつけて、一寸刻み五分試し——。それもまた一興じゃ。ふふふ……」

呟いて大きく肩で息をした時、役人が庭へ走りこんで来た。

「お代官様。例の非人頭の忠七が、是非お目にかかりたいと申して、来ておりますが」

「忠七と？ おおかた褒美金の催促であろうが」

「いや、女と同類の切支丹のことで、お耳に入れたいとのこと……」

「同類とな。うむ、早速ここに通せ」

長門が縁先に腰を降ろしたとき、役人に伴われて忠七が現われた。

柱にくくられて、気を失っている女に眼をやって、卑しい笑いを浮かべながら、

「へへっ。旦那様、お楽しみなこって……」

「黙れ。話と申すのは何んじゃ」

「へえ、実はゆうべあっしの身内が侍えに斬

られやしてね。それが何んと、切支丹で女の仲間だったんで。運良く逃げ帰った身内から話をきいて、あっしら侍えをとっつかめえようと追っかけたんでやすが、なにしろ暗さは

暗し、とうとう逃がしちゃいまして。——それでも大体の見当から、今朝になって、山奥深くまで足を伸ばしたら……、そしたら、何んと、旦那様……」



「見つかったと申すのか」

「へえ、そうなんで……。うめえこと人目につかねえ山奥に、奴等、小屋を組んでおりましたんで……。そう人数も、十人をちょっと越えた位のように見えました」

「ふーむ」

長門は大きくうなずいた。

「でかしたぞ、忠七とやら。——その方、場所とは間違いなく覚えていような」

「そりゃ、もちろんで……」

「では早速、明日は山狩りじゃ。——忠七、その方らに案内を頼むぞ。——うむ、出来れば生け捕りにしたいものじゃが……」

腕を組んで長門が考えこんだ時、ぎらぎらと眼を光らせた忠七が、

「旦那様、あの女を皿に使いなせえ」

「なに、女を？」

「へえ、お役人衆と、あつしら身内で小屋をおっとり囲んでから、女のからだをだしにして、奴等に武器を捨てさせる。同じ切支丹仲間なら、まさか女を見殺しにも出来ませえ。そこが付け目でやすよ。へへっ、——いかげでしょうね、旦那様。ま、山のことなら、あつしらにお任せなすっておくんなせえ。へへへ」

(四)

午前の太陽がさんさんと降り注ぐ頃……。森の丈高い草むらのなかを、よろめきながら山奥さして分けいる影があった。大刀を重そうにひきずり、ほろほろに裂けた衣服に、血や泥がこびりついている。

兵馬だった。

朝露に濡れ、傷の痛み到我に返って、ともかく小屋を目ざして歩き出してから、どれ程の時間が流れたことか。

ようやく小屋をおおう見覚えのある森を遠くに見て、兵馬は立ち上った。大刀にもたれて、大きく息を吐いたとき、どつとどよめきを耳にして、はっと兵馬は顔を上げた。

森のあたり、黒々と立つのぼる煙ひとすじ……。――

（小屋だ。まさしくわれらの小屋が焼けている。——いったい何者が……）

ただならぬ予感に襲われて、疲れた足を引きずって走りだそうとしたそのとき、かなたの森陰から背をかがめて走ってくる男を見ると、兵馬ははっと草むらにかがみ、息を殺した。無意識に、手が大刀の柄にふれた。

男は追われるように木から木を伝わり、見るみる近づいて、兵馬が潜むあたりを駆け抜

けよりとする。

刹那――

「源之進、覚悟！」

死力をふるいしほって抜き手ち一閃！

「うっ」

と叫いて男は転がりながら見返った。

「やッ、おのれは兵馬。生きていたのか。

……ひ、卑怯な奴が」

「卑怯は源之進、お主であろう」

血刀をつきつけながら、兵馬は一步、前に進んだ。

はや鮮血に染まった右腿をおさえながら、源之進は尻をついたまま後ずさりしようとする。

「源之進。お主の企みはよう判った。——美奈に拒まれた腹いせに、お主、美奈を役人に渡したな」

「ふふふ、やっと気付いたか」

唇を歪めた嘲笑になりながら、

「ふふふ、気付いたとて、もう遅いわ……あれを見い」

空一杯に拡がる黒煙を指さす。

「美奈だけではない。皆の衆も役人に捕まったわ。ここまで逃げのびたのは俺一人……。木に吊された美奈の姿に、皆の衆は抵抗もせずにおとなしく縛られよったわ。——何にも

かも神の思召しというやつかも知れぬ。ふふふふ

「なに、美奈が？ 美奈があそこにいるというのか、おい、源之進……」

「ふふふ……」

嘲笑いながら、なにか語ろうとした源之進は、どっと、口から血綿を吐いて前にのめった。

それから半刻あまり――。

「どれ、そろそろ発つとしようか」

役人達を見回しながら、長門は気嫌よく云った。

血を流さずに切支丹一味を捕えた喜びが、赤ら顔一杯に溢れている。

信者達は珠数つなぎに一列に並べられた。

その前後を役人がとり囲む。

「用意はよいか」

「旦那様あ」

と、忠七が非人の群から進み出て、

「この女あ、どうしますんで」

と、うつぶせに倒れている女を指さした。

梢高く吊されて気を失ったまま、美奈は降されてもなお正気に返らずにいた。

乱れた裾からなめらかな片腿が白々とのぞいている。肌に組んだ太紐が、桃の様な乳房を無残にしめつけていた。

「うむ。女はその方らがかついで先を行け」

「へえ、合点で……。おい、野郎共」

声に応じて、我先にと非人が女をとり囲む。そのまま手とり足とりかつぎあげて、

「わっしょい、わっしょい」

「ほーれ、生き弁天のお通りだあ」

掛け声あげて進み出すのを見てとって、長門は、

「皆の者――。出発じゃ」

ぞろぞろと一列に、昼近い森のなかを歩き出した。

美奈は非人の肩の上で、波のように揺れていた。がっくりとのけぞった美しい顔を、横合いから汚れた指が何本も出て、撫でまわす。

「さわるだけなら、代官様も叱言を云うめえよ」

「そうよ、そうよ。――それにしてもいったいこの女あ、どうなるんでえ」

「知れてらあな、おめえ。――町の奉行所に送られて、生れたまんまの格好で、磔柱を背負うのよ」

「――何んと、勿体ねえ」

口々に勝手なことを喚き立て、一行は草地を抜けて、林のなかに差しかかる。

刹那――

一条の光がきらりと非人の眼にとびこんで一同思わず声をあげた次の瞬間！

「う、こ、これを見ろ、女……女が」

すんなりした女の白い咽喉元に、深々と突き刺さった小柄一本、陽の光に血を吸って鈍く光っている。

「お、お役人衆、大変だあ――」

大声で助けを叫びながら、林の中に飛びこんだ非人の眼に、大木によりかかり幽鬼の様に睨みつけている武士の姿がとびこんだ。

「お、こいつあ、こないだの夜の侍えだ。仲間を殺った男だぞお」

「お役人様あ、この侍えが女に小柄を投げたんだあ――」

群れ騒ぐ非人をかき分けて、抜刀した役人が、大木の幹をぐるりと取り巻く。

「何に奴だ、返答をせい」

それには答えず、兵馬は大刀を抜き放ち、逆手にもって脾腹に押し当てた。役人の刃に

眼もくれず、瞼の裏に最後にただ一度、美しい美奈の花のような笑顔を思い浮かべた。

「許せ、美奈――。これがわれらのさだめだったのだ……」

血を吐くように一声叫んで、そのまま満身の力をこめてぐいと一突き。――迸る鮮血のなかに、兵馬はどっと崩れおちた。

ゴルドンの記憶

5

阿麻哲郎

江淵晃夫・絵

シヨツク

下宿にもどって床にもぐりこんだ。頭のシ
ンがさえざえとして寝つけそうにない。
考えるともなく考えてみると、どうにもフ
に落ちかねることばかりのようである。
第一、留守中、わたし自身の名をかたって
上島氏からのあずかり物であるあの紙封筒入

りの古文書を、下宿のおばさんからだましと
っていったという女の子は、いったいだれだ
ろう。どうしても心当たりがない。思えばず
いぶん大胆なやり方である。いたずらとも思
えない。なぜ、どうして、何の目的であの品
を、そんな向こうみずなまねまでして持って
ゆく必要があったのか。よっぽどそれには、
そうするだけの貴重な意味がああ品にはあっ

たものと思わねばならない。それだけの深い
わけのあるものだと思っていたら、もっと大
事に取り扱うべきであった。そして早く相馬
博士にお返ししておくべきであった。
上島氏も上島氏だ。あの人は、もっとほか
の肝心なことを知っていたに違いなかったの
だ。それならそのように、もう少し詳しい事
情をわたしに話しておいてもよかったろうに



……くやんでみたところで今さらどうしようもないことであった。

だが、肝心の相馬博士が、四、五日前から行方不明というのはどういうことであろう。

小林春吾が博士を訪ねた時、偶然わたしも同じ日、同じ時刻ごろ、博士の自宅を訪問しようとした。一足先に訪ねていった小林春吾が、博士の不在を知って引きあげるその外の道でわたしと会ったのだ。

「だめだ、博士は四、五日前から行方不明だつてさ」

彼はこともなげに言った。彼としては、行方不明ということばを、わざと大仰にセンセーショナルに言ったまでのことで、深い意味はなかったであろう。また出直してこなきゃなるまい、というていどの、軽い失望にかすぎなかったと思われる。小林春吾は東亜日報の記者だ、記者のくせとして、人が不在だと行方不明だ、と、すべて物事の表現の仕方が新聞の見出し調で大げさになる、それもご愛きようだ。

しかし、行方不明と聞いたその瞬間、言った当人は、何でもなく言ったに違いないそのことばが、わたしには非常に深い或る大きなショックをもたらした。それはなぜだろう。

博士の家

学者の家らしい、古い静かな家だった。すぐ隣はこんもりと茂った神社の木立ちで、前は畑になっていた。

古い板の廊下をきしらせて、物静かな老婦人が出てきて、けげんな面持ちだった。つい今しがた、小林春吾が訪問したばかりで、そのあと入れ違いにまた別の訪問者が訪れる、何だか面くらって、と、そのような面持ちが老婦人にはあった。わたしはちょっと困ったような顔をして、先に言った。

「いえ、あの、先生がいらっしゃらないということは、今外で、友だちから聞きました。彼とは、全く関係なくおうかがいしたのですが、偶然いっしょになっちゃったんで」

「そうですか、それはご苦労さまで」

老婦人の表情がほころんだ。柔和なまなざしである。

「ところで先生は、四、五日前からいらっしゃらないということですが、いつお帰りのご予定ですか」

老婦人が、相馬博士の夫人であることは、一目見て察しもついたので、わたしは遠慮のないところ、つつこんでたずねてみたのであった。

前号までのあらすじ

美しい、ふしぎな予言者サレアをめぐる上島氏の言動には、ある好奇な秘密がこめられているようであった。それは、ゴルドンの伝説につながる、ゴルドンの記憶につながる秘密であった。上島氏は若妻美美子を残して横浜港を発する。大阪商船一等航海士としての任務についたのだ。

わたしは彼からあずかった人文学者、相馬篤太郎博士の研究になる古文書をだれともしらぬ女の子に持ち去られる。しかも訪ねていった相馬博士の家では、肝心の博士が行方不明だと——ぐうぜんにいっしょになった東亜日報の小林春吾もがっかりしたようにカタを落とすのであった——。

「さあ、予定といたってあの人のことですからね」

「先生はどこへいらっしゃったんでしょう」

「それもあの人のことですから」

「行先もわからず、お帰りのご予定もわからない、そうですか」

幾分皮肉の気味でわたしは言った。

「相馬のくせなんですもの、仕方ございませ
ん——ところであなたさまは？」

わたしは赤面した。名前も名乗らず、差出
がましいぶしつけな質問をしたものだ、それ
で少しあわてぎみに、わたしは雑誌社の編集
者で、先生と面識のある上島航海士とは友人
で、と、手短に自己紹介をやった上、来意の
趣もかいつまんで話し、いずれ、先生がお帰
りになってから、改めてまたおうかがいしま
す、ということ、早々に引き揚げてきたの
であった。

ばく然とした疑念

バー・エテルナで、老残のこじきが、あわ
れな物乞いにやってきたところを目撃したの
は、ついこの前のことである。

小林といっしょのときであった。マダムの
扱いは残酷なものだった。犬に残飯を与える
ようなあしらい方だった。若いホステスが三
人、ルミとキクとナオミ。三人ながら調子よ
くこのこじきのぶざまな様子を笑っていた。
退屈さましに、ネコが獲物をからかう時のよ
うな様子があった。

それは直接的な残酷さではない。少しも暴
力が増えられたというのではない。しかし、
そこにわたしは、独特な女の残酷さを感じ

た。

ともかく小林春吾はバーを出たあと、いぶ
かるような面持ちで、

「相馬博士にどうもよく似ている」

と頭をかしげたものだ。老残のこじきのこ
とである。わたしは博士と面識はなく、その
顔写真についての知識もないので、相馬博士
とこじきが似ていたかいないか、判断する根
拠もないまま、簡単にそのことを聞き過ごし
てしまった。小林春吾もあまり深くはこだわ
らなかった。むしろ笑い話で過ごした。

うかつ千万にもわたしは、その時まで事の
重大さをまるで予知していなかった。そして
今、変な女が預かり物である古文書を留守中
に持ち去ったということ、相馬博士が四、
五日前から不在だということとが重なって、
初めて実感としての不安な暗い予感を感じた
のであった。だがそれは、まだあわい予感の
範囲を出るものではなかった。

事実、小林が行方不明だと大げさな言い方
をしたけれども、博士の家人はそのことに慣
れきっている。それが「くせなんですもの」
と、奥さんは平然としていた。そのうち、ま
たひょう然と、どこから立ちもどってくる
のであろう。いかにも人文学者らしい、自由
奔放な行動がそこにはある。

しかしそれではわたしとして、やはり責任
上気がかりである。大事なあずかり物である
古文書を、だれとも知れぬ女に持ち去られた
からだ。上島氏と別れの最後の夜、彼は、
「これは、ゴルドンの伝説に関する古文書で
す。——何かのために、あなたにしばらくあ
ずかってもらいましょう」

と、その分厚い紙袋をわたしに差し出した
が、何かのために、というその何か、とは、
どういふ場合のことを上島氏は予想して言っ
たのだろう。しかしそれも、まだとりとめも
ない、ばく然とした疑念にすぎなかった。

わたしには、その時印象に鮮烈な生々しい
ものがあつた。あの時、上島氏の横で、最後
までだまっていた芙美子夫人の、美しい涼し
気なひとみの奥の、何かにひかれてゆくわた
しの心の動きについてであつた。

街の風景

わたしは何とはなしに上島氏のことが気に
なつた。陸上よりは、やはり海のほうがいい
と、勇んで彼は横浜港を出ていった。明るく
野放図で、好奇心が強く、たくましい船乗り
である彼。

『あなたの、これがおそらく最後の航海にな
るでしょう』と、これはサレアの予言だっ



た。サレアは不思議な女である。はかりしれないナゾと力を持った女のようなのである。しかし、だからといって、わたしも上島氏もそれほど彼女のことは気にしたわけではなかった。上島氏は、船乗りにしては縁起をかつぐ迷信深いところがなく、かつ達な合理主義者

である。だからサレアの予言も笑ってすませる。芙美子の不安にも女の取越苦労だと軽く受け流してしまえた。

わたしはだが、サレアの予言はともかくとして、

『主人の乗船の話は、よして下さいません

か』と、キツとして言った芙美子のけわしい目に、気がかりなものを感じるのであった。

会社が終わわり、新宿を回って、自然と足はそこへ向いた。バー・エテルナである。上島氏がおなじみの店で、あまり酒をたしなまな

いわたしも、彼といっしょだと、ついそこま

で相伴して行ったものだった。先日も東亜日報の小林春吾を案内した。なんとなくなつかしい。ギターを肩からかけた流したちが、連れになって横丁から出てきた。店頭の青い灯の照明が、彼らの横顔を青白く浮き出させた。不景気そうである。といっても、まだ時間が早いので、客足が繁くなるまで、こうして横丁から横丁を時間つぶしに歩き回っているであろう。

その付近は、同じような門燈をかざした飲み屋やバーが軒を並べてあった。マズルカ、バレンテ、みわく、といった中に、有明という名の小料理屋もあった。

軒端の戸口に、ラーメンの空ドンブリが重ねられている。折れた割バシに、よどんだ残り汁がある。女給たちの食べ残しのものだろうか。野良ネコがすばしこく身をかがめ、ドンブリの汁を舌先になめている。ネオンはなやかな陰のさりげない風景である。その風景に何とはなしに、わたしは通りをずっと見渡した。この付近の人らしいエプロン姿の中年女が、小走りに急いでくるほかには人は見えない。まだ時間が早いのである。従ってこの前のれいの見すほらしげな老人のこじきの姿は、見ることはなかった。



女の子

「あら、阿麻さん。お早いですのね」

目ざとく見つけてルミが真先に声をかけてきた。ちょうど店開きしたところで、まだカウンターのみがきを入れている最中だった。客も居なければマダムも来ていない。ルミとあとひとり、キクが居た。

「早すぎたようだな。もう少しそこらへんを回って、それから来ようか」

立ち去ろうとするとルミはあわてたような鼻声で、

「どうぞ、どうぞ。早すぎるってことはありませんわ」

キクも急いで立ってきて、わたしの手をひっぱっていった。

「逃げようたって逃がさないぞ」

わざと男のような、すごんだ声でふざけていた。わたしはルミの肉づきのよいふくらした面立ちより、このキクのやせぎすの、そしてクリクリした目の顔のほうが好きだった。いたずらっぽい感じがするのである。

カウンターの内側で、ルミはあざやかな手つきでシェーカーを振って、

「はい、お待ちとおさま」

甘口のシンフイズ、サクラランボの小さな実

が赤い点景を添えて涼しげである。

「マダムはまだなの？」

「そろそろくるころですよ。そんなに気になるんですか」

「そうだね、気になるね。なかなかどうしてマダムは美人だからな」

「あら、あんなこと」

カウンター越しにルミが、わたしの腕をつねりに手を伸ばした。

「マダムがお目当てならダメだわ、先約がハいて捨てるほど居るんだから。それよりわたしはどう」

キクがいたずらっぽい目付きをすえながら、わたしのひざに乗っかるようなぐあい身を寄せてきた。身軽な身のこなしは、少年のような感触で、何か妖しい雰囲気があっ

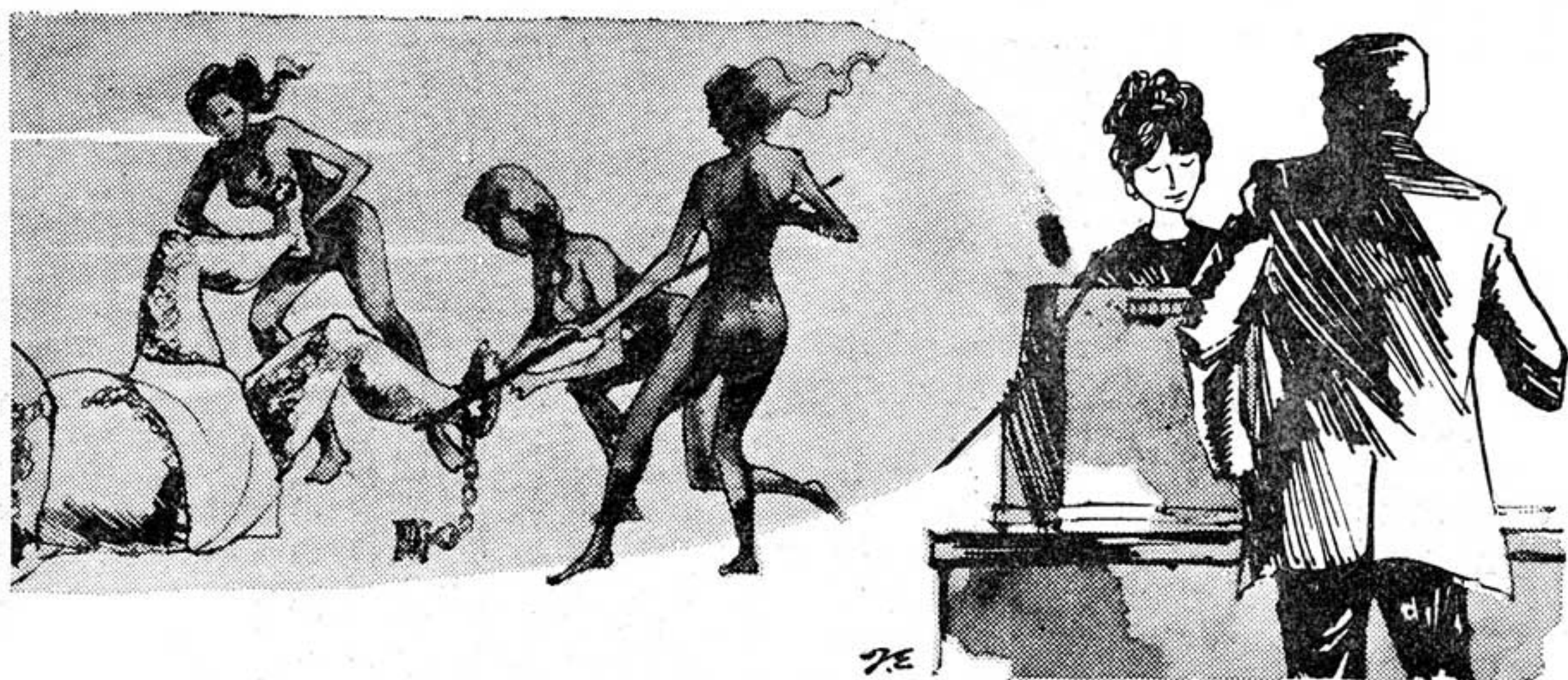


た。

「そうね、マダムより君のほうがいいかな」
そこでたわいのない笑いになった。

流しの男

わたしは、じょう談にかこつけて、少しマダムのことを聞いてみたかった。しかしヘタな聞き方では変に誤解されるおそれもあったので、それがひっかかってスムーズに質問が運ばなかった。和服が似合う、きれいなひたいをしたマダムの、えり足の白さは男にとっては魅力的には違いない。だが、わたしはそれのことを思う以上に、山下公園での、横浜港をバックにして、あの時の秘めやかな芙美子との一時を、もっと大事にしていた。芙美子は敬愛する上島氏の夫人である。そのことを



思うと心が痛む。だれにも言えぬ、自分ひとりの秘め事としてソツと胸のうちに押えておかねばならない。だから、不意にこうして、マダムにそれとはなしの興味を寄せたのは、もっとほかの理由でなければならぬはずであった。その理由が何か、自分でも漠としてつかみようがない。

茶の合オーバーを着た中年の客がはいってきた。続いていかつい肩を張って、がっちりした肉付の男と、めがねをかけたやせ型のキザッぽい男とが、二人連れではいつてきて、店らしい雰囲気立ちこめてきた。

わたしはカウンターの奥のほうに寄りながら、あまり酒が好きでもない関係から、この辺で帰ろうかな、と思った。二杯目のシンフイズを傾けて、そして立ち上がりかけた時、ドアが外からあいた。マダムである。

「よおーっ、待ってました」

客のだみ声があがる。わたしもいったん立ち上がりかけた腰をすえて、三杯目のシンフイズを注文した。もう目もとからハナにかけて、すっかり赤くなっていた。

目に笑いをたたえ、店の中に入ってきたマダムの黒いスーツにわたしは目を見張った。日ごろ和服でいる場合が多いが、今日は洋装である。それがまた和服に劣らず板について

いた。

いったん奥の化粧室で顔を直し、マダムはすり足でわたしのそばに來た。

「さっきからお待ちかねだったのよ」

ルミがカウンターの内から言った。

「そうですよ、待ってましたよ。おかげでこんなに首が長くなった」

照れ隠しみたいになわたしは言った。

「それはそれは、どうも」

こぼれるような愛きようである。上島さん、お元気かしらね、そんな話題から、気を兼ねたようにマダムは立って、ほかの客のカウンターのほうにあいさつがてら寄っていった。

わたしはこのとき、ふとこじきがいってくるような錯覚に捕われて、ドアのほうを見た。ドアがあいた。はいってきたのは流しのギターひきの連中であつた。先ほど横丁から出てきた、青い顔の男だった。あの老残のみじめなこじきの姿は、ついに見ることがなかった。

夢うつつ

校了明けの翌朝、わたしは重い頭をまだフトンの中に埋めていた。夢とうつつとの間の心地よい眠りが、けだるい春の朝のわたしの



意識を、霞の中のキレギレの点景のように、捕えてゆすぶっている。

窓ガラスには朝の日がさして、カーテン越しにまぶしい位の光を投げて明るい。人の足音や自動車の走りかう気配、廊下を隔てた母屋の台所では下宿のおばさんが水仕事、流しで食器を片づける物音がする。九時過ぎたろうな、わたしは、はつきりそんなことを思っていた。だのに一方では、わたしは見も知らぬ妙な土地にたたずんでいることになっている。付近はうっそうたるジャングルで、ただわたしのたたずんでいるところだけが、百坪程の空地になっていた。妙にジトジトとした、汗ばむような空気がこもって、ひどく胸苦しい。空地の一方を見ると、子どもがパンツ一つで後向きに立っている。声をかけようと近づいてみると、その後頭部に大きなハゲがあるのに気づいた。

あ、こんなところに吉展ちゃんが、と、今新聞で騒がれている誘かいされた子どものことを思い出して、いきなりその子の肩をたたくと、その子が振り返ってニタニタと笑った。顔一面が毛むくじゃらで、それはまぎれもないコマ劇場の舞台や楽屋で見たゴリラ男なのであった。わたしは驚いたがからだに自由がない。今は九時すぎで、母屋ではおばさ

んが水仕事をしてて、と思いながら、足がすくんで動けない。

その上、密林の奥のほうでガヤガヤと人声がしてこちらに近づいてくる。『早く逃げるんだ』聞きおぼえのある声が叫ぶ。見るとゴリラ男と思ったのが、実は上島氏なのである。思わずわたしが、上島さん、と言って手を伸ばしたとき、ジャングルの茂みを分けて真赤な鳥の羽が、ユサユサと揺れながら現われ、つんざくような鋭い女の声で、『逃げてもだめです』と叫んだ。それはまぎれもないサレア——遠くで電車のかすかなとどろき、早く起きなければ会社に遅れる、とあせる一方、からだ全体にじっとりとした汗が流れて、床を離れることができない。

「阿麻さん、お客さんですよ」

下宿のおばさんの呼び声で、やっと本当にわたしの目はさめた。

不意の訪問

「おい、まだ寝てんのか、呑気だな」

遠慮気もなく上がってきたのは、東亜日報の小林春吾であった。

「いや、昨夜遅くまで社の仕事があったもんでね、やっと校了にまでこぎつけて、それで——」

と、わたしはふとんの上に上半身を起こして、まだ重い両まぶたの上を手でこすった。

「会社のほうへ電話を入れたら、まだ来てないというもんでここまでやってきたんだ」

小林はわたしの枕元にすわりこんで、ポケットからタバコを取り出し火をつけた。

「何か急用でも起きたのかい」

「それがね」

小林はぼんやり考えこむような目付きで、両目の間にシワを寄せた。

「ほら、この前の相馬博士。博士が行方不明だっていうんだ」

「行方不明だって？」

そんなことはこの前からわかってることじやないかと、いぶかしげな視線を彼に向けると、

「いや、本当に行方不明なんだよ。捜索願いが警察に出されたんだ」

「そうか、それで、行先の見当はつかないのか」

わたしはネマキから服に着かえて、フトンはそのまま、二つ折りに隅へ押しやってすわり直した。

「なんだか妙な行方不明だよ。だいたい相馬博士って人は、奇人中の奇人なんで、行方不明といっても、しょっちゅうそういうことは

あるらしいんだが、今度ばかりは本当に行方がわからなくなってしまうたらしい」

「どうしてそうだとわかったんだい」

或る一つの緊張感が、わたしの背筋を貫いて流れた。

「古着屋が、博士の家を訪ねてきたというんだ。おれは何も詳しいことをまだ聞いてはいないが、その古着屋は、博士の外出時の背広を持って、早く服を引きとってほしいと、抗議するように言ってきたんだというんだ。これには家のほうでもちよっと驚いてね、あれから日数も十日以上にはなるしね、もしや何か変事でも、と、そう思ったらしいんだ」

喫茶店

小林春吾と別れて、ひとり都電通りを歩いていった。思わず寝すごしたのと、不意の訪問者のため、もう昼近い時刻になっていた。

それで申し訳の連絡を、下宿の近くの赤電話で会社に済まし、ともかくこれからでも社に顔出ししようと、出かけてゆく途上である。

まだ頭が重い。雲が出、日がかげり、むしろ暑い感じだ。先ほどのおかしな夢を頭の中で反すうしている。その続きのように意識が重くよどんでいた。これではいけないと、途中で喫茶店に立ち寄った。名曲喫茶の一刻で、ド

リーブのコッペリアを奏している。すると連想がわいた。舞台上でのコミックなダンス、土人の原色的な踊り、——それはコマ劇場の舞台ではなかったか。

曲が終わるころ、コーヒーが運ばれた。にがっぱい液の熱さが、心地よくのど元を流れおちる。次ぎの曲はコルサコフの組曲シェラザード、シンバッドの航海になった。そこでハッとなった。

まるで、コマ劇場の舞台そのままではないか。あのときもコッペリアからシンバッドの航海であった。そうして背景をジャングルにしてゴリラ男が登場するのである。

ゴリラ男は、やがてトカゲの皮をまとった女たちにつかまって、地面に低く打ちこまれたクイに縛りつけられ、からだ中を女たちに踏みつけられていた。顔といわず頭といわず、目も口も、女たちの踏みならす足の下にあった。

わたしは女性の活発な無鉄砲さを、そのとき初めてまのあたりにしたのだった。

『もし女性の方で、本当に彼を責め殺された方がありましたら、賞金一千ポンドを呈させていただきます』口上の通訳はそう述べた。するとどうだろう。舞台の呼びかけに応じて、たちまち五、六人も、若い女がその役を買

って出た。クツやゲタがゴリラ男を踏みつける。ムチやコンボウをふるってなぐりつける。あの時、女たちは興奮のあまり笑っていた。その笑いに凄そうな残酷さがこめられていた。

小林春吾は、八女族残酷物語Ⅴを企画し、その記録写真を編集するのだと張り切っている。その種の企画が、現在の残酷ブームに便乗した、いかにも安手なきわ物であることが見えすいているようで、その時、わたしはさして反応は示さなかった。しかし考えてみると、小林の企画はその扱い方によっては、とんでもない傑作を生むかもしれない、そんな気が急にしだしたことにわたし自身驚いた。

人違い

ほとんどうちへなど、遊びに来たこともない小林が、珍しく、しかも早朝に、不意にわたしを訪ねてきたということは、それほど大事な用件であったと思わねばならない。彼が女族残酷物語を制作するに当たって、ぜひ人文学者の相馬篤太郎博士に会う必要があったという。それはゴールドンの伝説について、博士から詳しい話を聞くためだ。ゴールドンの伝説と女性の残酷さと、どんな関係があるというのだ。小林も、その間の事情は知らぬらしい。知らぬからこそ博士を追っかけたのだ。

ゴールドンの伝説といえば、上島氏も意味ありげな口ふんをもらしていた。古文書にそれが書かれてあるという。大事なものであったに違いない。自分としてもうかつだった。もう少し早く相馬博士に連絡をつけておけばよかったのだ。それをだれか見当もつかぬ女の子が、下宿のおばさんをだまして持ち去った。しかも、当の相馬博士自身が、行方不明、本当に行方不明になってしまったのだ。だから小林は、アワを食ってわたしのところ

に朝早くから駆けつけてきた。とはいっても、彼は、至ってのんきだった。不思議だ、妙だと博士の行方不明に首をかしげながら、そのくせそれほど真剣に事件の意味は考えていないようだ。それは無理もない。彼はわたしほどいろんな事のつながり方を知らないでいる。奇人を通っている博士のことだから、そのうちどこからか、ひょう然と現われるだろうぐらいに、今でもタカをくくった安易感でいるようだ。博士が当然だめなら、ほかの筋から女性の残酷さを、ドキユメントに追求してみよう、という気でいる。だから古着屋が相馬博士の外出時の洋服を持って、留守宅に現われたという奇怪な事実も、結局は彼には関係のないことと、そんなに差しせまっただの関心は示さなかったのだ。

いつのまにか、シンバッドの冒険も終わって、カテリーナ・バレンテの生放送を、ラジオで流している。ぬるくなったコーヒーの残りを、一息に飲み干してカウンターのあたりを見ると、ひとりの男がこちらに背を向けて、勘定を払っているところだった。そしてドアから出てゆくとき、明るい外光につと横顔を見せて表通りに消えた。

わたしはとっさに立ち上がった。自分自分の行為がよくわからなかった。ひどく心ばかりがせくように、伝票の仕払いもどかし、表通りへ飛び出した。

遠くに目当ての男の後姿がチラと見えて、人中に隠れた。急いで後を追った。そしてやっと追いついたとき、完全に人違いであることがわかって、がっくりと肩を落とした。あの夜バー・エテルナにはいつてきた青い顔の流しの男ではなかったのだ。流しの男とは、彼が仲間と横丁を出てきたとき行き合った。不景気そうな顔だな、とただそう思っただけの行きずりの男を、てっきりそうだと見あやまっただけ、わたしはなぜ追っかけたのか、そこで追いついて、いったいどうするつもりだったのか、何を聞こうとしたのか、わたしは自分でもよくわかってはいなかった。少なくともその時まで。

(未完)

読

者

コ

ー

ナ

ー



★他にも多くのご投稿がありました
が、スペースの都合で掲載でき
なかったことをおわびします。こ
のらんの投稿はハガキでも結構で
すからご自由にお書きください。

今月掲載しました方には、本誌
次号をお送りします。誌上匿名は
自由ですが、住所、氏名はお書き
ください。（読者コーナー係）

★私は現在、私立大学の文学部
で心理学を学んでいるもので
す。心理学科を選んだのは、私
自身の持っているサディズムが
最大の原因です。もちろんそれ
以外にも心理学にひかれる理由
はいくらかありますが。貴誌も
ずいぶんとよくなりました。し
かし、最近は少し伸び悩みの感
があります。わずか二百ペー
ジあまりの紙面をもてあまし気味
のようです。でも、六月号はわ
ずかながら進歩がみられました。
まず最初のページあたりに、毎
号でていた、くつつけたような
絵物語がなくなつて、すっきり
したこと、次にグラビアの写真
が、今までのなんでも載せろ式
から少なくともよいものだけを

という方針に変わってきたこと
です。といつても、前号までの
写真がすべてでまずかった、とい
うわけではありません。たとえ
ば三十七年七月号の「石伐り場
の女」等は、モデルといい、縛
り方といい相当な出来ばえでし
た。モデルといえは五月号の写
真は実にひどかった。あの顔で
よく裏窓のモデルになる気にな
つたな、と少々腹が立った。お
そらく読者のなかにもほめてい
るのはあまりなかったでしよ
う。その点、六月号のはまずま
ずというところ。ただ縛り方を
いろいろと変えたのをとればよ
かった。同じ一人のモデルを何
枚ものせるにしても、同じ縛り
方ばかりのと、種々の縛り方を

してあるのでは、読者に与え
る効果がちがってきます。多く
の制約を受けながら、編集して
おられる方々には、本当に心か
ら「ごくろうさま」と申し上げ
ます。最後にもう一言。六月号
の読者コーナーに、SH氏が非
常に甘い採点を、裏窓に対して
されていたようです。私もSH
氏と同じく、現在の定価二百円
は決して高いとは思っていませ
ん。というのはこの種の雑誌は
数が少なく、貴重なものである
という見地から考えていうので
す。しかし、雑誌の内容のみを
考えた場合、二百円は安いとも
いえないと思うのです。氏の希
望どおり、二千円になったから
といって、内容そのものが数段

よくなるとは思えません。ペー
ジ数のふえるのが関の山でしよ
う。よい写真のせるもの、ま
ずい写真をのせるもの、一冊に
対する金額の比重はあまり変わ
りませんし、小説の方はもう完
全にマンネリ化しており、これ
以上の改革も無理でしょうから
ね。氏はまた海外画の高価さを
例にとつておられるが、値段が
いくら高くても見て楽しくない
よう。SMはどの角度からみて
も高尚な趣味ではない。もちろ
ん、低俗な趣味でもない。が、
氏のように金をかければよくな
るだろうというような考えは幼
稚すぎる。読者コーナーでいろ
いろ意見がでてくるのにも、ズ
ウズウしいと文句をつけておら
れるが、これにいたってはもう
話にもならない。読者コーナー
の意見は命令ではなく単なる注
文である。ほめるだけなら読者
コーナーなんていらぬし、裏
窓も進歩しない。SH氏のような
な投書をする方もする方だが、
それをのせる方ものせる方（失
礼）だ。以上わがままばかり申
し上げましたが、貴誌が発売さ
れるかぎり買いつづける気でい
るからこそ、注文も多くなった

読者コーナー

のです、あしからず。結局、マンネリ化を防ぐには写真以外にはありません。少々あつかましいかも知れませんが、写真を多くおのせていただくようお願いいたします。写真は、グラビアでなくとも普通のページにもどしどしおのせて下さい。貴誌の発展を祈っております。

(大阪・心理学学生)

★裏窓愛読者の一人です。毎号楽しみにしております。今までは書店で買うのがなんだか気はくさしく、なかなか手に入ることが出来ませんでした。直接購読するようになつてからは安心して発売日を待つばかりとなり、本当によかったと思っております。さて、六月臨時増刊号拝見しました。ボリュームがありがたいへん結構だったのですが読物が少なく、がっかりしました。もっと読むところが欲しいと思います。そして、アメリカSM絵物語、これに訳語がちょっとついていれば刺身にワサビがついて味をひきたてるように我々読者の胸にジンとくるものが大であると思います。学のない私に、みんなと同じような感動があたえられるよう、ご尽力下さい。勝手なことばかり書き

つらねましたが、どうぞ我々のよき理解者であつて下さい。お願いいたします。(広島・YT)

★六月号の「夜と霧」を読んでもう戦争などはしてもらいたくない、と大きく叫びたい気で読み終えた。私は二十八歳で大東亜戦争の頃は小学四年生であつたが、実に残酷であつたことは、この記事を読んだことによつて初めて一生忘れられぬ感動となり、時には思い出し私を悲しませるだろう。とうてい人間のする行為ではないが、それをひと昔おこなつたのだからこわい。日本兵も外地で女性に対し残酷なことをしたと聞く。悲しいことだ。反省してほしい。今は人造りで、そんなことをしたいと思う人は現われぬと思うが、とにかく大臣どのたのみますぞ。心に残つてゆく雑誌が一番よい。その点、この裏窓には感謝しなければならぬ。

(名古屋・寛)

★拝啓、私はSMを次のように考えております。SMはSFと並ぶ一つの突破口である。その突破口を突破口たらしめるものはなにか？ それこそ我々の究明しなければならぬ一つの現実なのです。我々にかせられ

たこの運命は、いや応なしに我々の頭上にのしかかつてきます。その現実とは？ 現実の真理とは何か？ そのア・プリオリな真理は何か？ それを究明することが我々人類にかせられた運命なのです。それを實現することは明きらかに高踏的です。だからといって、それをそのままにしておくことはできません。いや、それは無理なのです。私達はあくまでその高踏的現実を、正しく認識しなければならぬのです。それは苦しいことです。しかし、やらねばならないことなのです。過去に、あらゆる人がそれを実行しました。そして、失敗したのです。それを実現すること、その本質的意義を明きらかにすることこそ我々の運命なのです。その一つの突破口としてSMがあると考えるのです。これは一つの実験なのです。SMの高踏化は決してとりのぞくことはできません。いや、その必要もないのです。なぜなら、もともとSMは類縁したアメリカ芸術の生んだものだからです。ではそれを大衆的にすることはできないのか？ その答えはできないかも知れないし、できるかも知れない。

と云えるくらいです。我々にかせられた使命は、その類縁芸術の破壊なのです。その後何が来るかはこの際問題ではないのです。ただ、それを打ちこわすことが我々の唯一つの目的なのです、SMに現われる非現実性、非科学性、非芸術性はこの目的にそつた一つの行為にすぎないのです。このことは、映画「嘘」にあらわれている非芸術性と一致するものなのです。映画「嘘」には、アブノーマルな状態における人間の適応性、すなわち極限状況における人間の行動、思想を描くことによつて現実への反逆を試み、そして現実を止揚することが目的だったと思われる。その状況下において、人間はいかなる行動をとるか？ それを正しく見つめ、それを認識することが我々の目的なのです。芸術としてのSMは、この分野においてのみ芸術としての使命をはたすのです。また、この意味においては、この映画の価値はあるのです。現実に対するレジスタンスとしてとらえてこそこの映画の価値がわかるでしょう。すべての文学にとつて、現実破壊は必要であり、特に、高踏的芸術であるS

Mには、それが必要なのです。芸術の一分野としてのSMが、さらに発展するためには総合芸術の必要性がでてきます。これにはむづかしい問題を含んでおられます。それは、それにより発生する高踏性です。現在、総合芸術と考えられている歌舞伎にしても新劇にしても（もともと新劇は最近、芸術集団「雲」の出現により新しい脱皮を期待できますが）同様、明きらかに高踏的なのです。これは仕方のないことで、劇の発生の過程からいっても高踏的なのです。しかし、このままで良いものでしょうか？我々の目的はただ一つ、現実を破壊することである！！

（山口・藤本紘一郎）

★めずらしく本誌「裏窓」から増刊号（耽美芸術写真・絵画・絵物語集）が発売された。久しい間、読者が待ちのぞんでいたものであり、ページごととあらゆる点について、長い間プランされたものと思われ、見ごたえ読みごたえがあったのは、じつにうれしい。ふつう増刊号というものは、本誌と比較するとき編集そのほか、ことのほか気を使われることと思うが、愛読者にとって、本誌増刊号への期待



は他誌の場合にくらべ、さらに大きいのである。だから年に一度か二度の増刊号なら、あくまでもサーピスをモットーに入れてほしいけれど、しかしいたずらに低俗におちいることなく、やはり格調ある増刊号を——第二、第三のおりにも念頭に入れていただくことを希望する。

（静岡県・外岡芳朗）

★「泣きじゃくる弓子」「鞭のニコラス」「墓場からの命令」は圧巻で、専門家ならではの縦横なアイデアも認められるが、惜しいかな責められる女の心理描写に欠け、それが「肉を殺して魂を殺す能わざる者を怖れるな」と批評家を喜ばせる原因となっている。とにかく裏窓の頼もしき存在で休日を楽しみに過ごせた。編集部苦心の趣向による美しいオフセット、グラビアの数々に接し、女奴隷に君臨する王者の境地を味わえた点、感謝す。

（京都・道夫）

編集後記



▼ここ半年ほどのあいだ、本誌では「原稿募集」という記事、全然だしておりませんが、それでも毎日、二、三編の作品が、全国各地から送付されて参ります。

▼日に二編としても、一カ月間には六十編、三カ月間には百八十編にもなります。

▼お送りいただいたときに、すぐご返事をしたいたいのにはヤマですが、編集部きわめて多忙のため、つい、おろそかにしております。

▼しかし、お送りいただいた作品は、部員が手わけしてかみならず拝読し、批評をつけて保存しておきます。

▼これらの作品の題名とペンネーム、それから、みじかい批評をひとまとめにして、本誌に掲載しようではないか、という案が、いつも編集会議のときにだされるのですが、なにしろ限られたページ数のために、実現できませんでした。

▼しかしながら、投稿作品は溜まるばかり、投稿家諸氏のお気もちを考えると、たとえばページをつぶしても発表すべきだと考え、次号に掲載することを決定いたしました。

▼もちろん、これら多くの投稿作品のなかから、すでに数多く採用し、読者のみなさまのお目にかけております。

▼たとえ新人の投稿でも、よい作品は、ぜひたいに見のがしません。おひまがございましたら、ぜひ、力作をお寄せください。

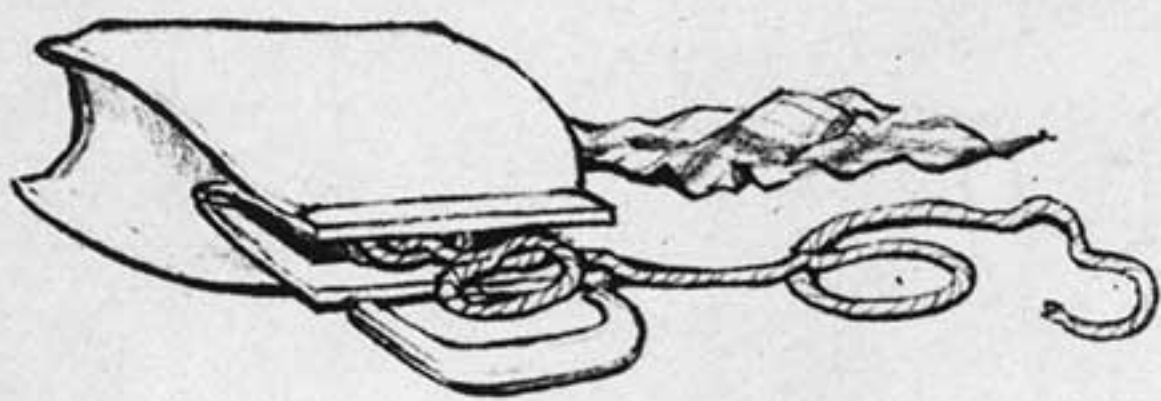
（飯田）

海外の公刊誌より

SMフォトご紹介②



カナダ・フェニクス商会・特約



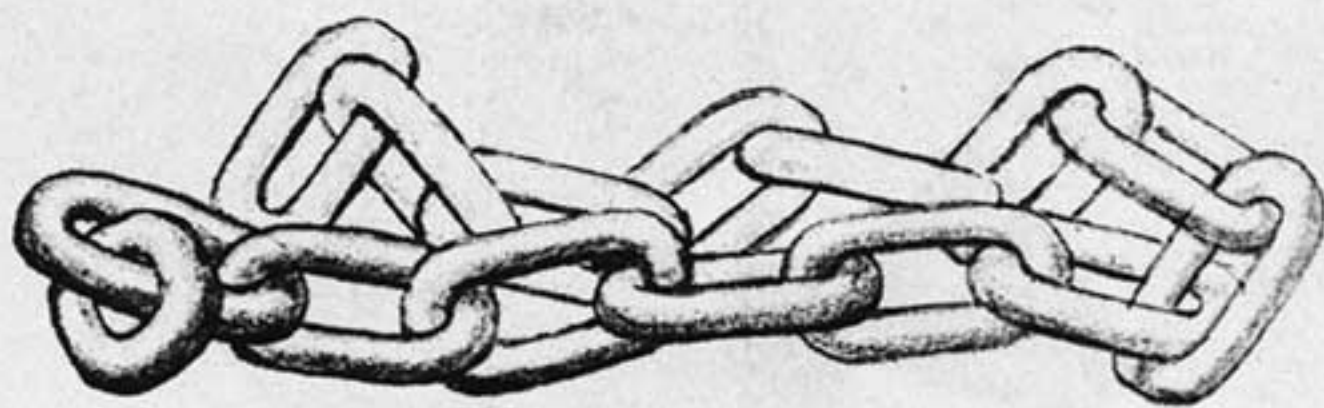












⑤ 破局

大阪の街々は、紫にたそがれていた。おびただしい車の群れに混って、信号待ちをしているときだった。

突然。車の後部で激しい音がした。洋子があばれだしたのである。

ならんで停車していたタクシーの群れからおどろいた顔がいつせいにのぞいている。

「ちくしょう！」

GOと同時に、高岸は車を飛び出させた。大通りを避けて、暗い工場地帯を突っ走ると、空地を見つけて停車した。

「哲公！ 手を貸せ。少し甘い顔をするとうぐこれだ。ぬかったな」

高岸は必死にあばれる洋子をおさえると、やわらかい胸へロープをグルグル巻いて、余ったロープで足首を縛り、背中へひとまとめに絞り上げた。

猿ぐつわも、頬がくびれるほどに、かたく結びなおした。

だが——、すべて手おくれだった。サイレンの音がして、ヘッドライトが近づいてきた。

「兄貴！ 見つけた。逃げろッ！」

いうが早いか、哲也は暗闇にむかって、いっさんに駆けだした。



⑥ 意外な結末

哲也は捕らえられて、大阪S署に留置されたが、取り調べを受けても、高岸のことを思い、ひと言も口を割らなかった。

二日めの朝、意外にも哲也は釈放された。豆鉄砲をくらった鳩のように、目をパチクリさせながらS署の玄関を出ると、高岸がニコニコした顔で哲也を待っていた。

高岸の後ろに、もっと哲也をおどろかせた人が立っていた。小牧洋子だった。

「このたびは、とんだご迷惑をおかけしました、そのうえ、高岸さんにもずいぶんお手数をかけましたが、おかげさまで……」

まぶしいばかりのスーツ姿、あいもかわらぬ濡れたような大きな瞳に、哲也はドギマギして声も出ない。

洋子はたしかに俺たちを、恨んでいるはずなのに。

それとも、俺は夢でも見ていたのか？

——、丁重な礼をのべて、洋子は去った。

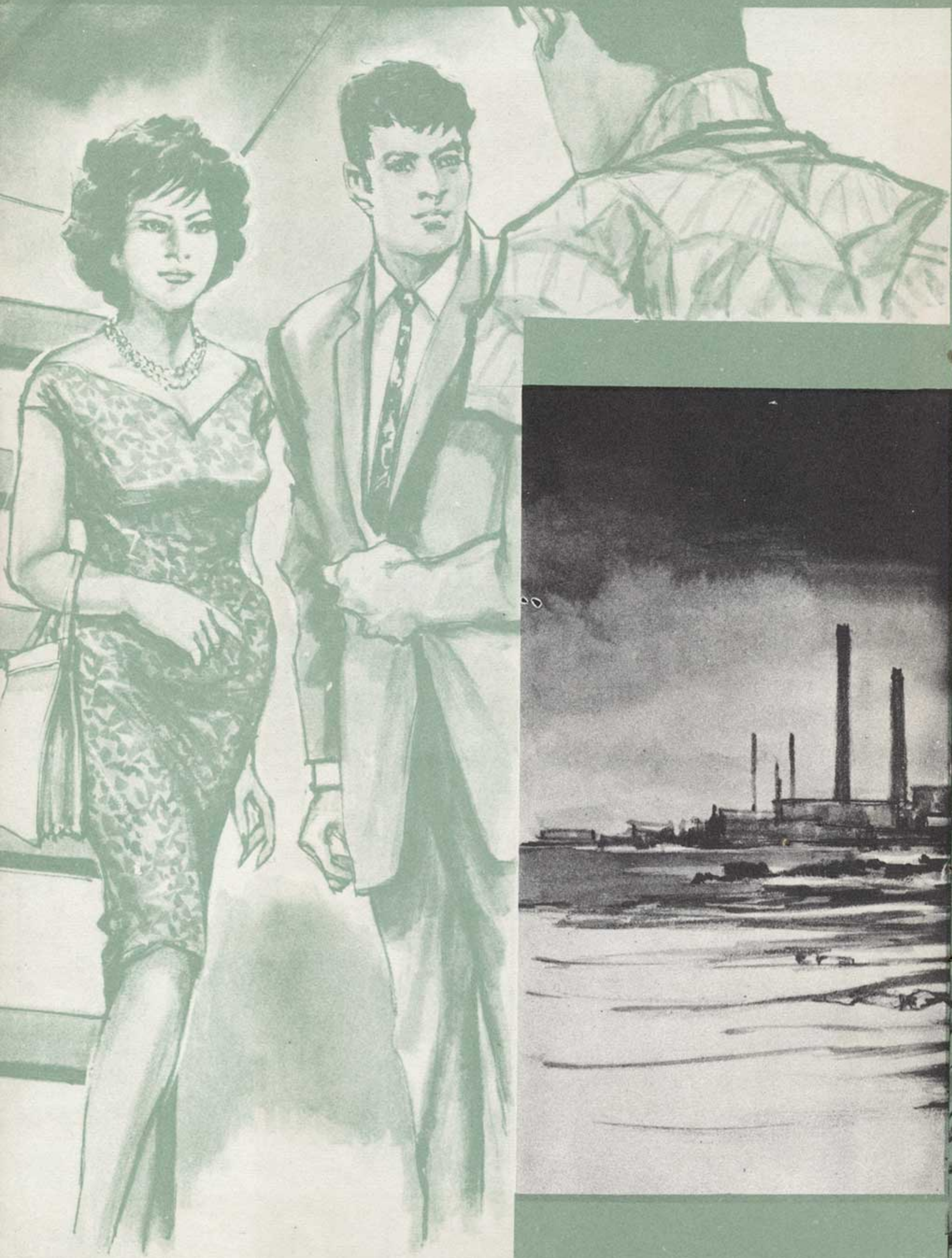
哲也は、なにがなんだかわからない。

「兄貴。これはいったいどうなったんだ。俺たちは……その……誘拐犯人として……」

「すまん。哲公、かんべんしろ」

高岸は哲也に最敬礼してみせた。





⑦ スリルの報酬

哲也が間違えたのも道理、トランク詰め
の女は、洋子の双生児の妹、陽子だった。
そして、陽子は狂暴性の精神異常者だっ
たのだ。陽子はながら、東京の精神病院に

れられていたが、洋子が神戸に新居を完成
したので引きとられることになった。

しかし、なにぶんにもスターの妹が精神病
者では、外聞がはばかれる。

そこで、高岸が護送の役をおおせつかった
という次第。

高岸の冗談をまにうけて、哲也は一生一度
のスリルを味わわされてしまった。

「さあ、約束の五万円。渡したぜ」

手の切れるような札を手にしても、哲也は
うつろな眼を遠くに向けていた。

陽子の、黒い瞳を想い浮かべながら――。



裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区江古田1の2302振替東京10756久保書店宛

38年(七月号)二五〇円

◎絵物語 無明怨念記……

文・矢桐 重八
絵・春日 章

鞭のニコラス……

文・春川 光彦
絵・中川 彩子

続・アラビアの城

文・北園透一郎
絵・鬼頭 暁

泣きじゃくる弓子

グラビア・静かな山林の午後

吉田 久

闇に光る

◎絵画集・サディスチンの微笑……江洩 晃夫

切支丹女牢……喜多 玲子

南北戦争以前……鬼頭 暁

海外SM絵物語……フェニクス商会

切腹殉教記(小日向一夢・絵)……黒部 恭治

しのび逢い刺青情話(都築峰子・絵)

北野 竜一

くたばれッ淑女学院……郷 保夫

西鶴におけるマゾヒズム……安東 泉

血染め白百合(古正英生・絵)……佐藤達四郎

体当たりマゾヒズム論(12)……水尾 究

墓場からの命令(山田彬弘・絵)……祖父江 新

わが愛の渴望(落合竜二・絵)……白木ゆりこ

虐げられた女たち(東桂史・絵)……野方 伸

ゴルドンの記憶④(江洩晃夫・絵)……阿麻哲郎

38年(六月号)二〇〇円

◎鬼頭暁時代妖美画集……鬼頭 暁

◎中島喜美時代妖美画集……中島 喜美

グラビア・幽囚の部屋……吉田 久

◎絵画集・続・美しき海賊船……フェニクス商会

七つの大罪(中川彩子・絵)……落合竜二

続・異端の終末……芦田 奈貴

おどろ記珍化論……左 次郎

「ロリータ」における

ニンフェッティズム……安東 泉

「夜と霧」……黒田 史朗

放浪と自己恋着の画家……かびや・かずひこ

月光の道で……河村 童八

鬼婦長……丸亀 恵子

夜の妖蝶……立原 道夫

ボスには乳房がある……五所 章

体当たりマゾヒズム論(11)……水尾 究

さんざね不動(小日向一夢・絵)……庄内 裕治

復讐黒髪秘聞(中島喜美・絵)……黒部 恭治

忍法「乳影」(鬼頭暁・絵)……島本 春雄

妄執侍(古正英生・絵)……潮 一樹

霧姫変化(鬼頭暁・絵)……佐藤達四郎

ゴルドンの記憶③(江洩晃夫・絵)……阿麻哲郎

38年(五月号)二〇〇円

絵物語・白蠟闇若衆……

文・島本 春雄
絵・東 桂史

・流刑星の美女たち

文・豊田 一狼
絵・山田 彬弘

江洩晃夫妖美画集……

グラビア・夢幻のへや……藤沢 修

・美しき海賊船……

・くさりと美少女……

海外SM画傑作選……

茅女物語……井村 錠

会津の女兵……潮 一樹

その夜……飯田 豊吉

ゴルドンの記憶(2)……阿麻 哲郎

椎名夫人の足……村山 省

ほも紳士録……かびや・かずひこ

現代マゾヒズム文化時評(14)……森下 高茂

体当たりM論(10)……水尾 究

私の愛した女優……北野 竜一

アラビアの城……北園透一郎

孤島の復讐鬼……祖父江 新

異端の終末……葦田 奈貴

背後の脅迫者……豊中 夢夫

ばんざいッお転婆学園……郷 保夫

38年(四月号)二〇〇円

絵物語・冥府海賊伝奇……

文・島本 春雄
絵・秋吉 樹

・マドリリーヌと黄金の靴……

文・松平 莊司
絵・中川 彩子

・白狐のお新いろうさんげ……

小日向一夢妖美画展……

グラビア・黒猫といす……毛 卓三

・黒いタイツ……

・鏡と女……

・パウリーネ夫人のピクニック……

海外SM画傑作選……

ゴルドンの記録①……阿麻 哲郎

処刑の図……三鬼 俊

無分別な夜……海老沢 七郎

大阪非情地帯……豊中 夢夫

内外ミュージックホール・スナック集……

虹川画伯のアトリエ演出ウラ話……北野 竜一

文芸評論「醜いコメディ」について……安東 泉

ほも紳士録④……かびや・かずひこ

A子の話……南 ゆり

体当たりマゾヒズム論⑨……水尾 究

舞踏会の贅……春川 光彦

のぞきの大スケ捕物帖……飯田 豊吉

38年(三月号) 1100円

絵物語・スリーベツト号	文・豊田一狼
不時着す	絵・鬼頭暁
・銭姫党伝奇	文・島本春雄
	絵・古正英生
・白峰の女忍者	文・矢桐重八
	絵・小日向一夢
グラビア・けんらんたる商品	藤沢 修
・黒猫を捕えた①②	毛 卓三
海外SMフォト・画像作選	泰西出版資料
醜いコメディ	淡路周五
大利根無頼	祖父江新
和装恋慕	宮古志満夫
ほも紳士録 (3)	かびや・かずひと
体当たりマゾヒズム論 (8)	水尾 究
猥	村山 省
犬とギブスと搾衣	春川光彦
不死身の女	海老沢七郎
「蠍たち」にみる	安東 泉
あるサディスチンのタイプ	鬼頭 暁
鬼頭暁時代妖美画展	左 次郎
うら八捕物帳	飯田豊吉
蛇川画伯のアトリエ	編集部
「裏窓」湯河原へ行く	

38年(二月号) 1100円

絵物語・姫法師呪文	文・島本春雄
	絵・小日向一夢
・変化黒髪小僧	文・京 剣児
	絵・古正英生
秋吉樹妖美画個展	秋吉 樹
グラビア・黒い皮のスタジオ	泰西出版
・美の凝結	金井 行雄
・美の模像	金井 行雄
海外SM画像作展	泰西出版
島原の子守唄	春川 光彦
金色の胸毛	立原 道夫
郡氏の応接室	豊中 夢夫
代用品じゃつまらない	九十九郎
フォルリ城の花嫁	三鬼 俊
おれの名はクニエル	祖父江新
愛の戦慄と充実	白木ゆりこ
体当たりマゾヒズム論 (7)	水尾 究
ほも紳士録 (2)	かびや・かずひと
新・森茉莉論	間野 嶺
新・安岡章太郎論	安東 泉
女因お蓮の死	小田桐 爽
浪人夢想日記	市原 砂夫
カブー家の第二夫人	加木れい子

38年(一月号) 1100円

絵物語・ハレウィンの歌う首	文・松平莊司
	絵・中川彩子
・赤鯨奇伝	文・島本春雄
	絵・小日向一夢
・隠密野番猫	中島 喜美
山田彬弘妖美画個展	山田 彬弘
グラビア・美の回帰・ほか	毛 卓三
・美の彷徨	北 好夫
・美の孤立・ほか	金井 行雄
クリスマススイヴに悪魔がくる	九十九郎
赤い血のうずまき	関町 妙男
仮面のたわむれ	溝口 雄太
黒い幻想	白木ゆりこ
小さな赤い腰巻の記憶	外村 良
体当たりマゾヒズム論 (6)	水尾 究
夜の感觸	万里小路崑
忍者遁走記	祖父江新
決闘立花屋	花巻京太郎
女性的情念の三十年	かびや・かずひと
「叩ひ声」を解剖する	安東 泉
小説「連」のレスピアニズム	間野 嶺
婦人機密持校ボーリン	泰西出版資料
売られていく玩具たち	北園透一郎

37年(十二月号) 1100円

絵物語・洞穴の姫と	文・松平莊司
	絵・中川彩子
・片耳の悪魔	文・曾我部泰
・耳の戦慄	絵・小日向一夢
・妖説黒縄盗賊	毛 卓三
グラビア・犬と女	北 好夫
・美の発端	毛 卓三
・美の展開	毛 卓三
・美の落差・ほか	金井 行雄
かわいい調教師	北園透一郎
殉国	中康 弘通
投げ節お駒	花巻京太郎
締めつける愛情	春川 光彦
東京午前零時	豊中 夢夫
日本刑罰史(終回)	名和 弓雄
ほも・とその周辺(終回)	かびや・かずひと
体当たりマゾヒズム論 (5)	水尾 究
新・三島由紀夫論	安東 泉
お春さらわれ草紙	小田桐 爽
千代の青春	浦戸 宏
赤い城	三津井弓雄
ある身の上相談から	神原 栄知
イラ ラする夜に	羽鳥なつ子
風雲地獄街道(終回)	鈴宮 英樹

37年(十一月号) 1100円

絵物語・かわいいアンヌの	文・松平莊司
	絵・中川彩子
・ばうけん	文・桂史
・異聞・牛裂きの刑	絵・東 樹
・寶石の血	絵・秋吉 樹
グラビア・美の鋭角	毛 卓三
・美の冗舌	金井 行雄
・美の傾斜	金井 行雄
・美の断面・ほか	金井 行雄
海外SMフォト特選集	泰西出版資料
あわれ雪路	丸亀 恵史
おかつばとおさげの間	間野 嶺
霧笛の町	五所 章
妖美画像作選	沖涉二都築峰子
火刑幻想	多賀 満
夜の画帳	鳴滝 三郎
足	村山 省
体当たりマゾヒズム論 (4)	水尾 究
さまアみろ	春川 光彦
ある恋の物語	山木 節夫
不安と絶望から幸福への道へ	桜井 和子
畜獣デリムソン(終回)	阿麻 哲郎
ほも とその周辺 (9)	かびや・かずひと
風雲地獄街道 (6)	鈴宮 英樹

37年(十月号)二〇〇円

絵物語・ひざまずいて……	絵・秋吉 樹
・柔肌切支丹……	絵・曾我部 泰
江潮晃夫妖美画個展……	江潮 晃夫
グラビア・舞台名場面集……	金井 行雄
・たわむれのふたり……	藤沢 修
・美と醜のあいだ……	金井 行雄
ある青年の休暇……	ゴードン社・提供
紅の私刑……	五所 章
女奴隷の浴室……	東島 かつる
妖しい体臭の夜……	市川 菊夫
畜獣デリムソン (11)……	阿麻 哲郎
鬼洞又四郎の煩悩……	小田 桐 爽
ギラルド王の金色奴隷……	松平 荘司
現代女牢記……	多賀 満
江戸の怪談……	河西 恒一
ほも・とその周辺 (8)……	かびや・かずひこ
海外SM映画ご紹介……	美濃村 晃
体当たりM論 (3)……	水尾 究
盗む……	村山 省
おろかな馬のものがたり……	馬場 弘二
風雲地獄街道 (5)……	鈴宮 英樹

37年(九月号)二〇〇円

絵物語・凄絶めくら忍法……	絵・東 桂史
・密林の女王ムムタール絵……	中川 彩子
・蛇と鞭……	絵・山田 彬弘
北原環妖美画個展……	北原 環
グラビア・SM式美容鍛練法……	毛 卓三
・屈曲……	毛 卓三
・悪夢……	毛 卓三
・女ひとりのへや……	猪島 昌也
・かわいいくちびる……	毛 卓三
お浜の受難……	花巻京太郎
山小屋の暴風雨……	駒井たまき
戦慄の女体爆弾……	綾川 妖司
鈴の泣き声……	浦戸 宏
白痴美の女……	青柳貫次郎
日本型罰史 (3)……	名和 弓雄
ほも・とその周辺 (7)……	かびや・かずひこ
「癡癡老人日記」を解剖する……	安東 泉
タロの恋……	八巻 令
体当たりM論 (2)……	水尾 究
女賊と姫君……	霧山 志郎
畜獣デリムソン (10)……	阿麻 哲郎
鬼婆のすむ家……	三枝喜久治
風雲地獄街道 (2)……	鈴宮 英樹

37年8月号ぜんぶ

売り切れました

37年(七月号)二〇〇円

絵物語・最初の火星人……	絵・山田 彬弘
・鞭に生きる女(5)……	ウァン・ロッド
○海外SMフォト特選集	
○中川彩子妖美画個展……	中川 彩子
★グラビア・時代劇のムード……	猪島 昌也
・石伐り場の女……	毛 卓三
・沼のほとり……	毛 卓三
フォト時代劇・島抜け伝八……	海老沢七郎
旗本被虐年譜……	島本 春雄
鼻には鼻を……	九十九 郎
脱走兵とその妻……	竹谷 十三
姫に捧げられた人獣の話……	白畑 高之
ほも・とその周辺(5)……	かびや・かずひこ
地獄で泣け……	万里小路 崑
武后秘話……	綾川 妖司
奇縁縁切り榎……	小田 桐 爽
絵本かぞえうた……	喜多 玲子
畜獣デリムソン(8)……	阿麻 哲郎
忘念油屋火事……	竜崎 聖吾
現代マゾヒズム文化時評……	森下 高茂
数塚温泉のおもいで……	影 なぎさ
裏窓タウン……	編集部・編
風雲地獄街道(2)……	鈴宮 英樹

37年(六月号)二〇〇円

絵物語無残女忍者記……	文・矢桐 重八
・時間旅行機第一号……	文・豊田 一狼
・鞭に生きる女④文・画・ウァン・ロッド	面・山田 彬弘
・フン族の暴雄アツチラ画・中川 彩子	
碧眼蛮女伝……	小田 桐 爽
肉の濁流……	城堂 純
畜獣デリムソンⅦ……	阿麻 哲郎
グラビア追いつめられていく演技……	毛 卓三
・和室のひとり……	猪島 昌也
・女体倉庫……	毛 卓三
・ふとんの上で……	猪島 昌也
色鬼島田……	竜崎 聖吾
桜とサムワイとサティズム……	浜野 真砂
哀艶十六夜街道……	文・円城寺 達
A心酔のタイプ……	かびや・かずひこ
日本刑罰史(1)……	名和 弓雄
稲妻さんげ……	万里小路 崑
現代マゾヒズム文化時評……	森下 高茂
黒髪幻想曲……	室 文彦
地獄船青竜号……	永井卓二郎
縄を待つ女……	堀越 早苗
風雲地獄街道(1)……	鈴宮 英樹

残部僅少

37年5月号 ぜんぶ

売り切れました

37年(四月号) 二〇〇円

- グラビア・はんにやのめん……………吉田 久
○ “ ゆがむ豊胸……………藤沢 修
○ “ いすと女……………吉田 久
○ “ 片隅にうごめく……………猪島 昌也
○ 絵物語・地獄への招待状……………文・小川左門
画・喜多玲子
○ “ ある夜の強盗ごっこ……………文・藤見 郁
画・山田彬弘
○ “ 砂漠の恐怖王ハッサン……………文・松平莊司
画・中川彩子
リボンに巻かれる娘……………綾川 妖司
姫肌受難船……………黒部 恭治
奇妙なあしながおじさん……………黒田 史郎
畜獣デリムソン(5)……………阿麻 哲郎
私本・礼津女切腹抄……………団 克衛
なめたい……………田沼 醜男
日本拷問史(3)……………名和 弓雄
フォト・ストーリー・鞭に生きる女(2)……………ヴァン・ロッド作・画
“・妖蘭亭の愛欲……………豊田 一狼
捕われた姫君……………宮古志満夫
姫君様御入牢……………小田桐 爽
おえん地獄夢……………五斗六太郎

37年(三月号) 一五〇円

- グラビア・沈黙のポーズ……………吉田 久
○ “ ソファベッドのあるへや……………藤沢 修
○ “ もだえ三熊ほか……………編集部・編
○ 絵物語・青い野獣のブルース……………鳥丸 克彦
絵・秋吉樹
○ “ 女忍伝奇館……………文・黒部 恭治
絵・古正 英生
不貞現場の女……………春川 光彦
畜獣デリムソンIV……………阿麻 哲郎
マゾヒズム文化時評……………森下 高茂
由美子よ逃げ……………竹谷 十三
鞭と縄と美貌の迫害者……………院南 五郎
○ 絵物語・吸血鬼号の女囚……………文・島本 春雄
絵・中川 彩子
日本拷問史②……………名和 弓雄
美妃責め行者譚……………来島 摂次
フォト・ストーリー・鞭に生きる女①……………ヴァン・ロッド作・画
○ 絵物語・煩惱地獄医者……………絵・中島 喜美
極楽バンティ往生……………童 文彦
マングローブの葉かげで……………松平 莊司
海老沼武七の執念……………小田桐 爽
黒い鉄の扉……………南郷 京助

37年2月号 ぜんぶ

売り切れました

37年(一月号) 一五〇円

- グラビア・縄のムード……………吉田 久
○ “ ろうそくのあかり……………編集部・編
○ “ 雪の朝・浴室の女……………編集部・編
○ “ ながいまつ毛……………吉田 久
○ “ 熊笹のなか……………編集部・編
○ 絵物語・恐怖王イブラヒム……………文・松平 莊司
画・中川 彩子
○ 縛った男をさがせ……………文・島本 春雄
画・堂 昌一
○ 捕り縄恋慕……………小田桐 爽
畜獣デリムソン(2)……………阿麻 哲郎
朝姫磔仔細……………吉田 義雄
○ 絵物語・手綱をとる姫……………文・山本 節夫
画・小日向一夢
あらしの夜の悪夢……………三井多美子
犬の独房……………須見 憲治
新春うらまど・いろはかるた……………画・沢拳史
魔女鏡……………西田 仁
奇妙な町の奇妙なたべもの……………淡路 周五
夜の刑律……………鳴滝 三郎
変幻鬼女囃子(最終回)……………矢桐 重八
風流責め句選……………中島 喜美
濡れる屈辱の夜……………たけの・みのる
マゾヒズムへの道程VI……………黒田史郎